

うちの魔法科高校の劣等生にはオリ主転生が多すぎる：その2

madamu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「魔法科高校の劣等生」の世界に複数の転生者がいる。

十二江 清姫

魔法科高校の3年生にて二科生の黒幕。

萬 真人

魔法科高校の2年生で武道家の家系。

そして司波達也が入学する日。

そこから新たな物語が始まる。

前作「うちの魔法科高校の劣等生にはオリ主転生が多すぎる」の別バージョンと
言うか

作者の執筆趣味のリハビリ（前作の燃え尽き症候群的）のため始めます。

<https://syosetu.org/novel/144926/>

来訪者編で完結の予定（45話くらいで終わらせたい）↑無理でした。目標60話完結。

うちの魔法科高校の劣等生（略）その2のキャラクターの外見の話

<https://syosetu.org/?mode=kappo|view&k>

id||222644&uid||222560

目次

「はい！ドーン！」	1
俺の実家の話はこんなものでいいだろう。	6
お兄様がいれば深雪はそれだけで幸せです	10
新入生総代の兄	16
ありがと。聞き慣れてるわ。司波君	21
「私は評価してるよ、はんぞーくんのこ」と	26
「お前な！三年生より早く彼女作るとは言語道断！」	30
ありがたみの無いファーストキス	42
ヤキを入れる	46
ほのかちゃんが可愛くてもやって良いことと悪いことがある。	56
君には婚約者がいる	62
2度目の九校戦	69
耳栓準備しとこうかな？	74
片や世界最悪の殺し屋集団のトップ。片や世界最高の魔法師。	78
ほのかちゃんおっぱい揺れすぎ！	85
私は四葉夜天	91

あましば！	95	それを言ったら戦争だろうが！	219
「小娘、殺すぞ」「殺す？殺せるの？四葉が」	105	La b • t e d u G • v a u d a	
ロード中	116	n	229
稲妻が空間を横に走る	129	千葉エリカと壬生先輩	238
DO☆GE☆ZA	150	さてと	249
御都合主義	155	説明してよ！	260
絶望のリン	168	一条将輝	265
クレイジー・デンジャラス・ビューティ・		あ、不遇の次男	276
スタンピード・オブ・バイオレンス		無理解の世界	293
183		テレビで見てるし	301
幕間：生徒会会長選	198	駄話：再成ってね、反則なのよ。	
ウイスキー。ダブル。ロックで	206	316	
		ククナラホサ	332

戦争

341

脳内ドラマルールを鳴らすのだ!

422

簡単に言えば「ほっとけ!」である

346

エイプリルフル企画:ぼくのかんがえ

USNAの超大型直立戦車「ハイペリオ

た・・・

357

ン

444

お花摘みなら一緒に行こうか?

人嵌めるなら色恋沙汰

364

駄話:「御飯」

466

アンジェリーナ・クドウ・シールズことア

あのバカの居場所だ

471

ンジー・シリウス少佐

384

流派!東方不敗は!

479

駄話:忘れたところにテキスト登場人物紹

七草の特別攻撃隊

487

介

399

半ギレブラコン女!

498

横浜騒乱

411

雪光と幽玄はお互い目を合わす

506

幕間:スーパーソニックランチャー

416

七草真由美、結婚を前提に付き合っ
て欲しい。返事は卒業までにくれ

518

585	駄話：オリ主たちの最盛期の設定	580
	結界を崩す方法は光なのである	570
	宵闇	561
	前世の後年（ややこしい）	542
	戦域	532
	ギッタンバツタンにした	

「はい!ドーン!」

「まゆみーん」

前方を歩く黒髪の乙女に声を掛けたのは、女生徒の制服を着ているが男装の麗人を思わせる切れ長の目をした美女だった。

本人はニコニコしているつもりだが、口元に浮かぶのは余裕の笑みだ。

声は軽い。

「なによ、キヨ」

返事をしたのは七草真由美。

日本魔法師の頂点に君臨する十師族「七草家」の娘。

中学時代より魔法師としての実力を発揮し、その実力を知る者が多い。

この魔法大学付属第一高校での活躍を期待されている才媛だ。

黒髪の美少女、年齢の割にはやや大人びた蠱惑の女性の要素をもった少女だ。

「部活は決まった?」

「いえ、生徒会に入ることになりそうだから部活まで手が回るかどうか」

小さくため息をする真由美を可愛く思うのは「十二江清姫」(トワエ キヨヒメ)とい

う長身の美少女だ。

中学時代は女子生徒からモテた女子生徒である。

高校一年生の平均身長で言えば、男子の平均身長より数センチ高い。

運動部で鍛えられた四肢は長く力強くあるが、女性的な柔らかさもある。

腰の位置や肩幅、まるで神が造形したような黄金のバランスで構築されている彫刻のようだ。

奇跡的な肉体を持つ魔法師の卵。

肩のあたりで切りそろえた黒髪は美しく帰路揃えられており、精緻に作られた生命力溢れる武者人形のようなものである。

「まゆみんは生徒会か〜」

少し感慨深げに、そして少し残念そうにキヨは呟く。

「キヨは運動部に行くの?」

今度は真由美からの質問だ。

「どうしようかな〜。魔法系の部活も面白そうだしね」

ウインクして答える清姫。

魔法大付属第一高校の入学式。

午前前の入学式も終わり生徒たちは、IDカードを受け取るべく講堂を出始めた時であ

る。

新入生総代として挨拶した真由美は、ここの生徒会の慣例で入学試験の首席が生徒会執行部に誘われることを人づてに聞いていた。

全国十校あるなかでも最も有力な高校。

日本のみならず世界においても「最高のエリート魔法師の教育機関」として認識されている。

学力のみならず実践性の高いカリキュラム。そして一流の講師陣に高等教育だけでは終わらない研究システムに将来性。

この一校に入れば、将来への展望は開ける。

講堂から出る二人を周囲の新入生たちは遠巻きに見ていた。

片や七草の娘。聡明な美少女。新入生総代。

片や百家の一門。美しい身体を持つ女性。そして二科生。

それは区別される関係だった。



「二科生の際で、彼女の周りにウロチョロするな!」

「はい!ドーン!」

入学後の帰宅時、キヨは真由美と一緒に帰ろうとしたところ、一科生のグループに真由美と一緒に帰宅を止められた。

「何か用？」と聞いたら上記の台詞だ。

キヨは声をあげた細身の男子生徒にパンチを出した。

と言つても本気ではなく、鼻の頭に軽く当たるようなパンチだ。

「あんたね、友達同士と一緒に帰るのがなんか悪いの？」

軽く鼻を触られた男子生徒は怒りと侮辱で声をあげる。周りにいる一年の一科生たちもキヨに一步間を詰める。

「彼女は一科生の総代だぞ！そんな彼女を二科生ごときがウロチヨロすると彼女の迷惑だ」

そう言われたキヨは横を向き

「まゆみん迷惑？」

「あのねキヨ、別に友達との帰宅が迷惑とは思ったことはないわよ」

真由美からは呆れと怒りが無い交ぜした返事だった。

一科生グループは当の本人の言葉に返す言葉が出てこない。

「ほらほら、ご本人のOK出てるんだから。あんた達も何なら一緒に帰る？」

「そうね、一科生、二科生をクラス区分以上の意味で使わなければいいわよ」

今日何度目かのため息をついてから真由美は宣言をする。

小学校からの友達はいつもこんな感じだ。

問題の本質を露見させ、即座に解決させる。ちよつとやそつとのトラブルも手慣れたものと解決する。

昔から不思議な友人だと真由美は思っていた。



後に「十文字克人」「渡辺摩利」「七草真由美」は三巨頭と呼ばれることとなるが

【裏番】と学内に知れ渡る実力者が「十二江 清姫」である。

彼女は転生者だった。

俺の実家の話はこんなものでいいだろう。

俺のことを話そう。

国立魔法大学付属第一高校 二年一科生 剣術・剣道部所属。

身長は平均よりやや上。桐原武明より数センチデカイ。

服部は体格の割に細いからプロテインを摂取をすればいい。

あと辰巳先輩は、私物を剣道部に置いていくのはやめてもらいたい。

実家は百家の流れをくむ。

徳川家六代將軍徳川家宣の頃に成立し、武家や奉行所で発達した「捕り手術」の流れを組む武道「静和流柔術」が俺の実家である。

大本は「戦場組討術」だったらしい。

五代將軍である犬公方と言われる徳川綱吉治世の頃の江戸は世界有数の人口を誇る一大都市であった。

人口増加により治安は少し悪かったらしい。

そのため、当時の南北の町奉行所はやや腕力的な方法で治安維持を実施した時期があった。

はい、そこで奉行所に武道を売り込んだのが俺の祖先「静和流柔術」の祖である。

当時は「竹内流の流れをくむ武芸者」くらいだったが、六代將軍家宣即位時あたりに「静和流」を名乗ったのだ。

そういつた歴史もあるのか、うちの実家は今も警察関係に非常に太いパイプがある。ちゃんとした弟子の数で言えば千葉流には負けるが、日本の警察関係者が警察学校時代に習う逮捕術はうちの何代か前の当主が主幹となり、他の武道関係者と組み上げた技術系なので警察に対しての発言力は高い。

親戚や門下生で警視庁、警察庁勤めは両手両足の指の数より多い。

まあ俺の将来も確実に警察関係になるだろうけど。

俺の実家の話はこんなものでいいだろう。

今日までの俺の話は箇条書きで言うところ

・ 魔法師の卵であり、武道家の卵である俺は魔法師としての技術を伸ばすべく第一高校へ入学

・ 武道関係者ということもあり、剣術部と剣道部とたまに拳法部とマジック・マーシャル・アーツ部を兼部しながら一年間部活を頑張る。

・ 桐原と服部が険悪になったので試合の立ち合いを務める。

・ 桐原が壬生壬生うるさいから兼部の関係で知り合っていた壬生を紹介したら「あの

「キ、桐原だ！」とちよつと声が裏返っていた。周りの先輩達からは物凄く弄られていた。

・裏番に絡まれる。美人なのは認めるけどさ。

・九校戦は選手には選ばれなかったが、校内外の行事では必ず警備隊に選ばれた。実家関係で経験はあるけどさ…。

・二科生の教育要綱の刷新問題に少し絡まれる。あの裏番と七草会長の暗躍が言われているが証拠はない。なんで俺が二科差別派を捕まえなきゃならんのだよ。

・服部が七草会長と裏番と生徒会女性陣からの連名バレンタインチョコを貰う。羨ましいやら可哀そうやら。

・剣術部・剣道部男子は両部の女子部員からの義理チョコを貰う。義理の割に桐原が機嫌が良かった。もしや別途壬生から貰えたのか？

・司先輩が体調を崩して実家に戻っていった。裏番…

・何とか一科生として二年生へと進級。速度と強度には自信があるが規模となるとね。近接対人がメインの家系としては修練が必要だ。

そして今日だ。

2095年4月。今日は入学式。新一年生が初めて学び舎の門をくぐる日だ。

部活連から警備として参加することになった。

早めに学校に来て部活棟で自分のロッカーの整理をしてから講堂へ向かう途中。

「納得いきません!」

初めて聞くが知ってる声だ。

早朝の講堂へ向かう道。黒髪の美少女が、黒髪の少年に自分の不満を言っていた。

少年は背筋も伸び、立ち姿に隙はない。

確かに派手さのない顔立ちだが整っている。

司波達也と司波深雪だ。

俺こと「萬 真人」(ヨロズ マコト)は魔法科高校の劣等生世界に転生している人間なのだ。

お兄様がいれば深雪はそれだけで幸せです

「じゃあ、みんなで帰ろうよ」

その一言で少しだけ場の空気が変わった。

「モーリーも駅までだろ。俺も駅まで。司波さんも駅までだし、取り敢えず駅まで行くよ」

「一科だの二科だの言うヤツとは一緒に」

「じゃあ、一緒に帰りたい奴だけ一緒に帰ればいいじゃん」

モーリーの隣にいた一科生の少年の言葉に反論すべく赤毛の少女が話すが、言葉の先を読んでか少年はさらに言葉が続ける。

「ほら、モーリーもそこにいるのは噂の入試論文満点だぜ。わからなかったところを聞くなら今のうちだぞ」

少年の言葉に何名かが司波達也の顔を見る。

「どこからそんな情報を。個人情報に厳しく管理されているはずだが」

司波達也は少し目を細め視線を少年に飛ばす。

少年は飄々と答える。

「入学式に生徒会役員の立ち話が聞こえてきた」

（生徒の成績は個人情報なんだがな。学生の危機意識とはこんなところか）

内心溜息をついた司波達也はさらに言葉を紡ぐ。

「別段俺は何人で帰ろうと構わないが深雪が望まないなら、大人数で帰るのは断らせてもらおうか」

「お兄様」

深雪と呼ばれた少女は、そつと兄の顔を見る。

新入生総代である司波深雪と「一科生と二科生」どちらが一緒に帰るか。

そんな小さな争いが起きた。

兄と一緒に帰ろうとする司波深雪に「一科生同士親睦を深めないか」と提案したのは
I—Aの面々だ。

二科生である深雪の兄、司波達也との帰宅を望む素振りを見せたので兄の友人の二科
生が

「兄妹同士帰らせてやれ！」と反論し、「こっちは三年間一緒に勉強する一科のクラスメイトだぞ！」と言葉の売り買いが始まった矢先に、モーリーの隣にいた少年が先ほどの言葉を言った。

夕刻の校舎からは同級生や上級生が帰路に就こうと出てきている。

人目が増えてきた。

「私は、お兄様と一緒に帰るのに同行する方が何人いてもかまいません。お兄様がいれば深雪はそれだけで幸せです」

司波達也の顔を見ながら宣言する深雪に周囲は言葉を失う。

「完全に眼中に無いぞ、モーリー」

「ああ、うん、ああ」

「なんか毒気抜かれたわ、あたし」

少年、モーリー、赤毛の少女と司波深雪と達也の二人の世界にゲンナリする。

「まあ、いいんじゃないやねえみんな帰ればさ」

そう言ったのは体格のいい二科生の少年だった。

総勢10名を超える一行は校門を出て、駅までの坂を下っていった。

「俺、西城レオンハルト」

横に来た一科生に自己紹介をする体格のいい一年生。

黒髪より髪色は明るく彫りの深い顔つきは活発であり落ち着いた雰囲気醸し出していた。

自己紹介を受けて、一科生のリーダー格が自己紹介を返す。

「森崎駿だ」

「あの森崎家の?」

名前に反応したのは赤毛の少女だ。目の大きい明るい少女だ。猫のような、もうちよつと野性味のある猫科の動物の印象もある。

「そうだよ。お前は?」

ぶつきら棒に聞き返すのは先ほどの諍いを少しだけ引きずっている証拠だ。

思春期の少年少女に、即座の切り替えなど求めるのは難しい。

「女子にお前とかモテそうにないわね」

「別にモテようとか思っていない!」

少女の突っ込みに少し声を大きくして返す。

数m先に行く司波深雪は光井ほのかと北山雫、柴田美月に兄自慢を始めていた。

「あたし千葉エリカ」

「千葉ってあの千葉家か」

森崎の言葉にうなづくエリカ。

「森崎は個人警護の家でしょ。付き合いは無いけど名前は知ってるよ」

そう言われて、少しだけ自慢げな顔をする森崎。

「モーリーン家って有名なの?」

「へへモーリーンって言われてるんだ。あたしも呼ば」

モーリーというあだ名を聞いたエリカは少し意地悪そうな顔をしてそう宣言した。

少し離れた所を清姫と真人が二人歩いていた。

学内では真人は「裏番に捕まった可哀そうな奴」という認識が一般的だ。

片や二科生の一番の美女。学内でも七草真由美とは別路線で人気者。

もう一人は桐原、沢木と並ぶ白兵戦の猛者。名家の次期当主が確実なスポーツマンだ。

生徒会の外部協力者コンビ。

「変なことになりましたね」

「いいじゃない。夏までは平和で」

真人の言葉に、清姫が頷きながら返す。

年末年始の騒動でGW前に発生するブラシユによる第一高校襲撃の芽摘んだ。

二人だけで司一を襲撃し、確保した身柄を即座に七草家・十文字家立ち合いで公安へ引き渡した。

九校戦には無頭竜、横浜騒乱には大亜連合、そして来訪者編のパラサイト。

清姫と真人は転生者と知識を持ち、人命の為此の先起こる事件を防ごうとしている。

二人としてはこの世界に転生し自分たちの人生を全うするための行動だ。

最初は清姫の無茶苦茶さ加減に真人は振り回されたが、彼女の司一襲撃を行うまでの本気ぶりに

今は納得と言うか諦めと言うか、一種の共感があつた。

「うちの部活に司波達也を誘いますよ」

「好きにしなさいな。でも四葉なのは変わらないからね」

真人は肩をすくめ返事をする。

それは「気をつけますよ」なのか「まあ何とかなるでしょ」のどちらかか、または両方か。

新入生総代の兄

「風紀委員？」

「誰がいいと思う、キヨ」

女子生徒が見たらそれだけで嬉しい悲鳴を上げるコンビが食堂の隅でお茶をしていた。

渡辺摩利。

一科生にして三巨頭の一角、酒吞童子討伐や茨木童子退治で名をはせた渡辺綱の子孫。

男装の麗人をイメージさせるショートカットの美貌の女生徒。

そして風紀委員の長。あの十文字克人と肩を並べる存在。

相談を受けているのは二科の黒幕。もう一人の男装の麗人の空気を纏う清姫である。

「うーん、二科生から入れてみる？」

「そうだな。風紀は実力主義だけどそのあたりも手を付けないといけないからな」

昨日の司波達也たちの下校姿を見た清姫の脳内には司波達也の三年生への接点がつ減ったことを理解していた。

一校の一科生と二科生の対立問題はこの2年で軟化していた。

生徒会長の親友が二科生であり、一校で最初の九校戦の二科生エンジニア。

美貌、学力に関しては言えば一科生二科生の枠組みを超えて、学内でも最優の一人だ。

魔法技術も、決して稚拙ではなく家伝の魔法が「発動速度」を鑑みない体系のため現代魔法の評価基準から外れている弊害による評価だった。

その評価を受けていた清姫が二科生への教育要綱の修正案を一年時点から出し、今年の年度には大きく指導内容が変わった。

百山校長から「長年のしこりを学生自身が正すのは嬉しい限り」と言われた時、清姫は「制服問題が始点とは言えないよな」と大人の狡さを許容した。

七草真由美と十二江清姫の表と裏の活動で二科生にも指導教員や、カリキュラムの統一化が図られている。

「うくん、二科生だと千葉の次女いるけどさ」

そう言われて渡辺摩利は頭を抱える。

「だめ。エリカの実力には太鼓判を押すが性格が」

「まだ嫌われてるの？」

清姫の言葉に摩利は頭を抱える。

「そうだね。二科生の活きの良さそうなのを見ておくけどいつまでに決めればいい

の

「明日か明後日」

摩利の回答に今度は清姫が頭を抱える。

「早いよ。なにそのスケジュール。カップラーメンの注文じゃないんだよ」

清姫は手元のカフェオレに口をつける。

摩利も少しバツが悪そうにコーヒーを飲む。彼氏の影響で入れるのはミルクだけ。

「まあ何とか見つけましょ。吉田家の若様もいるし」

その名前に摩利はコーヒーカップを下ろす。

周囲の雑音から一つ声を落として清姫に聞く。

「吉田って、あの吉田家の？実力者じゃないか」

「そう、あの古式の吉田。なんかね二科にいるのよ」

（あの子のリハビリもどうしようか。九校戦前に達也と仲良くさせないと）

清姫の中でスケジュールの調整が始まっていた。

吉田幹比古は遅かれ早かれ司波達也と交流をするだろう。

だが、幹比古の成長に必要な九校戦への参加は今のところ開けていない。

というのも、司波達也が「新入生総代の兄」「論文満点の生徒」でしかないから。

（どうにかして、ジユウモンに認められて「実力者」としての立ち位置与えないと周囲の

レベルアップも見込めないな〜)

清姫が小さくため息をついて、カップに残ったカフェオレを飲み立ち上がる。

「明日には候補あげるけど、そっちもそっちで誰か見繕ってね」

「わかった」

一校の麗人同士の話は、結論を迎えぬまま終わった。



「司波達也君いる?」

授業も終わり司波達也は妹の深雪の付き添いで生徒会室に行くべく椅子から腰を上げた。

その瞬間に教室の入り口にいる一人の女性から声をかけられた。

女性は周りの生徒を気にせず教室に入って来る。

エンブレムのない制服は二科生。そして抜群の美貌だ。ショートカットに冷たい目。

男性的というよりも怜悯な印象を持たせる。

女性は歩みを止めず、司波達也の席の前に立つ。

「私、十二江清姫。三年生」

腰に手をやり自己紹介する自信に満ちた女性。少女というにはあまりにも立派な態度だ。

司波達也は座つたまま自己紹介を返す。

「自分が司波達也です。十二江先輩、自分に何か御用ですか。この後用事があるので何かあれば後日にしていただきたいのですか」

面倒ごとが向こうから来た、そんな印象を目の前の上級生に感じ司波達也は早々に深雪と合流して生徒会室へ行きたくなっていた。

生徒会室であれば物理的に厄介ごとから避難できるからだ。

「ちよつと生徒会室まで顔貸して」

司波達也はトラブルが動き出したと直感した。

ありがと。聞き慣れてるわ。司波君

俺の名前は相馬新。

国立魔法大学付属第一高等学校の一年生だ。

クラスはI—B。

この学校に入ったのでクロス・フィールド部に入る予定だ。

運動は嫌いじゃないし、クロス・フィールドのようなちよつと軍事的要素のあるスポーツは得意だったりする。

入学から三日目。放課後を迎え、実はやる事が無い。

入部に関しての勧誘期間は明日からで入部希望者も「フライング」にならないように「友達に会う」以外の理由で

部活棟にはいかない様注意されている。

部活の入部勧誘で「接見禁止」期間が設けられているとか、過去にどんなことが起きたのやら。

今は実家ではなくここから二駅のところにあるマンションに一人暮らしだ。

男の一人暮らしなので家は直ぐ汚れる。

さて保護者様に定期連絡を入れて明日の部活動初日に備えようか教室を出て思った矢先。

昨日の悶着で知り合った司波達也が背の高い女生徒に連れられて歩いていった。

森崎駿ことモーリーは、帰路でGWにあるCADのビジネス向けの展示会の話をしたから

司波達也は食いつぎ気味に「行きたい」と言っていた。CADマニアめ。

「シバー！」

「なんだ、アラタか」

俺を見て名前を呼んだ司波達也の目がほんのすこし開かれる。これは何か思いついたな。

「んっ？」

すっごい美人に「あんた誰？」という顔をされた。

うーん、M心をくすぐられる。

「どうしたの？デート」

「違う。生徒会に用があつて、こちらの先輩と向かっている」

視線で女生徒を指す。身長は俺と司波の達也の間位。十代の女性にしては背が高い。

生徒会の市原先輩よりももう少し高いかな。

「ふくん、大変だな。あ、自分相馬新です。1—Bです」

「十二江清姫よ。3—F」

端的に答えた。口元には余裕の小さい笑いがある。

「先輩美人ですね」

「ありがと。聞き慣れてるわ。司波君」

感謝を述べてるが表情は動かない。うわ素っ気ない。自分が美人であることを10000%理解しているって感じだ。

凄い、きつめの美人のスタンダード。

司波の名前を読んで立ち話を遮る。

「そうだ。アラタ、暇なら来てくれ」

いきなりの何を言っているんだ君は？あの美人の生徒会長さんがいるなら行くよ。

「いいけど、俺行っても良いのか？」

「構いませんよね、先輩。妹の付き添いに友人が増えたところで、別段秘密の話をするわけでもないでしょう？それに彼と一緒に下校のつもりだったので、待たせるのも申し訳ないですね」

あ、こいつ面倒ごとに他人巻き込んで上手く逃げようと考えてるな。

美人先輩は2、3秒動きを止めたが「いいよ。エルロンド会議じゃあるまいし」と答

える。

ん？エルロンド？美人先輩を先頭に三人が歩き出す。

「なんか面白い話なのか」

「いや俺もよくわかっていない。深雪の生徒会の話に關してだと言う」

「はゝあれかね、生徒会關係で忙しいから兄貴もたまには手伝え的なことなのかね」

「そうかもしれない」

苦勞を予見した軽い笑い。兄貴も大変だね。

そのまま階上の生徒会室へと連れていかれる。

夕方のオレンジ色が廊下の窓にも映る。

さて、まったく關係の無い人間としてはどう自己紹介したものかな。

流石にフェアに正体を言うわけにもいくまい。

俺の本名は関重蔵。
そして転生者だ。

国防陸軍情報部支援課第二班の少佐。

「私は評価してるよ、はんぞーくんのこと」

「二科生に風紀委員は務まりません！」

そう言った服部刑部少丞範蔵は見事に司波達也に敗北した。

「司波さん、先ほどの非礼を詫げる」

模擬戦を行った実習室では見学の生徒会の面々と十二江清姫、相馬新が見守る中服部は司波深雪に謝罪した。

司波深雪の兄への評価は身びいきであり、司波達也の実力は評価に値しない。そんな発言を服部はしていたのだ。

清姫がヤジを飛ばし、相馬新が囁し立てる。

「お兄ちゃんの方にも謝れ」

「そうだそうだ」

「中途半端な謝罪はいかんで」

「そうだそうだ」

「中途半端だから恋愛にもうじうじするんだ」

「そうだそうだ」

「だからまゆみんに」

「黙った下さい!」

服部が赤い顔をして大きな声をだす。勢いよく言ったせいで嘔んでしまったが。顔が赤いのは負傷によるものではない。

服部はこの十二江清姫が苦手だ。

一年時は桐原との喧嘩を囁し立て、誰よりも早く七草真由美への想いに勘づき、いつの間にか頭が上がらなくなる。

生徒会や部活連、風紀委員とも違う独自の立ち位置で学内を闊歩するその姿は「裏番」というあだ名も納得させられる。

去年の夏に、生徒会活動で遅くなった夕方の学校で会った際の異様なまでの妖艶さを今でも思い出す。

その時に「私は評価してるよ、はんぞーくんのこと」という言葉を貰ったときは呼気が感じれるほど彼女の唇が近かった。

夜は枕に顔をうずめながら「俺が好きなのは真由美さん!」と10回唱えて自己暗示をしてから寝た。

清姫の冷たい瞳の奥に男女の熱があったように思ったからだ。

「司波達也。君の実力はよくわかった」

今の服部にはその言葉が限界だった。

その姿を見て清姫は子供を見守る親のように息をついた。

「自分は妹の認識が正しいと証明されればいいだけです」

CADをしまいつつ司波達也が答える。

「じゃあ、こいつは風紀委員で貫つてくぞ」

この模擬戦で一番得をした笑顔の渡辺摩利が宣言をする。

二科生対策で風紀に入れようとした生徒が、服部刑部に勝つほどの実力者。それもあの九重八雲の弟子筋。

これほど戦力増強になるとは嬉しい誤算だった。



「相馬君、君はどうする?」

「一緒に下校の約束してるんで、風紀の方に寄ってから帰りますよ」

渡辺摩利に問われた相馬新は司波達也に視線を飛ばす。

司波達也は「面倒をかける」といった視線を相馬新に返すと、そのまま三人は風紀委員室へ向かっていった。

「やっぱり深雪さんのCADもシルバーのシリーズなんですか?!」

「ええ、まあ」

残された生徒会の面々で一番のCAD好きである中条あずさは司波深雪に質問の雨を浴びせた。

「シルバーのCADはナンバー入りのリミテッドエディションなんですよね?!リミテッドエディションは初回のセッティングが複雑なんですか?!噂だと初回調整の時はFLT本社に行く必要があるとか、トーラスはどんな人なんですか?!ループキャスト用に回路がメテセトリクス工業のチップ使ってるんですか?!ストレージも並列用にメテセトリクス工業に発注した次世代式のミニストレージって本当ですか?!」

司波深雪は「中条先輩はCADお好きなんですな」と愛想笑いをするのが精一杯だった。

「あーちゃん、そんなに聞いても深雪さんはトーラス・シルバー本人じゃないから答えられないわよ」

微笑ましい中条あずさの姿を七草真由美が止めると、一度生徒会室に戻ることを提案する。

「二応これで風紀委員入りしたけど、ブランシュの件は起きないから「風紀の二科生」として名前を売るか」

清姫はそう思いながら、手持ちの不良生徒をどう動かすか考え始めていた。

「お前な！三年生より早く彼女作るとは言語道断！」

「今年もあの馬鹿騒ぎの一週間がやってきた！」と今頃渡辺さんが激を飛ばしているころだろう。

魔法科高校の劣等生序盤的一幕「部活勧誘期間」の幕開けだ。

うちの部活「剣道部」も新人勧誘の為、演武会の実施をする。

すでに、体育館では各部活が胴着やユニフォームに着替えて準備を始めている。

剣道部は白の胴着、紺は剣術部と色分けをしてある。

「へへ」

俺を含め部活の全員が少し離れたところにいる桐原に向けて笑顔で手を振る壬生紗耶香を囁し立てる。

二科の二年生。黒髪のポニーテールがトレードマークの袴が良く似合う美少女だ。

「紗耶香、桐原くんと付き合ってるらしいけどさ、ホントさ」

「剣道部女子エースが剣術部の次期主将候補とお付き合いとはベストカップルか」

「もう、止めてよ！」

笑顔で答えながら壬生紗耶香は女子剣道部の輪から離れて軽い足取りで剣術部の方

へ行く。

桐原も嬉しそうな、囁し立てられるのに困ったような顔で壬生と立ち話を始める。

「萬、拳法部とMMA部はいいのか?」

剣道部の三年の先輩が心配してくる。

「大丈夫ですよ。MMAは明日ですし拳法部はそのあたりゆるくやってるんで」

実のところ拳法部は部員が多い。幽霊部員含め。というのも「軽運動部」としての側面があつたりするからだ。

ガッツリ系運動ではなく柔軟体操プラスアルファ位の運動を提供する伝統があるらしく

月に1回はあの市原先輩や中条も「運動不足の解消」として顔を出してくる。

一度、七草、市原、渡辺、裏番が揃ったときは男子生徒が浮足立っていた。

レンタル用の胴着を着た七草会長の「ぶかぶかね、うふふ」という微笑みは最高でした。あざっす!

「先に剣道部で次が剣術部でしたよね」

「ああ、お前連続でだろ」

「二応、取り敢えず、しぶしぶながら剣術部ですから」

うちの道場は無手の柔術がメインだが、長物の取り扱いや剣術もそこそこある。

長物も槍やさす又、袖絡みやそれこそ梯子の取扱いの技術体系があったりする。梯子は意外と暴漢の取り押さえには有効だ。

剣術も古流の技法が伝わっておりその縁で剣道と剣術の両部に兼部となった。

正しくは裏番のせいであるの間に兼部だったけど。

「よし、ぼちぼちウォーミングアップ始めるぞ。15分後には演武開始だ」

剣道部部长が一声かけると部員は「押忍！」と返事をし、女子部員は「紗耶香」と剣術部でおしゃべりしていた壬生に声を掛けていた。



「ありがとうございましたー」

剣道部部員一同がお辞儀をする。

剣道部の演武も終わり、周辺からはまばらな拍手。

次は剣術部の出番だ。

ブランシュによる一校への侵略。それは芽で潰した。

あれが起きないように動いて、ついでに桐原の恋愛も応援して丸く収まった。

反魔法師団体「ブランシュ」

魔法師が政治に対しての影響力が高いことをやり玉に「魔法能力による差別撤廃」を標榜する団体。

公安から昔っからマークされている奴らだが、この冬見事に壊滅した。うちの道場生で警視の立場にある人經由で公安が動き、見事全員逮捕。

何でも爆発物や銃火器も隠匿していたらしく、規模を聴いたらブランシュ襲撃を阻止して正解だった。

剣術部は桐原対4人による多対一の演武を披露する。

「可愛い彼女作りやがって!」という三年男子の熱い要望によるものだ。

現在の三年生は一科、二科対立の意識は少ない。

一科の美少女たち以外に、二科にはあの裏番がいる。

古流魔法師の流れを汲み、「儀式魔法」を練り上げる十二江家。

百家の中では天気・天候の「操作」を主にしており、今でも天候関連で豪雨対策や、早魃対策などでの活動を聴くこともある。

七草真由美生徒会長とも路線の違う名家の一員。

渡辺先輩ばりの麗人で冷徹伶俐かつちよっとお茶目で、昨年九校戦での休息日には浴衣姿を見せて

九校すべての男子生徒は風に舞って裾が捲れた裏番の膝に釘付けだったらしい。

三年生は一科、二科というより「超絶異生命体【十二江清姫】」の存在で手一杯なのだ。

「やあやあ、諸君」

ふと物思いにふけりつつ、桐原が三年と二年の団体戦レギュラーに挟み撃ちに合っているのを見てると

体育館の一階出入口から裏番が入ってきた。

丸メガネのサングラスをつけており、胡散臭いことしかたがない。うわゝ黒幕ごっこだ。

体育館の女子たちは「清姫さん！」と声を上げ、男子は「うわあ……」と残念な声をあげてる。

「おい、どうした十二江？」

剣道部主将が闖入者に声を掛ける。

「うん、丸さん。ちょっと面白いことを考えてね」

いつもの陽気かつ意地悪な、そして妖艶さに見とれる笑顔を剣道部主将の丸さんに向けてる。

「木部君は？」

「今、桐原と一対一」

裏番の質問に丸さんは試合を指さす。

「お前な！三年生より早く彼女作るとは言語道断！」

「そんなの知るか！」

木部主将は竹刀に加重と硬化の魔法を使用し、桐原はそれに反論する。

「演武に剛剣（ハードブレード）とか本気じゃねえか!」

「モテ男に天誅!」

金属並みの硬度と重量になった竹刀を振り回しながら追いかける先輩に桐原は構えを解いて逃げ出す。

周りからは「モテない男の恨みを喰らえ!」「幸せで爆発しやがれ!」と他の剣術、剣道部員からヤジが飛ぶ。

壬生紗耶香もまんざらじゃないようで笑いながら「頑張つて逃げて〜」と応援している。

3分間走り回ったところで、剛剣の魔法が解けた竹刀で面を喰らい桐原の敗北が決まった。

体育館内ではそこかしこに笑いが起きる。

一年生はオモシロいコントを見た感じだが、二年生や三年生としては「実力主義者の桐原」が二科生の彼女が出来て弄られている姿のギャップに笑いが絶えない。

剣術部の演武が終わったあたりで、裏番がどこからかマイクを持つてくる。

「え〜見学にお集まりの皆さん。私は部活連の特別相談役を自認する十二江清姫です。特別にお試し部活参加を行いたいと思います。この体育館にいる一年生で、剣道、剣術

に興味のある生徒を対象に「上級生との模擬戦」を行いたいと思います。腕に覚えのある参加者を募集中！剣道部には女子剣道では日本トップクラスの二年生の壬生や、剣術部には昨年の剣術大会で好成績を取めた桐原などの猛者がいる！」

体育館のスピーカーから激みなく告げられるイベント。

丸さんは面白がつて笑い、木部さんは面を取りながら「俺も相手するぞ！」と元気だ。俺はため息をつく、いつも通り裏番のトラブルメーカーぶりに巻き込まれたことを恨み天井を見上げた。

二度目の高校生活は賑やかでいいが、時折命懸けが混ざってくるのは止めて頂きたい。

役得で、市原先輩をお姫様抱っこしたということもあるが市原先輩には彼氏がいるらしいのでその後まで話が行かないのが残念ではある。

視線を上から戻す時に二階席にいた司波達也と千葉エリカが見えた。

そうか、この二人を巻き込むための布石かなにかか？

他にいる男子生徒と何やら三人で裏番の方を見ながら笑っている。

少しだけ体育館内がざわつく。いきなり二年生と勝負させてやる、と言われてもそりゃ困るわな。

「相手の指名は可能?!」

二階席から元気な女生徒の声が聞こえる。

周囲は一斉にそちらへ向く。赤毛の美少女、千葉エリカだ。

「指名?指名したい相手でもいるのお嬢さん!」

裏番がお嬢さん呼びをして場を煽る。

「そこにいる壬生紗耶香との勝負を希望するわ!」

「え、私?」と驚き周りの女子部員の顔を見る壬生紗耶香。

すでに千葉エリカの視線は壬生に釘付けだ。

「よし!受けた!下に降りて準備して!あとそこにいる風紀委員、立ち合いを認めてね!」

ほら裏番が司波達也を巻き込んだ。



「では、これより壬生紗耶香対千葉エリカの特別試合を行います」

司波達也が立会いをすることとなった。

試合場では二人が剣道用の防具を付け、対面し一礼する。

準備中に「千葉、千刃流の?」と壬生が気づき、千葉エリカは「女子剣道の実力者と

一度対戦してみたかったの」と壬生を軽く挑発する。

あと「静和流にも興味があるけどね」と俺にも視線を投げてきた。いやだよ。剣での

勝負じゃ厳しい。

「イヤアア!」「セイ!」

二人の美少女の声が、体育館に響く。周囲には剣道、剣術の両部や手の空いている他の部活の面々、あと一年生たちが固唾をのんで見ている。

ルールは剣術寄りのルールとなった。ただし殺傷性のある魔法の使用はNG。責任は裏番と、立ち合いは中立である風紀委員。

司波達也は「一度本部に確認します」と言つてヘッドホンで確認したところ「風紀委員長が溜息をついてOK出しましたよ」とあきれていた。

試合場では千葉エリカが押せ押せだ。自己加速による歩法は有効だ。だが一本を取るほどではない。壬生は防戦。

いや後の先狙いかな? どうだろうか。

自己加速の中、右左と回り込みながら千葉エリカが壬生の隙を伺う。

千刃流と静和流はあんまり付き合いがない。

というのも、うちは無手の速捕術。向こうは昭和、平成で採用された剣道にとつて代わる魔法師向けの剣術の最大手。

仲良くはないが悪くもない。

合同稽古なんて指導カリキュラムが違うのでやる意味がない。

せいぜい年一の古武道の演武会で千葉の当主が観覧席にご列席するくらいだ。

千葉エリカの攻めに壬生が試合場の角まで押され、開き直ったように大上段に構える。

「ほう」

木部さんが声をあげる。

気付いた部員も何人もいる。これは押されたのではなく壬生が誘い込んだ。

試合なので線を跨ぐと場外となる。試合は仕切り直される。

壬生が角に陣取ったので千葉エリカは左右から回り込むことが出来ず、正面から行くしかない。

あとは壬生が飛び込む千葉を切って落とすか、千葉が速度にモノを言わせて切り崩すか。

どちらかになりそうだ。

千葉エリカも「チエエエ!」と気合を挙げるが壬生は身じろぎもしない。

肝が据わっている状態だ。

千葉は前後に大きく動き揺さぶるが壬生は釣られない。

会場も静の壬生、動の千葉の意図がわかり始め緊張が上がり始める。

「エエエエエー!」

壬生の裂ぱくの気合が体育館に響く。

勝負は決まった。

◆

千葉エリカは一瞬息をのみ自己加速を発動。

正面から大きく踏み込むが、それを読んで壬生は大上段から面を狙い竹刀を振り下ろす。

それで壬生が勝ったと思ったが、千葉エリカは自己加速で踏み込んだ瞬間に後ろにのけぞり面をすかす。

千葉は振り下ろされた壬生の右小手を左に持った竹刀で小手を取る。

「一本！」

片手での小手取り。単なる力業ではなく、剣術・剣道でも十分に評価される技術の一撃。

二人は開始線に戻り一礼。

試合は終わった。

試合場から離れて二人は面と小手を取り握手する。

「凄いわね」

「壬生先輩も。千葉の免許持ちを本気にさせたのよ」

そこから「サーヤって呼んでいい?」「いいわよ、その代わり剣道部どう?」「ええ汗臭い」「幽霊部員じゃなければ参加は強制しないわよ」「考えとく」と早速打ち解けはじめていた。

この後、千葉エリカの連れ立った相馬という男子生徒が木部さんに一発で負けて会場から失笑を取っていた。

裏番は予定通りなのか、薄く笑いを浮かべていた。
またよからぬことを企んでるな。

ありがたみの無いファーストキス

「清姫さん」

「ダメだった?」

うちの裏番に止めてもらいたいのは、不良生徒をけしかけるような昭和的発想だ。

たしか、「劣等生」放映当時には社会人だったらしい。逆算すると平成一桁くらいの生まれだろうか。

俺の目の前で裏番に対して報告するのはうちの学校でも少ない「不良」3人組だ。

不良と言っても酒を飲んだり、喧嘩騒ぎを起こす程度の不良だ。俺の前の時の不良はナイフとか持っていたり、カラーギャング、ヤカラなんてのもあった。

ちなみにこの三人と裏番と俺は「地獄飲み会」での共犯だ。

ざっくりいうと高校二年生と一年生だけで飲み会をした。2095年でも未成年の飲酒はダメだ。

結論から言うとうちの裏番は酔っぱらうとキス魔だった。いやあれはキスというより唇を舐め繰り返されたと言った方がいい。

不良の一人は「ファーストキスは好きな人と…」と涙声だった。

いくら美人と言ってもあんなにありがたみの無いファーストキスは嫌だ。

裏番が「ありがとね」と言つて労うと、3人はうな垂れて帰つて行つた。

ここは第2図書室の一角。

少量だが紙の本を管理しており、裏番は図書委員に名前を連ねておりこのスペースの管理をしている。

「で、この何日かの動きを説明してもらえますか？」

「まあまあ真人。怒らないでよ」

裏番からの頼みで司波達也に絡んだのがあの3人。

あの3人としては「二科生風紀の箔付けの手伝い」として悪役を買つて出たらしいが、箔付けする前に司波深雪に阻まれて手出し出来ずに退散したらしい。

近くの椅子に腰かけ、図書室の受付スペース内でくつろぐ裏番を睨む。

あの三人はそれこそ拳法部の幽霊部員だが体格もよく、「撫で合い」なら一般生徒には負けない。

下手すれば殴り合いの喧嘩に発展しかねない。それをけしかけたんだ。

睨まれたつて文句は言えない。

「君、修正力とか信じる方？」

俺は周囲を見て、この部屋に他に生徒がいないことを確認した。

それ程広い部屋でもない。

裏番は手元にある紙の本をペラペラとめくり遊びながら聞いてくる。

「あまり。それが今回の件と関係するんですか？」

「するね。このまま行くと司波達也とジユウモンとの関係が希薄になる」

「何か問題でも？」

「あの二人の関係性が薄いと戦力の一体化が出来ないかもしれない」

「九校戦で？」

「ちがう。横浜」

「でもそれほど会頭と司波達也に接点はなかったかと思えますけど」

「大筋ではそうだけど、九校戦での司波達也のモノリス参戦はミキちゃんとレオの活躍兼レベルアップの場だからそのお膳立てをしておきたいの」

「それでこれですか」

「安直だけど【実力者】としてジユウモンに認識させるにはトラブルが一番だよ」

「ブランシュが無い場合の代替え案というわけですね」

「私たちだけで周公瑾に先手は打てない」

「ええ」

原作の未来予知の話をするところに行き着く。

九校戦のジェネレーターはどうかなる、いや俺がどうかするつもりだが横浜の事件は規模が大きい。

俺と裏番の手の届く範囲を超えている。

だからこそ、司波達也とその周辺が大事になって来る。

横浜全域での戦闘。相手は戦車や銃火器を装備した兵士。そしてこちらには多数の市民と生徒たち。

アニメのように上手くいく場合もあるが、そうなる保証はない。

「都合よく修正力は働かない。ならば人為的に関係性の強化を図る」

俺が裏番の意図を口にする。

「そういうこと。ジユウモンの視界に「司波達也」を入れないとね」

「悩みどころですね」

「悩みどころなのだよ」

あつけらかんと言う裏番は余裕の笑みだが、この人の思考はわからない。

口笛を吹きながら司一を殴るような人なのだ。

ヤキを入れる

自分でもこの性格が支離滅裂なのは承知している。

いや、本質的には人間というモノは支離滅裂なのかも知れない。

私、十二江清姫はそんなことを常々思いながら、日々登下校をしている。

不良チームの失敗から2日。

ブランシユの暗躍なく、学内での一科二科問題はほぼ皆無。

平和な青空の下、皆勉強に励んでいる。

良いことなのだ。

ただど不安になるのは自分の行いが世界の成り行きを歪めてしまったのではないか、
と言うことだ。

バタフライエフェクト。

地球の真裏の蝶の羽ばたきがこちらの地表に甚大な被害を発生させる事件の兆しか
も知れない。

風が吹けば桶屋が儲かる。

ラノベ好きとしては発売とアニメ化の2度のタイミングで前世時点の最新刊まで読

んでいた。

勿論アニメも視聴済み。

一条将揮と壬生沙耶香は必ず対面させることが楽しみでもある。

キリトとアスナだよ。

原作ではブランシュ襲撃で「司波達也とは何者か？」というのが学内の実力者、特にまゆみんとジユウモンの中に残る。

これが大事。

九校戦、横浜での特別扱いの基礎となる。

九校戦での司波達也のエンジニア参加は確定だ。

深雪ちゃんの発言と私のごり押しでなんとでもなる。

だけど、モノリスへの特別参加は怪しい。

だってジユウモンは司波達也の実力を現時点では知らない。

実戦経験を匂わしての接触は起きない。

さて、そうなるとモブ崎がリタイアした後には司波達也たちがモノリスコード新人戦には参戦しない。

もつとさかのぼれば、レオもエリカも司波達也の実力に信頼を置いていない状況だ。

司波達也のあの性格だと二科一年の面々の中心にはなるだろうが、戦闘能力では「服

部副会長を倒した」程度の噂の持ち主でしかない。

剣術部との悶着もない。

どうも、私の2年間は司波達也の人生に良い意味でも悪い意味でも影響を与えてしまったようだ。



「これは、一昔前で言うところの「ヤキを入れる」というやつですかね」
涼しげな顔で司波達也きゅんが言ってくる。

「こんなか弱い女の子が司波君にヤキを入れられるわけないじゃないか」

放課後、風紀委員として巡回中の司波達也君を第二図書室に連れ込んだ。

うーん、中村悠一の声で敵対な態度で言われると涎が出そうだ。

桐原君との口論とか2時間くらい聞いていられそうである。

ジユウモンは性格が固いので「俺様の美技に酔いな」と言ってくれなかった。

跡部王国の住人としてはいつか言わせてやる。

ただしその時は、アイマスクして声だけに集中したいよね。

外見がアレで台詞が跡部様だと、ギャップで笑死しそうだし。

「フアランクス！俺様の美技に酔いな！」とか。

司波君に椅子を勧めめるが座る様子はない。警戒しているな。

「君と話してみようと思つてね」

「自分とですか。二科の3年生主席と話すことなどないよう思いますが」

「入試で論文1位は私は取れていないから、将来的には君なら一科二科関係なく論文だけで主席卒業しそうだけど」

私の言葉に司波君は少し顔を曇らせる。

「実技は評価の6割ですから、残り4割がどれ程評価されても、4割以上にはなりませんよ」

そうね。

私は思わせぶりに深く足を組んで見せた。去年はこれではんぞー君の声が一オクターブ上がったので、男子の反応見るにはなかなか使える。

「君、九重八雲の弟子筋で入試で論文1位。はんぞー君に勝つほどの腕。不躰だけど、佐渡の防衛戦とかで実戦経験積んでない？」

「いえ、日本海側には行つたことにはないですね。それに九重先生とは知り合いの紹介で、別段俺自身は忍者というわけではないですよ」

なんか表情硬いなく。まあ普通この状況で私を信用しないよね。

声の高さも変わらないので足の組み替えじや何ともないか。

「私はね、高校から先を見据えて将来有望な子には声をかけてる。まゆみんとは幼馴染

みだけど、摩利やリンとは高校からの付き合ひ。彼女らが将来私に対して有益な事をしてくれるなら、それなりの支援をするつもり」

私の言葉に司波きゆんの視線が変わる。私の求めるところがわかったので敵愾心は薄まっている。

「十二江家はこの国の天候については非常に重要な家だ。資産で言えば二十八師補家に隠れるがそれなりだし、宮内庁、内閣府との繋がりには下手な十師族より上」

「ここまで話して司波君の表情も少しだけ柔らかくなつた。話のオチが読めたからだろう。

「自分にそれを話して如何するんですか？ただ運良く論文1位で入学し、服部副会長との模擬戦も1対1かつ、障害物のない環境が自分に有利になつただけです」

「だから、自分の実力ではないとも言つても言うつもり？言つたでしょ、これは将来性を買つてゐるの」

私、悪い顔してゐるんだろうな。

「どうやら君は学生生活を静かに暮らしたいようだけど、言つておくよ。中途半端な立ち位置だとこの学校だと悪目立ちをするよ。ただ一人の突き抜けた存在になれば、想像以上に静かで楽に学生が出来る」

「ええ、先輩を見ればわかります」

「キヨさん、と呼ばたまへ」

もう一度悪い顔をして微笑んだ。

司波達也きゆんは少し呆れたように笑った。まるで面倒な先輩に目を付けられた後輩の表情だ。



「十二江」

ほら来た。

達也きゆんのおしやべりの翌日。第二図書室にやってきた。

ジユウモンはいつもの真面目顔で聴いてくる。

私が司波君に絡んだ話は既に学内に広まりつつある。

「二科の3年生が、1年の有望株にツバをつけた」とかである。

真人の事もあり、司波君を子分にしようとしていると見られても仕方があるまい。

「次にジユウモンはこう言う「お前が声をかけた1年生は何者だ？」とね」

「その通りだ」

もう、ジユウモンつまらない。

「はんぞー君に模擬戦で完勝。論文1位でおつむの出来は1年で1番。それにあの九重八雲の弟子。超掘り出し物だと思わない？」

「それ程の1年が二科か」

「試験の評価基準の問題でしょ?」

日本の魔法教育の判断基準は「基本的能力」に重点を置かれている。

「強度」「規模」「速さ」確かに重要なファクターだけど、基礎能力だけ強くて発展性の無さと柔軟性の無い日本の魔法思想はちよつとどうかと思うのよ。

その中で変数調整の速度を自由自在に操る司波達也きゅんの能力は評価基準から外れるが、魔法の基礎教育後の能力を伸ばすには必須のテクニクだと思う。

この点に関しては私が二科にいるのも「速さ」の一点が、他の良さを失くすほどだからだ。

天候操作なんて1秒で出来る魔法じゃないので、うちの家系では速度なんて「6時間で儀式が済めば早い方」の感覚だ。

「九校戦には引つ張るよ。どんな形でも学生の中核にいて欲しいね」

もう数か月で来るのが「九校戦」

総合三連覇がかかる大事な学校行事だ。

ここでの活躍によって生徒内の中心人物が決まっていく。

まゆみんも、摩利も、ジユウモンも私も、学内の有名人なのは学校行事での活躍があるからだ。

実績というよりも活躍。目立ったかどうか。それが重要だったりする。勿論実力が伴えば言うことはない。

「対立解消の最終段階か」

そうなのだ。この一科二科対立の最終段階は現在の一年生での二科生の活躍だ。

今の二年生は昨年まで、対立意識の強かった年代、私たちの一学年上を見ている。

二年生は、一科二科対立の記憶が濃く、本当の意味で一科二科問題が解消されるのは対立意識のない現在の三年生を見て過ごす、今の一年生の年代からだ。

そのためにも実力主義の元、二科生にも活躍の場を与える。

そんな意識が現在の学内自治の上層部は持っているのだ。

「ジユウモン、司波君の実力が本物なら部活連に貸すよ。ただ彼に立ち位置を与えるなら生徒会か私の周りがベターだよ。彼は静かに暮らしたい派みたいだしね」

そう、司波家の二人はこれから先の人生を順風満帆に迎えるために、静かに学生生活を過ごそうとしている。

でも、四葉真夜はそれを許してくれないだろうな。

「だが」

この大柄なポケモンみなたいなあだ名の男子はことあるごとにこう言ってくる。

「わかってる十師族として、看過できない場合はってヤツでしょ」

そうなのだ。十文字家の次期当主。ほとんど当主の仕事をする苦勞人。

彼は部活連会頭の責任と共に十師族の次期当主として、魔法界全体を見る責任がある。

だから「将来的な火種」については敏感で「対応」については、まゆみんや私以上に口にする。

「そうだ。その場合は何かしらの対応を取らざる得ない」

「そうだったら、私とジウモンで取り合いだ。十二江清姫は20年後の天下の為に有望な人材は欲しいからね」

悪びれもなく言う。本当に実力者とのつながりというのは未来への資産なのだ。

生まれながら当たり前に二十八師補家とつながりを持つ、名家とは違う独立独歩の我が家では人脈の拡充が親の代からの問題だ。

「拾いきれない人材は頼む」

ジウモンはそれだけ言って図書室を出る。私はジウモンの背に向けて言葉をかける。

「任してくれたまえ」

ホント、私は支離滅裂だ。

司波達也に主役として活躍はして欲しいが、活躍が必要な事件は防ぎたい。

キャラ萌えはしたいけど、現実の惨劇は勘弁願いたいのだ。

ほのかちゃんも可愛くてもやって良いことと悪いことがある。

司波達也きゅんを上手く有名にする手っ取り早い方法がないかな、と思っていたらトラブルは向こうから来た。

この二科の黒幕にかかればこんなもんですよ！

学内の悪事（壬生プロマイド事件、あーちゃんアイスクリーム事件、運動部部活棟再配置事案）に関しては大体黒幕と思われる私も今回に関してはノータッチだった。

問題は「魔法科高校の美少女たち」と特集を組んだ週刊誌いや、ウェブメディアだった。

「こんな楽しいことに、おねーさん混ぜないなんて司波君のいけず〜」
「犯罪行為を楽しむほど、心臓に毛は生えていませんよ」

司波達也君の肩をふざけてツンツンしたら一気に部屋の気温が下がった。

あ、深雪ちゃん私のこと睨まないで。

第二図書室の情報端末からウェブメディアのサーバーへのアタック。

司波達也きゅんは私がいらないと思いき、風紀の巡回として第二図書室へ潜り込んでい

た。

そこを見つけた私の言葉をサツと躲す司波達也くんは、兄に悪い虫がつくのを牽制する妹。

「達也君、そこにアクセスするのなら、3回はサーバー嘯ませてくれる？あそこのセキュリティは確かNDF関連だから、追跡が五月蠅い」

「どうやら達也君は、ウェブメディアの親玉である大手メディア企業のサーバにも悪戯しようというのだ。」

「よくぞ存じですね。まるで手慣れているように思いますが」
「まあ、ネットサーフィンに興味だからね」

私の過去の悪事を見透かすようなその余裕ぶつた口ぶり…大好きです！
ウェブメディアは悪さをした。

1年生の複数の女子にストーカー行為をしたのだ。

ほのかちゃんが可愛くてもやっつて良いことと悪いことがある。

いくらほのかちゃんが可愛くてもストーカーはダメだし、それを指摘されて逆上して達也君の襟をつかもうとするのもダメだ。

ちよつと高校生がお仕置きせねばならぬ！



「司波だったな。これは？」

「さあ、校内への不法侵入に関しては警備員の到着を待たずに実力行使が認められますからね」

目の前にはバラクラバ姿の男が二人。そしてこちらには俺と司波達也の二人。

逮捕術の元になった柔術の次期宗家と九重八雲の弟子。

素人相手のアクションシーンなど単なる文字稼ぎだ。

端的に言うと、俺と司波達也は不法侵入した二人を拘束した。

「我々は読者の……」

司波達也の眼光に不法侵入者の言葉が細くなる。

先程裏番が話していたウェブメディアのライターか。

どうやらネタ欲しさに不法侵入したようだ。馬鹿か。

こいつらは「読者の望むモノを見せる」と言いたいのだろう。

国立魔法大付属高校はエリート育成機関だ。

10年もすれば今の3年生は軍や各省庁における魔法の専門家として重要なポストにつく。

そんな育成機関にアポ無し、それも所属する人間のプライバシーを暴こうとしたのだ。

五体満足で捕まえられるだけありがたく思つて欲しい。

「お〜い、司波！」

校舎からは森崎と相馬が警備員を連れて走つてくる。

「連絡通り警備員さん連れて来たぞ。何があつた？」

森崎も急いできたのだろう。額に汗が見える。

「先日話したウェブメディアの人間だ。不法侵入で拘束した」

「何?! ホントか!」

今説明しただろう、モブ崎よ。

内心で突つ込みながら、俺は警備員に説明し、警察を呼ぶように伝えた。

「そんな!」

「よく聞け。ここは学校ではあるが国家機関だ。また魔法関係の重要施設もある。これがどういう意味だかわかるか」

慌てる侵入者に俺は視線を向け説明する。

「最悪国家機密の漏洩に関わる罪状になることも覚悟しておけ」

一校に入学する際は誓約書を書かされる。機密情報漏洩に関する厳しい誓約書だ。

書かされた時は噂は本当だったと納得した。

一校そのものの情報もそうだが、一校からアクセスできる情報のレベルは想像以上

だった。

昨年潰したブランシユが狙ったのも納得だ。

「萬先輩。脅し過ぎですよ」

「俺が言わなかつたらお前が言うだろう」

司波が俺をたしなめるが、俺が知る司波達也の性格なら似たようなことを言うだろう。

不法侵入者は警備員に連れられていく。

「司波。お前どうだ、武道系部活に参加しないか？」

「自分は魔工師志望です。身体を動かす部活は考えていませんし、風紀の仕事で手一杯です」

司波は余裕のある笑みは崩さない。

感情が希薄というのは嘘だな。こんなに感情豊かな奴が妹にしか感情が向かないとかある訳ない。

単なるシスコンだろう。

翌日、この不法侵入者騒動は学生自治の上層部に知れることとなった。

簡単に言えば十文字会頭と七草会長と渡辺風紀委員長と裏番が知ったのである。

十文字会頭は「そうか」としか言わなかった。

この人の頭の中はよくわからないが、ものすごく単純に考えているか、ものすごく複雑に考えているかの両極端な気がする。

天然と評されるのは思考の極端さの表れだろう。

そして5月は過ぎ、もうすぐ九校戦へと季節は向かう。

君には婚約者がいる

「会場警備ですか？」

十文字会頭の説明についてオウム返しをしてしまった。

3限目をサボれる特典はあるが告げられた内容はあまり嬉しくない。

「そうだ。萬。今回の九校戦では試験的に一部学生による警備補助を取り入れる」

部活連本部。言いたくはないが風紀委員室より片付いている。

部屋の奥、執務机を挟んで十文字会頭が答える。

そこには運動系部活の主要メンバー総勢20名が勢揃いしている。

「それですとスパイ行為や不正行為に手を出す輩がいらないとは言えませんよ」

操弾射撃部の部員が声を上げる。

尤もだ。九校戦は論文コンペとは違う。

リアルタイムで行う競技会では自校の生徒以外は皆敵だ。

そんな環境に警備とは言え他校生が近くには競技の戦術チェックなど出来ない。

「うちの学校でそんなことをする奴はいないが、他校で不埒な奴がいらないとは限らない

な」

辰巳先輩が頷く。

先輩、モノリスの選手候補だから気が楽かも知れないが、警備参加が確実な俺は気苦
勞しそうで嫌なんだぞ。

あと、いい加減剣道部の部室に置いた2世代前のレア物CAD持って帰ってくださ
い。邪魔です。

何ですか、「ハンディゲーム機内蔵型CAD」とか。

「だが将来有事の時に、戦列に並ぶ同じ魔法師をそのようには思いたくない」

会頭の声で辰巳先輩の私物の話から意識が戻る。

「実際は警備と言っても、観客席やコース脇での警備補助がメインです。警備参加の生
徒は競技参加の生徒とは別のホテルに泊まることになるから情報共有する機会は少な
い予定のほすです」

市原先輩が警備の大枠の話を始め。

基本的には選手との接触はほほなく、スパイ行為についてはできない。

今回の警備の話は本当に嬉しくない。

各運動系部活は九校戦後に夏の大会が待っている。

剣術部と剣道部は秋の大会だから良いが、クロスフィールドは夏の大会で3年生が引
退だから万全の体制で迎えたいはずだ。

そこに警備の話だ。

クロスワールドの主要選手の一人二人は警備に取られるだろうな。

調整不足で夏大会とか可哀想以外の感情は出てこない。

「いいか、言いたいことはあるだろうが、九校戦の選手たちが安心して全力を尽くせるよう努めるのも在校生の務めだ」

各部活から招集された面々の内心を感じ取った十文字会頭が、やや圧力のある声で宣言する。

この人のリーダーぶりは生まれつきな気がするな。

パパ、ママと口にする前に「責任」と一緒に生まれてきた感じた。

戦争が身近なこの時代で、兵器としての魔法師の頂点に立つ家の跡取りというのも大変だろう。

裏番辺りに話せば「君もでしょう」と笑われそうだが。

◆ 「ここにきて泥棒騒ぎとはね」

まゆみんが溜息をつく。

たまに顔出す生徒会室ではあーちゃんや市原鈴音（通称リン）、何でも年上の彼氏がいるそうで、なかなか紹介してくれない。年上には興味が無いので安心して欲しい。千葉

の長男にも次男にも興味は無い！」が忙しそうに校内SNSへ、九校戦についての情報を上げています。

「キヨ、これでもため息減らしてるのよ」

「ため息するとほうれい線深くなるらしいよ」

私の言葉にあーちゃんのみならず、リンも「えっ」と声を出す。

リンの表情差分の少なさは、ほうれい線対策だったのか！

「へ〜リンもほうれい線とか気にするんだ〜」

「まあ、人並みには」

少し顔が赤くなる。噂の彼氏のため？

「でも、今年はエンジニアが確保できて助かったわ」

私と司波達也君の2名がギリギリで参加が決まった。

学内から選手選抜が終わる頃、九校戦関係者の自宅に立て続けに泥棒が入った。

と言つても盗まれるというよりは、情報端末への不正アクセスの痕跡や、自宅書斎を荒らされるなど、普通の泥棒とも動きが違う。

九校戦の主催である魔法師協会は即座に警備強化を行った。

勿論国防軍への警備強化依頼を出したが、「実地研修」と「学生主体の自治」の名の下に、選手やエンジニアとして参加しない学生による警備班を組織しようと言うのだ。

うちからは運動系部活から数人。

まあ、真人は行かされるだろうな。実家が警察関係だし、格闘技道場の跡取だし。

近接戦闘なら沢木碧に匹敵し、剣術でも桐原武明にも劣らない。

そして「裏技」まで持つ最強の2年生。最優ははんぞー君だが、最強は真人でしょ。

「今年も浴衣かな」

「本当に好きですね。コスプレ」

リンから呆れた声ができる。

私は九校戦の中日、午後の試合がなくなる日にはちよつとだけ変わった格好をしてい

る。

浴衣姿に、アオザイ。

男子高校生の鼻の下が伸びた視線は、笑ってしまいうやら楽しいやら。

「はいはい、筆頭エンジニア殿、あんまりうちの品性を落とさないでね」

まゆみんに釘を刺されたが、君昨年のバニーガール計画に最後までノリノリだったじゃない。



「司波くん、君には【キヨさん】か【おねーちゃん】と呼ぶ権利をあげよう」

「十二江先輩」

困り顔をして私に声を掛けるのは司波達也きゅんではなく、五十里くんだ。
2年生で1番女装の似合う男子。

既に千代田花音と結託して女生徒の制服を着せたことがある。

スネ毛がなくてツルツル。

いやー似合ってたわ。

「五十里くん、君には婚約者がいるから手を出せないのが残念な限りだ」

残念そうな声を出したけど本当に残念なのだ。

こういう線の細い感じの男子大好き！

「兄弟は妹だけで十二分です。先輩にはご兄弟はいらっしゃらないのですか」

顔も合わせず返答する司波達也君はCADのメンテに使う簡易の測定器の充電状況を確認している。

正直、ホテルについてすぐに初日の競技に参加する生徒のCAD調整があるから、ゆつくりとは出来ない。

ここはスタッフ用の大型バンの中。

前方には選手が乗ったバスが走っている。

もうあと1時間もすればホテルに到着する。

そう、九校戦のスケジュールは始まっている。

この後はそ無頭竜による自爆テロだが、ジユウモンと深雪ちゃんと達也君の活躍で事なきを得るはず。

「二人っ子なのよ。おねーさんは。まゆみんとこの双子ちゃんには今一つ好かれてないし」

あの双子からは「変な人」扱いで、あんまり好かれてない。

「破廉恥！」と言われたときはちよつとだけ傷ついた。

そしてトラックは急ブレーキ。

さあ、始まったぞますよ！

2度目の九校戦

95年度の九校戦。

2度目の九校戦は懐かしさがある。

前回は参加が出来なかったけど、今回は選手としての参加だ。

「高村マリア」

バスから降りての点呼でそ名前を呼ばれた。

前世とは違う名前も十何年と呼ばれるとしつくりくるようになった。

有難いのか有難くないのか、数字持ちの家系ではなかった。

富士演習場周辺には数カ所の宿泊施設がある。

その一つに到着した我が六校ではあるが、いかせんこういった全国大会には弱い。

こういった全国大会に強いのは一校や二校などの一学年200人を誇るマンモス校なのだ。

一学年100人前後のうちの学校や、他の高校からすれば得意な競技で「○○の×校」といった看板を守らなければならない。

この九校戦には自校のアイデンティティがかかっている。

「マリアどうする？地下に温泉あるらしいよ」

「そうね、荷物置いて懇親会の打合せもあるから、夕食後に行きましようか」
私の話をしよう。

高村マリア。それが今の名前だ。

六校の1年生総代。部活は操弾射撃部に所属。

ただ課外活動が忙しく、あまり自由になる時間は少ない。

中学時代は黒髪を伸ばしていたが、高校では髪を編み込んだ特徴的な髪型にした。

友達からは「女格闘家か」と突っ込まれたが、動きやすいしカッコいいと思っている。

大人びた顔付きが自分で言うのもなんだけど、髪型とマッチしており、結構男子と女子からモテる。

名家でも魔法師の有名な関係者の血縁ではない。

長く培った知識とチート能力で実力的には国内屈指の一人になったと思う。

六校に入ったのはあまりこれといった理由はない。

実家が岡山ということもあり、近隣にある二校か六校かで何となく六校を選んだ。

入学前に全国にいる魔法科高校の学生名簿、といつても九校戦に名前や論文コンペなどで手に入る資料に掲載の高校生をざっと見ていた。

私の予想では、一校にいる「十二江清姫」というのは

転生者だ。または、記憶無し転生者だ。

「萬 真人」も転生者候補として認識している。

残念ながら同年代に転生者がいる様子は皆無。

この上級生を上手くコントロールして、九校戦、横浜騒乱を乗り越えなければいけないらしい。

二人のスタンスは「問題の回避」と思われる。

関係各所から漏れ伝わるブランシュ壊滅には二人が介入しており、諜報関係者からは、気象庁御用達の十二江から危なっかしい存在が生まれたことに注目している。

この二人が行ったことは決して小さいことでは無い。

公安への貸しとしては小さくない。

転生者としては先の展開を覆す行為だ。

原作ブレイクと言えば原作ブレイクだがこの程度なら許容範囲だ。

「マリア、打合せは会議室らしいよ」

同級生の誘導に従って地下一階の会議室へ向かう。

彼女は純然たるこの世界生まれの一般人だ。

転生者の判別は転生者のカテゴリーによって細分化される。

前世記憶の有無、この世界の知識、チート、生まれと育成環境。

私で言えば

【非十師族】【チート】【一般の家庭】【前世記憶アリ】【原作知識あり】になる。

事前のブランシュ壊滅から察すると、前世記憶はあるし、この世界についても理解しているのだろう。

ブランシュ壊滅に直接的に手を下したらしいので、チートやそれに近い能力もあるのだろう。

【百家】【名門】【前世記憶アリ】【原作知識アリ】【チート】といったところだろうか。

ただ情報を隠匿したり独自に動く手勢はいない。

更には各関係各所から情報を引き出す伝手はない。

その意味ではこの二人は転生初心者なのだ。

もう一度説明しよう。

私、高村マリアは転生者だ。

前の名前は川村エカテリーナ。
私の魔法科高校の劣等生は2周目なのだ。

耳栓準備しとこうかな？

九校戦の前夜祭。

つまりは九島烈による手品の時間であり、吉田幹比古の給仕姿と千葉エリカのメイド姿が見れる非常に楽しいシークエンスだ。

だが警備班に回された俺としては非常に楽しくない時間だ。

なぜなら懇親会に参加していないからだ。

警備班のバス到着時間が遅れ、スケジュールが押し押しになり懇親会も最初の15分程度で退席し、警備班参加者は

近くの会議室でミーティングとなった。

今回一校からは各学年3人ずつ計9人。それが九校分なので81人、になるはずだが学生の絶対数の少ない高校からは各学年2名とか1名なので、警備班は50人程度となった。

「明日の担当競技ごとのミーティングは9時30分からとなります」

九校戦スタッフは手元の情報端末に警備班のスケジュールを送信しながら、明日の予定を読み上げていく。

俺の担当は男女スピードシューティング本戦とモノリスコード新人戦だ。

あの指パツチンを現場で受けるのか。

耳栓準備しとこうかな？

俺以外にも一校生は何人か。

十文字会頭のところのクロスフィールド部の一年生も引つ張り出されている。

会頭のいる部活は悪い意味でも、良い意味でも十文字一家で会頭の提案には逆らえない。

警備班は1時間ちよつとのミーティングが終わり宿舎へと案内される。

俺達警備班は閉会式までは自校の生徒とは別の宿舎に寝泊まりとなる。

すぐに50人も人間の間に10日間寝泊まりさせる場所の確保も大変だったのか、割り当てられた宿舎は国防軍富士演習場の臨時兵舎の一画だった。

四部屋、ベッドは上下の二段ベッドが二つ。完全に新兵用じゃねえか。

地味な濃い緑のベッドカバーがいかにも軍隊といった感じをさせる。

「先輩、上にします？・下にします？」

同部屋になったクロフィーの相馬がベッドの上下を聞いてくる。

「ああ、俺は下な。悪いが上でよろしく」

この後は吉田幹比古と司波達也との夜の会話が起こるはずだが、残念ながらホテルと

この宿舎は距離があるのでその場に立ち会うのは難しい。

ただ、俺には裏番から与えられたミッションがある。

それは電子金蚕と無頭竜の人造人間対策だ。



渡辺先輩はコースアウトして失格になった。

バトル・ボード決勝での話だ。

ただ原作と違うのは怪我をしなかったという点だ。

勿論多少の打ち身はあったが、ベッドで一晩明かすようなことにはならなかった。

何でもコースアウトした瞬間に学生警備班の一人が、うちの一校の相馬だが、がコース脇で警備していたので

コース壁との衝突地点に先回りし、クッションこと肉布団として機能し重大事故は免れた。

だが相馬自身も一人が諸にぶつかったため、そこそこ身体を痛めた。

まあ格好をつける代償だろう。

そういうこともあり、相馬は警備班の仕事を軽減されている。

そして今俺は大変な思いをしている。

「御通しすることはできません」

「あなた職務に忠実ね」

護衛とも使用人ともつかぬ執事姿の男性や黒服の男を引き連れた女性。
年齢は30代？いや、20代と言ってもぎりぎり通じる？

白い肌に妖艶な笑み。

なんでこんなことになった。

四葉真夜が九校戦会場に入ろうとしているのだ。

片や世界最悪の殺し屋集団のトップ。片や世界最高の魔
法師。

四葉。

触れてはならぬ存在。

一国を崩壊せしめた狂気の魔法師集団。

謎と殺戮と秘密に彩られた一族。

闇の魔法師。

それが四葉に対する世界の見方だ。

概ね俺も同意する。一度だけ、四葉の関係者と紹介された人物と会った事がある。

道場見学に来たスーツの男性。

隙なく歩き、常在戦場なのに余裕のある態度。

道場に通いに来る警官や軍人よりも荒事慣れした空気に高い理性と知性を感じさせ

た佇まい。

俺の直感では「敵対するな」である。

裏番もおおよそ同意見。

「なんで、そのトップである四葉真夜が九校戦に来るんだ。

「大変恐縮ですが」

会場正門に乗り付けた四葉の車両の列を囲むように警備の軍人たちが立つ。

先程から正門警備を担当する軍の少尉が四葉の人間と問答している。

車輛の点検を「する」「しない」でもめ始めた。

「あなた一校生？」

四葉真夜の微笑みは美しいというよりおつかない。

この人に目を付けられたら平穏な人生が送れない気がする。

「はい。一校の生徒です。本日はどなたかのご招待ですか」

目立つ制服がこの場合は裏目に出た。

九校戦はネットワーク放映される学生の人気イベントだが性質上会場の、特に競技場

内への立ち入りは少し厳しい。

会場周辺にはCADメーカーやスポーツメーカーの出店（正しくは展示スペース）が

あるが、競技場内は魔法師の卵たちが持ち寄った機密技術がそれなりにあり、競技場内

への立ち入りには「招待」「来賓」「関係者」「応援学生」などの身分証明が必要となる。

論文コンペにおける産学スパイ問題もあるが、九校生も産学スパイが手を出す魅力が

ある。

「ご承知と思いますが九校戦競技会場内に入るには、招待や関係者パスが必要です。お持ちでしょうか」

俺は怯えを極力見せぬよう四葉真夜に説明する。

軍人たちは四葉の使用人たちとの押し問答と車両検査で手一杯で、ちょうど近くにいた学生警備の俺が自然と四葉当主の相手となった。

学生が相手をするのも変だが一触即発な状態に突入しそうになっている軍人 vs 四葉使用人には混ぜるわけにいかないだろう。

「そうね。関係者パスは持ち合わせていないわ。知り合いが来賓としていらっしやるから取次ぎしていただけますか？」

「知合いですか？」

「九島烈先生よ」

四葉真夜は鈴のなるような声で微笑みながら答えた。「ほら知ってるでしょ？あの人有名な人だから」と言った気楽な笑みだ。

ゲロ吐きそう。

片や世界最悪の殺し屋集団のトップ。片や世界最高の魔法師。

そんなのが九校戦で気軽に会おうというのだ。

それも殺し屋集団のTOPはアポなし突撃でだ。

絶対いいことは起きない。原作を知る人間だからわかる。黒幕と黒幕の会話の余波が学生に来るはずだ。

こんなことなら来訪者編より先も読んでおけばよかった。

映画合わせで来訪者編までは読んだが、どう考えても十師族まわりはそこから先が重要だったよな。

「協会のスタッフに話してまいりますので、しばらくお待ちいただけますか」

突然の疲労と混乱を極力、極力悟られぬようそう言いつつ、一礼して協会スタッフの元へと歩き出す。

そして俺の背には最悪な言葉がかけられた。

「卒のない対応、さすが萬家のご長男ね」

妙に感心した四葉真夜の声が俺の背に刺さる。

俺の顔と名前を把握してやがる。



10分は経過していない。

協会スタッフを連れて正門前に戻ると、警備の人間と四葉の使用人の睨み合いは継続していた。

「四葉様ですね」

協会スタッフが四葉真夜に声を掛ける。

何でも九島烈が「突然来るのは昔から変わらんな」と言ったらしく、「九島烈の招待」として四葉真夜の九校戦観戦が決まった。

もう間もなく新人戦のバトルボードが始まる。

「お母様」

四葉真夜に声をかける女性。

年齢は…20歳くらいか？

40代には見えない四葉真夜の隣に立つと外見からの年齢推察は難しい。

先程の車列の一台の中にいたようだ。

腰までの長い黒髪。ストレートで埃一つない。

肌は白い。目元は涼しく、月下に煌めく一凛の百合の花。

服装も黒のジャケットを着た落ち着いた女性。

そんな感じだ。

裏番が「妖しい」なら「艶やか」といったイメージか。

その女性は協会スタッフから離れた俺に軽く一礼する。

落ち着け。俺。

裏番と確認した世界設定と齟齬が起きている。

どういふことだ。四葉真夜に子供。それも娘？

この世界の異物は俺と裏番以外にもいたのか？それとも何かの副作用か？
過去に転生者でもいて歴史の改変が起きていたのか？

「行きましようか。夜天」

「はい。お母様」

協会スタツフに連れられて、四葉真夜が会場に入つていく。車列は肅々と駐車場へと誘導される。

場の緊張もほぐれ始める。

軍人たちもそれぞれの持ち場へと戻つていく。

本当に場を支配していたのは四葉真夜の動向だった。

彼女の存在は支配者として周囲に認知されるほどのものなのだ。

俺は一人取り残された。どうにかして裏番と連絡を取らねば。

四葉に娘がいた。

この事実を、この重さを本当に理解しているのは俺と裏番だけだろう。

そう思った時、また俺の背中に声が刺さる。

「よろしければ九校戦が終わりましたら会いませんか。こちらからご連絡しますね」
夜天と呼ばれた女性。少し哀しそうな表情をしている。

彼女は鈴ではなく美しき幽女の声でそれだけ言って会場へと歩を進める。
何か起きるのか？それとも起きているのか？

ほのかちゃんおっぱい揺れすぎ!

あっぱっぱは!

ほのかちゃんおっぱい揺れすぎ!大好き!

「馬鹿笑いでないで、少しは平河の手伝いしたら?」

サーセン。

和泉理佳に怒られた。

一科の三年生女子。CAD系の技術じゃ三年生でNO.1.

私のライバルの一人で、市原鈴音、和泉理佳、私で「三年理系美女トリオ」である。

そのトリオ名を主張しているのは私だけだ。

一校のスタッフトレントのモニターで見たほのかちゃんのおっぱい揺れは私に爆笑と、

下心で見ていた男子生徒たちを赤面させるに十分だった。

女子バトルボード新人戦予選。

見事光井ほのかちゃんは勝利し、決勝へと駒を進めた。

「あー、あの娘将来アイドルとかに向いてるんじゃない?」

「本人の性格次第だな」

涙を少しこぼして笑う私に呆れて答えるのは摩利。

昨日のバトルボード失格の騒動は、我が魂の弟である司波達也を本気にさせた。

達也きゅんは、ミキちゃんや柴田さん連れ五十里君と当時の動画を解析を終了し「精霊」が使用された事件だと喝破した。

まあ九校戦の裏で蠢く無頭竜の件は達也きゅんに任せたい。

というのも真人の伝手も前回のブランチシユ潰しで「下手に動いた」ことで、省庁間政
治で軋轢を生んだらしい。

なので無頭竜の件を振ってもあまり芳しい反応ではなかった。

泥棒騒動もあり、警備は強化されたがそれ以外は「身動きが取れない」らしい。

結果としては金星だったが余波が悪い方向に傾き、差し引きゼロといったところか
ね。

こぼさん（小早川景子）の件は：起きるのだろうか？

電子金蚕は警戒している。確実な発見方法はCADチェックの瞬間に達也きゅんに
帯同してもらうことだろうか。

一応別の方法も考えているので、そっちの準備もしておこう。

「あー笑った。じゃあちよつと、達也くん所行ってくるね」

私の役職は「筆頭エンジニア」というよりも「エンジニアマネージャー」である。

簡単に言えばエンジニアの統括でスケジュールの管理をしている。

個々の調整についても時折助言を与えるが、基本的には彼らの状況把握が主だ。

和泉にはライバル意識むき出しに話されることが多い。

逆に春（平河小春）にはちよくちよく相談されている。人に相談するのが好きというか、自分の考えを固めるのに相談することで固めるタイプなんだろう。

「司波君の邪魔するんじゃないわよ」

オカンか。

和泉のお小言を右から左に流しテントを出た。

原作の和泉の達也きゅんへのあたりの強さは、まったくもってない。

どうやら私へのライバル意識の方が強くて二科生の地味イケメンには興味が無い。

興味が無いとか言って「わからないことあれば聞いてね」とほほ笑んでいたのをおねーさんは見たぞ！

三年の技術畑男子はあんまり男女交際上手はいないので、背が高く大人な笑い方をし三年生に物怖じしないタイプに興味を持ったのだろう。

もしか、私が「おねーちゃん」を強要しているのに嫉妬しているのか？



「ほのかちゃんー！」

「キヨヒメ先輩」

抱き！

競技用ウェアから着替えたほのかちゃんと、出会い頭にハグ！

ついでに頭も撫でてあげよう。

この数か月、九校戦向けの戦術構築の手伝いやCADチエックに立ち会ったことから一年女子からは割と仲良くしている。

特に「達也君は凄い！」と言ったりすると、達也君大好き女子の一年女子からは「三年生にも理解者がいる！」と思ってくれた様で仲良くできた。

ほのかちゃんを抱きしめながらそばにいた達也きゆんに声をかける。

「ナイス作戦！さすが達也君だよ。私の魂の弟のことだけはある」

「お兄様には姉はおりません」

深雪ちゃんの凍気が風に乗って来る。

「先輩。いつまでもほのかを抱きしめてもほのかが休めませんから離してください。深雪も落ち着け」

そう言つて達也きゆんは軽くため息。

「この後CADの受け取りに行つてきます。深雪、ほのかを休ませてやつてくれ。先輩もいい加減に」

落ち着いた声で釘刺された。

ほのかちゃんと一緒に「はい」と答え解散となる。

競技終了後、使用したCADは一度競技委員会に提出し不正した様子が無いかチェックされる。

事前、事後のチェックがあるからこそ競技会の公平性が保たれる。

私は「じゃあまた後で」とその場を離れ、別の競技会場の見学へ向かう。

明日、明後日の競技の公式練習が間もなく始まるのでそこに顔を出す。

今年は三校の追い上げが強い。

一条&吉祥寺コンビや《魔法科高校の優等生》に登場していた有望株の一年生たちがいるためか

上級生たちが気負うことなく伸び伸びと競技に集中している。

そんなことを思いつつ、他校の応援学生や警備の軍人たちを横目に歩いていると声がかけられた。

「十二江清姫さん。時間ある?」

そこには六校の制服を着た、編みこみした髪型の男前な感じの美人がいた。

「そうだけど、もしかして私のファン? 義妹は募集していないよ」

「違うよ」

呆れた声の返事。妙になれた対応。

「私は六校の一年生。高村」

「そう、で高村ちゃんが私になにかよう？」

高村と名乗った男前の女子は私を少し睨み警戒している。

「【さすおに】 って理解できるよね？」

来た。予想はしていた。可能性も感じていた。

一校以外の転生者だ。

「あなたも？」

あたしの返事に高村は想定内なのか次に驚くべきことを言った。

「何周目？」

はっ？周回？何それ？え、周回？そんなことあるの？

私は四葉夜天

私の話をしましょう。

私は四葉夜天

私は転生者

私は四葉真夜の娘

私はまごうことなき四葉の血統

私はチートを持つ

私は母が大漢で受けた強姦の結果生まれた娘

私は四葉の忌み子

私は二周目

私は30余年、里に閉じ込められて生きてきた

私はチートで「レガート・ブルーサマーズ」を魔法で再現する能力を持つ

私は前世では一校一科生として通っていた

私は前世で九校戦に参加

私は前世で無頭竜をせん滅した

私は前世で赤子も殺す暗殺者

私は前世で横浜騒乱を混沌にした女

私は前世で。バラサイトに手も足も出なかった

私は前世で四葉真夜を殺せなかった女

今の私は四葉真夜の娘で、大漢の忌み子。

人体掌握の魔技を使う魔女。

人からは美しいや妖艶と呼ばれる容姿をしているが、本当に言っただけの人は言わなかったことが無い。

前世では2099年まで生きた。

最後は戦闘後の病後が悪く死亡した。

9歳から四葉の殺し屋として生きてきた身としてはまともな死に方だと今でも思う。愛しい方の手を取って末期の眠りについた。

戦闘の才能を見出された孤児は四葉に体のいい道具として生かされた。

15歳で司波達也たちと同じ一校に入学。

いつか司波達也を殺すため、そして十文字、七草の秘密を手に入れるため。

そんな一校で出会った数人の転生者。

一人は人狼。恐ろしく強力で再生能力を持つ魔人。

一人は赤髪の魔女。不思議と馬が合い卒業時には親友と呼べる仲に。

一人は無限書庫の住人。司波達也以上の魔法理論の天才。

一人は南米の悪魔。天才と狂気を身体に宿した美女。

そして一人は武神の子であり、軍神の加護を持ち、人ならざる肉体を持ち、無数の権能を持つ神に愛された方。

異能者集団を支え、最も現実的に世界に影響を与えることが出来る方。

人狼も彼には頭が上がりず、魔女も魔法を無効化され泣き、住人の理論が机上の空論であることを実戦で証明し、悪魔の狂気さえ彼の所業の前では子供だまし。

勿論100人を殺した私の暗殺者としての自負など、彼からすれば初心者の驕り。

それでも彼は世界を茶化し、笑い、怒り、そして運命を泳ぐ。

強いとか弱いとかではなく一人で現実に立ち向かう姿に私の心は震えました。

九校戦最後の夜。

闇の中、二人で死の舞踏を舞ったのは最高の喜びでした。

そして女の喜びを知り、あの方が私のために四葉と対立して頂けたのは生涯で最高の幸せ。

司波達也と深雪の処遇に奔走し、いつしか私も国防軍預かりとして身の自由を手に入

れました。

数年だけでしたが、あの方の公私の伴侶でいられました。
子は持てませんでした。義理の姪と甥には好かれました。

私は関重蔵の妻でありました。

あましば!

「ちよつと待つて、周回制なの?」

「私は2周目。他に周回している転生者がいるか確認しているのよ」

高村ちゃんと並びながら歩く。ちよつと意外な話に口の中が渴く。

「まあいいわ。丁度見かけたから声をかけただけ。九校戦が終わったら改めて話しましょ」

「いやいや、他の転生者の存在は覚悟したけど周回制は盲点だわ。今内心ぼろぼろ」

「ブラフやポーズでも内心ばらすのはよした方がいいわ。転生者にも悪党はいるから平静さを崩しちゃうダメ」

「あなたも悪党側?それにしちゃ、友好的だけど」

「そこも含めて次で話してあげる。そっちは無頭竜については準備済み?」

「達也くん任せ」

「そう」

彼女の表情は崩れない。本当になれた様子で話してくる。

なにこの冷静さ。こっつから先の学生生活は修羅の次元にでも突入するわけ? 経験者

の余裕は今の年齢差なんて意味ないって感じた。

「じゃあ、私こっちだから。九校戦の後夜祭で」

高村ちゃんは軽く手をあげ、右の通りへ行く。

「こりゃ、私より真人の来年が大変そうだ」

私は私で、自分のことより後輩のことが心配になってきた。



あつ！という間に九校戦も新人戦が終了。

モブ崎君は重傷：と言うほどでもないが怪我をして棄権。

スタート直後の破城槌は変わらなかった。

モブ崎君たち選手は救急車で病院へ。

ジウウモンが激おこで「あましば！」発動でお兄様参戦&指パツチンで勝利。

「あましばー」の際に笑いをこらえるのには苦労しましたよ。

で、うちの新人戦優勝以上に試合の裏で九校戦を賑わせたのが四葉の観覧だ。

四葉が九島の招待で九校戦を観覧。

急遽来たらしいが、最終日までいるようだ。

「先輩」

「いや〜こりゃこりゃ天才エンジニアの司波の達也くん！君のおかげで、新人戦で選手

「私たちは大活躍だよ！お礼におねーさんがチューしてあげ」

「新人生優勝の会議室での祝勝会。」

「私が達也きゅん抱きつこうとした瞬間、冷気が部屋の中に充満し私は抱き着くのを止めた。」

◆ 明日からは本戦。そして電子金蚕対策を実施せねば。

あつ！という間に本戦も終了。

五分前にはじゅうもんがああ顔で優勝旗を誇らしげに靡かせていた。

電子金蚕事件は起きなかった。

こばさんは見事準優勝。

深雪ちゃんの飛行魔法に対し跳躍戦法で確実にポイント確保した。

「流石にアレは反則だわ〜」と春と苦笑いしていた。

「同校の先輩にまで切り札隠していた罰だ！」として、エンジニアチームの女子から、揉みくちやにされて強制頭などでマシーンとなった達也きゅんは面白かった。

じゅうもんにナデナデされると、こばさんの首の細さだとコワイしね。

深雪ちゃんの冷気はほのかちゃんが必死で宥めていた。

小声で「二人つきりの時にナデナデ以上のことして貰いなさい」と耳元で言ったら、冷

気は止まった。

「何て顔してるの」

グラウンドで整列する選手たちを眺めるように観戦席では、呆けた顔しているであろう私に和泉が声を掛ける。

「アンタはちゃんとマネージャーとして動いてくれたわ。今年は地味だったけど」

和泉から励まされるのも変な感じだ。

二人とも3年生。

彼女の調整したCADでまゆみんは「エルフィンズナイパー」として、スピードシューティングは3連覇。

私の呆け顔が、3年間のエンジニアとしての責を果たした顔にでも見えたんだろう。

「和泉く。ありがとう、おかんく」

私はそんな和泉の隆起の少ない胸に顔埋めお礼を言う。

高村マリア。

すぐに九校戦参加選手を調べてフルネームがわかった。

彼女との出会いで少し混乱した。

なので、技術面での統括より各エンジニアが不足なく仕事できるよう、調整室の手配や各校との利用時間調整だけ頑張った。

「アンタね〜調子の良いことを〜」

嫌がりつつも和泉の声は鼻声だ。

そうなのだ。純理論畑には論文コンペがあるが技術屋の晴れの舞台は、九校戦なのだ。

そこで自分の名前を九校戦の歴史に、3連覇した学校のエンジニアとして残せたのだ。

そりゃ泣きたくなる。

私もちよつと鼻先が熱くなってきた。

選手退場のアナウンスと盛大な拍手。

さて、これからが本番だ。

まずはまったく連絡の取れなかった真人と情報確認。

そして真人と高村マリアの顔合わせ。

彼女が敵か味方か確認しないとね。

ここから横浜騒乱まで時間が少ない。

せつきー（関本勲）と春の妹の平河千秋の動向確認。

あとは横浜の地形確認と、周公瑾の店にも行ってみたい。

やることは多い。

高村マリアが味方になってくれれば助かる。

彼女もクラウドボールの新人戦優勝者。

チート持ちの可能性がある。



「どういふこと？」

「それ、俺の台詞です」

この10日間をお互い報告。

ここは後夜祭という名のダンス会場の隣室。

警備班の学生も含めた大人数での後夜祭になったので、急遽「談話スペース」として

メインのダンス会場の隣室が開放された。

コミュニケーション下手な子やお喋りしたい女子などが散見される。

そこで私は第一声に「2周目の転生者がいた」と言ったら真人からは「四葉真夜に娘がいました。転生者です」と返し。

そして冒頭である。

今頃まゆみんにはダンス申し込みの長蛇の列だろう。

「言ったとおり。この世界の転生が2周目の女子がいたのよ。ワイルド系の美少女」

「最後の情報いります？」

「重要じゃない?」

壁際の長椅子に二人腰掛ける。

完全密談モードで話が進む。

「高村マリアちゃんとはこの後接触してくる。そっちは?」

「こっちもですよ。向こうからアクションがあるはずです」

お互い笑顔を張り付けたまま。

下手に心配顔だと、周りが気にして会話に聞き耳をたてる。

「結局電子のアレはなんだったの?」

そう、達也くんの「舐められたものだな」は起きず、CAD審査をする担当スタッフ

が直前の体調不良と検査機器の不調。

確実に他の転生者が何かを起こしたのだ。

高村マリアかその四葉の娘か。

どっちにしろ仕掛けた人間は「穏健派」だと思われる。

こぼさんの将来をある程度知っておりそれを回避した。

原作を知り、そしてその回避を行った。その先は春の妹の暴走が止まる。

うくん、転生者だろうなく。

「警備側でも頭をひねる騒動でしたよ。侵入者による仕業と考えられない。完璧な警備

体制でした」

真人の言葉は本当だ。

警備は完璧。その中でこの作業。

相当の転生者。きつと四葉の娘？あたりの作業か？

うゝん、情報が少ない。

「結局は二人の女子に会わないとわからないか」

◆ この私の言葉は2時間後に現実となる。

「あなたは」

「そちらこそ」

（。▽。）アヒヤヒヤヒヤヒヤ

23時45分。一校が入っているホテルの裏庭。

私は室内着の上に防寒用の黒のパーカー。

真人は制服のジャケットを脱ぎ、身軽な恰好。

高村マリアは制服姿。

四葉夜天は黒のシックな室内用ドレス。

先程の会話は高村マリアちゃん（先攻）と、四葉夜天（後攻）のお互いの第一声。

完全に険悪な空気。

お互いの存在の何が気に入らないのよ。

「十二江さん。この人は?」

「萬さん。この子は?」

二人は数m離れた状況で睨み合う。

「おっほん。二人とも驚かないで聞いてね。二人とも転生者。六校の制服は高村マリアちゃん、大人の女性の方は四葉夜天さん。はい紹介終わり。情報交換しない?」
努めて明るく。

私は場を仕切ろうと二人の間に立つ。

「二人とも暴れまわる気はないんですよ。私たち一校の転生者に接触したってことはこれから先の横浜事件をどうにかしたいと思っっている。そうですよ」

左右の二人の顔を交互に見る。

表情は読めない。どちらも真剣な顔でガンを飛ばし合っている。

「そうね、情報交換する前にもう一人転生者を混ぜたいんだけど」

マリアちゃん一切視線を私に向けず声を出す。夜天さんを意識して声には少しの怒気が混ざっている。

「私も一人転生者を存じ上げています。味方に付けければこれほど強力な人物はありません」

ん

夜天さんも言葉遣いは丁寧だが、マリアちゃんに対しては上位者の視線を飛ばしている。

「誰ですか」

真人の言葉は少し硬い。場の緊張が伝染している。

二人は示し合わせたかのように同じ名前を答えた。

「相馬新」

誰それ？

「小娘、殺すぞ」「殺す?殺せるの?四葉が」

あゝ、九校戦も一段落。

小早川先輩も準優勝。良かったね。

この何日かは深夜業務で検査員に毒物飲ませたり、検査機器を弄ったりと忙しかった。

まあ九校戦の警備陣には及第点を与えよう。

内部犯行かつ目的が特殊だと防ぎよう無いよね。

あと、渡辺先輩軽すぎ。

バトルボードの時にクツションになったけどもう少し肉食え、肉。

おつめー、多少肉付き良くないと出産大変よ。お腹の子供にエネルギー取られるからキツいらしい。

妹の出産話を聞くと大変だったようだし。

姪、甥に会いたい。

モーリーの件は残念だったが、検査入院程度で済んで良かった。

クロファイ部員ということで戦術アドバイスの際に「室内では固まらずに」と話した

ことで、室内では各人距離を置いていたおかげで瓦礫の直撃は少なかったらしい。

チームの一人が頭部に瓦礫を受け、もう一人はビルの床が抜けたせいで下の階に落下。

モーリーも崩れた瓦礫に押し出され、窓から外に落下するなどのアクシデント。

ビル外は下草の伸びた芝生だったおかげで、モーリーは重傷は避けられた。

他の二人も事故の規模の割には傷は重くない。

モーリーは全身は打ったが昨日はベッドから起き上がり、後夜祭にも短いながら参加した。

結局は司波達也無双となったが級友の怪我は知っているより小さく安心もした。

ちなみに七草家調査のため七草会長にダンスを申し込んだがなござりなダンスだった。

俺は部下をお願いしておいたビルを受け取り、誰もいない一校が宿舎にしているホテルの別階にいた。

各高校はかち合わないように富士演習場付近の宿泊施設に分散して宿泊する。

そうすると、使われてない階がホテルに出て来る。そこにお邪魔してゆつくり一杯しようと思っっているのだ。

相馬新でいると飲むわけにはいかないからね。

ウイスキー臭い高校生とか嫌でしょ。景浦安武じゃあるまいし。

「あぶさん」完結まで読めなかったな。残念。

この楽しみにも問題が。

俺が広めの部屋にお邪魔して、窓から見える満月を見ながら一本目を開けるとドアが開く。

そう、この気配を消さない集団である。

君らが下の階から上がってくるの丸わかりだからね。

一校生が二人、六校生が一人、あとは年長の女性。

皆転生者なのだろう。

関重蔵の転生者判断方法!

- ・まずは「既知未来にいない人物」をリストアップ
 - ・その人物が既知未来の人物と絡んでいれば転生者可能性上昇
 - ・その人物が実力者なら転生者可能性上昇
 - ・その人物が名門や実力者の関係者なら転生者可能性上昇
 - ・その人物が既知未来の人物と友好関係を容易に構築出来れば転生者可能性上昇
- まあこんなもんじゃない?

その意味では「萬真人」と「十二江清姫」は転生者の可能性が高い。

特に「ブランシユ」の壊滅について公安から調査依頼が来た時、その発端が「萬家」のお坊ちゃんと言うことで物凄く転生容疑は高まった。

その萬先輩を子分扱いしているので十二江清姫も十分容疑は濃い。

そこに一緒にいる美少女と美女も転生者と睨んでいる。

「アラタ〜」

男前な美少女が凄い形相で俺の偽名を呼ぶ。

「いや〜転生者ってバレちゃった？ビール飲む？」

「重蔵さん、きつとご記憶にはないとは思いますが霞がお迎えに参りました」

俺のはぐらかしに反応したのは美女の方だ。

美少女の前に無理やり出て、まるで母親のような優しい笑みを浮かべる。

「邪魔よ！この馬鹿を一発殴らせなさい！」

「さあ、今は四葉ですが明日にでも里は潰します。また暮らせませすよ」

「何言ってるの！この馬鹿が早く死んだせいでカナデは未亡人になったのよ！」

「誰です？それ」

「誰？誰?! 関重蔵の妻よ！」

「妻？妻？私以外に？何を言っているの？」

「あんたがこいつの女房なわけ？頭おかしいの？」

「小娘、殺すぞ」

「殺す?殺せるの?四葉が」

「命乞いの機会は差し上げます」

「命乞いの機会も与えないわ」

うわゝグランプラー刃牙みたいに空間が歪んで見えるぞ。

男前美少女と美女は鼻息が交わるほど顔を近づけ睨み合っている。

「ちよつと、二人とも待って、待って」

いつもは上位者ぶっている十二江先輩が、慌てて二人の間に入る。

「この子が、相馬新?それにセキナンタラって誰?」

二人の間で両手を広げ距離を取らせると十二江先輩は俺に視線を向ける。

「ども」

軽く会釈で返す。

さて想定外だが、ここが正念場か。

もう少し接触は静にやりたかったが転がる石は止められない。

「俺の名前は相馬新。隠すつもりは無いが転生者だよ」

「重蔵さん」

「ん?」

美女の言葉に俺は疑問符を浮かべる顔をする。

転生者と伝えたからといって、本業をバラしてやる義理は無い。

俺は相馬新なの！

「そのセキナントラって誰？誰かと間違えてない？」

「そうですか。そうですよね。任務もありですし、そこには触れずにおきます」

美女は勝手に納得し笑みを浮かべて口を閉じる。

なんだ？この女、俺のバックボーンを知っている。

支援課ということまで把握しているのか。

視線はしっかりしている。

手先もモジモジするような挙動不審さは無い。

確信を持って話している。

重度の妄想狂か、本当に俺のことを知っているのか。

そのどちらかだろう。

四葉とか言っていたがあの話題に出てた四葉の娘か。

今頃、村井大佐も大忙しだろう。

上手く風間さんにアポが取れるかな？

「よくわからないが、ここにいてことは転生者同士の顔合わせでいいんだよな」

「その通り」

一番までもそんな萬。パイセンが答える。

姦しい、ではなく殺気を孕んだ二人には視線を向けず、俺の顔をマジマジと見る。

「お前が転生者とはな。俺と裏番のことは気づいていたな」

「そりや勿論。アレだけ目立てば」

裏番こと、十二江清姫は「ううん」と喉を鳴らし場を整えた。

「君が相馬君ね。名前と顔が一致しなかったけど君とは会つてるよね」

そう、生徒会室、というか服部副会長の敗北の時、そして千葉エリカと壬生紗耶香の試合の時。

二度この人と会っている。

最初に挨拶はしたが、まあその後の一連のイベントを過ごすと印象薄れるよね。

そっちの方が嬉しいし、そのためにエリカの一戦が印象に残るよう無様な道化も演じた。

不思議なもので一つのイベントで印象に残ることが起きると、それに付随する「気にならない不格好なこと」というのは忘れがちになる。

3年生にかっこつけて挑んで15秒で負けた奴など記憶の中から薄れていく。

特に既知未来を知る転生者からすれば「千葉エリカと壬生紗耶香」のコンビの前では

モブの名前など泡も同然だ。

「もう少し、顔と名前には敏感になった方が良いでしょう」

あのエリカ対壬生戦を振り返ると、この二人の展開の読みと現状の把握状況が読めてくる。

なんで千葉エリカが壬生沙耶香に挑みやすい状況を作ったのか。

答えは「横浜騒乱」だ。

壬生紗耶香の活躍する機会は「入学編」と「横浜騒乱」だ。

正直、俺の限定的な既知未来知識ではそこまでしか知らないが

壬生紗耶香と桐原ホニヤラを戦力化して同一ユニットとして、横浜騒乱に巻き込むには千葉エリカとの接触は実は重要だ。

千葉エリカと壬生沙耶香が面識のない横浜騒乱は良くて協力体制の弱体化、下手すれば不仲による作戦行動の不一致。

そうならないための面識なのだ。

九校戦で実力の知れた司波達也はこの後千葉エリカ経由で壬生沙耶香と誼を通じるだろう。

まあ、ここまで読んでの行動かわからないが「学校の中核を担う生徒同士が知り合い」という状況にしておかないと横浜が怖い。

既知未来で有利になるように辻褃を合わせたのだ。

うーん、行動がわかりやすい。

さて、俺を怒りの視線で睨んでいる六校の女子は横に置いておき…いやホントにこんな殺気を持って睨まれるのは久しぶりよ。

「で、顔合せした感想は?」

俺は4人の顔を見た。

「やっぱりあんたのその顔好きになれないわ」

六校女子の厳しい言葉。俺が何したの?前世の君でもフったの?俺のこと好きだったの?

六校女子は背を向け部屋を出ようとする。

「まあいいわ。また改めて連絡する」

自分自身の怒りの感情が抑えきれないと感じたのだろう。

感情が爆発して、場を台無しにする前に退散するようだ。

賢明な判断だ。

背を向けた六校女子に美女が冷淡な声をかける。

「もう二度と顔を出さないで」

「死ね」

返事は完璧だった。

「なんとというか、こんな感じなのよ」

あははは、と濁いた笑いでごまかす十二江先輩。

どうやらこの人、今まで順風満帆な転生者人生だったようだ。

既知未来を十分に使い速いタイミングでブランシユを潰し、学内での立ち位置を作った。

実力もあるのだろうが、未来を知っているアドバンテージを最大限に使っている。

だから、転生者同士の対立が怖い。未知の恐怖だ。

俺も自分以外の転生者と話するのは初めてだもの。

わかるわかる？ん？なんで俺は落ち着いてるんだ？

まあ、USNAギヤング潜入の時は毎日怒鳴り合いとナイフの見せ合いを経験していれば肚も決まるか。

さすが俺（ということにしておこう）

「二応、仲良くお喋りするって感じでもないですし、連絡先交換しますか。そこあなたもどうです？」

俺の提案を受けて、この場に残った4人は情報端末を取り出し、アドレスを交換する。

その際、四葉夜天と名乗った女性は「お暇な時にご連絡を」と妖艶な笑みを俺に向け

た。

何だ?モテ期?

いやそれ以上に「四葉の娘」という世界規模の火薬庫の個人アドレスを手に入れてしまった。

どうにかして村井大佐と共有するか、それとも黙っておくか。

ちよつと思案が必要だ。

俺の九校戦は夜空に輝く月の下、妙な形で幕を閉じた。

ロード中

「十二江さん、どこ？」

昼下がりの横浜。

私は編み込みヘアの美少女、高村「ランペイジ」マリアちゃんと共に喫茶店へと入っていった。

私は明るい青のワンピースにワンポイントでブラウンレザーの細身のベルト。

流石に麦わら帽子はなし。そこまで乙女チックなのは苦手。

マリアちゃんと言えばローライズのフェイクレザーのパンツに黒のTシャツ。ブーツを思わせるスニーカー姿で、スポーティというよりはファイティングっていう感じだ。

ランペイジという渾名（さつき勝手につけた）はこのカッコイイ服装と待ち合わせの横浜駅でナンパ師の皆さんを「うるさい」「邪魔」「玉潰すぞ」「マズい面を見せるな」と一刀のもとに断罪したのも関係する。

ナンパ師諸君は逆ギレするかと思ったらマリアちゃんの圧力に小声で「はい」と呟くだけ。

顔が赤くなっていた人はたぶんMの人なんだろう。

ここは桜木町の喫茶店。

2007年にオープンした老舗だ。

なんかね、2000年代初頭のモノが老舗とか骨董品とか言われると違和感があったりする。

少し前世に引きづられているのかね。

今日は面談だ。三人だけで。

「お待たせ。美人を待つ楽しみを堪能してくれた？」

「美人には慣れているので楽しくないですね」

秒で返答したのは笑顔の相馬新。

さつきマリアちゃんに聞いたら相馬新は30代らしい。

こんな台詞をノータイムで笑顔で切り返すとか、なんかかっこいいやら悔しいやら。

笑顔を見る限りはたんなる男子学生だ。それもあまり特徴のない感じの。

町で10人男子学生を集めれば2, 3人は含まれるようななんともいえない普通の容

貌。

「コイツの言葉を真に受ける必要はないわ」

そう言いつつ、相馬新の前に座るマリアちゃん。

不機嫌を隠すつもりは一切無いらしい。

「どうも口調が昔に戻るわね。アンタの顔見てるからかしら」

私も席に座ると相馬新は私には視線を投げず本題に入る。

「俺の話聞かせてくれないか。どうやら俺より俺の未来に詳しいようだし」

彼女はテーブルの注文用タブレットからコーヒーを二つ。

「長い話になるから覚悟して。十二江さんも、コーヒーでいいわね」

「あつ、はい」

こりや、ダメだ。私は完全に子供扱いだ。

この場に決定権も主導権も何一つ無い。

マリアちゃんの話ロード中……………



マジか。

高村マリア、前の名前は川村エカテリーナ。

彼女の話だと、相馬新こと関重蔵始め10人以上の転生者が存在した「魔法科高校の

劣等生」世界の出身？らしい。

信じられない話ばかりだ。

司波達也そっくりのUSNAの軍人や深雪ちゃんの双子ちゃん。

藤林響子の妹に、四葉の天才児。

信じられない。

ヒドラジンが流出した横浜港の海水から、ヒドラジンの成分を無害に近い状態まで変異させる魔法とか、頭おかしいんじゃない。

何それ、四葉の天才児。

天才というか化け物の類だよ。

音速に匹敵する速さで走るとか、ネットワークに生身で介入とか、直立戦車を体当たりで倒すとか、冗談にも程がある。

真人ならいざ知らず、か弱い私には信じられないことばかりだ。

関重蔵との馴れそめを親友の藤林奏から嫌と言うほど聞かされたおかげで、関重蔵の動きはある程度把握しているらしい。

「結婚十年の祝いに十輪の青い薔薇とか恥ずかしくなるわ」

新ソ連とのアレコレを聞く限り彼女は我々高校生側では無く、十師族、特に九島や四葉、七草に匹敵する存在だったようだ。

俗に言う権力者側。上に立ち人を導く側。うゝん、すごい話だ。

内閣府と直接交渉とか外務事務次官との亡命受け入れ組織の話とか、ちよつと現実的な話でも手の届かないレベルでの話だ。

「藤林奏ね」

相馬新君の眩きは先ほどの年齢不詳とは全く違う年齢を重ねた大人の一言だ。

出会ったことも、ましてやこの世界に存在することさえ怪しい女性。

その女性と結婚し、あまつさえ子供までいた。

そりや色んな感情が一言に凝縮される。

悲しいとも嬉しいとも違う、なんとか感慨深い感じだ。

「で、君は俺が藤林奏より早く死んだことに腹が立っている」

「そう、親友が立ち直るのに7年かかったわ。息子がいてくれなきや、アンタの後を追つてた可能性もあるくらい」

「申し訳ないことをした。モテる男の罪だね」

言葉は冗談めいている、がそれに付随する感情はわからない。悲しんでいるのか、何も感じていないのか。

相馬君は手元のコーラに口をつけるが一切の動揺は見取れない。

この人は何を考えている？

何も考えていないのか、それともこの程度では動揺しないのか。

「その冗談、私は笑えないわ」

マリアちゃんは冷めたコーヒーに口をつける。

「四葉の娘について感想は」

相馬君は話題をバツサリ変えた。

マリアちゃんの返事は簡潔。

「別の世界線」

「そう考えると辻褃が合うな」

辻褃。うん、辻褃が合う。

「カナデ」と言う女性の存在と四葉夜天の主張の矛盾。

別の世界線でもセキジュウゾウがいるなら、矛盾では無くなる。

じゃあこの相馬君は3度目の転生？

「2時間後に萬。パイセン同伴で会うことになっている」

相馬君はこれからの予定を告げる。

今日、真人が一緒ではない理由はこれだ。

情報交換したいが感情面での衝突は避ける。

そのためマリアちゃんには私、夜天さんには真人がつくことになった。
「そう」

「何で四葉を嫌うんだ？」

マリアちゃんは二杯目のコーヒーを注文。

相馬君の質問に目を伏せる。

「何となくよ。四葉という名前には良い思い出が無いしね」

少し寂しそうな言い方だ。

「その四葉光夜とかいうのは嫌な奴なのか」

もしかして、俺様超TUEE君とか？嫌な奴だわ、それ。

「良い奴よ。中条あずさと結婚するほど」

ブツ！

「あ、ごめん。驚いて」

コーヒーを少し吹き出し、しどろもどろに弁明をしよう。

あのあーちゃんの旦那さん？何？洗脳？脅迫？

「言っておくけど、恋愛結婚よ。知っている限りあれほど仲の良い夫婦は他にいないわ」
私のリアクションを察したのか、マリアちゃんは二人の関係を簡潔に説明してくれ
た。

「変な質問だが、君は横浜の事件について協力体制を敷く気はない感じがするけど」
相馬君はコーラを飲み干すと本題に入る。

え、協力する気がない？

「そうね、他の転生者が動かなくても被害を少なくする算段は整っているわ」

「さすが、高村製紙の御息女」

「女のプライバシーを探るのね」

「そう言うならちゃんとして隠しなさいな」

え、高村製紙の御息女なのか。

高村製紙とは、国内で数少ない紙の製造メーカーである。

特に和紙の生産量については国内第一位。

と言っても2095年では伝統産業を守る有名中小企業くらいで、紙に関する業界では有名だが普通の人は知らない。

「ちよつとご説明を」

うゝ敗北感。いや、単なる調査不足だ。

我ながら凡ミスだ。

意識が横浜に向かっていた。

勝手に協力が強固になると想った。

うくん、どうも味方というモノがわかってないんだ私は。

転生者は味方。

黙っていることはあるだろうがお互いの手札はある程度見せ合う。

そう思っていた。

みんな、この「魔法科高校の劣等生」世界を生き抜きつつも好意的にとらえていると思っていた。

だけど、マリアちゃんや夜天さん、相馬君を見ていると、もつとリアルにもつと危機感を持っている必要がある。

この人たちは「魔法科高校の劣等生」世界ではなく自分の世界で生きている。

私は甘ちゃんなんだ。

「どの辺りを？」

タブレットで2杯目の飲み物を選択する相馬君は、まるで生徒の質問に答える先生の顔だ。

年下、いや実際は年長者だから私への接する態度はこつちが正解なのかも。

「マリアちゃんが協力的に積極的じゃないこと」

この短い会話で、そこまで推し量るにはどの点を見ていたの？私は何れだけ馬鹿だったのか？

「まず、第一に協力する気なら俺を一発殴って終わらせるだろ。ここまで話しが長く続くのは気持ちのしこりがある証拠さ。解決できない怒りを理論的にぶつける」

相馬君が人差し指を立てる。次に中指も立てる。

「第二に、西日本魔法師連絡会から派遣された民間魔法師が3名、横浜で活動していることが確認されている。この3名は元は佐渡義勇軍にも参戦しているゴリゴリだよ。1人は元国防軍所属だ」

そして薬指も立てる。

「さっきナンパした一人はうちの工作員だ。あれで高村マリアのパースナリティはわかる」

コーラが運ばれてきた。

「高村マリアは服装通りに攻撃的な面を有するが、その攻撃性は自己の制御下にあり決して無軌道な人物ではない。また西日本魔法師連絡会派遣の魔法師を傘下に持ち組織的行動が可能。その資金についても、違法性の低い経済行為によって賄われている」

私は息をのんだ。いや、騙されているのか？ 謎の説得力で丸め込まれている？

先入観で相馬君の言っていることを歪んで捉えている？

わからなくなってきた。

「あとは彼女は前の時の横浜騒乱の具体的なキーパーソンについて話していない」

相馬君は視線を私からマリアちゃんへ移す。私は小さく言いを着いた。思考と緊張の檻から解き放たれた気分だ。

「周公瑾」

相馬君の一言。

そうだ、横浜騒乱の黒幕の一人。そしてこれから先の明確な敵。大漢の生き残り。

前世の話には一切出てこなかった。

絶対に話に上がるべき重要人物。そこが抜けていた。いや抜かして話していた。

マリアちゃんは一気にコーヒーを飲干す。

「この人は憑依型の転生者よ」

私はこの日何度目かの絶句をした。

◆

疲れた。自分が転生初心者であることを痛感した。

相馬君を残し、喫茶店を出て横浜駅に向かって歩いていった。

横には会談に満足したのか、最後には「情報共有もする、必要なら戦力は出す、ただ

アంతタのにやけ面を終わったら殴るわ」

と共闘の約束はしてくれたマリアちゃん。

私は私で、自分の甘さや世界の深さ、つまりは転生者の生き方をまじまじと語られ凹

んでいた。

司波達也を救うというのは想像以上に苦難の道で「血脈」からどう離すか、そして四葉真夜をどうするのか。

自分で言うのもなんだか、折角の美貌も今や病人レベルで顔が青くなっているはず。

「十二江さん、やる気があるなら鍛えてあげる」

マリアちゃんが小さく呟く。

私に垂らされた蜘蛛の糸。そつと横を向くとマリアちゃんの意味の強い瞳が私を見据えていた。

「うん、生き抜くためにも」

生き抜く。そう、生き抜くのだ。ハッピーエンド、いや人生にエンドなんてないけど。

自分が生き抜き司波達也を救うため。

「そう、生き抜くのよ。貴女はこれからも司波達也が関係しうる事件に関わる義務があるわ。それが転生者がチートと引き換えに持つ使命よ」

もう一度息を飲んだ。

【転生者の使命】

この言葉によって私は、ライトノベル「魔法科高校の劣等生」に本当にかかわること

となる。

司波達也の先輩、七草真由美の親友と言うポジションの登場人物ではなく

世界を、身の回りの平穩を、友達の命を守るために奔走することとなる。

私は誰かの世界を守るのではなく、私と私の周りを守る。

それが出来るのが転生者なのだろう。

稲妻が空間を横に走る

その日、相馬新こと関重蔵は森崎駿のひと騒動を助け帰路に就こうとしていた。

「ありがたいな」と騒動が終わった後、森崎駿は相馬新に少しハニカミながら感謝を伝えた。

同い年の友人に面と向かって礼を言うことに恥ずかしさを感じる年齢でもある。

孫美鈴と公安のひと騒動につきあつた相馬新は、作業員としてのテクニックと伝手を使つて事態を秘密裏に処理した。

空挺時代の後輩である瀬川はから「次何かあつたら手を貸しますよ」とちよつとした取引もあつた。

夜天、高村マリア、十二江清姫、萬真人。

関重蔵はこれから起こる横浜騒乱にむけての戦力に多少の不安を感じていた。

四葉からの戦力提供は不透明。

西日本魔法師連絡会との関係は高村マリアとのつながりだけで組織的な協力は無理。

萬が警察機構に働きかけが出来るといつても、それは命令ではなくお願いであり、良いとこ当日の警邏警官を増やす程度。

そう関重蔵は睨んでいた。

そして、メイン戦力である国防軍へ事件を伝えられないでいる。

転生者が知る未来を迎える確固たる証拠は無い。

今はまだごく少数による「妄想」として処理されるのだ。

国防軍をメインに据えられないと広域での防衛は難しい。

100人未満が協調無しに地域戦闘に勝てるわけがない。

(どうすつかだな)

午後8時を過ぎ夏の東京でも周りは暗い。

八王子の近く。

一校から二駅の距離のセーフハウス。

毎朝の登校にはちよつと距離があるが、公共交通を使うほどの距離でもない。

すでに諸々の処理を済ませ関重蔵は帰路についていた。

駅近くのスーパー、2095年にはほぼ無人。

出入口でIDをかざすと、自動精算される仕組みだ。

一時期は人間の顔で判別をしていたが整形、戦災傷病などで顔の作りが大幅に変わる者や、フェイスログ(整形成りすまし)による過度の被害から、個人特定は個人の肉体からカードへと逆行した。

結局のところ、便利の代償に被害を受け、そして不便になることでセキュリティを手に入れたのが2095年という時代なのだ。

明日の食事にパンと冷凍食品を買い入れ、重蔵は店を出る。

一瞬目を細める。

街灯の灯りが目を刺した訳では無い。

下手な口笛を吹き流がら、一つ裏の路地に入る。

この辺りは八王子でも中小企業の工場が少し残る地域だ。

一戸建てには車用のガレージ代わりにシャッターと軽トラック。

そんな家が裏通りには時折現れる。

(気配が薄いな)

距離にして120m。

殺気は薄く、闘気は臍気。

そんな存在が3人。

重蔵の経験からすると凄腕の殺し屋。

だが、三人とも距離を取らず固まって行動していることに、気配の薄さと反した素人

臭さがあった。

(どこだ？四葉？萬？十二江？大穴は七草？いやいや、十文字とかなら大笑いだ)

内心、自分の尾行する組織を想像しながら、何度か裏通りを右往左往し公園を抜け一般家庭の塀に登り、道ではないところを進む。

(俺の立ち位置を知り、かつ俺を尾行する奴はいない。特に諜報屋なら、俺の後ろをつけるより軍内部のお喋りに金積んで話を聞いた方が早い。つまりはこの尾行は関重蔵目当てではない)

塀からおりと、その先は公園。

この辺りだと運動公園として使われる広めの公園だ。

敷地の中央には400mの競技用トラックがあり、今も10人ほど大学生が汗を流している。

夏の大会へ向けての最終調整だ。

公園に足を踏み入れ、大学生達が見えるところ、また大学生達から見えるトラック外周の小径を歩き出した。

(問題、俺を相馬新として尾行する理由は？ 解答、実力の確認)

確信を持つて関重蔵は自答した。

国防軍も決して有能で信義に厚く、兵士の命を見捨てず正義と博愛で運営される組織ではない。

そこそこの金額で「一校に潜む諜報員」の情報は売れたのだろう。

何をもって自分を絞り込んだのかは幾つか想像した関重蔵だが、絞り込んだ要因など多すぎて考えるだけ無駄と思っから切り捨てた。

金というのは恐ろしい魔力がある。

その魔力を理解している関重蔵は自分の存在も取引の対象となる事を理解していた。

(村井さん辺りが泳がしている可能性もありそうだな)

幾つもの可能性があるが、やはり相馬新という存在の尾行だろうと考える。

(萬先輩の意を汲んだ道場生、というのが妥当なところか)

プロや戦闘経験者なら襲撃の際に固まっては行動しない。

十師族で現役の戦闘向けの魔法師や工作員を抱える十文字や七草、四葉の可能性はな

い。

十二江にはこういった後ろめたいことが出来る人員はいない。

気配を消せるが戦闘経験が圧倒的に不足している。

関重蔵の頭に浮かんでいるのは「戦場経験の無い格闘技の道場生」

つまりは萬家だ。

だが、警察関係者を排出する萬家がこういったことをするだろうか。

(千葉ならしそだな)。千葉というかエリカが)

千葉エリカの性格を内心で笑いながら、公園を抜ける。

後方の追跡者との距離が詰まる。

関重蔵はそのまま追いつかれ、なし崩しの流れで対応することを考えていた。今、工員としてのノウハウで尾行を撒くと余計に勘ぐられる。

格闘戦で時間を稼いで、住民の注意を引いて幕引き。
算段としてはこうなる。

転生者同士手の内を見せるのも悪くは無いが、仕事の関係があるので余計なところでは見せられない。

(面倒くさい)

そう思いながらも、更に一本裏道に入る。

人影は無い。

更に距離詰まる。三人組は路地を曲がり裏道に走り込んできた。

「なんすか?」

高校1年生らしい少し間の抜けた、だが意味も無く自信満々な顔での問いかけ。関重蔵の視線の先には三人の特徴の無い男性がいた。

(おかしい!)

態度や表情を崩さず関重蔵は自分自身に警報を鳴らす。

三人の男性の服装や年齢にバラツキがある。

下は20代、最年長は白髪のどんなに若く見ても60代。

若者はジーパン姿。年長者は上下ともジャージ。中年は洒落たスーツ姿。

力試しの襲撃者ならば、より街に溶け込む服装や、動き易さや、防御力を見越した厚手の服など工夫をする。

だが目の前の三人は違う。バラバラだ。

年長者のジャージも運動用というよりは普段着といったもので、状況に対して服装に違和感がある。

これ程チグハグな三人が固まって行動していたのだ。

スーツの二人組なら会社員として駅周辺では目立たない。ジャージの年寄りと介護者なら住宅街に馴染むだろう。

だが、この服装の設定が全く違う三人組はどこにいても目立つ。

(なんだ? 四葉による精神干渉による洗脳か?)

萬家から四葉に黒幕が変わる。

素人への洗脳による即席追跡者。

だが諜報や裏仕事慣れした四葉にしてはおかしい。

素人を即席で仕込むには雑すぎる。

三人との距離は10m。一気に走り出し逃げることも関重蔵は選択肢に入れた。

だが、次の現象がその選択肢を選ばせなかった。

関重蔵を挟んで三人組の反対側。

関重蔵から見れば後ろに、火花を散らすような音をたてて、オレンジ色の巨大な円が空間に出現する。

円の内側は周辺の景色と違う、どこか街灯の少ない地域であった。

「さて、楽しい弱い者虐めの時間だ」

円から出て来たのは20代とも30代とも見える不思議な男。

体格的にはやせ形、いや引き締まった身体だと関重蔵判断する。テイラーはわからないが、なかなかのスーツを着ており裕福な印象がする。

「お前を殺しておけば後が楽だしね。このタイミングだとパラサイト辛いでしょ。じゃあ、死ぬ」

その薄い笑顔を見せなが男は独り言のように関重蔵に語りかける。

関重蔵は汗を一筋流す。

◆ 非人間的な存在と相対している、という本能的な危機感が汗を押し出している。

「疾！」

短い呼吸を一つ吐くと常人では出せぬハンドスピードのパンチを6発見舞う。

三人組の一人、年長者は弾丸に匹敵する殺傷力を秘めるパンチにより胸に6つの陥没を作る。

常人なら即死してもおかしくは無い。

だが年長者は膝も折らずに数歩距離を取る。

スーツ姿は初手で関節蹴りを食らい、右膝が曲がってはいけな方向に90度曲がった。

だが片脚で立ちバランスを取ろうとしている。

20代は逆一本背負いで地面に脳天から落ち、数度の痙攣のち沈黙した。

だが、関重蔵が有利になった訳ではない。

20代との接触から手足の力が落ちてきている。

先ほどの6連撃も本来であれば10連撃を意識したが力が続かない。

(ヤバいな)

後ろに立つ謎の男はニヤニヤと笑いつつ、時折何も無い空間から光弾を打ち出し関重蔵を牽制する。

「おい！あんら誰なんだ！」

呂律が少しおかしくなった。関重蔵の問いに男は何も喋らず、焦りを見せた関重蔵を嫌な視線を向けながら笑う。

「人は来ないよ。後は君が死ぬだけ」

会話が噛み合わない。意図的なのか、単に無視しているのか。

正面に立つスーツと年長者から距離を取る。振り向いて駆けだせば逃げられるかもしれないが隙があまりにも多すぎる。

周囲の家屋からは人の反応が薄い。

小さく深く呼吸をし関重蔵は周囲にほんの少し意識を割り振る。

正面に二名は砕けた足と破損の多い胴体で動きが鈍い。

周辺家屋で人の動き。薄い気配から襲撃者の仲間が潜んでいると関重蔵は睨んでいた。

「そろそろお終いかな」

男の言葉に反応してスーツと年長者が突っ込んでくる。

動きは鈍重だが、それと同程度に関重蔵も体が重い。

「邪！」

半歩早く踏み込んできた年長者に渾身の抜き手を肋骨下に差し込む。

関重蔵の手には内臓の温もりが伝わり、ジャージは赤く染まり始める。

直ぐに抜き手を抜くと年長者の影から突っ込んでくるスーツに正面からぶつかると。

丹田に力を入れることで小柄な関重蔵は地面との一体感が上がり、この状態なら小形

のスマートモビリティに突っ込まれても揺るぐことはない。

スーツは関重蔵の不動さに負け、4歩後ろに下がる。

関重蔵はその隙を見逃さず、スーツの頭を両手で挟む。

スーツの頭は高速振動する掌で挟まれ、頭部は眼や鼻、耳から出血する。

昔見た漫画の技の再現だが、現在では不可能殺人となる暗殺技だ。

確実のスーツの男の脳は復元不能なまでに破壊された。

荒い呼吸の関重蔵は空間から現れた男に視線を向けながら徐々に後ろへ下がる。

「次はアポ取つれから襲撃しちくれ」

軽く笑う関重蔵とその姿を見た空間の男は先ほどよりも深く、不敵な笑いをする。

「イツツ、ショータイムー」

その言葉で風が薙ぐ。空気が重くなる。

関重蔵は男に背を向け走り出す。

周辺の殺気が一気に濃くなる。殺気は誰かから、何かからではなく空間から関重蔵に

むけられている。

殺気のプールの中を走り出す。

だがそれは遅すぎた。

関重蔵の中に情報次元体のパラサイトが三体入り込む。

5秒後。

重蔵は地面に膝を着き、ゆっくりと倒れ込む。

「よし、一丁あがり」

動かなくなった関重蔵を見て、男は満足し登場した時の様な空間を開く。

男は知っていた。肉体の欠損は司波達也によつてどうとでもなる。「死」さえ超越する可能性がある。

だが情報次元による攻撃、霊子への攻撃による死亡は事情が変わってくる。

それは再成では対応できない消失なのだ。

「あ」

忘れ物を思い出したかのように、男はナイフを一本取り出し関重蔵に投げつけつつ空間へと消えていく。

念押しナイフは関重蔵の背に深々と刺さる。

それは心臓を狙つての一撃だった。

◆

21:00の病院。

「村井といます」

十二江清姫は突然、相馬新の親族と言われる男性から病院へと呼び出された。

スーツ姿の禿頭の男性だった。

「相馬新の叔父でして、学校では十二江さんにお世話になっていたらしく、何かあれば連絡してくれと」

村井は関重蔵から「十二江は俺の正体に気付いている。引き込むならあの子ですね。自信満々の素人なんで懐柔簡単ですよ」と報告を受けていた。

（確かに簡単そうだ）というのが村井の十二江清姫への印象だった。

長身の美少女、大人びた感じと無邪気さが同居した不安定な魅力。

目的を提示、金を渡し、方法を示してやればプロパガンダの片棒位はかっいでくれそうだ、というのが村井が最初に浮かべたことだ。

「それで相馬君が暴漢に襲われたとか」

連絡の主な内容がそれだった。

十二江清姫は少しだけ顔を青くし大急ぎ病院に来た。

勿論他の転生者には伝えてある。

（真人はもうすぐ、夜天さんは東京にいるなら来るだろうし、マリアちゃんは少し無理か）

「状況はどうなんですか？」

「ナイフが背中側から刺さってあわや心臓直撃だったが身体が鍛えておいたおかげで、

心臓には刃は届かなかつた。発見者の処置が良かったので即死ではなかつたよ。だが昏睡状態のままだ」

村井は少しだけ心配するように言葉の語尾が少し弱げだ。

「君に連絡したのはアラタが君を気にしていたからなんだが、何かあつたのかね」

十二江清姫はその問いかけに「大亜連のテロリストの存在」を伝えようと唇を動かさうとした。

「その人とは話さなくて結構です」

廊下の角から現れた四葉夜天。

口調は落ち着いているが村井にむける視線は敵対的な色がある。

「これは、なんといいきなりで手厳しい」

「村井大佐。情報部支援課課長」

四葉夜天が村井大佐の立場を呟く。

額に一滴も汗を見せない村井。

夜天の呟きに村井と夜天を交互に見る清姫。

「何が起きたか詳しく。仰らないのなら独自に調べますが」

少し距離を置いたまま夜天は村井へとプレッシャーをかける。

「天下の四葉に言われると弱いですな」

「場所を変えて話を聞きます」

村井の謙遜と組織力の違いを示す言葉が無視して夜天は話を促す。場所は関重蔵の病室のあるフロアから離れた病院1階のラウンジ。

見舞い客もいない、寂しく閑散とした空間。職員もいない。

いるのは突然呼び出された女子高生と組織をまとめる立場の者が二人。

少し離れたところに四葉の護衛と軍の護衛がそれぞれ別方向を警戒する。

3人はラウンジの丸テーブルを挟んで座る。

「簡潔に」

「謎の襲撃者により、重傷。今晚が峠。襲撃者は死亡している。襲撃を指示した人物は

調査中」

夜天の言葉通り、村井は簡潔に伝えた。

「より詳しい情報は書面でいただけますか」

「難しくありませんが建前をいただけですか」

村井は理由のない情報公開をよしとしなかった。

ギブアンドテイクでない単なる情報漏洩は自組織の格を落とすし、何よりも交渉相手

として下に見られるのは良くない。

「では、公安経由で依頼を出します。多少を色を付けて」

「この手の話に慣れておいでのようで」

「明日の正午までには手配します」

村井の言葉に多くは応じない。

夜天の経験上、情報士官との長話は得することはない。

少なくとも前世で村井との会話で余計な仕事を2度受けさせられたことがある。

「では、相馬君の寝顔を見て帰ります」

（絶対黒幕を見つけて殺す。絶対殺す。野良犬の死骸のように路上にバラまいてやる）

この30年で感情を隠すのが夜天は上手くなった。

ただ無表情でやり過ぎす前世とは違った。

薄く笑った夜天の表情から村井は何となく殺意を隠していることを感じた。

（また惚れられたか）

村井がそう思った瞬間に病院の明かりが一斉に消えた。

「確認だ！警備状況を確認して相馬君の部屋に2名、あとは警備員と合流して警戒！」

離れて護衛していた兵士に村井は即時に指示を出した。

「私も所轄と関係部署に確認してきます」

夜天へそれだけ言うと村井は席を立った。

「敵襲のようです」

事もなげにそれだけ言うとな夜天は自分の護衛に向かつて軽くうなづく。四葉夜天は血縁上は次期当主候補の最右翼だ。

彼女につく護衛は見えない範囲を含めると1個小隊以上の人員である。

廊下の電気が戻る。

非常用の電灯で足元だけを照らす。

「十二江さんはどうされます。こちらでお待ちになられるなら一人置いていきます」

「私、戦闘苦手なのよね」

「そうですか。ではこちらで」

四葉夜天はそう言って護衛を置いてどこかへ行ってしまった。

特殊な糸を使用して人体を操る、その技術は魔技と言っても差し支えない。

その技を持つ夜天にとっては凡百の魔法師など相手にはならない。

(真人早く来ないかな、ヤバいな)

二呼吸して清姫は簡易な感知系の術を起動する。

ブランシユの件よりも何段も上のレベルの事件だと清姫は肌で感じた。

国防軍情報部と四葉が絡むことの件は収束点が見えない。

そう言った「先の見えなさ」が清姫を不安にさせていた。

原作の敵ではなくもつと異質で物語の外から来た敵。

いや、原作から外れたことによることで新たに敵が生まれたのか。明かりの乏しいラウンジに看護師が横切り清姫へ

「こちらにいて大丈夫？ ナースステーションへいらつしやいますか？」と声をかけた。

清姫は軍人による確認が取れ安全なら帰宅するつもりであること、この場を離れることで連絡が遅れることを懸念していることを伝えた。

看護師も何かあればナースステーションに来るよう念を押し、仕事へ向かっていった。

5分、7分、10分と時間が経過する。

廊下の角から人の走る複数音。悲鳴。魔法師の魔法行使の光が暗い廊下の壁を照らす。

「逃げるー！」

角からは一人の護衛が飛び出し、清姫に叫ぶ。

護衛の頭を飛び越えるように先ほど声を空けた看護師が床と水平に飛んでいく。看護師の身体には力が入っていなかった。

清姫は（パラサイトだ！）と看破した。

正しくは家伝の「魂魄英視法」により看護師の霊子の輝きが弱まったことから連想だ。古式には情報次元へのアクセス方法として五感を通して行うことがある。

十二江では霊子の確認に視覚能力を特殊に強化する方法が秘伝の一つとして伝わっていた。

すぐに席を立ち、廊下とは反対側に走ろうとした。

だが、進行方向の先に常人とは違う霊子を纏う存在が二人いる。

清姫の後頭部には護衛の男性の断末魔が聞こえた。

「周公瑾の部下なの!?!」

膝が震える。生死の合間に立っている。

原作やアニメとは違う本当の生命の危機。

自分のチートが自分を救うのに役に立たない瞬間。

相手に問いかけるのが精一杯だ。

口の中が渴いている。

問いには答えず前方の二人が距離を詰めて来る。

後ろを振り向くと一つの人影が床に倒れ込んだ護衛を跨いで近づく。

十二江清姫は数少ない攻撃的な術を起動しようと手元で印を結び始めた瞬間である。

稲妻が空間を横に走る。

清姫を避けて三人に稲妻が直撃する。

肉体は一瞬で炭化し朽ちる。

清姫はパラサイトの魂魄が空中に集まり始めたのを目視したが、その魂魄も人型のオーラが現れ一瞬で消滅させていく。

パラサイトの完全消滅を見た清姫に次の衝撃が襲った。

突然の頭痛。片膝を着き、吐き気が襲う。

(これは…転生だ！何か世界に起きた！)

痛みでうすぼんやりする頭で思ったのはこの衝撃が転生者しか受けていないこと、そして転生者に関わる何かが起きたこと。

「ガハッ」

胃の内容物が出た。

その身に襲う違和感と戦う。

今年の新入生総代は？

入学後の騒動は？

生徒会にいるのは？

二科生の問題児は？

九校戦の1年生選出は？

九校戦のモノリスコード新人戦の優勝メンバーは？

経験したことのない記憶が清姫の脳裏に浮かぶ。

それはあり得ない過去。存在しない過去。

だが今は、清姫を襲う違和感は過去を改変し事実とし、一瞬で世界の有り様を変えた。全知全能、万能の御技。

「無理をしない方がいい」

落ち着いた声。少年というよりは男性といった少し低く人を引きつける声。

非常灯の灯りでは廊下の向こうにいる人物の顔は見えない。

だが身に纏う服装は一校の制服。

ゆつくりと近づき、顔が見えてくる。

穏やかに見えるが意志の強い瞳。

長い黒髪を紐、帯留めだろうか、まとめている。

長身に決して薄くない胸板。

美しさと気高さと雄々しさを併せ持つ。

「アラタは、相馬新は3階の奥の病室ですね」

確認を清姫にするが、清姫はそれに答えられなかった。

答えられたのは突如現れた人物の名前だけだった。

「四葉光夜」

D O ☆ G E ☆ Z A

関重蔵が座っているのは応接室だ。

服装は一校の制服。

応接室のソファは黒の皮張り。合皮ではなく本革の相当値段の張るものでもある。

壁紙に部屋に飾られている絵。決して品のないものでもなく、高級感がある。

二度のノック。扉が開く。

「失礼いたします」

何度目かの再会だ。

「ご無沙汰しております」

担当神は、伸ばした背筋を折り曲げ深々とお辞儀する。

「これ何度目かですよね。よく覚えていませんけど」

「はい」

担当神はお辞儀を止め答える。

10秒間の沈黙。

「大変申し訳ありません！」

担当神はその場に土下座した。

関重蔵は神の綺麗な背中を見て「DO☆GE☆ZA」とイメージし、その後シコルスキーの土下寝を思い出した。

「いきなりの土下座では判断できません。座って話をしていただけですか」
 そう関重蔵が促すと担当神は立ち上がり俯き加減に対面のソファへ座る。

「事情は非常に複雑です」

話は想像以上に長かった。



分岐した複数の世界。転生先としての世界。全く同様の世界に全く違う登場人物。

神々からの転生処理で関重蔵の魂は同時に二つの世界に存在した。

そして全く同じ扱いで同じ世界に存在したのが【影の中の男】だった。

そして二つの世界はそれぞれ進行した。

神々の受けは上々だった。

だが問題が。

【ロキ】である。

完結された関重蔵の魂を予定外にもう一度転生させたのだ。

二つの世界から適当に二周目者を選択し、何も考えも無しに転生者を配置したのだ。

「これはオモシロいよ！三度目の対決！二つの世界の転生者！序盤から出る謎と違和感！一話切りした奴が4話目くらいで「まあ序盤にそんな雰囲気あったしね」と自慢する！サイコーじゃないか！掲示板の自称古参とにわかの言い合いに、前作を知る人から「まあ、「うちの〜」だからね」と諦めて呟く。超脳勃起もんだよ！夜天と奏の喧嘩を求めるユーザー！掲示板ではどっちの嫁が最高か論争！カナデ派が「夜天は霞とキャラデザが違うから同一性ないだろ」と突っ込んで、霞派は「カナデはBBA」と反論！荒れる掲示板！それを遠巻きに見る「光夜×あずさ派」！うくん参戦したい！」

有名な神による勝手な転生劇。

北欧系派閥に対しての痛烈な批判。始末書の嵐。該当転生魂の管理責任。前ループの担当者への緊急の対応依頼。システム担当者は別プロジェクトで対応できない。

代打の開発担当者はシステムの解析と対応に追われ残業。ホワイト職場を標榜するので残業も出来ない。仕事も持ち帰れない。

差し込まれる別の仕事でズルズルと対応が遅れる。進行するトラブル。白紙に戻せない。

「このタイミングしかないですよ！」

上司に直談判し、前ループの担当者は関重蔵への土下座と他の魂への説明を買って出て事態の収束に乗り出した。

まずは関重蔵に土下座した後に、魂を「完結状態」に戻す錠剤を飲んでもらった。

完結状態になった関重蔵は、厳しい視線と担当に向けたあと大きくため息をついた。

「で、この状況をどう回収するんですか」

（混じった記憶で混乱しないのは気持ち悪いな）

関重蔵は脳内に思いだされた二人の妻や家族の記憶、友人、部下、そして世界。

自分という人格は一つだし、他人の記憶でもないし、他人の人生でもない。

自分の経験が並行して存在している。

（これで本人が混乱しないのは神様パワ〜か）

「その、【影の中の男】を止めるのがこの世界の均衡の最善なんです」

「それで方法は。転生者の努力ですか」

あの【影の中の男】を倒す戦力としてはギリギリだ。

関重蔵の中では勝率は決して高くない。

（すでにあの男はパラサイトを手元に置いてある。消耗品として使える程度に）

それをあの戦力を覆す難しさを冷静に考えていた。

「特例中の特例を使いました。関さんには10分後に元いた世界に戻っていただきま

す」

担当者の真剣な眼差しで言葉をつなげる。

「オールスターキャストです」

ソファに深く座り直し関重蔵は天井を見て呟く。

「アベンジャーズアツセンブル」

担当者は深く頷いた。

「それです」

御都合主義

「豪華な顔ぶれ、なのかね？」

「どうですかね、前作の登場人物を知らないまま続編の映画見てる感じですね」

私の質問に1000点満点の答えを出す真人。

八王子にあるお高めのレストラン。

その1番広い部屋。

パーティー会場としても使えるその部屋には20名近い転生者が各々好きにテーブルについている。

私は先輩枠として真人と一緒にテーブル。そのテーブルには「須田です！先輩！」と須田渉が同席している。

すっごいニコニコしている。君、美人好きなの？

私は急造された記憶から各テーブルの面々を確認していく。

【Aテーブル】

四葉光夜

今年の一年生総代。実技一位、論文同点一位。生徒会所属。

無類のカリスマ。支配者の格。窒息系イケメン。昨晚病院にいた5名のパラサイトを同時に消滅させた魔法師。

黒髪に優しさと高圧さを讃えた美貌。女子が100人いたら100人が「美しい人」と言いそう。

黒羽竜也

あの黒羽家の長男：らしい。学校には司波と黒羽は遠戚関係で、養子として司波達也君の双子の彼を迎えたらしい。

らしいというのは、私の急造記憶では「ゴデコイ情報」だという認識があるから。まったくもって司波達也きゅんとうり二つ。

司波雪光

深雪ちゃんの双子。高速戦闘をメインにする凄腕。王子様。まゆみんのお気に入り：なのだが雪光君はまゆみんの扱いが上手く、ちよつとまゆみんの中で達也きゅんと同じレベルで気持ちが行っている様だ。

深雪ちゃんが男子になったらこんな感じ、という美しさとはんわり儚さと優しさを讃えた美貌。

黒城兵介

雪光君の友達で三高の“一年三人衆”の一人。通称黒騎兵。

モノリスコード新人戦で雪光君との高速戦闘をしながら一条将輝のフォローもした超高校生級魔法師。

健康!といったスポーツマンイケメン。夏の海とかすつごく似合いそう。

〔Bテーブル〕

なんでこんな子たちがいるのよ。頭抱える。

緋村武心

剣術家その1。古式でも名門の一つ。現代で言うところのエレメンツの一族。

国家の魔法師の遺伝子的改造に協力的だった一門の御曹司。

うちのような古式の家の間では有名。

赤毛の美少年。小柄な体格だけど俊敏そうだ。

鬼一法楽

あく、こんな子が転生者だったの!剣術家その2。

腕前は100年に一人の逸材。実のところ急造記憶では彼に「結婚してよ」と7年前に言われたことがある。

鬼一家はうちの儀式関係の警備をお願いしている。

中学三年生だけど、身長は180cmあるのかな？悔しいけどワイルド系イケメンなのだ。

七海奈波

七宝家の縁者。特殊な魔法を使うらしい。七宝家とは同じ気象系の魔法を使うので多少の面識もあり

何度か「現代」「古式」の両面で気象調査を行ったことがある。

小柄で今時の女の子！って感じだけど、少しブーたれている感じもする。

五輪鳴門

たしか五輪の家の子だよな。何年か前に養子の話題が出てたからこの子か。

噂だと忍者とか言われているはず。

正直五輪家とは縁は無いけど、四葉の対抗勢力としての強化は十師族はみんなしている。
る。

上背は無いけど、背筋の伸びた凛々しさと子供っぽさが同居している少年です。

おねーさんのシヨタ好きにビンビンですよ。

【Cテーブル】

親類縁者の子が目を合わせてくれない……。

仙破冬彌

司波達也の2コ下。四季の「冬」のエレメンツという超特殊家系。アッシュグレイの髪がすつごく似合うビジュアル系イケメンBOY。

獅子王院楠葉

宮中の魔法的防御手段を任されていた呪禁師の一族。現代魔法と伝統魔法を自在に使いこなす一族。

急造記憶では・・・従妹

腰までのストレートの黒髪で絶品の日本人形みたいだ。なぜか先々週にお菓子を一緒に食べた記憶がある。

【Dテーブル】

二科生チームだ。残念系転生者が多いみたいで、みんな私を慕ってくれている。

アーデル・フォン・羅門

赤毛の魔女。東欧地域の血を引く美少女。知性溢れる外見に反して、理論はダメ。入学式の時に騒動を起こし司波達也きゅんより「じゃじゃ馬」扱いさえれている。

おまー。

狼谷一樹

魔狼。人狼に変化できるBS魔法師。変身後は高速戦闘と強力な爪と牙。数秒で傷

が塞がる再生能力。情報体次元も嗅ぎとる嗅覚。理論はダメ。

「人狼狩り」という欧州の人種差別主義者集団に命を狙われる事件があり、二科生十モブ崎&須田で撃退する。

九校戦前に「俺は貴女の犬です！」とリンに言ったら「彼氏がいるので間に合ってます」と断られているはずだ。

久慈灘幽玄

次元図書館の主。

実技よりも理論重視。

天才肌で吉祥寺真紅郎のメル友。

司波達也による知識マウント被害者の会会長。

入試の時の実技で試験官に実技中に気になったことを質問しつつやったら、時間が無駄にかかったらしい。

ミシエル・フィリオ

南米娘で地脈（レイライン）と植物と流血に関する特殊な魔法を習得しているらしい。じゆうもんと初対面の時「P a i !」（ポルトガル語で「お父さん」）と呼んでしまい、以来「十文字娘」渾名をつけられる。本人は気にしている様子はない。

九校戦の中日でサンバ衣装を持ち込んでいて、柴田さんに着せようとしていた。

わたしもまゆみんにさんばいしようきせたい。

一番恐ろしいのは相馬君のEテーブル。

夜天さんと恐ろしく大人びた黒髪の美少女、いや若々しい美女が相馬君を挟んで座っていた。美女の横には夜天さんを牽制するようなマリアちゃん。

あのショートカットの大人びた美少女が噂の藤林奏さんである。

夜天さんは乙女のように相馬くんの右腕に抱きつき、睨むマリアちゃんにあかんべーをする。

相馬くんの左隣に座る奏さんは、テーブルの上に置かれた相馬くんの左手の小指に自分の右手の小指を絡めている。

そして相馬くんに向けてちよつとだけ舌なめずりのような感じで唇を動かす。

なにアレ、ちよーエロい。

空気が凍りつくのか沸騰しているのか判別がつかない。

あの晩。あの晩は混乱と驚きと出来の悪い二次創作SSを夜通し読んでしまった感じが無い交ぜになった不思議な晩だった。

結局は相馬君の怪我は深夜に司波達也くんがやって来て再成を使い完治。

そのままなんとなく流れ解散となった。

到着が遅かった真人には「遅漏野郎！」と罵ったが「あまり良い言葉じゃない」と四

葉光夜に窘められた。

窘められてちよつとグツと来たのは声が速水奨つぽかったからである。

今朝、情報端末に16時よりの作戦会議を実施するお知らせが来た。

署名は「藤林奏」と書いてあつた。

そしてその16時である。



「異議が無ければ俺が話を進めるぞ」

部屋の奥、少し空いた空間。司会進行役として司波達也が前に出た。いや彼が司波達也じゃないのはわかっている。

どうしても司波達也きゅんとそっくりなので、このあたりの混乱は今もある。

「黒羽、お前はそつち側だろ。主導権取るつもりか」

齒に衣着せぬ、といったやや攻撃的な口調で聞いたのは久慈灘くんだ。

長身で切れ長の目。怜悯な印象を持つ二科生。

いくら記憶の整合性が取れているといつても転生者同士の相性や人間関係は別の話のようだ。

「俺の本名は四葉竜也。諸事情により黒羽竜也として一校に在籍している。四葉真夜の実子だ」

!!!!

デコイ情報はこの事実を隠すためか。

驚きを見せないのは四葉光夜と雪光君、相馬君にカナデさん（凄い大人っぽくて年下
なんだけどさん付けになってしまふ）くらい。

いや横で須田君が「ジンジャエールは辛口派なんだけどなく」と手元の飲み物が甘口
ジンジャエールであることに不満を漏らしていた。動じてないな。

「俺はそこのアホが藤林奏と結婚した世界にいた転生者だ。司波達也と同じ顔でUSN
A生まれの魔法師。一時期は他の転生者と敵対関係にあった。別段、こっちの転生者で
仲良しこよしがしたいわけじゃない。場を仕切るには1番中立だろう」

視線で相馬くんを指し示す。

当の本人は美女二人に挟まれて青い顔をしている。

大の大人が（童顔だけど）あんなに不安そうなのを初めて見た。

「それが四葉？何の因果？」

楠葉ちゃんがえらく攻撃的に竜也くんにつつかかる。

それを肩を軽くすくませて竜也くんはいなす。

あの可愛かった（急造記憶）あの子がこんなに敵対的で、嫌味を称えた笑顔を見せる
なんて。

「御都合主義だろう。今回の件を対応するには、因果をねじ曲げて俺をここに居させるのが都合がいい」

部屋を見渡して同意を得る。

竜也くんは気にすることもなく話を進める。

「質問は？無ければ話をしようか。問題は：便宜上【影の男】としておく。俺のいた世界での呼び方だが。この男が今回も暗躍している。目的は不明。パラサイトとの関係がある。もつと言えば顧傑との関係も推察される」

「今回も敵対的だと？」

黒城くんが確認をする。

妙に竜也くんと距離がある感じだ。

前世に何かあったの？

「そうでなければ、パラサイトを引き連れてそいつを襲ったりはしない」
身じろぎ一つしない相馬くん。

「何で師匠を？」

狼谷（ろうや）くんの質問に竜也くんは簡潔に答える。

「当たりがつけやすい」

その言葉に納得するものと理解できない者がいる。

おう、二科生組よ、ちゃんと理解してるかい？

ミシエルちゃん、コーラをブクブクしないの！

「姉やカチューシャのようにこの世界に転生したときに別人として生まれるのなら、存在を気取られることは無いだろう。姉の情報プロテクトが堅く、カチューシャは一般の家だ。だがアラタは全く以前と同一の背景を持ってこの世界にいる」

竜也くんは声までカツコイイ（中村悠一基準）とか反則やで。

「目的は不明、と思う。愉快犯的思考は変わらずと見えるが」

「そのようだ」

竜也くんの意見に同意するのは光夜くん。

「対応策はあるのか？」

兵介くんは冷静だ。周りの緊張感の高まりを意識をしていない。

自然に疑問を提示する。

「それを話し合う…と言いたいところだが奴の起こす計画が不明だ。過去の行いと現在の状況で、判断できるのは」

「横浜騒乱」

アーデルのテーブルに肘をつき乱暴に答える。

「そうだ。だが同時に来訪者編も起こりつつある」

同意しつつも追加する光夜くん。

「あと古都内乱もね」

コーラぶくぶくに飽きたミシエルちゃんがさらつと言う。

!!!!

その発言に皆、ミシエルちゃんの方を向く。この天然加減はじゆうもんにホント似ている。

「地脈に関連した魔法が使えるんだけど、どうやら畿内辺りに地脈の乱す痕跡があるみたい。前世と同じなら、その影の男とみて間違いない」

10秒間の沈黙。

「パラサイトによる複数地域の同時暴動」

五輪鳴門の言葉でさらに沈黙が長引くはずだった。

「オマケの人食い虎さんか。相手したいな」

こっちは鬼一法楽。

「くじで決めようよ、ね、法楽」

法楽の独り占めをけん制する緋村くん。

この緋村くんにはほっぺにバツテン傷はない。

戦闘が発生することに喜ぶような口調の二人に呆れ、竜也くんは今日最後の提案をす

る。

「提案だ。3日後に再度作戦会議。それまでに各人の伝手で情報収集」

「異議無し」

「あたしは受験勉強したい！」

七海奈波ちゃんの抵抗の一言は大多数の返事がかき消された。

絶望のリン

「いい加減に離れたら？」

「うるっさい！」

異議なしの言葉から、向こうのテーブルではマリアちゃんと夜天さんの口喧嘩。

楚々とした美女の夜天さんが子供みたいなリアクション。

あれだ、父親の足にしがみついている子供に離れるよう叱る母親だ。

各テーブルでは各面々の話や、テーブル間を移動しての個々のネットワークの確認が行われている。

「キヨお姉！獅子王院の全勢力使って情報集めるよ！」

大股で私の居るテーブルに来たのは楠葉ちゃんだ。

綺麗な日本人形的美少女は眉間に少しだけしわを見せている。

「楠葉ちゃん。お姉ちゃん少し混乱しているけど、うちと貴女のところの伝手だとそんなに情報収集は…」

「弱気にならない！宮内庁にある新陰陽寮に実働部隊の話があるからそこに働きかける！」

「え、初耳……」

「2101年に初陣だから現在は人選段階。それでも佐渡経験者と101旅団関係者がいるから諜報戦の実地訓練として説得！」

ちよつとマジ、それ。

この子たちは、いやこの人達は全員2周目ならこの先起きることを把握している。

各組織の動向や戦力を知り、そして何をするとどう動くかわかっている。

この人たちの記憶とチートを使えば、この前倒しされた来訪者編も解決が容易なのかもしれない。

「ちよつと待つて。一応宮内庁への圧力をかけることは考えるけど……」

「弱気にならない！ どうせ、宮内庁は魔法師関係は九島に握られているから十二江の様な非戦闘系魔法師の家系でも宮内庁からしたら貸し作れて今後の魔法師育成を依頼できるなら情報調査くらいなら引き受けはず！」

「落ち着きなよ。それに十二江先輩と話したい人が多いみたいだし」

須田君が楠葉ちゃんを止める。

「ワタル先輩もそんな調子でいいんですか?! もつとしゃんとする！」

まるで家庭教師の先生と言った調子で、テーブルで突っ伏して溶けかかっている須田君を叱咤する。

「でもさ、楠葉ちゃん。君らが宮内庁動かすより、あそこにいる美女に挟まれて青い顔しているビックリドッキリおじさんに動いてもらった方が速いよ。再来年には従五位になるんだから」

視線の先の相馬君は青い顔に冷や汗。両手をそれぞれの美女に握られてあんなに描写するのも難しい顔するとは。

そんなに前世は酷いことしたのかね？

「そうですねが…あの四葉に…」

楠葉ちゃんは相馬君の方を見て少し言葉が詰まる。

そこに割り込んできたのがうるさい4人組だった。

「オネーチャン！そうよ！あーちゃんを独り占めにする光夜を出し抜こうよ！あーちゃん独り占めだよ！」

私と変わらぬ身長に、グラビアアイドル以上のナイスバディな金髪褐色娘のミシエルが両手をバタつかせ言ってくる。

うん、あなたあーちゃん大好きだからね。小脇に抱えて逃げようとしたときは驚いたよ

「そうつすよ！姉御！生徒会のスカシノユキになんか負けられないつすよ！」

ローヤ君よ、雪光君をスカシ野郎とか言うときまた女子生徒から「野蛮人！」とか言わ

れちやうよ。

「姉御、ここはあの黒羽の野郎にギャフンと言わせるチャンスなんですよー！」

ホント、久慈灘君は黒羽君をライバル視している。やっぱり顔の問題かね。

知的クール系がかぶっているのが許せんのかい？

「二科二科というより、あの完璧四葉野郎に「ぐぬぬぬ」言わせたいのよ、姉御」

1人クールに言つて来たのは赤い髪的美女。欧州の暗い空と情念をイメージさせる
雰囲気。

が、論文系の成績で言えば二科最下位。在籍が一校の新七不思議。羅門ちゃん。通称
ラモちゃん。

わいのわいのと私を慕ってくれる二科生の四人がアレコレ話してくる。

その姿を見ていた別のテーブルから四葉光夜と黒羽竜也が余裕のある態度で「ぐぬぬ
ぬ」と「ギャフン」と言つてくれる。

この余裕のある態度が余計に火に油を注ぐ。

「三日後覚えておけよ！」

そう言つて久慈灘君はレストランから出ていった。

「なんか仲悪いのかな」

「どうであれ意識するしかないでしょう。お互い別な方法でこの世界を一度乗り越えて

きたんですから」

私の眩きに真人が答える。

御都合主義だ…。

ホントに神様は世界の根底を意図も容易く変える。



そして、始業式。あれから数日後。

生徒会室に顔を出したら、まゆみんが上機嫌だった。

結局のところ、アレから大した進展は無い。

というかうちからは宮内庁への根回しくらいで情報収集やその他諸々は、四葉組が中心に手配をしている。

既に国外でジロー・マーシャル（ちよび髭のオッサン）は身柄を確保されたい。

雪光君が「1週間ばかり軟禁して公安に渡してお終い！」と言っていた。

その雪光君は上機嫌のまゆみんの髪をヘアブラシで磨いでいた。

「真由美さん、来週の図書室のメンテ業者ですが光夜と中条先輩に任せてみては？」

「あら、もしかして恋の応援かしら？」

人の恋愛に楽しそうなまゆみん。

「次期会長候補に引継ぎがてら慣れてもらわないと」

「雪光君は中条さんが会長になった方がいいの？」

「美人の次はカワイイ系の方がいいかな」

「あら、おねーさん妬けちやう」

「…本気？」

雪光君の真剣な一言でまゆみんが一気に顔が赤くなる。

髪を梳かす手が止まり、髪留めをサツとつけ、まゆみんの髪型が出来上がる。

「冗談ですよ」

余裕のある声で雪光君はそう言つてまゆみんの後から離れる。

「バカップルか」

私の言葉に誰も反応しない。

天然小悪魔美系少女も、恋愛の駆け引きに余裕のある年下美少年には勝てないようだ。

論文系三美女の一人、市原鈴音が一つ咳をして話を戻す。

「ですが冗談では無く、一科生と二科生の融和策を纏めるには中条さんの生徒会長就任と二科生の生徒会執行部入りは必須ですよ」

そうなのだ。二科生（この場合は達也きゅん）を生徒会に入れることで一科二科融和のモデルとなる。

まあ達也きゅんは九校戦優勝を支えた天才エンジニア、そして司波三兄妹弟をまとめる有名人。

論文1位にあの黒羽竜也の双子。

校内の有名人の一人だ。

光夜君は生徒会だし、深雪ちゃん、雪光君も追っかけからの「緊急避難」としてそれぞれ副会長補佐、会長補佐の立場にいる。

なんでも「前は最初は部活連だったんだけどね」と雪光君が光夜君を見て笑っていた。

あーちゃんと光夜君はコンビとして忙しく校内を動き回っている。

日に日にあーちゃんがね、光夜君のことを好きになっていくのがわかるのですよ。

緊張から尊敬そして親愛。

(急造) 記憶では最初は「中条先輩」って呼んでたのが九校戦が終わったあたりで「あずささん」と呼んでいたのだから光夜君も手が速い。

マリアちゃんが言っていた睦まじい夫婦のスタートですよ。

さて、恋愛事情は横において、大きく変化した一校の話をせねばなるまい。

そりゃ転生者が8人増えたのだ。私が体験した2095年4月〜8月は驚くべき騒動があった。

まず生徒会の陣容である。

会長はまゆみん。

副会長ははんどーくん。

会計にリンは変わらず。

書記にあーちゃん。

もう一人の書記で四葉光夜が参加。

男子の追っかけから緊急避難で深雪ちゃんが副会長補佐。

女子の追っかけから緊急避難で雪光君が会長補佐。

完璧な陣容だ。まゆみんの進める一科二科の融和に対して反対する生徒のところに

はあーちゃんを派遣。

あーちゃんのコンビとして光夜君が帯同。

光夜君の姿を見ただけで反対派の生徒は沈黙。

一度だけ蛮勇のある生徒が「中条！お前は一年の威を借りるのか！」とあーちゃんに矛先を向けた瞬間：光夜君に「口を開くな」と睨まれ、本当に何も喋れなくなったらしい。

成績優等生だったので、フォローに私が駆り出されてメンタルケアをさせられた。

「二科とか一科とか関係なく怖かった…」と涙目で凹んでいた。

次期生徒会長は器とかなんとかでなく光夜君を制御できるあーちゃんがっピツタリな気がする。

二科生の問題児チームは「人狼狩り」問題でモブ崎&須田コンビと忙しかった。そこにエリカやレオ、幹比古、美月の面々も絡んで実戦を経験している。

黒羽竜也が事の顛末をまとめて解決させたので「保護者」の立場に。

本人は「二科生の面倒は二科生でやれ」と司波達也に言うが「俺は深雪の世話で忙しい」「もう！お兄様」赤面）と笑われていた。

竜也君のほのかちゃんを見る目が純粹だ。

お前、うちのほのかちゃんに手を出すつもりか！

細かい事件は色々あった。

・ローヤ君による多摩地域不良統一決定戦！八王子で一番強い不良はだれだ！（結局真人に座を奪われる）

・雪光君を狙った近隣の女子高校生たちによる集団ストーカー事件（まゆみんの登場で女子高生たちが戦意喪失）

・ラモちゃんがリンに「賢くなる方法」を教わるべく突撃。「魔法の…系統？」で首を傾げたラモちゃんに絶望のリン。

そして楽しい九校戦だ。

今年の九校戦では黒羽竜也&四葉光夜&司波雪光が大暴れした。

四葉光夜による「9本同時フォノンメーザー」によるアイス・ピラース・ブレイクの最短記録や黒羽竜也による「クラウドボール荒らし(その場を動かない黒羽ゾーン)」、司波雪光のバトルボートの超絶試遊、そしてモノリスコード新人戦。

司波達也、司波雪光、四葉光夜による蹂躪。

唯一抗えたのは三校だけ。

無頭竜の行った細工はモノリスコード新人戦の下見で起きた。

モブ崎(一年生の転生者たちからはモーリーと呼ばないと怒られる)と須田君の負傷。人為的な競技地形の改竄。

モブ崎君と須田君はそこで滑落。

モブ崎君は岩場に数m上から落ちて肩の骨折と酷い脳震盪。

須田君は左足の骨折と腰への打撲。

発見されるまで1時間かかった。

怒りにかられる二科生問題児チーム(彼らにすればモブ崎君は口は悪いが面倒見がいい家庭教師役)は速攻無頭竜を潰しに行った。

ついでに会場にいた無頭竜のジェネレーターは魔装大隊が出張る前にラモちゃんが文字通り「粉微塵」に。

この件に関して「四葉」「十文字」「七草」「一条」等の学生十師族が大会の中止を求めたが、運営委員会は実行を宣言。

見学に来ていた九島烈、七草弘一、四葉真夜が「調査をする」と言う。「十師族」と「高校生魔法競技大会運営」による政闘の影を帯び始めたが、軍部情報系組織の動きにより魔法協会内の一部職員による大陸系マフィアとの繋がりが証明され

「大会の続行」に対して「学生からの提案・お願い」によるバーター取引。それと大会警備には軍関係ではなく「監察」として警察が入ることとなった。

軍としては警察に監督されるという屈辱。

大会運営は一時的とはいえ学生と言う管理すべき相手への白旗降伏。

学生は運営への怒りを無理やり納得させての競技続行。

警察は軍との軋轢を起さぬように気を使う。

皆それぞれ、それなりの負担を負いながらの九校戦となった。

国家政策の意味を持つ九校戦に関して多大なる不手際。

まあ考えればマフィアの無頭童のジェネレーターが普通に入り込めるんだから原作の九校戦も結構ガバガバだ。

結局九校戦では達也きゅんは天才エンジニアとして名前を轟かせ、一条将輝を破った
ダークホースとして注目されることとなった。

少し脱線した。

一科二科の融和策だ。

「風紀や選管、懲罰委員の実務者とか役職付きにするのは確かに融和策を有名無実で終わらせない為にも必要だね」

私の言葉に生徒会室にいた一同は頷く。

「候補は？」とまゆみん。

「司波達也の生徒会入り、吉田幹比古の主要委員会への所属」と私。

「ミシエル・フィリオさんにも役職を与えるのが有効かと」とリン。

「個人的には西城レオンハルトの部活連執行部入りを希望します」と雪光君。

達也きゅんとミツキー君の實力はもう二科生としては天元突破している。

ミシエルは…二科生のマスコット。柴田美月ちゃんと並ぶ一年生の男子がちらちら見る女子トップクラス。

いい加減何かしら役職に就けて、生徒自治へ組み込んだ方が良い。

「PoiがOKしたらね」と告白してくる男子をじゅうもんへたらい回しするのはやめた方がいい。

じゅうもんが「なぜ俺が人の告白の相談を聞かねばならぬ」と言っていた。

レオはね、人好きする性格だしモブ崎&須田コンビとも仲いいし部活連での二科生

のモデルケースにはいいかも。

「勢ぞろいだな」

生徒会室入ってきたのは、彼氏が間合い3mなら世界三指に入る女、渡辺摩利である。あれ？5mだっけ？

誰かに断ることなく、一番近い椅子、つまり私の隣りに座る。

「風紀の次期委員長を決めた」

まゆみんに少し胸を張る。先に後任を決められたことを少し自慢している。

「真人？それとも別口？」

私が可能性を口にするが、結果はみえている。

「千代田だ」

「地雷ちゃん？」

千代田花音を「地雷ちゃん」と呼んで怒られないのは学校内でも私だけ。

おかつぱの美少年、五十里啓を愛でた仲なのだ。

「その千代田だよ」

摩利はその端正な顔にやつぱり後任を決めた安心感と断固たる決意を見せる。

「で、なんで？地雷ちゃん、風紀つて言うにはバカス力魔法使いそうだけど」

「そう思われていれば、千代田の前で悪さする奴は少ないだろう」

抑止効果としての登用ね。

「沢木先輩の負担増えそう」

雪光君は少し意地悪そうな笑みを浮かべている。

「いや、そこぞ。二科生の羅門を風紀に入れたい」

「羅門さん？でもあの子は」

リンの言葉は、5月の事件を思い出させる。

「そうだ。あの事件で魔法を他の生徒に見られている。あれだけの魔法を使うんだ。抑止力としては最高だろう」

人狼事件による学内に潜入した工作員二人を「巨人の手（ハンズオブタイタン）」という彼女特有の「魔術」、

青白く光る巨人の手により拘束していたのを他の生徒に見られている。

ラモちゃんの魔法は「巨人の力を再現する」なのだ。

巨人（ジャイアント）ではなく巨人（タイタン）なのが厄介だ。

彼女は「情報次元存在の物理空間への干渉召喚」をやったのけたのだ。

これについては久慈灘君と達也きゅんが今でも討議して結論が出ていない。

タイタンとは神ではないかと。

「千代田も自分以上のじゃじゃ馬がいれば、少しは自重するだろう」

甘いな、摩利よ。ラモちゃんはじやじや馬じやない！暴れ馬だ！

クレイジー・デンジャラス・ビューティ・スタンピード・オブ・バイオレンス

「でもさ、記憶は上手く組み合ってるけど現実感がないよね」

司波雪光、一校の王子様は風紀委員室で頭を抱える相馬新に話かけていた。

現時点で風紀委員に名を連ねている転生者はカナデ一人である。

今は、風紀委員の各面々のスケジュールが合わず生徒会会長補佐の雪光が留守番をしておりその相手に相馬新がいた。

「なに悩んでいるの？ いいじゃない、夜天さんは四葉の次期候補じゃないし、カナデは変わらさずだし一夫多妻制でもすればいいじゃない」

半分本気、半分冗談と言った口調だ。

「奈波ちゃんと結婚離婚繰り返し返してた奴に言われたくない」

「あー言っつてはいけないこと」

重蔵の言葉に棒読みで返す雪光。

雪光の前世では確かに七海奈波と二度結婚して二度離婚した。

大学時代に一度。好き合ったというより気が合った感じでの結婚だった。

だがお互い仕事をする中で生活リズムがズレ始め、一週間で20時間同じ空間にいれば良い方だった時もある。

そこで一回目の離婚。

40代でもう一度結婚。奈波の海洋調査への傾倒と、雪光の月面用機動車の製作による方向性の違いから二度目の離婚。

その後はたまたま肉体関係を持つ男女友達の間柄となった。

七宝琢磨に「責任取れ！」と会うたびに言われていた。

「お前の方こそどうなんだよ」

「そう言われても……」

重蔵の言葉に立場が入れ替わる。

雪光は中年になるまで吹っ切れずにいた七草真由美と、今は恋愛関係と言える距離まで近づいた。

だが七海奈波との数十年の関係を考えると、雪光はなぜか真由美への最接近をためらっていた。

「俺の悩みわかるだろ」

「身に染みます」

重蔵の言葉に頷く雪光。

(どうしたもんか)

重蔵が悩むのは二人をどうするかである。

二人とも妻であり愛する人だが接し方を悩ませる。

カナデに対しては残して逝ってしまったことに負い目がある。

夜天こと霞については、彼女が死ぬまで不安にさせなかつたか自信が無い。

正直言つて両名に合わせる顔が無い。

先日の一堂に会した場でも、あまり会話が出来なかつた。

(軍務じゃないからな)

軍神の加護も一人の男の悩みには無力だ。

「そう言えばワタナベさんは？」

渋い顔をしながら無理にでも話題を変える雪光。

雪光も七草真由美と七海奈波から少し逃避したいのか、今一番現実的な話題を出して

きた。

「昨日連絡来て保護した」

ため息の代わりに、昨日の出来事を伝えた。

既に周公瑾は日本政府の庇護下だ。



一校から駅へ向かう大通りから一本外れた通りに甘味処の看板のある喫茶店がある。
「久々に食べる気がするわ」

「私もです」

「帰っていい?」

最初はカナデ、次に夜天、最後は清姫。

うきうきとした言葉に、落ち着いた返事、そして逃げ出したい声。

落ち着いた美少女に、白百合の様な美女、そして長身の麗人。

周りから見れば、その美しき可憐さに距離を取りたくなるほどだ。

美しすぎるといふのも、時には目の毒である。

「夜天さんもいきなり親類縁者が増えてびっくりしなかった?」

梁のある店内は喫茶店というよりは甘味処の名前の通り、大正レトロの風情がある。

奥の席に案内されながらカナデは夜天に質問する。

確かに光夜、雪光、竜也と四葉に後継者候補が一気に三人も増えた。

「意外とすんなり受け入れましたね。逆に母に対する記憶の方が混乱します」

冷徹な笑顔を讃えた母。分家との関係性を悪くしながらも、娘である夜天を守った

母。それは病的な妄執と紙一重だった。

それがである。

「竜也、元氣かしら」「光夜さんは学校に慣れているかしら」「達也さんにそのあたり上手く取り計らってくれるかしら」

身内のことを心配する美熟女となり、心配し始めると深夜や木庭優衣（光夜の母）が止めるまでアレコレと騒ぎ始める。

四葉の里は夜天の成長とともに大きく変革した。

大漢の忌み子への視線はきつかったが、夜天の能力と経験をもつてすれば分家の「自称一流の戦闘魔法師」など子供同然。

心を病みかけていた母も竜也の出産とともに回復。

深夜も原作の様な極端な任務遂行もせず、四葉基準では幸せな家庭を築いていた。

光夜が10歳になるころには、発言力も強く木庭家も分家並みの発言力を有していた。

9歳になる光夜に分家の当主含めた10名がものの十秒で倒されたことがその要因だ。

「懦弱な」の言葉に心を折られた魔法師も多かった。

ちなみに司波龍郎は【円満な別居中】で達也が20歳になるタイミングで深夜と離婚を予定されている。

古葉小百合は司波家に顔を出し、エンジニアとしての達也に相談することが時折あ

る。

深雪には好かれていないが、それなりに幸せである。

雪光曰く「二度目の沖繩なんてバカンス」といった状況だったらしい。

なにせ、達也、竜也、光夜、雪光の揃いぶみだったからだ。

唯一変わらなかつたのは分家からの不満を逃がす意味で行われた「仮想魔法領域実験」とその顛末だけだった。

さらにである、十師族のごく一部では七草弘一と四葉真夜の不倫関係というのは公然の事実となっている。

16年近く前の十師族会議の晩。一度の間違ひは黒羽竜也こと四葉竜也をこの世の生み出した。

「嬉しくもなんともない」と竜也本人はクールな顔で言っていた。

夜天は事情は分からないが本当に嬉しくもなんともないのだろうと感じていた。

「高村マリアとは親友でしたね」

「そう、付き合いは長いわ。前の時は60年以上かしら。彼女の葬式にも出席したわ」

カナデの記憶では世界各地から弔問客やカチューシャが運営していた亡命者の教育機関の出身者など多くの人が溢れていた。

「昔は自信と勢いが形になったような性格だったけど、今は落ち着いてるわね」

30代の時に「新ソ連の奴らに煮え湯を飲ませてやる！」と言って日本とUSNAとインドを往復していたのは今は懐かしい。

その時にリーナと出会って「カチューシャは精密な運行をする暴走機関車」ということで見解が一致した。

本人は「あんたたちの旦那と比較すればまとも」と言っていたのが懐かしい。

カナデと夜天はそれぞれ、黒蜜豆の白玉、白玉とわらび餅の黒砂糖まぶしを頼んだ。

清姫は「胃が痛い」と言って、緑茶だけ。

二人の頼んだ甘味が届くとカナデは前置きもなく話し始めた。

「正直、あの人との結婚はいつ頃できそう？」

その言葉にさらりと夜天は返す。

「そうですね。重蔵さんの任務が一段落つけば」

「早ければ2年進級時か」

そのやりとりを不安な顔で聞いていた清姫が間に入った。

「ちよつと待って」

マリアと夜天のやり取りから、この二人にも埋めることが不可能な溝があると思っていたがここまでのお話は和やかとまではいれないが、世間話が出る程度のお仲と思えてくる。

そんな清姫の考えを感じ取ったカナデが答える。

「別段敵対的なわけじゃないの。私はあの人の妻だけど、夜天さんの年齢を考えれば先に結婚するなら夜天さんよ」

「それは前世の結婚からくる余裕ですか」

ちよつと棘のある夜天の言葉。

「純粹な算数よ」

夜天はわらび餅を一つ食べ、口元をナプキンで拭う。

「私は前の時は2年も満たぬ間の夫婦でした。先に死んでしまつて、あの人の人生に無駄な時間を作つてしまつたかもしれないですね」

それは懺悔も反省でもない。自分の感情を含めた事実を述べた。

カナデも口元をナプキンで拭うと少しだけ寂しい微笑みをした。

「私は逆。先に死なれて抜け殻だった。カチューシャには助けられた。居なかつたら不味いことになっていたかも」

その言葉に清姫はマリアのこと言葉を思いだす。

愛する人を残してしまつた妻と、愛する人に残された妻。

同一の人を愛するが、立場は全く逆。

そんな二人なのだ。

1人の男を取り合う。いやそうではない。1人の男の人生に最後まで寄り添うことが出来なかった二人なのだ。

「夜天さんは根本的には別に結婚制度とかどうでもいいでしょ。あの人のそばにいられば」

そう言うときカナデはお茶をすすする。

「そうですね。あの人と一緒に生活を営めればそれだけでいいです」

夜天もお茶をすすする。同意。

「じゃあ、戦略目標は一緒ね」

湯呑を置き、白玉に手を付けるカナデ。

清姫はその意味を把握しきれずにいた。男女の感情、それも特殊な運命を背負った二人にしかわからない感情に戸惑っていた。

「一緒？」

夜天とカナデの視線が絡む。

「自分が死なないように、そしてあの人を死なせないように」

カナデの言葉に夜天がうなずく。

清姫には茶飲み話で彼女たちの人生の目標が明確化されているのがわかった。

この二人には言葉少なに行っている同盟成立の瞬間なのだ。

愛する男と添い遂げることを目標に。

「私が独占欲にかられる可能性は？」

「別にそれでもいいけど、きつとあの人独占欲の強い女のあしらい方知ってると思う」

夜天のジャブにカナデのカウンター、いや自分の夫の女性の扱いを説明した。

夜天も声を出さず軽く笑い、小さくうなづく。

「わかりました。では最初は私が結婚を。子供も先で？」

夜天は30代半ばに差し掛かる。いくら医療技術が発展しても出産、つまりは新しい

命を生み出すのは命懸けだ。

夜天の母、真夜が深夜の「精神構造干渉」の魔法がかけられなかったのは憐憫だけで

なく

胎内にいた夜天の存在が魔法の正常な動作をゆがめる可能性があったからだ。

一つの身体に二つの命。出産とは奇跡なのだ。

「ええOK。ただし一つ条件が」

カナデが声を一つ落とす。

「なんででしょうか」

その真剣な声に夜天も改めて居住まいを正す。

「子供の名前。男の子が生まれてもアラタとはつけないで」

寂しくはあるが決意に満ちた言葉。

夜天は一度息を飲み、「わかりました」と呟くように了承する。

カナデはその了承に対して、条件の理由を述べた。

「あの子は前世だけにとどめておきたいの」

神の都合で生き直す苦勞は子供には背負わせたくない。

それがカナデの母親としての想いだった。

◆

「光井さん」

「ほのか」

黒羽竜也は血縁や友人らが言う“光井ほのかにしか見せない笑顔”を光井ほのかに見せていた。

横には北山雫がブロックするように座っている。

北山雫の認識では黒羽竜也は確実に下心を持って光井ほのかに接している。

気づいていないのはほのかだけだ。

G W後から始まった「黒羽竜也勉強塾」

ロボ研の見える喫茶室では週に一度、一年一科生の同率首席の黒羽竜也が自習をし、ておりその場に勉強を教わりたい生徒が自然と集まっていた。

その中には優等生の光井ほのかと北山雫も参加していた。

一年生は粒ぞろいどころではなかった。

タレントが圧倒的に多い。以下総合成績順である。

「完璧」四葉光夜／「当代第一」黒羽竜也

「一校の王子様」司波雪光／「氷雪の美少女」司波深雪／「才媛麗人」藤林奏

「光彩妖精」光井ほのか

「音子使い」北山雫

「クイツク・ドロウ」森崎駿

「国立魔法大学付属第一高校初代恋愛博士」須田渉

くく学校の評価基準の壁くく

「天才エンジンニア」司波達也／「神道魔法の麒麟児」吉田幹比古／「超理論」久慈灘幽玄

「水晶眼の少女」柴田美月

「魔狼の末裔」狼谷一樹

「千葉の娘」千葉エリカ／「二科のマスコット」ミシエル・フィリオ

「鉄壁要塞」西城レオンハルト

くく超えられない壁くく

「クレイジー・デンジヤラス・ビューティ・スタンピード・オブ・バイオレンス」アーデ

ル・フォン・羅門

「だから、なんで放出系のところに振動系が入るんだよ！」

「文字数が同じ」

「文字数で判断しない！」

喫茶室の奥、定位置では森崎を囲むようにアーデル・フォン・羅門と狼谷一樹、千葉エリカ、ミシエル・フィリオ、西城レオンハルトが座っている。

怒られているのは羅門である。

「なー、この文法おかしくないか？」

レオはタブレットに表記された英文に苦しんでいた。

「おかしくない、THAT構文については翻訳機に別項で記載があるから読め。エリカ、そこはベルヌ条約だ」

「えー魔法に著作権あるのおかしくなくい」

エリカは倫理の科目で出ていた「著作権」について、誤った記載をしている。

「2011年に最高裁で判決出て、判例を元に2020年に著作権法に追加された」

「えーでもー」

森崎の指摘に不満の声。

「百家の魔法の中には特許以外に著作権で特例的に保護されてるモノもあるの！特に！千葉の剣術の伝書は著作権法における特例条項により保護期間が2120年まで延長されてるだろ！」

「えっ、そうなの」

森崎からの指摘で千葉の名前が出た。少し冷や汗を流すエリカ。

「お前、スクワット30回な」

厳しい視線を飛ばす森崎は、ペナルティを告げた。エリカはテーブルから少し離れてスクワットを始める。

周りの生徒からはくすくすと笑い声が漏れる。

「モーリー！出来た！」

「うー、計算式が違う！検算！」

ミシエルが元気よく、計算式を書かれたタブレットを見せると、森崎は数秒タブレットを見て次の指示を飛ばす。

「はい（＾O＾）／」

ミシエルは元気よく返事。

「なあ、ココア頼んでいいか？」

「人数分だ。ココア来るまでに1問解け」

脳にカロリーを送るべくココアを所望した狼谷に森崎は人数分の注文を促す。
賑やかな中で、転生者たちの情報端末に通知が来る。

送信者は【相馬新】

本文は無く件名だけ。

【周さんとお茶会のお誘い】

幕間：生徒会会長選

学校から少しだけ離れた喫茶店。

学内で出来ない話をするにはもってこいの場所である。

「私が生徒会会長選に立候補ですか」

中条あずさの声には驚きと心配がない交ぜになっていた。

正面の席には司波達也と司波深雪が座っている。

「現在の一科、二科の融和策を推進するには七草会長の薫陶を受けた中条先輩が最もふさわしいと思います」

黒髪の美少女、司波深雪の言葉は事実だ。

司波深雪は多少、若干、それなり、おおいに、兄への想いが強い少女ではあるが人間の善性については正直に評価する面もある。

だが中条あずさが生徒会の会長職に推されているのはそれだけではなかった。

「こういういった評価をするのは大変失礼かとは思いますが、中条先輩だけが四葉光夜を抑えることが唯一出来ます。その手腕を頼らせていただけじゃないでしょうか」

司波達也の言葉は、言葉通り大変申し訳ないと言った口調であった。

感情が希薄な人間の出来る最大限の感情表現でもあった。

四葉光夜は事実上校内の支配者であった。

高圧さは無いものの、七草真由美以上の華、十文字克人を超える威厳、渡辺摩利を凌駕する人心掌握。

すでにその知性、実績とも校内のNO.1である。

だが唯一にして、その四葉光夜が「懐いている」人物が中条あずさなのだ。

部活連の次期会頭が内定している服部は即座に「四葉光夜」用の窓口担当執行部員を作り（これは森崎駿と須田渉が指名される可能性が圧倒的に高い）、10月からの体制を着実に作り上げていた。

「あずささん、お昼どうですか」「俺から業者に連絡します」「あずささんはお弁当作ったりしないんですか」

時折四葉光夜から質問攻めにあうが、中条あずさとしてはあまり悪い気はしなかった。

多少なりとも恋の予感もしており、なんとも甘酸っぱい高校生活を楽しんでいた。

ふと光夜の顔が近づくと「睫毛長いなく」と的外れな感想も出て来る。

「ですけど、私は人をまとめたりするのが、得意ではないですし」

弱々しげに、どちらかというところ自分の気の弱さを卑下するような返事だった。

ちょうどその時、喫茶店のドアについたカウベルがガラガラと鳴る。

ふとその方向を横目で見た司波深雪には、森崎駿、千葉エリカ、西城レオンハルト、吉田幹比古、柴田美月、桐原武明、壬生沙耶香の7人である。

「なんだ中条、司波兄とデートか」

桐原のちよつとしたジョークは、司波深雪による空調効果を一段と強くした。桐原君、と壬生沙耶香が名前を呼びながら肘で脇腹を突く。

「生徒会選挙に向けての説得ですよ」

司波達也が妹の肩に手を置き、落ち着かせながら状況を一言で説明した。

7人は達也達のすぐ近くにある大きめのラウンドテーブルに着席し、説得に参加した。

参加と言うよりも、世間話の方が比重が大きい。

「私は入試が良かったので生徒会に所属しましたが、あまりその、人に対して、アレコレを言うのは得意ではないんです」

早口で少し俯きながら中条あずさは告げた。

「中条先輩。光夜の学内での評価って知ってますか？」

意地悪なような、少しだけ中条あずさを責めるような口調で千葉エリカは問うた。

エリカからしてみたら、中条あずさによる本人評が的外れであることが、少し苛立し

いところがある。

「え、光夜君ですか」

「そう、その光夜」

「えっと、入試主席で九校戦の優勝の立役者で、文武両道の優等生、ですか」

キツめなエリカの声に少し怯えて応える。

「違うのよ、中条さん」

ため息が交じりそうな、口調で説明を始めたのは壬生沙耶香である。

「四葉君は部活連の武道系、運動系の部活の勧誘に対して自分を負かしたら入部する条件を出したわ。そして彼はどの部活にも入ること無く生徒会に参加している」

補足をしたのは桐原である。

「言つとくが手を抜いたわけじゃない。どの部活も本気だった。木部主将や沢木といった実力者も10秒と持たなかった」

「それだけじゃないの、四葉君の論文はインデックス入りが確定しているらしいの」

壬生沙耶香の言葉にウンウンと頷くのは森崎だった。

彼は四葉光夜の部活の相棒として行動を共にすることが多いが、四葉光夜の才能が「魔法行使」だけでは無く、「魔法創作」にも長けていることを知っていた。

「光夜と達也と竜也と幽玄の魔法理論の話とか、ありや異次元だよな。俺100年勉

強しても理解できないかも」

「そこには同意するよ。四次元相違については立ち話するようなレベルじゃない」

レオのぼやきに同意する幹比古。

一科二科含めても1年生では最優の1人である幹比古が理解出来ないほどの最先端理論を立ち話する4人は、やはり高校生のレベルにはいない。

「使われる単語の定義が長いだけで、要点さえ掴めば幹比古でも立ち話が出来るさ」

「俺には無理ってことか」

達也のフォローに反応したのは幹比古では無く、レオだった。

トホホと肩を落とすレオの背中をバンバン叩きエリカは「あんたの学力だとね、はは」と笑う。

森崎はジト目でエリカを見て「お前の方が数学成績悪いだろ」と呟いた。

「四次元相違ですか」

中条あずさは息を呑んだ。

端的に言えばワームホールやワープホールという空間圧縮に関する超難問だ。

20年前に新ソ連の魔法研究の主たる課題で、もしその技術が確立されていけば、世界の地図は変わっただろう。

「四葉君は一人孤独の丘にいる王子様よ。その人が学校内を動き回る。凡才程度じゃそ

の佇まいで自信を無くすのよ」

まるで、その凡才は自分だと言わんばかり壬生沙耶香の言葉に中条あずさは再び息を呑む。

自虐するような淀んだ目を一瞬見せた壬生紗耶香に司波深雪も小さいながら共感した。

司波深雪から見ても、数カ月違いの兄達はその能力は群を抜いている。

いや双子の雪光や夜天の存在も考えれば、優等生と称えられる自分自身を非才の一人と思ってしまうほどだ。

竜也は幼い頃から、四葉の闇として暗躍し既に当主代理とも言える発言力を有している。その能力は達也に匹敵する破壊力と共に、深雪を凌駕する魔法師としての才能。誰もその立場に疑問を挟めない。

光夜も実戦魔法師としてはどの分家の魔法師よりも優秀だ。沖繩防衛の際には、その魔法で敵の軍艦を空中に浮かせ、上下逆さまにしていた。一族内、いや存命の魔法師では唯一竜也を凌ぐ天才なのだ。

雪光もその実力は劣るところが無い。トールス・シルバーのオフィシャルパートナー「スノーセブン」を設立し、CADの世界にも多大な影響力を持ち、また魔装大隊にも達也とともに「桐ヶ谷和人」特尉として参加している。

夜天の実力は、深雪は直接見たことが無いが伝え聞くところによると「肉体そのものを支配する」力とのことで、四葉の精神干渉魔法とも全く違う魔技とされている。竜也が今の地位に就く前は、血筋さえ問題なければ次の女帝として君臨するはずだった。

一族の若年者の中では最も落ち着き、大人びた光夜は本当に別格の一人だ。

学内で「氷雪姫」と異名を持つ深雪ですら、光夜の存在には数歩及ばない。

「そんな四葉君を、普通に扱える貴女は全校生徒に頼られてるわ」

落ち着いた、それでいて突き放すような複雑な感情で壬生紗耶香は中条あずさに、自分自身の重要性を説いた。

「中条、俺からも頼む。一科二科の問題、四葉の問題、それを解決なしえるのは一校だけでもお前だけだ」

桐原の言葉に司波深雪も続く。

「公約はただ一つでいいんです。一科二科の融和も一度棚上げにしてもいいんです。

【四葉光夜の面倒を見る】それを公約すれば、みんなが安心します」

そう言われた中条あずさは少し身を固くして考えてしまう。

その中で中条あずさ攻略の糸口を提示したのは森崎だった。

「会長選立候補したら、年末のCADコンペのビジネスデイに招待しますよ」

日本国内のCADメーカーの来年度を占うのが年末の「CADコンペ」だ。

俯いた中条あずさは恐るべき速さで、森崎の方を見る。

森崎としてはCADマニアとして有名な中条への効果のない餌として言ったに過ぎない。

だがその中条あずさの反応を見て司波達也が決定的な一言を告げる。

「中条先輩、トーラスシルバーのプレモデル興味ありませんか？」

5分後、中条あずさは会長選への出馬を決めた。



「ハックシユン」

光夜は珍しく声を上げてくしゃみをした。

傍にいた竜也が心配する。

「風邪か」

「いや、あずささんが俺の噂をした」

断言。一校に入学して以来、光夜の話す内容の半分は中条あずさのことだ。

内心で竜也は光夜が中条家への婿入りを狙っているのではないかと疑っている。

（お前が中条家に行ったら、俺が光井家に婿養子に行き難いではないか）

黒羽竜也こと四葉竜也は当主の座を達也か光夜、または雪光、深雪あたりに押し付け

ようと画策していた。

ウイスキー。ダブル。ロックで

「周公瑾か」

久慈灘は協力者としての周公瑾に初めて会ったようで、少し胡散臭げに見ていた。レストランからうって変わって今度は夜の新宿。中華飯店の一室だ。

高層階の店の窓から眼下に広がるのは新宿の街並み。

歌舞伎町周辺は100年前から変わらないの繁華街だ。客引き、風俗店も変わらずで、LEDの照らし出す路上の光景は映画のようであり、2095年の今でも「近未来」と言う単語を思い起こさせる。

雨が降ってはいないのでブレードランナーっぽくはない。あの映画は見ていないが。円卓に座る周公瑾と言われる長髪の美青年。白磁の肌に流れる黒髪。優しく微笑んだ顔は刀剣男子っぽい。

萬の家に何本かの日本刀があるが残念ながら顕現はしていなかった。

部屋の中には5人、周公瑾に相馬、黒羽、久慈灘、そして俺、萬真人だ。

「今回はどんなもんですか?」

相馬の口調は世間話だ。緊張のひとかけらもない。

この男、相馬新だか関重蔵だかと言う男は心底信用できない。

諜報員であり、転生者であり、俺の睨みだと殺し屋だ。それも生死観が崩れている。修羅場はいくつも経験したのだろう。

何と言うか、この「魔法科高校の劣等生」と言う世界でも異質なのだ。

四葉達や羅門達とも違うもつと深くてドロドロしておぞましく、暗い。そんな感じを俺は相馬新に見ている。

俺の印象を補強する証拠はこいつの隙だ。

恐ろしいことにこいつと学内で会うと動作の先が読める。

その読みと動作が異様に一致する。

武道家がどんな読み鋭くとも歩幅や体の向きまで読むことはできない。それが一致する。

まるで俺の「読むこと」が操られているようだ。

「いや、【影の中の男】でしたっけ？ 会うことは無かったんですが、どうやら国内に数十人規模でパラサイト？ を持ち込んだみたいです」

数十という言葉に一瞬だけ緊張が部屋を充満する。緊張と言うより「予想外」といった方が正しいか。

周は困った顔をして頭をかく。この人の責任じゃないが伝える人間としては、なんと

もなしに責任を感じてしまう。

ただ周の困った顔もすぐ収まり真剣な表情に変わる。

「一つ不思議なことが。密輸業者の紹介を求められました」

「具体的に」

久慈灘は短く話を促す。

「色々です。薬物、武器、動物、美術品。どうも目をくらます意図もあつたのでしょう。手広く接触しました」

群発戦争後、人や物の国家間の流入は簡単ではなくなつた。

海外からの輸入品には21世紀初頭に比べるとべらぼうな関税がかかり、日米安全保障など既に過去の遺物だ。

「あとはUSNA関係は？」

相馬が目の前の揚げ団子をつまみながら話を進める。

「そうですね、アジア系で流ちょうな英語をしゃべる男が二人。影の中の男の使者とか言っていましたね。態度を考えるにUSNAの関係者、それもCIA系の人物でしょう」

頭を抱えなくなった。

CIA。まるで映画だ。

映画の敵役で不動の1位。CIA。

正しくは中央情報局ではなく「Continent Intelligence Agency」となる。

北米大陸はすでに一つに統一され、アルファベットの意味も少し変わった。

「つまりは影の中の男は大漢だけではなくUSNAも取り込んだと」

久慈灘は腕を組み神妙な顔付きになる。

「正確には親大陸で反日本かつ強硬路線な情報系軍事組織とみるといいでしょう」

「つまりはタカ派か」

周の言葉に頷きまとめる久慈灘。

「国防系シンクタンクの一つ。太平洋地域情報分析センターというのがある。旧CIAの東アジア調査室が母体だったが、日本が魔法技術によって世界の軍事大国になったことで反日本閥が寄せ集まった集団だ。色々派閥の集合体なこともあり、人脈だけは広い」

黒羽が妙に詳しく説明してくる。

こいつの情報網はどれだけ広いのだ。

「そっかどっ？」

俺の言葉に肩をすくめる黒羽。

何ともなしにアメリカ人っぽい。司波達也の外見でアメリカ人風。声が中村悠一な
らキャプテン・アメリカだな。

「もういくつかあるが、さっと思いつくのはここです」

「あそこは実戦部隊はいないだろう。軍がCIA系からの直の命令で動くとは思え……
そうかパラサイトを増殖すれば一気に実戦部隊が手に入るか」

相馬の指摘しつつ、敵がパラサイトを持つことによる利点を説明した。

増殖する憑依情報体。情報体を確保するだけ、無辜の市民に憑依させ操ることが可能
だ。

戦闘能力だけで言えば対人戦は下手な魔法師よりも高い。と言うか大半の魔法師よ
り強い。

「在日米国市民の多い横浜で大規模騒乱。日本の治安維持が期待できない状態になれ
ば、USNAから軍事的介入、とはいかなくても第七艦隊の派遣は即時で議会承認され
るでしょう」

「そして、横浜沖から艦砲射撃」

相馬は俺に簡単に説明し、想定される一つの予想を黒羽が口にする。

「僕らはみんな生きていくよ」

相馬が裏声で一小節歌う。本人的には玉川紗貴子の物まねのようだ。口元がにやけ

ている。

攻殻機動隊のセカンドギグの米帝ミサイル発射にかけての歌だろう。

「セカンドギグより笑い男編の方が好きだ」

それに気づいて俺が話題を拾う。

「押井信者はいないだろうな」

久慈灘が苦い顔がでそれぞれの顔を見る。

「なんだ親を押井信者に殺されたか」

黒羽は興味なさそうに答える。

「スカイ・クローラに無駄金出した」

久慈灘はさらに苦い顔。

「いやー、スカイ・クローラについては押井信者でも擁護できる部分と出来ない部分だ」

「海外ロケやったのアバロンだっけか」

周と相馬が少しだけ会話すらす。

数秒の沈黙。

「パラサイトを尖兵に大亜連を呼び込み、USNAによる軍事的圧力をかける」

黒羽が敵の、いや影の中の男のスポンサーの動向を看破し

「群発戦争以上とはならないが、それでも万単位の死者の可能性はある」

久慈灘の捕捉する。両者とも声に苦いものがある。

「抑え込むにはパラサイトと大亜連の潜入部隊を潰すこと。出来れば論文コンペ前に」
「または論文コンペ当日に完膚なきまでに日本の魔法師で敵対勢力を黙らせる」

俺の提案に、黒羽が別の案を出す。

奴が言ったのは敵への牽制を含めた案。被害を出す可能性も高い案。

一瞬、俺と黒羽の視線が交わる。



高層階から離れてビルの外に出ると、小雨が降っていた。

相馬は電話が来たらしく周とまだ部屋に残っている。黒羽はさっさと通りの向こうへ歩いて行った。

大通りでもなく、ビルと飲食店の人一人分の小さな通り、汚れて狭くて誰も通らない。そこに滑り込んでいったと思うと数秒と立たず消えていた。

相馬も酷いが、黒羽の動向の気に食わない。

黒羽は、相馬と四葉光夜だけが「対等である」と態度で示している。

二周目だが何だか知らないが、裏番をはじめとした二科生を軽んじている様にも見える。

「先輩、別の店で飲み直しませんか」

「俺は高校生だ」

久慈灘が店を出てすぐに外で声をかけて来る。

多少のストレスのある会談だったので、憂さ晴らしの一つもしたいのだろう。

切れ長の目には先ほどの気難しさは無く、インテリ感あふれる美青年だ。

「高校生でも酒を出す店を知ってますよ」

「家が警察関係だ。勘弁してくれ」

「違法酒場なので大丈夫ですよ」

何が大丈夫なんだ。

10分後。

「よう」

「なんだ、来てたか」

狼谷が先に店にいた。

日頃の野性的な制服の着こなしとは全く違うスーツ姿だ。

新進の企業家と言っても通じるだろう。

「不良決定戦」などやっていたのでもう少し幼いかと思ったら、こちらの方が狼谷の本質なのだろうか。

新宿の具体的な場所は言えないが、西武新宿駅のあった公園から徒歩で4分ほど。

マンションの一室。中に入るとカウンターしかないバーだった。室内は木製品が多く、なんとも落ち着く。

「どうやってここを知ったんだ」

俺の質問に狼谷、久慈灘はニヤツと笑う。

「そりゃ、俺たちの中で一番の悪党に昔教えてもらったんですよ」

「違法」に関してはある人が一番だね」

ああ、相馬か。

工員、兵士の次に悪党ね。

「ウイスキー。ダブル。ロックで」

「銘柄は如何しましょう」

「適当に」

バーテンダーに流れるように注文をする久慈灘はカウンターで狼谷の左、つまりは俺の右にいる。

「先輩はどうします?」

狼谷は少し俺を試す様に聞いてくる。

違法な、いや二周目の大人たちに対しての態度を見ている様だ。

「キャプテン・モルガン、そこにあるプライベートで」

「飲み方は」とバーテン。

「ショットに」

前の時によく飲んだ銘柄があつて一応体裁を整えられた気がする。

「乾杯は何にする?」

「黒羽死ね」

狼谷の言葉に、久慈灘はわざと渋い顔を作り答える。

そこから久慈灘はバーテンダーにわからぬ隠語を使って狼谷に会談の中味を伝えた。

時折、黒羽や四葉光夜の話題を混ぜながら。

久慈灘はどうやら向こうの面々に強い対抗心がある。

久慈灘は一通り話すと手洗いへと立つ。

狼谷は一席空いた俺を見て来る。

「アイツ、前の人生で七草会長と半年間付き合つてたんですよ。七草会長の卒業とアイツの周辺環境が変わつて別れましたけど」

さらつと爆弾を言つて来た。

「じゃあ、未練でも」

狼谷は首を横にふる。若い高校生と言うより中年男性の様な重みを感じる。

「その後は一切男女の関係にはなつてないですよ。60年間。茶飲み友達から先には踏

み込まずね」

手元のウイスキーグラスを一気に煽る。

俺も残ったショットグラスのラムを飲む。

「俺はアイツの友達として雪光が七草会長をタラシこんでるのが嫌なんですよ」
指を鳴らしバーテンダーにもう一杯を求める狼谷。

俺も視線で同じものを注文する。

店のドアが開く音。違法な店でも客足は絶えないようだ。

「止めろ。無駄な話で、ここの七草真由美は俺の知ってる彼女じゃない」

戻ってきた久慈灘がつまらなそうに告げて席につく。

席に着き、今度は「スコッチ。適当で」と注文。

「ハードボイルドだな」

「たんなる天の邪鬼だよ」

俺の言葉に少しだけ微笑んで答える。

「別に雪光を弁護するわけじゃ……あんまり弁解する要素は無さそうね。中年まで初恋
症状抜けなかっただけだし」

店に入ってきたのは彼女だ。

藤林奏。黒のイブニングスーツ。女子高生とは思えないほどの大人っぽさ。

短い黒髪と、美しい瞳。男装の麗人の凛々しさとは違う柔らかい美しさが潜んでいる。

彼女の耳には先ほどの話が少し聞こえていたのだろう。

慣れた様子で俺たちの後ろを通り抜け奥のカウンター席で「サイドカー」と告げる。カクテルの名前だ。

俺は藤林を無視して二人の男子高校生に話をつづける。

「お前達はあつちの面々と違って十師族関係には巻き込まれなかったのか」

久慈灘と狼谷は顔を見合わせて笑う。

「こいつとフィリオはがつつりと。敵対してたしな」

「俺は自分の部下守っただけだ」

狼谷が久慈灘を指さすと、少し声を出し思い出が浮かんだのだろう。

「むこうはどうだか知りませんが、こっちは高校卒業してからが本番でしたよ」

そう言う久慈灘は狼谷ともう一度顔を合わせて笑う。

どれだけの事件があつたのだろう。二人の笑い方はただ楽しいというより、悪戯を思いつくような笑いでもあつた。

一歳年下の男の子、と言うには何ともシニカルかつ思い出深い笑顔だ。

「全部、四葉と九島が悪かつたがな」

狼谷の言葉に反応したのは奥の藤林だった。

「どう悪かったのよ」

怒りではなく、単純な好奇心のようで声は軽かった。

「光宣によるパラサイトの召喚。国内の外法使いの扇動。淡路島が一時的にノーマンズランド（無法地帯）にする」

狼谷は指折り数えて3つめで止めた。

それを聞いて藤林は頭を抱える。

「それだけ？」

「止めといた方がいい。光宣をぶん殴りたくなる」

久慈灘がグラスを挙げて合図をする。

それを言ったら戦争だろうが!

十文字克人の下校は一般生徒と変わらない。

十師族だからと言って車両での送り迎えは行っておらず、本人もその点については異議はない。

部活連は事実上服部刑部に会頭の座を引き継がれた。

あとは学校側への申請と関係各所の承認を得れば晴れて服部会頭の誕生である。

その打ち合わせもあり、下校は遅れた。少しだけ空は夜寄りだ。

同級生の女子（主に十二江）から「筋肉モリモリのマツチヨマン」と言われる通り

十文字克人は質量が詰まった肉体を持っていた。

元々筋肉の付きやすい体質だったのもあるが、戦場に立つことを求められる魔法師、

特に十師族の頭領の一人としては

魔法だけでなく、肉体でも優等である必要性を感じていた。

人を鼓舞し、先頭に立つべき必要な能力。

校門を出て少し坂を下るとまばらに歩く生徒たちの背中が見える。

みな部活や研究で下校が遅れた生徒たちだ。

「Pai、ご飯行きたい」

後ろから声かけてきたのはよく聞く声だ。

身長は一校女子でも一番大きいだろう。

十文字が比較対象として思いついた司波達也と同じか、少しこちらの女子の方が背が高いか。

振り返ると、長身の女子の顔を見て一つ息を吐く。

「なぜいつも俺なんだ」

「おっさん顔だからじゃない」

長身の女子の隣にいる七草真由美より小柄な一年女子がぶつきら棒に言った。

「ふけ顔だと食事を共にしなければいけない理由でもあるのか、羅門」

「金持つてんだろ、おごつてよ」

明け透け、というよりは露骨、直球な物言い。好かれる人間には好かれるが、嫌う人間には徹底的に嫌われる。

十文字克人はそれを嫌う人種でもある。

眉間にしわを寄せ、この顔つきの厳しい女子生徒と、天真爛漫を体現する長身女子に改めて一言言つてやろうと思つたときに三人目の女子が現れた。

正しくは自家用車で乗り付け、後部座席のドアを開けた瞬間だ。

「理由は一つ。貴方が十文字家の人間だからです」

「藤林」

(話の通じる奴が来たな) それが偽らざる十文字の気持であった。

藤林家の車は昨今の丸い小型モビリティとは違う、数名の人間が対面で座れるリムジンのタイプの高級車輜だ。

運転席と助手席には運転手と護衛と思われる女性と男性がいる。

「十文字先輩、どうぞ。ご自宅までお送りしながらたかられる理由を教えますよ」

藤林奏での言葉に一瞬思案をしたが「下手な考え休むに似たり」という言葉が浮かび十文字は「邪魔するぞ」と言つて車両に乗り込み、その後アーデルとミシエルも乗り込んだ。

「そこに飲み物はいってるから好きにね。お菓子が少し入ってるけど食べる?」

藤林の言葉にうなずきながら、ミシエルは備え付けの冷蔵庫から飲み物と食べ物を漁り、アーデルは少し欠伸をし「紅茶取つて」とミシエルにリクエストを伝える。

説明の始まらない状況に、十文字は腕を組み渋い顔をした。

「先輩、可愛い後輩女子に囲まれて帰れるんだから喜んでください」

「自分で可愛いと言うか」

「客観的評価を本人が言葉にしているだけです」

余裕の微笑みの藤林奏に慥然と返すが、さらに返される。

「pai、女子の見る目なさそう」とウシシシと楽しそうに笑うミシエル・フィリオ。

「何を言う、美的感覚に関しては一一般人並だ。それでなぜ十文字家が理由になる」

言い訳のように答えつつ理由に迫る。

藤林奏では手元にグラスを持ち炭酸飲料を入れ、一口飲む。

表情は変わらず、緊張などは見受けられない。

「大亜連、USNAの軍内の一部による日本侵攻作戦が画策されています。それに関係して、十師族の人間、特に人質になりうる若年者に警備がつくようになります」

十文字克人一人が息を飲んだ。

すぐ傍ではミシエルが「きのこ派？たけのこ派？どっちの方が美味しいかな」とアーデルにどのお菓子を食べるか聞いている。

「それをお前たちが担っている」と

「それを言ったら戦争だろうが！」

十文字克人とアーデル・フォン・羅門の声が被る。

気まずい沈黙。

藤林奏が咳払いを一つ。

「私は、たけのこ派。先輩、別に我々は誰かに頼まれて動いているわけじゃないんです。

七草前会長には雪光と達也がついていきます」

「俺は守られるほど弱いというのか」

腕を組み慥然とした表情の十文字克人に対して他の3名は、そんな十文字の態度を意に介さない。

「実戦経験ないでしょ。私ならそこらの魔法師なら3秒で殺せる」

口にお菓子を入れてアーデルが勝手に答える。

「アデイはホント、物騒。なのでpaiが実家に警備要員を出さないのなら後輩が警備しよう」と

「明朝には国防軍から護衛が出されると思います」

ミシエルも口にお菓子を放り込み屈託なく笑う。カナデはすました顔でもう一度ドリンクを飲む。

1人納得のいかない十文字克人は、三人の顔をじつと見る。

「藤林、お前は、お前たちはどこまで状況を把握している。その情報源はなんだ」

十文字からの質問への答えは簡単だった。

「私とアデイは人狼事件で知り合った公安関係者から、カナデは家関係。一番は四葉家の情報網に頼んでいるから」

ミシエル・フィリオは極力ありそうな嘘をついた。流石に転生者による事前知識によ

るものとは言えない。

ただ四葉家からの情報というのは正しい。

四葉夜天を頂点とした四葉の情報部隊の優秀さは国家レベルの諜報機関とほぼ同レベルだ。

そこに関重蔵からの国防関係の情報、どこからか持ってくる黒羽竜也の情報、獅子王院楠葉の古式周りの情報、フィリオの地脈調査によるサイオン分布の異変。

転生者による調査は、この島国の諜報機関以上の情報収集を可能にしている。

「そういうことです。十文字先輩、年齢らしく守られてみては」

藤林奏は落ち着いて諭すように十文字克人に言う。

「だが藤林、本来魔法師とはこういった戦争へ繋がる事態での活動を期待され、実際に期待に応えている。その中で、俺が十文字家次期当主たる責務を持つ俺が守られるというのは本末転倒だ。俺は戦いの場に立つべきなのだ」

論す藤林奏に反論ではなく正論をぶつける十文字は腕組みを解き、説得力のある顔で藤林を見る。

「お前たち1年の行動は、決して褒められたものではない。藤林、お前は九島の縁者として求められる役目があるだろう。だがその役目は年長者である我々3年生が担うべきだ。藤林、四葉光夜との会談の席をセッティングしてもらいたい」

十文字克人は事を中心に四葉がいると考え、その窓口になり得る四葉光夜との会談を藤林奏に求めた。

願いではなく、宣言に近い物言いだった。

学校の将来を担う1年生ではなく、卒業を控え学校から飛び立つ3年の仕事だと。

藤林奏はこの年長の子供の「リーダーごっこ」に嘆息する。

たかが十師族の次期頭領が動いたところで、指揮権や方針決定の権限が十文字克人の元に集約されることはないし発言権も付与されない。

(家の実力も本人の実力としておいてあげたいけど)

組織を動かすには金がかかる。

特に民間人である十師族が国防、公安などに働きかけるにはそれなりの寄付が必要となる。

その「金」については十文字家の資産ではこの規模の事件では足りない。

勿論首都防衛のお題目を言えば、国防軍も動くがそれは「建前」で押しているだけで実利が無いと動かない者たちからすれば「鬱陶しい正論だけで働かそうという正義の味方気取り」とみられる。

人を動かすには「建前」と「実利」が必要で十文字克人には後者を提示するだけの味方がない。

「壁しか出せないくせに偉そうに」

アーデル・フォン・羅門は吐き捨てるようにつぶやく。

十文字はその言葉で身動きが止まる。

フアランクスを主体とした強力な戦鬪者ではあるが事実それだけである。

「組織を動かすには億単位の金が必要。出せないでしょ。それなら小銭使って後輩に飯をおごれよ」

アーデルの脳裏には十文字克人の子供の乳母として苦労したミシエルと、何かにつけては「十師族の役目」しか言わない「頑固」な当主としての十文字の顔が浮かんでいた。

「あんたね、十文字家とか十師族とかお題目言うけど役立ってないよ。大金使う決定権ないでしょ。先輩だかフアランクス使いだか知らないけど、5秒あれば殺せるよ」

「アディー！」

責めるようなアーデルに対して名前でも強くいさめたのはミシエルだった。

この二人の前世、つまりは以前の世界では「十文字閥」の人間だ。

特にミシエルは十文字克人の子供の乳母として十文字家の血統を後世に残した。

そのミシエルの苦労を知っている羅門としては、この以前と変わらぬ「建前男」を凹ます意図もあった。

そして、実力として本当に5秒で十文字克人を殺すことも可能である。

転生者たちはチートと共に、前世の経験や知識、実力がそのまま引き継がれている。アーデルは前世での25年に及ぶ戦闘経験があり、その経験や実力は2095年の今ならば多くの魔法師たちと隔絶した実力と言える。

匹敵するのは転生者と、ごく一部の本物の魔法実力者だけだ。

そしてアーデルの認識では十文字克人は「本物の魔法実力者」には含まれていない。「そういうことです。十文字先輩」

言いたいことを言ってくれた、と藤林奏は内心留飲をさげた。

前世で九島の当主となった従兄が「十文字の石頭」と愚痴ていたことがあったからだ。十文字は眼をつむり小声で「わかった」と答えるのが精一杯である。

事実、資産を動かすには現当主である父の決定が必要であり、十文字克人が出来るのは提案までだ。

ここでの会話は十文字克人の負けである。

数分の沈黙。車の走行音だけが流れる。

車が急停車する。

助手席の男性護衛が「前方で渋滞です。火災も見えます。ルートを変えて、このまま吉祥寺の国防軍の施設に向かいます」

後部座席の面々に伝える。

「なにが起きた」

十文字克人は誰に聞くでもなく呟く。

それに答えたのはアーデルだった。

「単なる前哨戦。殺し合いのスタート」

アーデルの頬や首筋には青白く光る紋様が浮かんだ。

L a b · t e d u G · v a u d a n

「ちいー」

十文字家の代名詞。フアラランクスの光沢ある障壁は四足獣に躲される。

4分前の護衛による吉祥寺への進路変更から、事態は急変した。

車内から外部を見るにはモニターに映る外部カメラの映像か、後方の小窓から外を除くしかない。

十文字の放ったフアラリンクス（と言ってもこの場合は射出型の障壁に近い）は精度も悪く、四足獣にあたることはない。

魔法の命中精度には視覚は重要な要素だ。

渋滞と火災の原因は4体の四足獣であった。

外見は大型犬なのか、ライオンなのか虎なのか判別がつかない。

車列の先方からまっすぐに第一高校の部活連前会頭の乗る車両に肉薄してきた。

涎も垂らさず、吠えもせず、低くうなり声だけ。

体表は膨張した筋肉が皮膚を突き破り骨格の変容も激しい。血はすでに凝固し、体表にへばりついている。

目立つのは巨大化した牙と爪。

路上に残る小型モビリティ（と言っても優に500kgはあるが）は四足獣に押され脇にズレたり、横転するものもある。

（なんだ！あの馬力は！）

十文字は迫りくる4頭の四足獣に息を飲む。

通常の対魔法師戦闘とは違う、動物（？）との戦闘は今まで培ったノウハウをどう使っているか選択肢が浮かばない。

「あれは?!」

十文字は落ち着いた三人に聞いた。

一人焦る自分と比較しても、彼女たちの態度は驚くほどだ。

藤林奏では何事もないようにグラスの中味を飲み干し、グラスをケースに戻す。

ミシエル・フィリオは「おく」とまるで動物園に来た子供のように四足獣を見ている。

1人戦闘態勢に入っているのはアーデル・フォン・羅門だけだ。

「La b・t e d u G・v a u d a n」パラサイトを憑依させた四足獣の通称」

アーデルの身体には細かい紋様が浮かび上がる。

青白く光る紋様はアーデルを並の男性より遥かに強靱にする。

握力170kg、ベンチプレスは400kgを超える。

アーデルの言葉通り十文字を5秒で殺せる状態だ。

運転手はすでに、車列から抜け時速80kmを超えて住宅街の車道を走っている。

周辺には法定速度を超えて走る自家用車に驚く人と、禍々しい赤黒い四足獣に恐怖し叫び声をあげる人の2パターンだ。

助手席の窓から上半身を出した護衛は小型の連射性のあるライフルを撃つが、一頭に1発、2発当たるが怯む様子はない。

獣の動きは脊椎動物の運動能力を大きく離れ、まさに魔獣と言っても良い動きであった。

「パラサイト？あのパラサイトか？」

十文字の確認は、確認と言うより混乱に近い。それが混乱に聞こえないのは落ち着いた声のおかげでもある。

「そのパラサイト」

ぶつきら棒にそう答えてアーデルは自分の近くのドアを開ける。

「すぐ閉めてよ」

フィリオが風圧でばたつく髪を押さえる。

「おいーらも」

十文字がアーデルの突然の行動に驚きの声をあげるが、アーデルは気のもせず、車両の外へ踊りだす。

時速80kmで車外に飛び出て無事には…済んだ。

まるでスケートリンクで滑り出したフィギュアスケーターのようにアーデルは地面を両足で滑る。

1秒間、アスファルト上のスケートをしたアーデルはスカートの下で見えぬ足にさらなる魔法を行使した。

四足獣へ逆走し、一気に間合いを詰める。まずは手近な前足の肥大化した一頭。

アーデルは拳に想子を集中させる。

彼女が習い覚えた術では「fam」という技術である。

「らあー」

声とともにいきなりの反撃に一瞬体をこわばらせた獣が頭部を思いつきり殴られる。

50kg程度のアーデルが高速で近づき一撃を与える。その衝撃は乗用車の突撃と変わらない。

魔法により加重と硬質化された一撃は確実に四足獣の行動能力を奪った。

薄手の制服を透けて見えるアーデルの紋様はさらに強く発光し、彼女のスタイルの良さを異様に際立たせている。

残された3頭は速度を緩め、アーデルを囲むように歩を進める。

『かかつてきな！畜生共！』

アーデルは肉体の外側に想子で作った人型の力場を纏い、東欧の古い言語で獣たちを威圧する。

最大出力ではないがこの人型の力場の状態がアーデルの戦闘状態である。

対魔法師用高速弾でも致命傷は与えられない。

拳銃用弾丸では力場は貫通せず、最大出力であれば12.7mmの徹甲弾さえ容易に防ぎきる。

広範囲の魔法さえ、相当の干渉力がない限りはこの状態のアーデルを毒すことはできない。

少なくとも前世で司波深雪の無差別コーキウトスを防いだ実績もある。

3頭はその姿のアーデルに押されやや距離を取り、低い声で唸り睨み続けるしかない。

「おい！止めろ！」

車を止めさせて援護に向かおうとする十文字に対して反抗するように車は加速をする。

すでに車内のモニターに映るアーデルは小さい。

怒りと少しの焦燥を漂わせた十文字に対して手櫛で髪を直したフィリオが「Pai、援軍来たよ」笑顔を見せ窓の外を指さす。

遠吠えだ。

「狼谷か！」

目まぐるしい状況変化に十文字克人は思考がまとまらない。

（どういうことだ！二科生はどうなっている！十師族以外のルートでどの程度国防、いや魔法師たちの暗部へアクセスしている？いや、狼谷はあの事件から見れば東欧系の血筋ということは「黒い森」に）

狼谷への言及を脳内でした瞬間に車の横を逆走する巨大な影を見た。

狼谷一樹の狼形態には二種類ある。

純粋な四足歩行の狼と、二足歩行による「人狼」の二種類である。

今、車の横を通り過ぎたのは四足歩行の狼である。

その外観はまさに巨大な狼である。

前世では「美輪明宏の声じゃない」と突っ込まれたことがあるが、体毛の色は白ではなく濃紺に近い色であり「ガンメタリック」と自称したら「プラモ用の塗料か」とこれも突っ込まれた。

巨軀が向かう先は3頭の獣と睨みあるアーデルではなく、アーデルの睨む先にいる情

報次元に潜む。パラサイトである。

狼谷の嗅覚はパラサイトの存在をかき取り、そして牙はそれを噛み殺すことが出来る。

『くたばれ!』

暴れまわるアーデルはすでに2頭目を行動不能、つまりは頭を潰したところだった。

彼女への攻撃は力場を貫通させることなく、傷を負わずにはいたっていない。

狼谷はアーデルの横を通り過ぎ、近くで横転している小型モビリティを踏み台に高く飛ぶ。

そして中空に浮く、パラサイトの見えぬ喉笛に食らいつく。

情報次元では小さく波紋が広がる。情報次元レベルでの死だ。

その後は作業となった。

意識を共有するパラサイトは一つの情報次元体の死で動きが止まる。

残り2頭の獣も、まるで動揺するように2歩ほどよろめいた。

そこに獣よりも暴虐な少女の形をした小さな嵐が近づき頭を潰す。

肉体を捨てさせられたパラサイトが中空に浮くと、物理世界から干渉する牙により消滅を余儀なくされた。

狼谷到着から3分で戦闘は終結した。

「wooo」

低く唸る。アーデルに「俺は戻るぞ」と唸り声で伝えたと狼谷は背を向け走り出す。「お腹減った」

アーデルはお腹を抑え十文字に何をおごらせるか思案を始めた。



「十文字先輩、実戦の経験は」

吉祥寺の国防軍オフィスまであと数分の車内では藤林奏が十文字克人に言葉を投げた。

言葉としては試す意味合いがある。

「正直に言つて魔法師同士による戦闘経験は数えるほどしかない」

表情には動揺は出ないが、その言葉は自分の力量不足を痛感している。

魔法師との戦闘も十全な準備と支援、情報を揃えたモノで突発的な戦闘や、偶発的な戦いというモノとは無縁でもあった。

「今回の感想は」

「感想も何も、想像を大きく超えるものだ」

再度の奏の質問に、絞り出した声。

十文字克人は、例えば一条将暉や沢木碧等との戦闘では遅れを取る事はないし、勝つ

だけの自信もあった。

しかし四足獣の存在はあまりにも非現実的であり彼の常識と自信に少くない衝撃を与えていた。

「当面の間はこの襲撃に準ずることが起きる可能性があります。護衛をつけられては」それは提案ではなく、指示や命令の類いのものである。

この2歳年下の少女の方が十文字克人よりさも、荒事に動じていない。

「俺だけではないな。学校側にも警備の増強を進言しよう。勿論全国の各校に」

学校を話題に盛り込むことで十文字は自分の立場を再度確認した。自分は十師族で魔法師を守る立場でもあると。

それを高校生の強がりとして藤林奏は受け取り、ミシエルはかつての主人の成長の兆しとして喜んだ。

千葉エリカと壬生先輩

「奴らの狙いは何だ！」

夜の渋谷。

人通りの少ない住宅街と繁華街の境目。

黒羽竜也は司波雪光と並行して走り続けている。

移動魔法を使い常人以上の速度で走る。

住宅街の窓の明かりは遠く、繁華街の明かりは赤、青、緑と多種多様だ。

「なんだって、パラサイトでしょ」

「ああ、そうだったな！」

独り言を律儀に返す桐ヶ谷和人特尉に怒鳴り半分でさらに返す。

黒羽竜也はこの状況よりも登場人物に対して苛立ちがある。

状況は二人の予想を超え始めていた。

パラサイトを保有するのは黒羽竜也が睨んだ通り太平洋情報センターであったが、問題はパラサイトの存在を内密に処理するため、スターズが日本に派遣されたのだ。

それも数名ではない。2小隊+ α 。つまりは20名以上の「一流の実戦魔法師」であ

る。

「国防総省」による太平洋情報センターへの制裁といった面もある。

情報センターの行為は独断専行かつUSNAの軍事行動に楔を入れる行為である。

比較的友好的な関係を結んでいる日本での非公式の軍事行動。

実行能力を持たぬシンクタンクが行った愚行は小さくない衝撃をホワイトハウスに与えていた。

正体不明の人物による疑似ブラックホール実験を支援し、研究所の人員を危険にさらした。

その後USNA国内では研究所のあったジャクソンビルでは行方不明者数が前年の200%を超えた。

USNA大使館からは暗に「我々で離反者は始末する」を匂わせる接触が外務省にあつた。

「こちら、キリト。不動と同行して現場に向かっている」

雪光は情報端末へ報告。

不動、黒羽竜也（こと四葉竜也）の軍事行動中のコードネームだ。

司波達也が「大黒竜也」と名乗るので、大黒天ことシヴァ神がその起源とも言われる

「不動明王」から取った「不動達也」として行動している。

雪光からは「ベタだ！」と爆笑されたが「どうした、イキリト」と竜也は意地悪な笑顔で返した。

「桐ヶ谷和人」というコードネームもどうかと思う、というのが夜天、光夜、竜也の感想だ。

川原礫は2010年代の日本のポップカルチャーを代表する小説家の一人でもある。情報端末の先には、品川に居を構える警察署の会議室を占拠してつくられた前線基地。

この件の主体は「外務省外事部」である。

20人を超えるUSNA国籍職員の受け入れについては、関税関係の会議を先送りし日本の通商関係を有利にすることで黙認をした。

監視のため不動達也と桐ヶ谷和人の両特尉が魔装大隊から派遣され監視に任務にあっていた。

そして突然の戦闘発生の一報。

場所は品川再開発地域。

攻撃目標になるような高層ビル群はなりを潜め、今や低層ビルやショッピングモール、そしてリニアメトロなどを要する近代都市の手本の一つだ。

そこに「仮面をつけた赤毛の女が率いる数人が一人の男を追っている」と言う情報が

もたらされた。

「…リーナいるかな」

「言うな！」

「ほのかちゃんとはどうするんだよ」

「言うな！」

「不動特尉、意外と優柔不断」

「言うな！」

間もなく外事部の車との合流地点だ。

黒のワンボックスカーが二人に向かって減速しつつ近づいてくる。

魔装大隊の偽装車両だ。



昼には十文字克人を狙う襲撃があった。

そして夜にはこれである。

今、転生者たちは後手に回っている。

何となく、ほぼ確実に影の中の男が「論文コンペ」合わせで何かを起こすことを転生

者たちは感じていた。

既知未来知識で「論文コンペ」に時期を合わせてくるだろうと漠然と、しかし確実に

時期を感じ取っているが尻尾が掴めない。

USNAのCIAが絡んでいるならば大亜連とは違った形で工作員の隠匿手段を保有しているだろうし、パラサイトの管理については影の中の男が十二分に行っているはずである。

そう感じるのは相馬新襲撃におけるパラサイトのコントロールを見ての判断である。

四葉の情報網や関重蔵の人脈、黒羽竜也によるフリズスキャルヴによる検索でも、USNAが一枚岩ではないことは確認しているが、今二つ確信できる情報にたどり着けない。

どこで、どのくらいの規模で、事件を起こすのか。

そして直近の問題は「関重蔵Ⅱ相馬新」という情報が幾つかの情報機関で確認されたのだ。

関重蔵が「諜報員」と言う情報までは出ていない。

だが「相馬新」という名前で一校に所属しているという未確認情報が国内外で出回った。

相当望遠で撮ったのかぼやけた写真も添付されている。

小さい情報だが国家機関に背景が不透明な人物。十師族とは違う特異な立ち位置。

波紋としては極小で数日で別の情報に飲み込まれるかもしれない。

「こちら大黒。現場に到着した。指示は？」

移動する車内で黒羽竜也のヘッドセットには司波達也の声がする。

101旅団 魔装大隊所属 大黒竜也特尉

司波達也は軍名をつける際に珍しく冗談めかして「竜也」と名乗るようにした。

真夜は軍名で二人名前が交換されることに「達也が私の息子で、竜也が深夜の息子になつちやうのね」と親馬鹿的に喜んでいた。

その言葉の「達也」と「竜也」を入れ替えた言葉を深夜も言っている。

「状況は」

「USNAのエージェントと思わしき、7名…いや8名が5名の民間人風の魔法師と戦闘をしている。装備は不明だが服装は都市迷彩になっている」

竜也の質問に達也は答える。まだ精霊の眼を使ってはいない。

「あれは…エリカだ。千葉エリカと壬生沙耶香だ」

達也は視覚に捉えた二人の少女を報告する。



（二人は買い物帰りか）

ウルフグレイカラーのジャケット姿で司波達也はバイクに跨ったまま、少し離れたところから状況を注視していた。

2 階建ての立体駐車場。

モビリティではなく自家用車向けの駐車場は地下よりも地上での複数階建てが一般的なとなっている。

(直線距離は300m。危機管理上で危険地帯に近寄らないのが常套だが)

千葉エリカも壬生紗耶香も荷物はさほど多くない。せいぜい片手にシヨッピングバッグがある程度だ。

千葉エリカが戦闘音に気付く。壬生紗耶香と二言三言話す。二人とも真剣な顔をして戦闘音の方向へ走り出す。

走りながらも千葉エリカは腰の後ろに手を回し、武装型CADを取り出す。特殊警棒を模したCAD。

壬生もたすき掛けにしていたボディバックからリストバンド型のCADを取り出し装着する。

服装を言えば千葉エリカは袖の長いTシャツにひざ丈のデニムスカート、スニーカー。

壬生紗耶香は紺のワンピースにデニムのジャケット、ヒールの低いミュール。

(全くあのじゃじゃ馬が)

司波達也は戦闘音に対して真剣ながら笑みをたたえたエリカの横顔が思い出された。「エリカと壬生先輩が戦闘への介入しようとしている。こちらで静止する」

それだけ情報端末に言って司波達也はバイクを飛ばす。

後ろに司波深雪を乗せない時はやや荒っぽい運転となる。

二人の美少女剣士が現場に到着する直前で出会うことが出来た。

だが立场上、正体を明かすわけにはいかない。

建物の影にバイクを止め、そのまま武装型CADを二人に照準し撃発動する。

波の合成。

複数の波長の違うサイオン波による三半規管へのダメージ。

変数調整というハイテクニックを使うが、目標が動き回る実戦ではあまり使えない。

2秒後二人はその場に膝を着ける。

壬生紗耶香は千葉エリカの腕をつかみ、よろけるまま近くのビルの入り口まで避難する。

不意打ちからの避難。

状況に対して冷静に行動しているのは壬生の方だった。

千葉エリカは入口の近くのベンチの影に隠されており、まだ立ち上がることが出来ない

い。

「こちら大黒。民間人二人の行動は制限した」

その言葉を合図に少し先の商業施設で爆発。

USNAスターズとパラサイトの戦域が拡大し始めたのだ。



「大黒！こちらは俺が対応する！あの、え、仮面の奴を追ってくれ！」

竜也はリーナの名前が頭に浮かんだが、無理やりそれを言い換えた。

（あーくそーなんなんだ！くそ国防総省め！リーナを日本に派遣しやがって！カノーブスの奴どうにかしろよ！）

かつての義妹であり妻の姿を聞いて竜也は混乱をUSNA国防省への怒りに変換した。

現在のアンジェリーナ・クドウ・シールズの立場を考えれば、原作同様にスターズの総隊長である。

それも魔法師関連の殺し屋扱いを受けているという想像も難くない。

自分の義妹の扱いの悪さに勝手に怒りを覚えているのだ。

USNAの孤児院については7歳でネットワークを介し、無記名の通報で早々に潰した。

栄養失調で死んだ少女はこの世にいない。

少なくとも今現在、この世界に存在する黒羽竜也を名乗る人物は概ね平和かつ前世であつた心に刺さる小さな棘もなくなり、淡い恋心を持つて光井ほのかとの距離を詰めようとしていた。

だが、これである。

(どいつもどいつも！)

上手くないかないことへのいら立ちを影の中の男に全てぶつけようと固く誓った瞬間である。

爆発の直後、パラサイトが二手に分かれた。一つは品川から渋谷方面。もう一方は品川からさらに南下を始めた。

司波達也からは「仮面をつけた魔法師が南下したパラサイトを追つていった」の報告に大声で端末越しに言葉を返したのが先ほどの竜也だ。

「不動特尉！」

「この場で下ろしてくれ！俺と桐ヶ谷特尉で追う！」

運転手が状況を察して指示を仰ぐように竜也の軍名を呼び、即座にこの場から追跡及び迎撃を伝える。

「不動特尉、今なら何分持つ？」

「戦闘を考えると5分ほどだ」

車を降りながら雪光は竜也に聞いた。

聞かれながらも竜也は知覚魔法を実施。

視界と言うより脳内に展開された広域グリッドに人型かつ高速で移動する集団を感じ取った。

「ここから3kmの地点だついでいい」

移動魔法を展開し、道路を走り出す。「はいはい」と気の抜けた返事をし雪光も後を追う。

竜也は接敵までの時間を考えると移動魔法、それも高速を維持するためのサイオン消費も抑えられそうだと考えた。

さてと

さてと。

俺は市ヶ谷の官舎に戻れず、情報部提供の相馬新君こと関重蔵氏の現在住所で寝起きを余儀なくされている。

関が相馬で相馬が関で。どっちも俺なんだけどね！（やけくそ）

ネット回線も限定され、記録も残る。

つまりはエッチな動画が見れない！と言っても今はそんなことをしている場合ではない。

今、関重蔵はそこそこのピンチになっている。

ピンチ！ピンチ！スーパーピンチ！

現実逃避はやめよう。

先程迄、カナデと霞はリビングのメインとサブの二つのモニターを使い、ネットゲームをやっていた。

二人とも午前2時までネット越しにカチューシャとアーデルとミシエルと奈波ちゃんと楠葉で何やらミッションをしていたらしい。

女子会だ。

時折「うちの旦那も」とカナデと霞が爆笑していたのは、何やら笑いの種にされた感じがしてちよつと寂しい。

既に午前4時。

俺は二人がモニターを占有している間に今晚起きた竜也とか達也とかキリト君とかが接触したUSNAの動きを考えていた。

つていうかき、竜也とかタツヤとかキリトとかめんどくさい軍名つけやがって。

光夜はわかり易く「中条」としか名乗っていない。あいつ絶対婿入りを狙ってやがる。リビングではカナデと霞が雑魚寝している。

緩いホットパンツにTシャツ姿の美女二人。

薄着の美女と美少女がスピースピー鼻息立てて寝ている姿は健全な青少年の目の毒だ。

俺は中年なのでノーカウント。あ、見えた、白だ。

二人の嫁は仲良くなつており、残されたのは俺の中の罪悪感だけだ。

嫁同士が仲良しなのは良いことなので良しとしよう。

この数日での行動は不透明かつ状況を混沌とさせている。

「魔法科高校の劣等生」

あまりこの題名を言いたくはないが、俺が既知未来として認識している世界線は大きく当初のストーリーから外れている。

来訪者編を迎える前に、パラサイトが横浜騒乱編に登場するからだ。

そう言えばアニメシリーズの2期はやったのだろうか。

状況を整理しよう。

・パラサイトは結構な数がある。Gと同じで一人いたら20人はいると思え。
・USNAの馬鹿なシンクタンクが影の中の男に取り込まれた。シンクタンクは馬鹿なのか？バカなの？

・金髪おつちよこちよい日笠陽子声と映画版にいた日本刀おじさんが来日

・パラサイトを使った今世紀最高のイケメン相馬新への襲撃

・十文字襲撃。ワンワン(うちの姪っ子は狼谷に会うところ呼んでいた)が活躍。アー

デル無双。コーエーテクモ。

・品川あたりでUSNA軍と吸血鬼ことヴァンパイアことファンガイア族ことパラサイトの喧嘩。

・剣術小町と「キリト君！」先輩が巻き込まれる。

・今世紀最高のイケメン相馬新が、激モテ渋め中年の関重蔵だとバレる

・村井大佐が情報工作で苦勞。禿る。

・「1週間ばかり寝込んで」の命令

・周公瑾ことワタナベケンゴさんの情報で国内各情報部が動き出す

・対。パラサイトについて四葉からの情報提供があり、光夜つながりで101旅団が戦力として参戦

・四葉の遊撃隊として転生者がある程度自由に動ける。一年二科生チームがブーブー言っている。

手元のコップには半分のコーヒー。

どうも考えがまとまらない。

ここまでで導き出されるのは計画性の無さだ。

まず、戦力の逐次投入。十文字襲撃にジェボードンの獣が4匹。あまりにも戦力不足だ。

アーデルやミシエルがいなくても十文字家のフランクスならごり押し、力押しで何とかなんとか死なずには済むだろう。

でも十文字は戦闘素人だからなく、まあそれでも既知未来知識と九校戦の動きを総合してみると生存確率は9割くらいだ。

俺に対する襲撃も確実性がない。

最後適当にナイフを投げずに拳銃で二、三発頭に打ち込んでいけばあいつの勝ちだつ

た。

何ともたらだらと襲撃を仕掛けられた気分だ。

あの男の情報もついでに整理しよう。

長い付き合いであるが、俺はどの程度あの男を知っている？

・年齢は現時点で27才。出身は滋賀。

・中卒

・魔法とは違う『魔術』を使用する。空中浮遊、念力、エネルギー弾、空間転移 e t

c

・「古都内乱」まで知っている

・カナデの時はその実力は戦闘面で発揮された

・霞の時は空間転移による逃亡に手を焼いた

・空間転移はカチューシャの親父さんに頼めば、いや今は高村マリアが対応できる：

はず

・戦闘面についてはまあこれだけの戦力だ負けることはない

あれ、意外と知らない。

本名も出生のアレコレも調べたがそこが重要ではない。

あの男が何に固執して、どういった動機があるのか。

そこにはこの世界をライトノベルとして捉えるあの男の認識というか精神性が関係しているのだろう。

「主人公は僕だ」と言ったような言動を察するにあの男はこの世界を「転生先で自由にしたい世界」と認識していた。

それは間違いない。

だが、この世界、つまり2周目以降の世界でも同じようなことを起こすのだろうか？ 勝ち筋があるのか？ それとも新たなチートがあるのだろうか。

コーヒを一気に飲む。

あいつと俺の違いは？

能力、年齢、生まれた時代と場所。色々あるが最大の理由は・・・家庭環境なのだろう。

この世界に生まれ、「魔法科高校の世界だ！」と言って精神病院入り。家庭環境も良くなかった。

まるで異常者を隠す様に育てられ外界との接触もほぼなかった。

特殊な知識と閉じた家庭環境。結局は精神が歪む。

状況が安直だなくと思うがやはり生育環境は重要だ。

そう考えると狼谷が真つすぐ育つたのは奇跡的だな。なんだよ「狼の試練」とか幼児

虐待じゃねえか。

タツちゃんは…大変だったみたいだが30代での光井ほのかとの不倫騒動は身から出た錆だろう。まあUSNAの指導者候補の家庭内不和を起こせたのだから合成写真の手間も無駄じゃなかった。

嫁に内緒で毎年光井さんにクリスマスカード送ってたらね。ダメじゃん。

結局はあの男は生育環境による人格面による執着が問題…でもないな。

影の男は人生をまつとうしてない。30手前で俺たちに殺されてお終いだ。

あいつ、RPGで言うところの序盤繰り返し返し人生だ。いやその自覚は無いだろう。

あいつの知識はだいたいピアンカと会って幽霊城をクリアしたくらいで止まっている。

つまりは毒消し草持っていばらの鞭とブーメランが最強なのだ。

この先のチェーンクロスもパパスの剣の存在も知らない。

※比喩

非常に限定された中で限定された情報の上に今の戦略を立てている。

だがこちらは違う。

「世界最強の経営者」四葉光夜。

「天才エンジニア」司波雪光。

「最強海兵」黒城兵介。

「電子世界の指揮者」関奏。

「戦う経済実践者」川村エカテリーナ。

「魔狼王」狼谷一樹。

「次元の支配者」久慈灘幽玄。

「鮮血の乳母」ミシエル・フィリオ。

「戦場の魔女」アーデル・フォン・羅門。

後輩連中まで含めたら世界に名を響かせた人間は両手の指じやたらない。

「鮮血の乳母」って笑い話に聞こえるけど、十文字の子供守るために籠城した上、敵兵の死体を操って「不死の軍団」まで作るようなことをしたのだ。笑えない二つ名だ。

あいつは俺たちと知識と経験に大きな違いがある。転生者の行いに対しての結果を知らない。

カナデの時には2年の2学期。霞の時は3年の終わり。結局はあの男は世界の一期間でしか派手に行動をしていない。

どういうことか。流浪の子供↓奴隷↓魔物使い↓結婚(俺、ピアノカ派)↓国王↓石像↓国王の長い長い物語を知らない。

つまりは「序盤」があいつにとっての全てなのだ。

最強魔法はバキ。メラ。それで勝負をしようとする。

違うのだ。見ている世界の奥行きが。

あの男はきつと、いや確実にリセットボタンを押した後だと思っている。

だが俺たちは違う。あの男を殺してもこの先四葉の解体や新ソ連とのアレコレ。中南米での事件。東西EUでの大問題。

世界規模の事件や問題が山積しているのだ。

つまりどういうことか。

あいつは「魔法科高校の劣等生」世界としてこの世界を見ている。それも古都内乱まで。

つまり原作に対しての転生者としての思考が読めればあいつの行動は読める。

もつと言えば複数回の転生をした俺であればあいつの知っていること、知らないことのある程度推測が付く。

そこを踏まえて改めてあいつの知っている、または現状を考えると

・パラサイトの一団を保有

・CIAと大亜連の協力

・前世を邪魔した相馬新は関重蔵というダブルネームなのを知っている

・なぜか、自分を邪魔するキャラクターがいる

・そしてあいつは転生者を重要視していない。なぜなら「十二江」も「萬」もいるのにノータツチだからだ。

あいつは新しい状況を試している。それも無計画に。

取り敢えず俺を襲い、取り敢えず十文字を襲う。

きつとあいつは「次がある」と思っている。ここで死んでも次がある。そしてこの世界で数百人単位での犠牲を出し続ける。

転生を祝福だと思っているのかもしれない。リセットして再スタート。

なんだかな〜「タイムリープ」と言っても限度があるだろ。

さて質問。

1、魔法科高校の劣等生世界に転生

2、知識は古都内乱まで

3、司波達也に「横浜騒乱」でちよっかいをかけるのが目的（あくまで俺ではなく司波達也）

4、手駒はそれなり

5、お楽しみは後に取っておくタイプ

6、死んでもやり直しがきく（と思っている）

この条件下で騒乱編の当日までやることは？

俺なら司波達也にプレッシャーをかけるため側にいる重要人物を襲う。

例えば千葉エリカ、西城レオンハルト、吉田幹比古、柴田美月。

だがそれでは横浜騒乱が盛り上がらない。横浜で動く遊撃隊をパラサイトで圧倒して楽しみたい。

ジョーカーたる俺を襲った。

3年生の重要人物十文字克人も襲った。

次は？

そこそこ強くて、横浜騒乱の前振りに脱落させるのに適当な人物。

この人物がやられて話が盛り上がりつつ、謎の敵の実力を知らしめることが出来る。

誰だ？

モーリーが適当じゃないか？ いや、モーリーには悪いが実力、知名度、盛り上がりから見て無し。

誰だ、誰が適当…。

いたよ。いたじゃん。実力があって、九校戦で話題に出て司波達也と勝負した人物。

架空読者に敵のパロメーターとして見せるにピッタリな人物。

一条将輝だ。

説明してよ！

「説明してよー！」

司波達也と黒羽竜也が並ぶとどちらかわかりづらい、というクレームもあり黒羽竜也は時折整髪剤を使い、前髪を弄りオールバックにして登校することがある。例えば今日だ。

人のいない放課後の教室。

千葉エリカは渋谷での一件を司波達也と黒羽竜也に聞くべく呼び出していた。

呼び出された両名は落ち着いた顔を見せているが考えていることは若干違った。

（エリカが千葉家の人間を使いこの件に介入するとなると余計な被害が出る。それに加えて、エリカはあれで勘が鋭い。俺の四葉での立ち位置をあて推量で引き当てる可能性もあるな）

（達也が睨んで終わらせてくれないだろうか）

横目で達也を見た竜也は、一つため息をつく達也と目が合った。

（どうするつもりだ竜也）

（早く、エリカ！とか言って恫喝してくれないか）

この二人、同じ顔をしているが昔から今ひとつ意思の疎通が上手くいっていない。

というのも竜也は「達也の思考を推察できる」という意識がどこかにある。前々世での小説としてのこの世界を知っていることが原因である。

それ以上に、四葉竜也ことタツヤ・クドウ・シールズはやはり司波達也に対してどこか一線を引いているということも遠因だろう。

「あれは、偶然」

「偶然なわけではない。サーヤと見たあれは確実に魔法師で、それも凄腕よ。それがあんなにサツと引いたんだよ。達也君の個人的な能力以上に、何か引く理由があつたはずよ」

(無駄に勘が鋭い)

達也と竜也の意見が珍しく一致した瞬間だった。

「体形や装備から見て軍属。それも国内じゃない」

ブツブツと思考し始めるエリカ。

達也はやや危ないと思ひ始めた。

(エリカはこのままだと正解に近づくな)

彼女が司波と黒羽が十師族、それも四葉の関係者として連想するのは時間の問題かもしれない。

「竜也君、貴方もあの場にいたでしょ」

「いた、だがそれについてお前に話すことはできない」

「なんでよ、何か秘密が、秘密、十師族とかじゃ、でもそれを隠すような家は……」

「エリカ!」

(やつと言った)

司波達也の叱責を思わせる声に千葉エリカは一瞬体を震わせる。

それは緊張と恐怖の表れだ。

「竜也の秘密を探るのは止めるんだ」

(この野郎)

司波達也は竜也をダシに話の先を自分から外した。

視線だけ達也に向けた竜也はポーカーフェイスのまま、内心苦虫をかみつぶしたような気持ちになった。

「エリカ。言っておこう。君の推測は当たっている。だが口に出すのはオススメしない」

四葉竜也は、既に16才にして四葉のアルコレが面倒になっていた。

七草弘一は父親で、四葉真夜は母親。

認知はされていないが、内密に年に一度は家族が揃う。

まったく嬉しくも感慨もないが前世よりは幾分ましという状況である。

「母よー」と泣きながら家の玄関先で騒ぎ立てる四葉真夜はいない。

タツヤ・クドウ・シールズが地元警察にピザの注文のように気軽に電話するのに時間はかからなかった。

今は光井ほのかの同級生として堂々と振る舞える。

お目付役の北山雫には時折ブロックされるが、それでも光井ほのかの好意が心地よい。

リーナの来日問題もあるが、千葉エリカの相手まで押し付けられて、同じ顔の従兄弟に恨み言の一つも言いたくなる。

「俺がどこの誰か、それを口に出すと学内で矛盾が生まれる。そこには触れてはだめだ」学内に四葉は一人。四葉光夜だけ。

だが、そこにもう一人四葉の人間がいた場合、四葉を名乗る光夜の存在が浮く。つまりは謎と矛盾。

十師族の闇。殺し屋魔法師集団。触れてはならぬもの。

それが四葉である。

三人の間に沈黙が流れる。

教室の扉が開く。

殺し屋集団の一族、十師族の闇、触れてはならぬものである四葉光夜が現れた。

エリカの眼には日頃のポーカーフェイスが一変し、恐ろしく冷徹な表情に見える。本当は殺人者ではないのか？ そう思わせる冷徹さだ。

「達也、竜也、四葉から招集だ。行くぞ」

光夜はエリカに気にすることなく達也と竜也に声をかける。

その言葉に達也も竜也も全く同じ頭を抱えるポーズをする。

(これだから光夜は……)

怯えを交えた真剣な眼差しと頭を抱えた双子の様な二人。そしてこの状況をあまり理解していない光夜だけの教室は

何とも言えぬ妙な空気だけを残した。

一条将輝

「はあはあ」

大きく呼吸を繰り返す一条将輝は、久々の実践訓練で身体を苛めていた。

先週。

9月の第一週に十師族内に「パラサイトの上陸」「大亜連の工作員」の話題が上がり、義勇兵を募る方向に雰囲気に向いている。

佐渡での戦闘経験がある将輝自身、求められれば十師族としての責務を果たすべく義勇兵参加を希望していた。

父親からは「今度はそうはなるまい。国防軍も積極的に動いている様だ」と話され、佐渡防衛とは違い蚊帳の外に置かれた気がしないでもなかった。

「どうした？バテたか」

「馬鹿を言え。このくらいでちようどいい」

さほど呼吸が乱れていない兵介が声をかけて来る。

将輝も強がって言葉を返す。

運動場のランニング用コースには呼吸を乱す三校生たちが疲れに負けて寝転がって

いる。

少し後ろには吉祥寺真紅郎が疲れの為寝転がり大きく早い呼吸をし、時折「つ…か…と…た」と呟く。

有志による訓練は最後のハイポート（ライフル持ったままのランニング）も終わり、兵介と将輝を除く各人はよろよろライフルと同じ重量に型抜きされたラバーボードを持ち上げ校舎へ戻っていく。

体力面で言えば三校N.O. 1は黒城兵介。

一条将輝も入学当初は体力気力とも一年生ではN.O. 1と自負あったが、実際に入學すると黒城兵介が居りその自信は早々に崩された。

だがそれで腐るような男ではなかった。

身体を鍛え直し、学問に勤め、学内自治にも参与した。

結果「最強は黒城兵介、最高は一条将輝」と呼ばれるほどの1年生となった。

「ジョージ、起きろよ」

「ま…や…き…」

今にも死にそうな真紅郎はラバーボードを力なく兵介に投げつけつつ、差し出された将輝の手を握った。

一般男子生徒と比べる吉祥寺真紅郎の体力は並だ。

無論一条将輝の参謀としては格闘戦や魔法戦などでは非凡ならざる部分を見せるが、いかせん持久力という点についてはまだまだである。

「復帰してすぐに実践訓練なんてやるから」

しようもない奴だと言わんばかりの笑顔で真紅郎を起こす将輝。

九校戦モノリスコード新人戦では三人とも活躍したが、吉祥寺真紅郎がマッチアップした相手が悪かった。

四葉光夜は仁王立ちのまま真紅郎の魔法を悉くキャンセルし続けた。

必殺の不可視の魔弾も、それを発展させた不可視の散弾、隠し玉として準備した「荷重砲撃」も一切通用しなかった。

ちなみに「荷重砲撃」は兵介からのアイデアを具体化したもので、魔法大全（インデックス）への登録も予定されている。

荷重砲撃は視界範囲内の任意点から数mの重力子を活性化し通常の数倍〜数十倍の重力を対象に与える魔法だ。

「重力子プラス」の活性化は理論的には証明したが（真紅郎自身が）、そこから発展した「不可視の魔弾」に続く

カーディナルコードを利用した純粹な攻撃魔法である。

自信作を容易に潰され、真紅郎は動揺したところを四葉光夜の行った「雷電」と名付

けられた魔法で気絶してしまった。

その後夏休み期間中は秋に向けての研究の再開により、まともな運動は今日が久々だ。

「体が鈍ったままだと健康に悪いからね」

立ち上がった真紅郎。

身長で言うと3人中で最も低い。

低いと言つても高校1年生の平均身長と比べると若干程度の低さで、高1で180cm近い一条将輝と180cmを越える黒城兵介が育ちすぎとも言える。

「今週末には金沢基地で訓練会があるらしいがどうする？」

「パス。そろそろ論文の装置が来るから調整始めないと」

兵介がラバーボードを玩びながら今週末の予定を言うと、真紅郎は「もう勘弁」といった表情で週末の予定を伝える。

「まったく、高校生活しながら義勇兵参加も楽しやないな」

将輝はその端整な顔立ちに疲労の影を見せた。

就学時間を除くと一条将輝の1日は想像以上に忙しい。

父の十師族として役割の名代。

地元の国防軍基地で行われるミーティングへの出席。

意見表明する機会は少ないが一条の次期頭領が参加することで、ミーティングへの参加率は上がる。

この辺りの人間心理については将輝自身あまりわかっていない。

「必要な人間を会議に出席させるには、より重要な人物が出席すれば出て来ざるえない」とは父剛毅の言葉だ。

父は父で京都の魔法師協会本部に顔を出したり、横浜の関東支部に行ったりと移動距離なら将輝の何倍も動いている。

「親父の名代と言ってもな」

今はまだメツセンジャー程度だがこれから先を考えると、国防軍との顔繋ぎは重要な仕事だ。

「まあ国防軍と上手くやれば金沢は安心だろ」

あつけらかなと考え無しのように将暉の言葉に返したのは兵介だ。

前世では国防海軍海兵大隊を指揮した男はこの辺りの「顔繋ぎ」を思いの外重視していた。

なんやかんで前線視察に来た四葉光夜、後方支援として西日本の治安維持政策に尽力した九島光宣こと桜井光宣。

逆に関東防衛を重視して関東圏から離れない十文字、陰謀毎には余念のない七草。

前線で体を張った兵介としては現場レベルで話の通じる光夜や光宣は非常に助かった。

反面、十文字や七草は安全圏での策動というイメージが抜けない。

「光夜、もう少し丁寧にやれよ」と光夜の魔法行使後に文句を言った事もある。

上陸予定の海岸線に仕掛けられた地雷を全て連鎖的に爆発させたときは、白く美しい砂浜が焦げて、景観が台無しになった。

「分隊長、あの四葉と知り合いなんですね」と恐る恐る聞かれた事もあった。

兵介の知る前世の将輝は四葉の動向に振り回され、十文字の頑固に苦労していた。

一条の頭領としての苦労を感じながら薄く笑う何とも渋い男になった。多少額が広くなつたが。

「それよりも委員会どうするんだ」

学内組織の掛け持ちが多い将輝としての悩みの種は父親の名代による学内組織の会議の欠席が多いことである。

兵介の言葉に将輝は苦い顔をした。それは次の言葉を言う為のちよつとした罪悪感である。

「代わりに頼む」

整った顔立ちに、スポーツマンとした身なり、家柄、学力、魔法師としての実績と実

力。

一条将輝という少年は「息抜き」「ちよつとした手抜き」といったものとは無縁の人生だったせいもあり、こういった人にモノを頼む際には今二つ苦手だったりする。

「ええ、昼飯3回」

「高すぎじゃない」

「女子から将輝がどこにいるか聞かれて、失望されるの俺だよ。悪くないのに」

兵介の要求に真紅郎が異議を唱えるがその対価の真意を聞くと真紅郎は頷いた。

将輝は校舎に向かいながら兵介に「そのうち払う」と言わんばかりに手を振る。

この後は三年生と論文コンペティションの警備に参加について話をする予定だった。

夕刻の校舎には部活や委員会活動、自己の研究で残る者。

それなりの人数が残っていた。

夕陽は校舎を朱に染める。

三人のいる第二運動場から少し離れた第二研究棟から声が出た。

最初は女生徒が実験で驚いたか、はしやいだかと思われた。

だが叫び声の次には誰かを呼ぶ声、そしてまた叫び声。

そして一人の悲鳴から連鎖し、二人、五人、十人と驚愕と恐怖の声が広がっていく。

「なんだ!」

複数、それも助けを求めるような叫び声。最初気付いたのは兵介。

「将輝！兵介！職員室でCADを取ってこよう！」

次に声を出して行動を示したのは真紅郎だった。

三校の歴史に残るパラサイト襲撃事件である。



「クソ！」

（最悪だ！）

声に出した短い悪態と同義を心の中でも呟く。

既に状況は黒城兵介の想定以上になっていた。

パラサイトの強襲。

これは昨晚、いや今日の未明に関重蔵から伝えられたことで対応方法を検討し始めたところだ。

学校の距離的に近い高村マリアに情報次元での防衛術式を知る古式魔法師紹介してもらおうこと。

もう一つは司波雪光の秘密道具を貸出してもらおうこと。

雪光の方は今朝連絡を入れ、昼には「夜には持つてく」とのことだった。

すでにパラサイトに憑依された女生徒は研究棟を暴れ尽くした。

霊子を吸われ昏倒した生徒は二桁にのぼる。

兵介の目の前では真紅郎の不可視の魔弾をその大量の想子で防ぎ、将輝から照準を外すように校内を走り回る。

女生徒の生命活動を止め、パラサイトを情報次元に追い出すのは容易だ。

しかし、その姿を認識し止めを刺す手段が兵介には無い。

正しくはそれを行う装備が無い。

憑依された女生徒は狙いをつけさせないように左右に体を振り真紅郎に肉薄する。

「下がれ！」

障壁を展開し、女生徒と真紅郎の間を分断する。

だが、相手はパラサイトだ。

障壁を切り裂くといった真似が可能なのだ。

兵介は腕を伸ばして、真紅郎の上着を捕まえ後方に投げる。

「うわっ！」

真紅郎は数メートルは投げられる。

「兵介！お前も距離を！」

パラサイトの詳細な能力や習性を、知らない将輝は拳銃型CADを向け牽制する。

「将輝！弾をちらして牽制！」

兵介は後にジリジリと下がる。

将輝の発するCADからの想子の波動を感じつつ、障壁のキャンセルのタイミングを見計らう。

女生徒は唸り声を上げ、展開した障壁を叩く、叩く。

障壁越しでも彼女の体格以上の圧力を感じる。

「一条君！」

廊下の後方から二人の生徒が来た。一人は風紀委員。もう一人は生徒会だ。

「先輩！妖魔です！」

一条将輝の判断は速かった。

生徒会所属の男子生徒は九州から県外留学生で神道、それも高千穂の流れを汲んでい
る。

「退魔でも、破魔でなんでもいいです！何か対応を！」

そう言われた男子生徒は「お、おう」と驚きながらも低く静に言葉を紡ぎ出す。

後の事情聴取の際に判明するが、男子生徒の家で伝えられる神楽の際に使われる祝詞で「神に舞いを舞うことを伝え、破魔を祈る」という主旨のモノである。

10秒、20秒と時間が流れると女生徒は障壁を叩くのを止めて、手近な窓から飛び出す。

将輝は女生徒に向かってサイオン弾を数発撃ち込むが、女生徒はそれを払い落とし、学校の敷地から抜け出す。

「クソ！警察と国防軍に連絡を！至急に！」

一条将輝の言葉は即座に実行され、5分とたたず警察と救急が到着し10分後には金沢基地から魔法師中隊と数名の分析官が到着した。

その後一条剛毅も到着。

「今、非常線が張られた。将輝、辛いだろがお前も手伝え。真紅郎、黒城くん、二人も頼む」

そう伝えた。

広域の警戒は48時間続き、168時間後にはその警戒網は解かれた。
意識不明の生徒は18名。

一条家は正式にパラサイト探索の任を十師族会へと願い出た。

そして、金沢には一条剛毅を中心に調査隊を結成。

他の十師族との連携のための名代として一条将輝を東京に派遣した。

副官として吉祥寺真紅郎。

護衛として黒城兵介。

三人は一時的に一校に学び舎を移した。

あ、不遇の次男

「この会議の目的は何ですか？」

「十師族より若手魔法師たちを独立して行動させたい、という要望がありその顔合せが目的だ」

「それ、俺いますか？」

市ヶ谷から少し離れた池袋のビルの一室。

高層ビル群の中では比較的低めだが敷地は広く、V字型のビルである。

軍服姿の風間さんと一校制服姿の俺が並んで歩く。

三校の襲撃事件から3日。

十師族は早急にカードを切ってきた。

つまりは組織間の連携に対して、ちよつとした建前を利用して遊撃隊を結成したのだ。

「実力が保証された若年の魔法師による遊撃隊」というヤツだ。

一条が提案して、四葉と九島が賛成でもしたのだろう。

十師族も日本国内の担当地域の防衛をせねばならん状況で遊撃隊を組むのは、「国防

を担う集団としてのアピール」「十師族内での戦功争いの機会の配分」と言ったところか。

状況は俺の手を離れつつある。

今までは「周公瑾」の件と四葉、九島（藤林）との縁から俺が若手の魔法師こと転生者たちの監視役として行動をしていたが、今は三校襲撃による十師族による正式（公的）で無いのが（ミソ）な組織間での提案と折衝となった。

外務省外事部、公安、国防軍の三者による水面下での搜索、対応を実施する段階だったが、ここで十師族が介入することで「組織であつて組織で無い」不思議な団体「十師族」が主導権を握ろうと動いてくる。

十文字の件までは「国防軍からの護衛派遣」として主導権を保持していたが今は違う。対パラサイトのノウハウや対応が出来る魔法師の確保はすでに十師族に握られていると考えるとよい。

この国の魔法師戦力はやはり十師族という大きな流れに掌握されているのだ。

影の男の思惑とは別に政治的思惑がまわりついてくる。

廊下を進んで会議室に到着する。

部屋の出入り口には兵士が二名直立不動だ。

風間さんと俺に敬礼すると会議室の扉が開いた。

部屋の中には口の字型に組まれた机の三辺に座る10名とホワイトボード近くの座席に着座している書記役の藤林少尉。

そして4名の護衛役の軍人が部屋の四隅付近に立っている。

「遅れて申し訳ない。国防軍101旅団魔装大隊少佐の風間晴信であります」

議長席のように準備された椅子に腰かける風間さん。

俺はその横の席に着席する。

知っている顔と知らない顔がいる。

「本日の顔合せの進行を務めます国防軍魔装大隊の藤林です。すでに面識のある方もいらっしゃると思いますが、面識のない方のため、こちらでお名前をお呼びいたします。敬称を略しますことご容赦ください」

「一条家の一条将輝」

出たー！クリムゾン・プリンス！

軽くうなずくだけだ。疲労の為か目の下にクマが出来ている。

「三矢家の三矢元治」

あ、三矢家の次期当主だ。20代半ばで鍛えられた身体はスーツ姿でもよくわかる。

三矢家は兵器ブローカーを職業としているが、本質的には戦闘用魔法師集団でもある。

「五輪家の五輪鳴門」

知ってる。略。

「七草家の七草孝次郎」

ぼさぼさの髪。優男だがどうも着ているスーツが浮いている。まあ普段は研究施設で研究三昧なのは有名だ。

「八代家の八代隆雷」

「こちらも20代半ば？後半と言ったところだろうか。行動的な眉に、人を射抜くようなまなざし。」

「九島家の九島蒼司」

あ、不遇の次男。

「十文字家の十文字克人」

「なぜお前が!？」という驚きの視線を投げて来る。

「一校の吉田幹比古」

「なぜお前が！（略）」

「一校の司波達也」

あの無表情で俺の方を見ずにただただ虚空を見ている。

まあ考えることは予想がつく。「厄介なことに巻き込まれた。CAD弄りたい」あたり

だろう。

「風間少佐の横にいるのが」

「君らの面倒を見ることになりそうな関重蔵。情報部支援課第二班所属。少佐。好きなものはシュークリーム」

最後に藤林少尉の説明を引き受けて、テーブルに肘をつき顎を乗せ、不満げに各人の顔を見回す。

風間さんは察しがいいな、と言いたげな眼で俺を見る。

「本件、パラサイト事件については我々国防軍としては各省庁と連携し大亜連、USNAの一部軍事組織が関係していると考えられます。この状況の中で十師族の中から高い実力を持つ各家の方々と、オブザーバーとして吉田家の御次男、また一校でも屈指の実力者を迎えての少数精鋭の遊撃隊を組織されること。我々国防軍としての最大の支援として、情報部少佐の関重蔵を遊撃隊の顧問として送りだしたいと考えています」
偉くなるとこういった腹芸が上手くなる。

本来であれば重要戦力の司波達也をこの無益な遊撃隊に取られて一喝したいところだろう。

この仕事は村井さんを通してきた話だ。

国防軍としてはこれだけの戦力を「塩漬け」にしたいのだ。

戦力の有効利用を考えるなら各家の得意な分野に割り振る。

情報なら七草、軍部との折衝なら三矢や五輪、現場は一条や十文字と言ったように。だが十師族はひとまとめに「遊撃隊」を結成し送り込んできた。

この国防軍の意図を無視する無駄な遊撃隊を「国防軍に押し付け横から戦功を奪う気満々」なのだ。

十師族は各地域の防衛で戦力は出さないし、対パラサイト用の魔法師は貸し出しを渋る。

反面、功績づくりに若手十師族はぶっこんで来る。

舐められているのだ。国防軍は。

そういった相手に見張りをつけて適当にあめ玉しゃぶらす役割。

支援班の腕の見せどころでもある。

「最初に言っておくが、この遊撃隊には各所からの期待が多分に寄せられている。それ以上に存在に對して疑問符が付けられていることを承知してもらいたい。君らの行動は常に誰かに評価される。それが本件の解決に関わる関わらずでだ」

さて、一校の制服を着た16、7歳に見える少年からこういった言い方をされての反応はどうだ。

俺の予想では三矢と八代辺りは多少食いつく。

七草は：まあ無視だろうな。研究肌の奴は期待とか評価とかは自分の研究以外では無頓着だ。

一条はさらに緊張するし、十文字はそれが十師族の責務とか考えるだろう。

鳴門の奴は「柄にもない言い方を」と内心笑っているだろう。

幹比古は「どういうことだ？アラタのはずが!？」と驚きが続行。

達也は「十師族だけでなく国防軍の各派閥が十師族の若手の実力を見極めようとする。この遊撃隊での功績如何では次世代の十師族の国防軍の窓口、つまりは軍事面での協力すべき十師族が判明する」と考えているのだろう。

お前の内心のセリフは長い。

「ご説明いただき恐縮だが、関少佐。いや本当に軍人か」

三矢の若いのがなんとも嫌な、上から目線かつこちらを小馬鹿にするような笑いを浮かべている。

わかるよ、わかる。高校生が軍人の隣で大人ぶったこといったら怪しいよね。わかるわ。

「残念ながら若作りのでね。ちよつとした理由でこの制服を拝借している。今回の遊撃隊では相談役だ。指揮官ではない。だが、君たちの持つ情報網や実働部隊に関してはある程度把握しておきたいと考えている。差支えなければ伺っても？」

「五輪は僕だけ」

最初に声を出したのは鳴門だ。

こいつ前世の最盛期能力を引き継いでいるなら九重八雲を超える忍術使いである。

いや忍術使いと言うか「甲賀流忍術 五輪派初代総帥」という肩書で十人の弟子を内閣情報局に送り込んでいた。

五輪濤の戦略級魔法師引退で軍部との関係が希薄になる直前に、鳴門は政府との関係を軍より上位にある内閣に誼を作った。

あの年代では一番の出世頭だ。

「一条は人員はほほいいない。俺と三校からの協力者が二人。直接戦闘では役立つが情報面では協力を願いたい」

疲れた顔に申し訳なき。一条は禿るな。

「人員の話はいい。本件遊撃隊の指揮権や情報網の共有についてはどのようなようにお考えか」

若い二人の発言を台無しにするように八代が声をあげる。一瞬三矢と十文字に視線を投げたので、八代がこの場で意識しているのはこの二家だ。

七草は除外ね。七草次男も会話の推移を静かに見ているだけだ。寝てないよな？

「その情報網を構築するための戦力確認だ。続けてもよろしいか？八代家の陣容は？」

俺は回答しつつ八代に言葉を返す。

八代は不機嫌な様子も見せない。この辺りの腹芸ごっこは、そこでデカイ諏訪部順一声よりも出来るようだ。流石社会人。

「こちらは首都圏の八代関係者と連携する予定だ。直接的な戦闘が可能な義勇兵との知己がいる」

翻訳すると「情報収集も戦闘もそこそこやるよ」だ。お前んとこの関係者って地域開発局の奴ら？

八代は沖縄・九州の守護ということもあり環境関係の省庁や、沖縄を縄張りにもつ環省の地域開発局に絡んでいる。

直接戦力は「沖縄戦」で投入した子飼いの魔法師だろう。

「八代家には期待しているよ。沖縄では大亜連との一件もあるしな」
そう言ったのは三矢家だ。

おうおうおう、そこで火花を散らすな、若造共。

少しだけ空気がピリツとする。これだから十師族は。

「七草、九島、十文字、三矢の四家は？」

水を残りに向けてみた。

「一応若手代表としてこの場にいるけど、僕はこの手の事が苦手な情報は回るようにし

ておくから後はよろしく」

七草の言葉に三矢と八代は微妙な顔し、十文字と一条は口をつぐむ。漫画みたいな研究以外興味のない奴もいたもんだ。

「十文字は情報面、戦闘両面で協力する」

咳ばらいをして、場の空気を変えようと頑張るじゆうもんじさんじゆうはっさい。

「九島は関西方面の防備を強化するため、人員は回せない。ただ、分家の藤林家の前面協力はお願いしている。そちらの藤林少尉とその妹さんが情報面でバックアップしてくれる、はずだ」

九島真言によく似た細面の優男はすまなさそうに藤林少尉を見る。

当の藤林少尉は微笑みを浮かべるだけで言葉は発しない。

この場合は「ええ、わかっていきます」か「初めて聞きました。シット！」のどちらかだ。

表情で読めない場合は肩と視線と指先を見る。

視線の揺れ、指先の不審な動き、肩に出る緊張、それらで判断する。

視線と指先は意識すればコントロール出来るが、肩というのは見る者が見れば結構感情がわかる。

あ、少し背筋が伸びて緊張した。

こりや、はじめて聞いた口だな。

「では九島家は情報収集面では実働は藤林、連絡担当として運用するということですか？」
「ええ、概ねは。戦闘面では関西の守りもあるのでどの程度人を出せるか不透明ですが、民間の古式魔法師のご紹介は可能です」

まあ、九島らしい提案だ。戦力を出さない代わりに古式魔法師のカードを晒す。

本体戦力を温存しつつ、別戦力を紹介するで自分の重要性を主張する。

やらしー。この入れ知恵は親父か爺様だろう。

言葉の意味を理解したのは：俺と鳴門と風間さんくらいか？

九島は戦功は放棄したが貢献だけ狙ってきやがった。

八代と三矢は九島の次男坊の発言に口元が少しだけ緩んだようだ。

「こいつは脱落だな」と思っている様だが、あの爺様たちの助言を曲解せずに伝えるだけ合格点だ。

「三矢は基本的に戦闘面での支援になる」

少しだけ胸を張る。馬鹿か。このゲームの勝者は今のところ九島だ。

手駒の被害を出さずに結果だけ攫って行きやがった。

お前のところは手駒の魔法師が減るだけだ。

「では、こちらからの提案だ。情報収集については八代、九島をメインに。直接戦闘での

連絡のため七草には伝達役を。戦闘における基本戦力は一条と三矢、十文字。五輪は独立で動いてもらおう」

視線を鳴門に送る。俺の視線に釣られ皆鳴門へと視線を向ける。

「この態で言わせてもらおうが子供が役に立つとは思えないな。大人しく邪魔にならない所でブラブラしててもらおう」

俺は左手の小指と薬指を少し絡ませつつ宣言する。

大昔に決めた符帳だ。意味は「自由にやれ」だ。

この場で俺は後ろ盾にならない宣言をし突き放した。

鳴門としては下手にの遊撃隊に組み込まれるよりこつちの方が動きやすいだろう。

「基本はこれだが、八代には予備戦力の準備。九島はその吉田家の次男と協議してパラサイト向けの魔法師の選定。あー、司波達也はご足労いただいて悪いが、役不足だな、いや、この場合は役者不足かな」

司波達也くん、俺の意図はわかったかな。横を向き風間さんに目配せ。

周りからは提案の承認というか、意見を求めるように見えるが魔装大隊の大黒特尉を隊に返却したのだ。

「九校戦での活躍は間近で見ていたが、この場では役に立つ部分はないな」

うわー深雪ちゃん聞かれたら俺死んでるね。

五輪以上に役立たずという宣言だ。

頼むからこの場のことを深雪ちゃんに伝えるなよ！ふりじゃなくて、マジだからな！
氷の彫像になんかなりたくないぞ！

「異議は」

俺の言葉に三矢、八代は頷く。まあ初手から妥当な落としどころだろう。

八代辺りは七草を抱き込んで情報を三矢に回さない様するだろう。

戦闘現場に遅れを理由に予備戦力を先行投入して戦功を奪う。

まあやる気のない七草には連絡役で適当な人員を動かしてもらおう。

一応役割を与えたので七草ホニヤララからは文句も出まい。

「遅れた」

ああああああああ、はい、俺の仕事は無駄になりました。

無駄です！時間を無駄にしました！最初から来いよ！

光夜は室内を睥睨する。

動揺しないのは俺、司波達也だけだ。鳴門でさえ息を飲む。

「四葉光夜だ」

光夜の瞳で睥睨されると大抵の、あ的一条剛毅でさえ言葉を失う。

さらに言うとうと機嫌が悪い。

三校の襲撃は各魔法科高校内に臨時に警察から警備を呼び込むこととなった。

わかり易く言うと、その辺りの生徒会と学校側、警察との調整で中条あずさと最近同じ時間を過ごせていないのだ。

こいつはこいつで四葉関係者として、非公式の会合に参加する事があり時間を無駄にしている。

そこに来て、これだ。

今の時代で一番転生をエンジョイしている光夜だが、そのエンジョイを邪魔する者には非常に厳しい。

この間も「国防軍には高卒と大卒でどう待遇が変わる？」と聞いてきた。

完全に横浜騒乱で物事にけじめをつけて楽しい学生生活をエンジョイする気満々だ。

学生結婚とか狙ってるんじゃないか？

「四葉は遊撃隊に参加しない。反対は？」

「十師族の連携をけ．．．い．．．．．しする．．．．」

会議室に一步踏み込んだ光夜に反論する三矢だが、光夜に睨まれ声が少しずつ小さくなる。

「十師族で群れる前に国防軍と連携を取れ。防人を自負するなら、国防の担い手に協力しろ」

異議なし！閉廷！

誰も光夜の言葉に反論が出来ない。

バツサリだ。額に手を当て頭を抱えるのは司波達也。わかるよ、わかる。

そこそこの腹の内の読み合いでそれなりの「研修」になったはずだが、こいつのおかげで話が終わった。

この遊撃隊構想を実現するために十師族が行った国防軍への横やりが全部無駄になった。

きつと司波達也も十文字に何かしら圧力をかけられこの場にいるのだ。

「風間少佐」

光夜に呼びかけられ、風間さんが席から立つ。

多少なりとも緊張があったのだろう。又は光夜のカリスマ性か。

「四葉光夜の名にかけて、四葉家が収集した本件に関わる情報は国防軍と共有させていただきます。窓口は藤林少尉でよろしいか」

今度は藤林少尉の顔色が少し白くなった。

現代ではまだ光夜と藤林少尉は接点がない。

極東の魔王である四葉真夜と同じ姓を持つ、神秘性と神話的威圧感を漂わす少年に余裕の塊である藤林少尉も緊張の色は隠せない。

この四葉光夜はただの光夜ではない。世界のエネルギー問題に司波達也、司波雪光、タツヤ・クドウ・シールズと共に取り組み、ついには人類の月での生活を実現させた「世界のカリスマ」である。

腕つききとはいえ、国防軍の一軍人が対面して気おされないわけがない。

「それでよろしいか」

「ああ、それで構わない」

風間さんもうなずくのがいつぱいだ。

光夜は風間さんの承諾を確認すると室内にいる若手十師族にもう一度言う。

「情報収集は七草、四葉で行う。各家は戦力を供出。預かりは101旅団とする。24時間以内に人員リストを提出。九島は古式魔法師について仲介できる名簿を提出しろ。十文字家は首都防衛として警察省に協議を持って。鳴門、お前は東京の別邸にでもいろ。達也、幹比古、帰るぞ」

ばっさり。

だがこれで十師族は四葉光夜の説得により戦力としてカウントが出来る。

対パラサイト戦力として国内の古式魔法師が使える。つまりは国防軍の軍人がパラサイト化することを防げるかもしれない。

味方が即座に敵になる。これほどやりづらいものはない。

光夜に言われて幹比古は驚きながら、司波達也は大きなため息をつきつつ部屋を出る。

俺は残った十師族たちに向かって次の言葉を言つて会議を終わらせる。

「光夜の相手するには10年若かつたな」

無理解の世界

「ソファ数多くないっすか？」

「注文数は4個だしな」

2009年でも業務の一部は人間による車両配送である。

2030年ごろにはドローンでの配達も最盛期を迎えたが同様にドローンジャマヤーネットガンによる「網漁」によって盗難被害も非常に多くなっていった。

またドローン生産も生産後即時に群発戦争投入により、ドローンの日常運用が厳しくなったことも少なからず影響している。

配送業者は世田谷区にある集合住宅地に向かって車両を走らせていた。

一箇所に配送される4つのソファ。それは単純に経費をケチったためである。

ベッド4個とセールで出されていた型落ちソファ4脚を比較した際に結構な差額が出たためだ。

パラサイトに憑依された人間は身体を休めることをしても睡眠は必要としない。

身体を横たえるのに適したものがあればベッドだろうとソファだろうとどちらでも

構わない。

【影の中の男】がCIAに依頼して準備したセーフルームは日暮里、小田原、町田の三カ所で、この日四カ所目として世田谷に一箇所増設された。

増殖されたパラサイトの中でも「まとも動ける」パラサイトはあまり多くない。

「まとも」つまりは会話、思考、判断が可能な個体である。

現在で25体。上記の三要素を満たさない個体だけなら60体近くになる。

パラサイトによる個体増殖は数日に1体といったペースで増加曲線は鈍い。

CIAが頭を悩ませるのは素体になる人間の選定よりも、失敗して死亡した死体の処理である。

USNA国内であれば方法はいくらでもあったが日本国内では非常に難しい。

顧傑の本国内の協力者のキャパシティも超えており、状況的には芳しくない。

この状況があと一か月と少し。

【影の中の男】の条件は「論文コンペ当日」の作戦決行である。

大亜連との連携機会、つまりは陳祥山率いる「決死隊」の到着と作戦準備を含めると妥当な所である。

現在の作戦は複数個所への襲撃による魔法協会の保有する致死性の戦術、戦略級魔法のデータ奪取だ。

USNAには「古式魔法師」というものは存在しない。

1960年代のヒッピーブームに並行する形で乱立した超自然主義を掲げたカルトはいくつもあつたが

欧州魔術や東洋魔術を源流とする魔法を生育する社会状況ではなかった。

そのためUSNAの魔法師は基本科学的な超能力の解析と、科学技術との複合物であり、その魔法は戦略、戦術使用方法は非常に「常識的な範囲」にとどまっている。

つまりはABC兵器の代用品ではない。

反面、アジアや中南米、アフリカ、欧州の魔法は非常に盛んであつた。

その中でアドバンテージを取つたのは魔法と科学の混合をいち早く行つた日本であつた。

カルト的な集団が一夜にして魔法の権威。

それが起きたことで、2000年代初頭の日本では非常に複雑かつ大規模な混乱があつたのも事実である。

「(右か)」

自動ナビに誘導されて車両は動く。

年配の方40代と10代のバイト風。

二名の配達員は「運転手」ではなく、荷物を届ける際の運搬用ロボットの操縦者であ

る。

1990年代の世田谷は下町の色を残す23区最大の区であったが、自然災害を受けての復興による強制的な区画整理が行われた。

その際に二次大戦の遺構から見つかったいくつかの資料や遺物が学問としての魔法に多大なる影響を与え

民間の魔法師たちによる学問地区として一時期は栄えた。

しかし、民間魔法師たちは貧学の徒である。

復興後は住宅街として民間魔術師たちは立ち退きを求められ西へ東へと散って言った。

あるものは研究所勤めに、また別物は「伝統派」を名乗る。

住宅街として賑わいを見せていた世田谷区であったが、群発戦争、そして現在まで続く数十年で少子高齢化となり

住宅の数に対して住民は減少傾向にある。

到着したのは3世代住宅であった。

「また古い…」

40代のスタッフはやや古びた住宅を見上げた。

30年前には流行った3世代住宅は風雨によって白い外壁は少しだけ古びていた。

◆ 玄関に向かうパラサイトは元はUSNAの海兵隊に所属していた「アジア系」の女性だ。

身長や体格は平均から少し大きい。しつかりしていると云っている。

右頬から顎にかけて小さいながら傷があるので「スカー」とCIAからは呼ばれている。

この家に住む唯一のまともなパラサイトである。

そのため対人に関わることは全て対応している。例えば手配されたソファの受け取りである。

他のパラサイトとは意識を共有しているがそれでも管理できるのはこの家にいる1名が限界だ。

皆、それぞれ繁殖欲求を持ち、状況を理解させ外出が可能なタイミングを計るのは判断と会話と思考のすべてが揃った「スカー」だけである。

チャイムの音で玄関口のモニターを確認。

写っているのは配達人が二人。中肉中背の一人と、小柄な一人。兩名とも男性。

1人は40才に届くほどだろうか。もう一人は10代に思う。

(安全)と判断しスカーは玄関のロックを手元のコンソールで解除し、少し離れた玄関先

に向かった。

玄関の扉に手をかけた瞬間に状況は一変した。

情報体次元による巨大な揺れ。それは肉体ではなく、パラサイトの本体である情報体次元における不安定な空間状況を発生させた。

揺れというより強力な波紋、巨大で重い波が情報体次元のパラサイト達を押す。

スカ―をはじめ、住宅内のパラサイトに憑依された身体は両手足を床につけ耐えるだけであつた。

下手に憑依した身体を抜け、情報体次元に逃げ込むと波に吞まれ、霧散するか遠くへ流されてしまう。

玄関が開いた。

40からみの男は拳銃を構え、室内を確認する。

左手を後ろに回し合図すると数秒後に武装をした兵士たちが住宅内に突入し「クリア！」「目標発見！確保！」

と叫び連携を取る。

その後に作業着姿の10代と、服装が違う一校と呼ばれる高校の制服を身にまとった前髪がクロスした髪型が特徴的な少年と一緒に住宅内に入ってくる。

40代は10代に敬礼する。

作業着の10代はその恐ろしい揺れに耐えるスカーの傍らに屈み、顔を覗き込んでくる。

「確かお前らは意識が共有しているんだよね」

スカーは無意識に声の方を向く。

声の主の顔を見る。だが印象が薄い。どこにでもいる顔。どこにでもない顔。

それは情報体次元で生きるパラサイト達の人ならざる認識を持つても理解の及ばない無理解の世界だった。

最上級のヘルメスの加護。詐術の加護は「認識」さえも騙す。

「もう消すぞ」

もう一人の少年が軽く呟くと手元のブレスレッド型のCADを弄った。

強力な渦。情報体次元で起こる強大な圧力と回転。それは物質の情報体次元を傷つけず、パラサイトのみを対象とした恐ろしく高等かつ「情報体」を殺すことだけに特化した魔法。

四葉竜也の「アケロン」という魔法だ。

「これで攻勢に出れるな」

「まあ須田ちゃんのおかげだね」

少年同士の会話はスカーの耳には届いていなかった。

彼女であつたパラサイトは一瞬で渦に消えていったのだ。

テレビで見てるし

「清姫先輩、グループデート行きませんか？」

三年生が多数いる昼食時の食堂。

麗人、女生徒の憧れの一人、色気と益暗が同居する美女、十二江清姫に正面から声をかけたのが須田渉であった。

一年C組の須田渉、妙に男女の仲を取り持つのが好きな少年。

一年の総合評価では30番前後。優秀と言えば優秀だが上位陣には一切食い込めない。

平均身長よりは少し高い背。森崎、相馬と須田。良く絡む仲良し三人組だ。

そこには雪光が混じることもあれば狼谷や久慈灘やアーデル、フィリオ、そして光夜も混じることがある。

「え」

海鮮丼を食べ終えた清姫はその美しい相貌をちよつとだけ崩した。

それは面倒ごとと巻き込まれた、というより予想外の言葉への単純な驚きだ。

「そうですよ！先輩とデートしたい一年男子が多くて、自分が代表で誘いに来ました！」

先輩もお一人だと思つたらないと思ひますので他の女子も誘つてますよ！七草先輩でしよ、市原先輩は：彼氏いるか、あと誰か彼氏無しの三年女子知りませんか？」

周りの生徒たちも驚いてふたりのやり取りを注視している。

須田は物怖じすることもなく、やや押し気味に勝手に清姫の正面の席についた。

女生徒の視線が厳しいが須田としては「心地よい」といつた感じなので気にはならない。

「おねーさんそこまで暇じゃないからな〜」

清姫はこの転生者少年の意図を読めないでいた。

どう見ても他の転生者と違う能天気さが爛漫としてゐるからだ。

「ダメですよ、そんなこと言っちゃ。せつかくの高校三年間ですよ、恋愛の一つくらいしないと！それに男女で楽しくデートするくらいいいじゃないですか！」

力説。軽く引く清姫。そしてそこには清姫の幼馴染が現れた。

昼食時の食堂でありながらトレーを持っていないことから清姫はこの事態の黒幕は七草真由美だと看破した。

小学校5年生の時は学芸会で一人二役の早変わりを真由美の根回しで行うことになつたりと、たまに真由美は清姫で遊ぶ。

清姫としても小学校6年生の時に真由美と二人で人魚役で上半身水着姿になつたこ

ともあるのでオアイコだと思っている。

「キヨも恋愛するお年頃でしょ〜」

七草真由美。

そして渡辺摩利。

真由美の顔つきは久々に清姫を遊べるといった感じで満面の笑みだ。

横に並ぶ渡辺摩利も意地悪な笑いを湛えている。

笑顔で清姫に顔を寄せ「最近、学内の空気も重いので協力して」と言って小さくウイ

ンクをする。

（生徒会も大変、大変）と清姫も内心同情する。

「グループデートは男子25名、女子25名。参加費は一人・・・こんなもんで！」

指を四本立てて須田に提示する。

清姫の提示に須田は笑みを浮かべる。

畏にはまったのは清姫だった。

「任せてください！ただしその参加費を取るなら先輩も協力してくださいね〜」

笑顔の種類が変わる。

須田の小動物的笑顔から、畏にかかった愚かな動物に対して自分の技量を誇る猟師の

笑顔だった。

◆ 「やられた」

青を基調したバニーガール姿の清姫は険しい顔付きで呟いた。

タイトは網タイトではなく、黒に近いストッキングで脚線美をあらわにしている。

「その台詞、着替える前に言う台詞です」

横にいる市原鈴音はいつものポーカーフェイスで白のタキシードの襟元を直す。

市原鈴音も女子としては背が高い方で、そのクールな美貌と相まって似合っていた。

身長は二人とも同じ程度、やや清姫が高いが、「バニーガールならハイヒール！」ということで

今は清姫の頭頂が幾分か高い。

今日の3年生の引率はこの二人だった。

グループデートというのは校外学習だった。

十三東家が運営に参画するテーマパークで1日就労体験。

清姫はお祭りごとは好きだが、学習行事は今二つ苦手であった。

前世もそのあたりは優等生というわけではなかった。

この校外学習で参加者のモチベーションをあげるため人気者をやや強制的に参加させたのだ。

策を練った須田は「バニーガール美女が見たい！」を最大の動機として行動をした。そして彼はこの校外学習の設定の為、十三束に交渉し、学校を説得し、テーマパークの支配人に話をつけバニーガール姿の十二江を実現させたのだ。

あの食堂での話の段階で、須田は十三束には接触していたし、テーマパーク支配人へのプレゼン用の大枠は決めていた。学校への説得材料も収集済みであった。

十二江清姫は哀れ「健全な男子高校生」の欲望のためバニーガールとなったのだった。当の本人はそのバニーガール姿を気に入って、午後の別の作業時もバニーガール姿で楽しく作業していた。

校外学習は早々に決まった論文コンペの開催規模縮小に伴う、一般学生への単位取得のイベントであった。

例年は論文コンペへの応援ということで単位取得となっていたが、三校の女生徒が行方不明ということもあり論文コンペ開催事務局は早々に参加者の制限を行った。

裏では十師族による圧力があり、内定段階だが論文コンペは登壇者と一部警備班だけの参加となり、各校の応援は当日休校扱いで自宅待機となる。

ただし、各校の生徒会からは審査を勤める生徒会長の参加は必須となった。

面子を守るため中途半端な選択した事務局の理事の一人は

中条あずさを危険に晒す事務局の判断に怒る四葉光夜の視線で恐怖のあまり年甲斐

も無く失禁してしまった。

「おりんよ、私が言いたいののは真由美のバニーガール姿を生で見られないことなのよ」
「十師族、七草家の令嬢がバニーガール姿になるとは思えません」
ぴしやり、という擬音。

スタツフ控室から出た二人は。園内の広場に足を向けた。

時間は8：45。あと15分で開園。

最後に点呼を取って仕事の開始である。

二人は最初の1時間は入園者へのゲート近くでの案内である。

テーマパークを選択しなかった生徒は国立博物館の分館での収蔵物の整理作業が待っている。

集合の広場ではすでに40名近い生徒たちが待機しており、それぞれの就業場所のグループを作っていた。

「似合いますね」 清姫と市原鈴音の姿を見て笑いかみ殺しているのは狼谷だった。

横のミシエルもニヤニヤ笑っており、アーデルは情報端末で熱心にバニーガール姿の清姫の写真を撮っている。

「リン先輩と腕組んで」

清姫はその指示に的確に答えていく。

数秒ごとにポーズを変え、時には市原鈴音を巻き込み、軽妙だったり、艶やかだったりとポーズを決めていく。

既に他の生徒も撮影会に参加しており、5分間の撮影タイムとなった。

女豹のポーズを終えた辺りで「ババババニーガール！」と声が広場に響く。

作業員服の左腕に「研修」の腕章をつけた服部刑部少丞半蔵が顔を真っ赤にし、声をあげる。

「童貞、もう時間か？」

アーデルは服部の驚きを無視して、間もなく点呼時間であることを確認した。

童貞と呼ばれた服部は自分のことであると確認をせず声を出す。

「十二江先輩！如何にテーマパーク研修における研修先からの意向といえ、一校の生徒がそんなにハレ、破廉恥な恰好を、バニーガールですよ！それは、ハハハハレ、破廉恥ですよ！」

「おや、えっちい格好だと認識しているんだ。ウサギちゃんは常時発情してるしね〜」
服部は顔を背け清姫の方を見ないように努めるが高速の横目でちらちらとその姿を網膜に焼き付けようとしている。

清姫はその姿を面白がりちよつとずつ近寄り、そして作業員姿の服部の襟元をつかみ、無理にでも自分の方を見るよう力づくで態勢を変えさせる。

いつも以上に接近し、目をつぶることで抵抗する服部。服部の耳元に清姫の吐息がかかる。

周りの生徒は男子はドキドキしながら見つ、女子は黄色い声をあげる。

「服部会頭。仕事になりませんからとつとソレを見てください」

市原鈴音はため息をつきつつ、清姫とじやれる服部の名を呼んだ。

清姫は最後にフツと服部の頬に息を吹きかけ離れる。

「ハンゾー君。お仕事の時間だよ」

そう言われて恐る恐る目を開けた服部が見たのは列に並ぶため背中を見せたバニーガールの後ろ姿と形の良いヒップだった。

結局この日の夜は服部刑部は寝る前に「俺は真由美さんが好き！」と枕に顔をうずめて20回連呼してから寝ることとなった。

翌日情報端末には、アーデルからの撮影会で撮られた清姫の写真が大量に送られることとなる。



「なに、高校生もこんなところで呑むの？」

「コーラ美味しいです！」

一日の仕事も終わり、須田渉は行きつけの居酒屋に来ていた。

正しくはこれから行きつけになる店のオープン1年目に来ていた。

須田は博物館での収蔵物整理を終わらせ、上野にある飲み屋街に来ていた。

十二江清姫のバニーガール姿はアーデルと共有している一校美少女フアイルにアツプされているので心配はない。

上野での収蔵物管理は意外と肉体労働で、数少ない男子生徒は常に走り回って重量のある収蔵物の移動に駆り出されていた。

アラタ達は「軍務」の一言で別途駆り出されている。

須田の行きつけはかつての京成上野口から歩いていける飲み屋街の一角にある。

上野の美術、博物館については群発戦争でも残り、文化の聖域として2000年代初頭よりも文化物の収蔵品は増えていた。

「アジア最大」という冠もあながち嘘ではない。

行きつけはチェーン店ではなく、飲み屋の三代目が店名も一部変えたりニユーアル店だ。

コーラとこの店の名物になるハーフピザをつまみつつ、横にいた男性に見覚えがあった。話しかけた。

最初は男性の持っていた情報端末のカバーが珍しいことが話しの糸口だった。

男性は、逆に年若い須田がこの飲み屋、カウンターバーにしていることを面白がっている

ようだ。

「仕事は何なさってるんですか？」

「こう見えてもイベント関係でね」

男性はハイボール。横顔からは20代から30才程度に見えるが実年齢は上手く読めない。

コーラを飲みつつ須田は自分に（気軽に聞こう）と気持ちが固くならない様言い聞かせつつ、リラックスの為、先週見たアイドルのグラビアを0,5秒だけ頭に浮かべた。3年後に電撃入籍することで少しだけ世を賑わせたアイドルである。

「へーイベント、ライブとか主催とかプロデューサーですか？どこのアイドルなんですか」

「いやアイドル系じゃなくて、一般ユーザー向けの体感イベントっていうの？規模だけはデカくてね」

いつものように少し食い気味に。男は苦笑いをするが、その真意は須田では読み切れない。

「体感イベントいいですよね！友達と行くとすごく盛り上がって！この間も図書館主催の体感系イベントですごく盛り上がりましたよ！」

そう言って須田はちよつとした思い出を話す。図書館の中の謎を解くという趣旨の

イベント。

グループデート100人でクリアタイムを競ったこと。

「いいね、図書館系イベント。体感系イベントのキモは非日常から日常を見せることだから、お堅いイベントの割には楽しかったでしょ」

「そうですね、図書館の書庫に入ったのはオモシロかったです。今度されるイベントも体感系なんですか？」

話の流れを切らさないように質問。こういった質問事は須田は得意だ。話を途切れさせないにはジェスチャーと視線と質問。

「規模としては大きめだね。最低でも参加規模は数千人を予定していてね。最大に膨らめば10万人は硬いね」

「どこでやるんですか？東京なら行きますー！」

少し身を乗り出す須田。男も楽しそうに須田の興味ありげな顔を見て笑う。

「いやね、今度の論文コンペの日になるんだけどね、横浜と京都あと八王子での同時イベントだね」

「すっごい！同時イベント！」

「いや同時にやるだけである程度は観客が主体的に動いてもらわないと」

男の含むような笑い。須田は何が起きるか知っているが、そんなことを知らないふり

をしつつさらに質問を返す。

「誰かゲスト来るんですか?!」

「ゲストか：君らは知らないだろうけど最高のゲストがいるんだよね。長年の夢の人が」

男はそこで手元のグラス、レッドアイ（ビールとトマトジュースのカクテル）を飲み干す。

「えゝ教えてくださいよ!」

「ダメダメ。当日までお楽しみ」

男は食い下がる須田を見て笑う。

「えゝ、当日は論文コンペに参加予定だから遊びに行けないんですよ」

「いや、論文コンペ会場も体感イベント会場だから当日参加できるよ」

（そうだよねゝ）男の言葉に内心同意して須田はその感情を誤魔化す様にはしやぐ。

「ホントですか!?! やった! 行きます! 絶対行きます!」

男は「じゃあ」と何かを言おうとしたとき情報端末に着信を感じ、手で「ごめんね」とジェスチャーをすると席から少しだけ離れた。

情報端末を耳に話を始める男。須田も情報端末を出し、つまらなそうな顔を作る。

「いや、うん、世田谷。いいじゃない、適当な家あったんでしょ。そこと日暮里にまとめ

られない？小田原は遠いよ。うん、あくじや、世田谷、日暮里、町田。事務所はこれで。小田原だつて大して広くないし」

少し駄々をこねるような口ぶり。

連絡先と何か選定をしているようだ。

須田は、その地名を情報端末のSNSに記載して投稿せずに下書きに収めた。



その日の深夜、アラタと連絡かつかず、黒羽竜也に須田渉はネット回線越しに会った。知り合いの中で一番軍人らしいことは知っている。

この手の報告も上手く運用してくれることを期待してである。

「みたいな会話をね。【影の中の男】としたんだよ。だから目的地は横浜の魔法協会支部、京都の魔法協会本部、あと一校だね」

腕を組み、そのことを思い返して頷く。

竜也もその須田を見て、驚きで表情が固まっている。

「よくそいつが【影の中の男】とわかったな。そしてよくお前が転生者と気づかれなかったな」

一番の疑問がそれだった。なぜ須田渉は居酒屋の横に座った男が【影の中の男】と一瞬で判断できたのか。

その理由がわからないと、情報の信用度が変わる。

「ほら、僕特殊な転生者だから。会ったことのない人もテレビで見てるし。タツちゃん
と光夜君との空港の会話とか知っているし」

顎に手を置き、うんうん頷く須田。

全120話＋おまけを知る須田は神の横でポテトチップスを食べながら見たことを
思い出していた。

出てきた飲み物がドクターペッパーかコーラだけというのは多少飽きがあった。

「はあくどういうことだ？」

空港の会話。竜也は脳内を検索するがきつとそれは前世の1年生の終わりの頃のこ
とだと判断した。

須田の発言は信用できる。自分と光夜しか知らない会話を知っている。

それがこの発言の担保だ。

「まあね、なんていうの神の視点を知る転生者なんだよね。あとね、世田谷と町田と日暮
里と小田原になんかあるから調べてみてね」

須田は追加情報を伝えるとその後25分かけて竜也をメインにしたグループデート
実施プランをプレゼンした。

竜也としてはグループデートの出汁に使われるのは不快だったが、「光井ほのか」の参

加が濃厚だと聞くと「参加する」と間を空けずに答えた。
これが世田谷のパラサイト強襲に繋がる情報である。

駄話：再成ってね、反則なのよ。

「で、一校最強はだれか？という話だ」

「それを俺と話すんですか」

ロボ研の近くの喫茶室。

思い出深いこの場所で珍しい人と会って、一校最強論の話が飛び出たわけだよ。

c.v. 杉田智和よ、お前じゃないから安心しろとは口が裂けても言えない。

「相馬、お前は四葉や黒羽、司波兄そして一年二科とも知り合いが多い、是非とも意見を聞かせてくれないか」

c.v. 杉田智和の横にいるのは、あーあれ、板前みたいなあの人、たつみ？辰巳先輩？

何でも風紀委員として貸与されていた記憶媒体を返却ついでに剣道部と剣術部に置きっぱなしの珍妙CADの回収したら

c.v. 杉田智和と最強論で盛り上がり喫茶室に場所を変えたら俺がいた、ということなのだ。

状況説明なげーよ。

現時点での最強か…。

「誰だと思えます?」

俺の質問に辰巳先輩は腕を組み自信ありげに言う。

「俺は十文字を押す。同学年でも最強だしな」

「あれ?先輩は渡辺先輩押しじゃないんですか?」

c v. 杉田智和先輩の驚きの声に辰巳先輩が答える。

「確かに姐さんは剣術を中心とした中近距離での戦闘は三巨頭最強だろうが、攻防一体のフアランクスに対しては今二つ決定打にかける」

辰巳先輩は自分の発言に納得してうんうんと頷く。

c v. 杉田智和もその言葉についてはある程度納得したようだ。

「確かに決定力という意味では、十文字さんの障壁を抜けるかどうかは重要ですね」

出たく、十文字フアランクス問題。

プロの回答としては戦闘前に下剤でも飲ませておけば敵じゃない、になるけど流石にそれだと味気がないな。

「じゃあ、十文字先輩のフアランクスを抜ける打撃力を持つ生徒、またはフアランクスを阻める者が最強候補になりませんか?」

俺の質問に辰巳先輩(いいんだよな、辰巳先輩で。心配になってきた)は

「うゝむ」と考え込みc.v. 杉田智和も「そうか…」と条件に合いそうな者を考え出す。「四葉か黒羽は？」

「先に服部会頭の名前を出してやる優しさは無いんですか？」

c.v. 杉田智和の言葉に秒も置かずに突っこんでやった。

なんて友達がいの無い奴なんだ！c.v. 杉田智和よ！お前の友達はマフィア梶田だけか！

最強議論をやるなら先に2年の「服部」「千代田」「三七上ケリー」などの名の知られた生徒との比較・分析が先でしょうよ。

そりゃ、いきなり一年の名前でしたら二年生が可哀そうでしょ。少しは考えてやんなさいな。

「いや、二年生には悪いが展開力なら服部、陸上戦での千代田、魔法戦でのケリー、どれも強力だがやっぱり十文字前会頭のフランクスの攻防一体、七草前会長の精密遠距離攻撃、姐さんの中近距離での戦闘能力、どれと比較しても一枚落ちる」

敵しいゝ、板前見習い。

「お前だつて候補に入るが姐さんとの戦闘じゃ間合いが違って勝負にならんだろ」

「いや接近できれば」

「接近しても剣術家である姐さんは簡単に仕留められないし、姐さんの香術にハマれば

接近も難しい」

「経験おありで？」

c v. 杉田智和の返答を遮り、仮想される戦闘状況を伝える板前見習い。

俺の言葉に気まずそうに板前は返答する。

お前暇な時に脳内で「一校最強論」とか考えてた口だろ。じゃなければこんなスムーズに話ができるか！

「まあな、近づけなかった」

「先輩でもダメか……」

c v. 杉田智和が凹んだ。

学内でも高速移動を得意とする板前見習いが敗北経験があるのだ。近接屋のc v. 杉田智和では絶望的だろう。

喫茶室の扉が開く。

「なんだお前たち」

あ、彼氏に弱いペアルック、料理上手の片づけ下手。彼氏が3m内世界五指、卒業旅行は恋人じゃなくて親友と二人旅行の背の高い方だ。

通称、渡辺摩利だ。

「かくかくしかじか」

「それでわかるか」

流石に通じないか。

嘆息一つして背の高い方の女子が俺の説明を一蹴して近くのイスに座り珈琲を注文する。

「いや、今の一枚で一番強いのは誰かと話していたところで。見事に俺と桐原が離脱したところですよ」

「最強か面白そうだな。論点はどの辺りだ？十文字のファランクス対策か」

「現状だと、2年生は決め手に欠けるな。真由美でも十文字のファランクスは破るのは難しいだろうし、あたしも格闘戦の距離まで近づけるか怪しいな」

戦闘分析に自信があるようで、自分の不利に対して陰気さはない。

「三巨頭なんて言うのも、ゴロが良かっただけで事実、真由美と十文字の二強だ」

隠すつもりもなく言う。

まあ、たしかにね。渡辺摩利嬢には決め手がない。

既知未来知識だと圧斬りを見せたが、それでも十文字のファランクスを崩せるとは思えない。

「姐さんの考える一枚最強はやはり十文字前会頭で」

板前さんの言葉にペアルックが首を横に振る。

「いや、1年生四葉、黒羽、司波達也の誰かだろう」

「そこで司波兄たちが出ますか」

c.v. キヨンが驚き、声が出る。

「考えてみる、今言った三人は体術、魔法については学内屈指だ。特に司波達也の術式解
体と魔法技術の精度。二科生と言って侮れるレベルじゃない」

「そうそう極度のシスコン前髪クロスを殺すのは難しい。」

「再成ってね、反則なのよ。」

「常にザオリクがオートでかかるのはダメだよ。」

「じゃあ、今名前のあがった三人が、一校最強候補で」

「辰巳先輩が聞くと渡辺さんは頷く。」

「概ね賛成だ。」

だが、「あわわ会長」と「突発的に光学魔法使う娘」と「毎年4月は納得できません！
記念日」が組めばもつと強いけどな！

人類が社会性を持つてから、男性は女性には勝てないというのが俺の持論だ。

「戦闘条件は定めないが、オールラウンダーの四葉と黒羽、特化型の司波達也だろう」

「まあ、現状考えればその分類だろうね。」

「摩利ちゃん、相当自信があるようだ。」

「それで十文字先輩のフランクスは抜けますかね」

「可能な裏技を持っていてと見ていいだろう」

c.v、杉田智和の言葉への返しにニヤリと擬音が付く笑み。

どんだけ自信満々やねん、彼氏とペアルックちゃん。

喫茶室のドアが開く。

あつ、特撮ヒーロー人間パンツァー！とむつつりスケベ（水晶眼限定）だ。

「珍しいメンバーだな」

「かくかくしかじか」

「わかんねーよ」

レオが笑いながら返事し、幹比古は苦笑い。

辰巳先輩が説明。

「えー、最強ですか？アーデル？」

「うーん、僕は雪光を押したいところです」

おや推薦がみんな違う。

「その心は？」

彼氏とペアルック（略）さん。

「アーデル強いっすよ。身体強化が単なる腕力だけじゃなく、耐久力向上や何よりも障

壁を素手で破れるっていうのは驚いた」

まるで自分のことのように、左腕を右手で叩きアピールするレオ。

アイツ、神降ろしすると干渉力が爆上げだからな。

本当にフアランクスを素手で「引き千切った」こともあった。

「だが、あの羅門が真由美や服部との戦闘で先手を取れるとは思えんな」

「あの想子装甲は驚異的ですよ。七草先輩が攻撃を抜けるとは」

ペアルック子の疑問に返答するレオ。

その横では辰巳先輩、c.v. 杉田智和、むつつりの三人が別の視点から話をしている。

「問題は戦術判断が出来るかどうか」

「そこまで馬鹿なのか？」

「そこそこ……」

とアーデルの判断力を気にするが前世での戦闘力は勿論判断力も含まれる。

そりゃ、海外の戦場を魔法一つで渡り歩いたのだ。

危機察知に関して言えば嗅覚ではなく直感で判断するアーデルは恐ろしい。

スパイダーセンスか（笑）

性格的にはウルヴァリンなんだが。

今度は幹比古の根拠だ。

「僕は雪光です。雪光の速さは驚異的です。戦闘開始の合図が同時なら、大抵の敵は勝負になりません。何よりも魔法師として恐ろしく優秀です。達也や光夜、竜也に隠れがちですが、魔法師としては高校生レベルではなくA級ライセンス確実です。それこそ司波深雪さんに匹敵します」

そうなのだ、アイツ意外と優秀。七草真由美のお尻を追いかけているだけじゃない。いや幽玄のことを思うとおじさん悩みどころですよ。

正直実技試験なら普通に深雪ちゃんに匹敵する。

つまりは今すぐ戦場に出て蹂躪が可能なレベルでの魔法師なのだ。

さらにはあの速さ。本人曰く「マツハ」らしい。青銅聖闘士か。

「速さか」

摩利ちゃんがかうくと悩み辰巳先輩に振る。

「お前より速いと思うか？」

「モノリス新人戦を見る限り速さの底は見えませぬね。下手すると一校で最速ではなく、魔法科高校史上最速かと」

「マジかよ」

マジだよ、c.v. 杉田智和。

近接屋の君より遙かに速いよ。

「でもなく、速いんだけど攻撃力が」

レオの言葉にうなづく渡辺さん。

したり顔でv.c. 杉田がうなづく。

はいはい。高周波ブレード、高周波ブレード。

軍人志望なら剣技だけじゃなくて、銃火器及び車両操縦の技術やトラッキング、カモフラージュ、工作技能も必要だからね。

現時点で想子剣を見せていないので、雪光の「打撃力」というのは未知数だが、まあ深雪ちゃんクラスの魔法師がマツハで動き回るって相当酷いからね。

喫茶室に次の客だ。

下の名前を呼ぶと怒り狂うらしいけど誰も見たこと無い先輩、沢木碧だ。

「あれ、渡辺先輩、珍しいところはどうしたんですか」

「どうも、かくかくしかじかで」

「うくん、わからないな」

俺の説明にミドリちゃんも苦笑い。

c.v. 杉田が簡単に説明する。

「自分としては四葉光夜かと」

「本命だな。理由は？」

渡辺さんはオモシロそうに理由を問う。

「体術と魔法。両面とも群を抜いています」

きつぱりと答える沢木ん。

「竜也、いや黒羽はどうなんですか」

同格の実力者について尋ねる幹比古。

「体術を披露しているところは見ていないので判断はつかないが、現時点での総合力なら四葉だね」

沢木んらしい判断基準だ。「魔法」と「体術」を同レベルのウエイトで考えている。脳筋。

またまた喫茶室の扉が開く。

あつ、壬生先輩。

「かくかくしかじか」と俺。

「えっ?」

俺の説明に面を喰らい1秒ほどフリーズするがc.v. 杉田が手招きし隣りに座らせ説明する。

ほお、ほお。

「うーん、黒羽くんか藤林さんかな」

「別の意見が出たな」とパールック。

「何でだ？」と板前。

「黒羽君は単純に試験結果と九校戦での成績からです」

「だがそれなら四葉も凄いぞ」

それは少し意地悪な質問じゃないですか、パールック。

「いや…四葉君は、その中条さんがね…」

質問にやや言葉濁す壬生先輩。

そうそう、光夜を止めるには中条さんにお願ひすれば済むから弱点がわかりやすい。

ちなみにだが、前世で中条あずさ（当時は四葉あずさ）の拉致を企てたCIAは光夜の怒りを買って、西海岸に大量の落雷を落とされたことがある。

光夜は器用に日本から一步も出さず、というよりは事件が解決したその瞬間、市ヶ谷の国防軍のオフィスから東の方を睨みCADに触れて、天変地異を起こした。

5分後にタッチャンからの「死傷者はいないが、お前なく」という連絡があった。

「藤林は？」

横のc.v。杉田が聞く。

「う〜ん戦闘嫌いを公言しているけど、魔法の実力だけで言えば深雪さんに匹敵するし、CADの取扱いや性格面からかな」

カナデは戦闘は苦手と言っているが実際は相当なものだ。

【偉大なる指揮者】と異名を持つ、世界最優のハッカーにして、俺直伝の格闘能力。

FLTのセキュリティチーフを任せられる程度には銃火器や戦術行動の訓練は受けた。

俺も心を鬼にして彼女を陸軍が主催する短期自衛研修（6週間）に無理矢理送り込んだりもした。

俺は息子のアラタとその間にキャンプに行ったり、遊園地に行ったりと親子の時間を満喫した。

「私も【千葉にある夢の国】に行くー」とその後怒られた。

まあ、カナデはリアル草薙素子みたいなもんだ。

「エリカやミシエルは？」

カナデと同年代の最強候補女子の名を上げるのはレオだ。

まあカナデの名前が出るならこの二人の評価も気になる。

「エリカは……近接戦では強いですが中距離戦だと分が悪くなると思います。ミシエルちゃんは、ねえ？」

「性格か」

板前さ……辰巳先輩が同意を求める壬生先輩の言葉を具体的にする。

「はい、戦闘経験は皆無ですし、魔法の特性も汎用というか」

ミシエルの魔法は難しいというか、スゲー概念的な魔法なのである。と言うか「魔法」である。

あれ「二足歩行の世界一のネズミ」的なおとぎ話の魔法を使うのである。アーデルの「神降し」以上に魔法だなくと思う。

何だよ、戦場の死者を100人単位でゾンビ化して軍団形成するとかさ。魔法かよ。ただしミシエルも「学校では評価されない項目ですからね」なので、なかなか評価は難しい。

喫茶室の扉が開く。

モーリーだ。

「かくかくしかじか」

「どうせ誰が強いとか話してたんだろ」

先輩の前ということもありあきれ顔は出来るだけ抑えている。

「「おお〜」」

一同驚き。

「なんでわかった!」とc.v. 杉田智和が聞く。

喫茶室にいる面々をぐるりと見渡すともーリーは

「面子ですかね。渡辺先輩と辰巳先輩と桐原先輩揃うと進学よりもそっち系の話になる
と思っただんで」

既知未来のモーリーよりもズケズケ言うのは光夜の部活の相棒かつモノリスコード
仲間ということもある。

あのボッチを日々横で感じていれば、年上の先輩など団扇の風だ。

「はあ、司波さんでしょ。妹の方」

「おお、また別な意見」

モーリーの言葉に辰巳さんを筆頭に皆目を開く。

「単純な総合力の高さです。司波兄は実技ダメですし、光夜は中条会長と仲良くして
れば問題ないです。竜也は多少好戦的などころはありますが、あれで慎重派で運の悪い所
もあります。雪光は魔法凄いですが調子に乗る性格ですし、藤林さんは戦闘しないタイ
プでしょうし、二科生は穴だらけじゃないですか。そう考えると司波深雪さんが一番つ
よいでしょ」

あ、はい。

モーリーの言葉が今回の話の結論になりそうだ。

結局は「穴のない魔法師」という点では深雪嬢が一番なようだ。

深雪ちゃんなら十文字や七草への対抗手段もありそうだし。

331 駄話：再成ってね、反則なのよ。

「いけ、お兄様！十万ボルト！」とか。

ククナラホサ

10月30日まであと2週間。

俺は最大の難問と戦っていた。

「ねえ！重蔵さん、九校戦の夜の台詞言って言ってる！」

「じゆうぞうさん！霞にも霞にも、あの夜の「思ったより泣き顔可愛いな」って言って〜」

赤ワインと白ワインを1本ずつ、秘蔵の日本酒の一升瓶が1本と半分。

この間、母の製菓学校の同級生だったパティシエからいただいたチョコレートボンボン（並んでも買えない場合がある超限定品）を一缶。

全てを空にしてカナデと霞は帰宅直後の俺に絡んで来た。

3時間前にカナデと別れて市ヶ谷への報告してきたので、この二人はどんなに長くても3時間飲んでいたわけだ。

相馬新としての家。

情報部のセーフハウスは美女と美少女の酒盛りの最盛期だ。

カナデは決して酒の弱い方じゃない。

霞もこのところの飲酒を見る限り、前世よりかは飲めるようになってる。

それが二人ともアルコールで体が暑くなったのか服を脱ぎ下着姿で俺の首元に手を回しやいのやいの言ってくる。

どうやら、いや、ほぼ確実に九校戦最終日の夜の出来事をお互い自慢したようだ。

何故ならリビングのモニターには「95年度九校戦特集」の特別番組が流れているからだ。

そうだよなく、カナデも霞も最初にやらしいことしたのはあの夜だしなー。

カナデは上下とも薄いブルーの下着。

少し光沢のある素材で爽やかな色気を残す。

霞は刺繍の着いた上品ながら見せる下着としての装飾のある黒を主体に赤が差し色で入った上下だ。特に下はレースが着いており、デザイン性が高い。

「あ、別に「泣き顔よりも楽しそうな顔もいいな」でも良いです、言ってみて」

どんなに抑え目の評価でも美女（人によつては絶世のがつく）が甘えた子供のような、それこそ姪っ子達の「おじさん！おじさん！」と正月に久々に会うときの喜びようと同レベルだ。

霞は一校の制服のままの俺に俺に抱きつき言葉をねだる。

「ダンス、ダンス」

カナデは霞ごと俺に密着しダンスなんだかその場をぐるぐる回っているのだからよく

わからないことをする。

お前らな！美女と美少女が下着姿で体絡めてきて羨ましいとか思ってたんだろ！
読者だか、神共だか知らんけどな！

こっちはな、こっちはな！

二人への罪悪感で押し潰されそうで

EDなんだよ！チンコ勃たないの！ちんちん不能です！

カナデのオツパイも、霞（夜天）のオツパイも柔らかくて、ちゃんと弾力があって、○
 ○◆××なくブワーン〜！ドドンパフパフな感じで、チヨロロポンポンニタシベツ川
 ！シヤララランタモモンタモン！フワフワワツフルホンホンカココ、アハラヤママンマ
 ンマンママン、クエクエオクエミノミタミノン！

サイサイハアハアオホオホサナサナ！

おほな！

パラらんらん！

ククナラホサ!?

（※作者注：性交表現が具体的かつ、重蔵の思考が言語化不能なほど混乱しているため伏せております）

つまり良い匂いがするんだよ、二人とも！俺の好きな香りなの！



「お水」

そう言つて寢室から出て来たのはカナデだ。

午前2時、かつての俺の言動をそのまま説明されると恥ずかしくなり、何とか二人のボデイタッチをやり過ぎし（やり過ぎしというよりは身を捧げ）、結局二人は日付が変わる頃には寝た。

二人を寢室のベッドに放り込み、俺はリビングのソファでゴロゴロとしていた。

二人の仲の良さには安心するが、その仲の良さが俺の罪悪感を際立たせる。

これ程嬉しそうに振る舞う二人を俺は傷つけたのかも知れない。

いや傷つけたのだ。

カナデは自殺を考えていたらしいし、霞の死に顔は微笑みは無かった。

ウダウダとソファに寝転がり考えても答えらしい答えはない。

謝罪？それで許されるのか？どうすれば償える？

二人とも同時に愛しても許されるのか。

カナデにも霞にも独占欲がある。

それを蔑ろに同時に愛するなど偽善ではないのか。

それは愛なのか？罪悪感を愛と呼んで誤魔化しているだけだろう。

結局は前世の行いの悪さを愛だとか偽善とかで帳消しにしたいだけなのでは。

関重蔵は単なる屑なのかも知れない。

物思いに耽っていたときにカナデが寢室から出て、台所でコップ一杯の水を飲んだ。

リビングの灯りは落とし、壁の低いところに設置された間接照明だけが薄暗い部屋で小さく輝いている。

暖色の灯りが部屋に何とも言えぬ物悲しさを高める。

カナデは寝室に戻らず、俺の寝転ぶ三人掛けのソファに腰掛ける。

「悩んでるんでしょ」

「当たり前」

「美人の奥さんを二人持つのが嫌？」

「そうじゃない。罪悪感に潰されそうなだけ」

「罪悪感？」

「俺が死んだあと、カナデは辛かったんだろ」

「うん。死のうかと思っただけ」

「傷つけたんだ。謝っても謝りきれない」

彼女の手を弱く握る。

「私はね、そんなこともういいの。また重蔵さんに会えて、一緒にいられてそれで幸せ」

「俺は罪悪感を、帳消しにするために君を抱くかもよ」

「貴方の気持ちなんて知らない。あたしは好きだと人一緒にいてエッチして、最後の時を看取るか看取られたいだけ。貴方に罪悪感があるのならそれを利用してでも一緒に

「いたいの」

声がいつもより柔らかい。

「きつとの夜天さんもそうしたいはず。あの子、重蔵さんのこと大好き。だから、あたしと一緒に大事にして」

「独占欲は？」

「貴方の傍にいられるなら些末なこと」

「俺の奥さんはヤンデレだな」

「そうなの。転生しても一緒にいたいくらいヤンデレなの」
握った手が握り返してくる。

カナデは体を横たえ、俺に添い寝する。

狭いソファで体が密着し、カナデの吐息が首元にかかる。

俺を包み込むようにカナデの左腕が俺の体に触れる。

彼女の足が絡んでくる。

罪悪感の解消されたことが下半身に直結しているのは男のサガなのか、俺が単純なのか。

薄明かり。カナデの瞳には俺の情けない顔が映っている。

ああ、もういいや。俺は彼女と霞と生きよう。

罪悪感なんて投げ捨てよう。

俺を愛すると宣言した人のために、今まで通り生きよう。

罪滅ぼしじゃない。開き直りでもない。

俺はやっぱりこの人に惚れていることを再確認したのだ。

寝室から霞が眠たげに出てきた。

「あー、えっちなことしてる…かすみもする」

霞は下着姿のまま俺の上に覆い被さると腰を俺のお腹に二度三度押しつけるとあくびをした。

「じゅうぞうさん、おやすみなさい」

霞は俺の胸に頭を預け寝てしまった。

エッチなことするんじゃないのか。

胸にある霞の頭を二度三度と撫でてやる。

前の時も頭を撫でられることを気に入っていたな。

霞は夫婦の時間も無く、あつという間だった。

ちよつとずつ喜怒哀楽が表に出て、霞の笑顔は多くの色合いを見せたことを思い出す。

この胸の上の重みが心地よい。

宝物の重さだ。

「ふふ」

小声で笑うカナデ。

「幸せそう」

「好きな人が二人も傍にいるんだ」

もう一度笑う奏。

目元に涙が見えた気がする。

「おやすみ」

「おやすみ」

今度はみんなで大往生だな。

戦争

魔法協会関東支部。

15階の大会議室には装備を固めた義勇兵が待機していた。

彼らは予備戦力であり、関東支部での不測の事態で戦力が手薄になった地点へ投入される。

すでに1階や地下階、屋上や屋上近くの階には元軍人などの十師族の手駒の魔法師達が控えている。

「俺達の出番あると思うか？」

「出来れば無い方が嬉しいな」

二人の青年、関西魔法技術大学の院生である。

二人の会話は自然と小声になる。

片方の男子生徒の母親が国防軍関係者であり、2090年度のモノリスコード本戦準備優勝の腕前を見込まれ義勇兵の募集に誘われて参加した。

流石に一人だと恐かったので研究室仲間、マジックマーシャルアーツの経験者である友人と参戦した。

二人とも学生時代によく見たモノリスコードの装備よりしつかりしているものを装着している。

ミリタリーの専門サイトでは「ライト・バルドレス」と呼ばれる装備一式だ。

簡易的な都市迷彩としてグレイを主体とした装備で、性能通りなら6.8mm弾の貫通を防ぐはずである。

彼らには個々人のCAD以外に小口径の小火器が準備されている。

これは戦争なのだ。

義勇兵達は国防軍の予備兵役として登録された者が殆どだが、実戦経験者は決して多くない。

今や戦闘は魔法師同士による少人数による遭遇戦がメインとなる。

佐渡や沖繩での広範囲の戦域での戦闘は本来であればイレギュラーなのだ。

2020年から各国の軍の、特に人員と予算が豊富な大国の軍事戦略としては、少数の魔法師をいかに敵軍の後方に送り込み

通常の正規軍と後方の魔法師による挟撃作戦を成功させるかがメインとなっている。

「戦闘巧者の魔法師一人は機甲師団に匹敵する」と評したのはUSNA設立以前のUSA陸軍参謀で魔法師の戦闘運用の基礎理論を構築したピーター・スプラドリン將軍の言葉である。

単独で戦術核と同様の意味を持つ戦略級魔法師というのは機甲師団以上の価値を保有する。

前述のピーター・スプラドリン参謀長は「戦略級魔法師」という存在にして

「最高の存在だ。生きている限り何度でも再利用できるのが最高だ」と後年語っており、「戦略級魔法師」の価値は単なる破壊力ではなく、車両や軍事兵器の維持と違いそのメンテナンスにかかる手間と再度の利用が可能である点と語っている。

2020年の主力戦車の一台当たりの納入価格と言うのはゆうに300万ドルを超えている。

年間の整備、長期間での維持コストを考えると容易には買い替えが出来ない。

主力戦車15輦で約4500万ドル超、5年間の整備費用を考えると小さな町の年間予算を超える。

戦車1輦の購入費用、燃料費、運用に必要な乗員あたりの人件費、車輛維持のための施設維持と管理、戦地への運搬費用…。

2050年でUSNA軍の主計委員会の算定では、2050年時点の主力戦車購入から10年間の運用費用と、魔法師育成と運用費用を比較し、魔法師の方が「燃費が良い」と発表した。

実際に2095年にはUSNA軍では、戦闘車輛の保持車両数は30年前より22%

減少している。

反面、USNAの軍事魔法師集団スターズの隊員数は30年前と比較して311%増加している。

単純な破壊力という面だけでなく運用経費という面でも魔法師というのは軍事行動へ大きな影響がある。

「人一人を育てるのに莫大な金と時間がかかる」と議会で声高らかに言ったUSA下院のゼネビー・ウィーランド議員は

主計委員から「時間の面では同意するが、資金面では同意しかねる」と返されたことが議事録に残されている。

費用面から言えば、魔法師と言うのは非常に「安価で強力で長期稼働か可能な戦力」といえる。

戦術面から言えば「柔軟な対応」が可能な「思考・判断」できる戦力である。

戦闘巧者でなくとも熟達した魔法師数名の特殊部隊が敵国の中心地に潜入し行動する。

その部隊は思考し判断し、その際に最善の行動をとろうとする。

ただの破壊活動ではない。

発電施設、エネルギー供給のパイプライン、浄水施設、行政施設etc。

事前の作戦行動を状況によって変更できる。

戦車と違い、身を隠し、相手の裏をかき、そして姿を見せないで社会的脅威を与える。人心の不安程、敵国の恐怖は無い。

CADさえあれば物理事象を捻じ曲げ無尽蔵に破壊工作が行える。

魔法師という存在は戦争では脅威なのだ。

「歩く破壊兵器」それが魔法師である。

今回の大亜連合の軍事行動は「少数の魔法師の潜入及び破壊工作」を主軸とした「未確認軍事集団を装った上陸陽動」を行う作戦であると日本国防軍の軍事参謀本部喝破していた。



会議室の扉が開き、野戦服を着た軍人が義勇兵を取りまとめる分隊長に現在の状況を伝える。

午前10時5分

横浜の街は未だ平静を保っていた。

脳内ドラムロールを鳴らすのだ！

「やはり、人数は絞られていますね。…参加生徒は100名もいません」

舞台の緞帳脇から観客席を見て達也きゅんが呟く。

どうせ知っていたんでしょ？このこの。

「ほら、邪魔ですよ」

理系三大美少女の一人、市原鈴音に後ろ頭をツンツンされ私は道を空けた。

コンペ開始前。各校のプレゼン担当者は舞台上の立ち位置の確認に余念が無い。

舞台の幕は降ろされているので、観客席からは見えない。

おりんは舞台上へ進み、緞帳の先の観客席へ視線を飛ばす。

いや〜おりんは摩利と違った涼し気な美少女だから、こういった舞台上では映える。

「凛々しい娘役」と言った感じ。タカラヅカ！



2095年10月30日。運命の論文コンペ。

この十二江清姫はこの日を迎えるまで基本的には蚊帳の外であった！

宮内庁への楠葉ちゃんと一緒に根回しは、なぜか先に国防軍の儀礼部が動いていて根

回しどころじゃなかった。

それ以外にも十師族は国防軍との協力関係を結び義勇兵、パラサイト対策の提供などありとあらゆる協力をしていた。

東は国防軍中心、京都や大阪では十師族の魔法師たちを配置した。

101旅団の魔装大隊がもたらしたパラサイトの身柄、そして大亜連工作員の行動、そして第三勢力の暗躍。

それはこの日を迎えるまでに、いくらか削がれていた。

現存する国立魔法研究所にはパラサイトに憑依された人々を収監し、回復可能か調査している。

国防軍、宮内庁、厚生省等複数の行政組織が「縄張り争い」をする形で十師族の介入を防いでいる。

「パラサイト」を厚生省&宮内庁が囲い込みつつ、国防軍が研究する主導権を主張し十師族がそこに嘯んで来ようとするのが、厚生省が「部外者による接触は不当主張である」と国防軍に言いつつ、宮内庁もそれに同意しつつも九島への優遇案を出したところを国防軍が「公平性に欠ける」といい、他の十師族への目配せも忘れない。

なに？縄張り争いつて？と今の今まで馬鹿にしていたが、縄張り争いの副次効果をこんな感じで見せられると自分の黒幕ぶりの底の浅さに打ちのめされる。

◆ 101旅団はこの事件の主導権を握っている。

「本作戦は101旅団を主力とし、作戦参謀本部の立案にて実施する。情報部にはすでに主要都市での情報収集の任に…」

壇上の偉そうな軍人さんが朗々と作戦の主旨を説明する。

10月上旬。

かつて皇軍とか近衛とか名乗っていた残滓、「宮内庁近習備」として一部残る古式の魔法師立達、つまりは呪禁師や陰陽師、修験者、星読みと言われる「古式中の古式」の連中は作戦のオブザーバーとして参加し、私も当日の天候操作の任もあり作戦説明の会場にいた。

数十人はいる会議室では近習備のお歴々（聞いた話だと中には軍属もいて階級は少将だとか中将だとかになるらしい）や、十師族からは代表して一条と九島、国防軍の幕僚連中、そして一校の後輩たちも数人混じっていた。

今回のパラサイトの件は、国防軍だけではなく古来よりの国家鎮守の妖魔退治を任とっていた近習備もノリノリで参戦している。

特に年若くも実戦経験の少ない者たち、つまりは私の隣に座っている娘だったりする。

「キヨお姉、本気出してよ、当日は」

ジト目で釘を刺すのは獅子王院楠葉ちゃん。

日本人形を思わせる美しい黒髪に白い肌。

司波深雪ちゃんとも双璧を張る美少女であるが、どうも私の手抜き癖を知ってか作戦説明が終わった時に一言言われた。

楠葉ちゃん自身も「近習備」の一員であり、血統という意味では古い家柄の中でも一段上である。

彼女の家は古い家でもあるが、国防軍への一部兵站の共有をになうロジスティック企業でもある。

そのため国防軍系の情報も多少なりとも彼女の耳に入ってくる。

「支援課第二班なんて木っ端部署の情報なんて見落としていた」と言っていたので関重蔵の所属していた第二班というのはそういう部署だったんだろう。

この10月上旬時点で十師族も古式も国防軍も警察組織も行政も大亜連、パラサイトへの対応へと方向性は合致しており、その中での些細な権益競争はあるものの遺恨を残すほどのことはなく、概ね順調であった。

その順調さの原動力は2周目転生者の各派閥への工作だった。

十師族には四葉光夜や藤林奏、五輪鳴門。

国防関係には関重蔵、黒羽竜也。

古式には獅子王院楠葉ちやん。

うん、2周目転生者達の用意周到たるや、1周目の私や真人の出番は無い！



「第一班はエントランス、第二班は建物外部、第三班は施設内。各班は巡回順路を確認。第四班は待機だ。これを30分で順に行う。巡回は二人一組だ」

割り当てられた大会議室では警備班を目の前にじゅうもんは今日の基本行動を説明する。

人越しでもあのデカい体はよく見える。横にいるはんぞーくんの細いこと細いこと。

次の女装ははんぞーくんだな。

いや〜発表準備は達也きゅんにお春(ジェットスクーター娘小早川千秋の姉)、鈴音もいるのでいったん抜けて警備班の様子を見に来た。

真人も真面目な顔をして話を聞いている。

鼻屑無しでも真人はイケメンだが、一校の美男子ランキングは今年に入ってから大きく変動した。

今まで女子たちから「なんかいいよね〜」と言われていたはんぞー君が大きく順位を下げ

6 か月1位だった沢木碧ちゃんが3位圏内からはじき出された。

1位：四葉光夜

女子の声としては「カッコいい」「ザ・美形つて感じ」「見てる分には良い」「見てる分には綺麗」「話しかけられたくはないが綺麗」「目を合わせたくないがカッコいい」「カッコいいが付き合いたくはない」「中条さんは偉い」「中条ちゃんは凄い」「中条さんが生徒会長なら安心」

2位：司波雪光

女子の声は「カッコいい」「中性的だけど男の子らしさがあっていい」「可愛い」「ちょっと手の届かない感じの男の子」

3位：黒羽竜也&司波達也

女子の声は「私は黒羽君派」「司波君派だけど深雪さんが怖い」「派手さは無いけど見飽きないイケメン」「たまに前髪をオールバックにしている黒羽君萌える」「達也君もオールバック見たいけど、その話をするとう深雪さんが怖い」「光井さんが凄い。深雪さんに負けてない」「深雪さんの血縁にしては地味だけどカッコいい」「深雪さんは竜也君の外見褒めると同意するだけだけど、達也君の外見を褒めると「当たり前です!」とテンション上げるのはなぜ?」

4位：久慈灘幽玄

女子の声は「性格きつそうだけど綺麗」「性格はきつそうだけどカッコいい」「メガネ姿に萌える」「クールな感じ」「狼谷君とセットで見ると創作意欲がわく」

同率4位：吉田幹比古

女子の声は「知的な感じでカッコいい」「スタイルが良い」「顔小さすぎ」「腰細すぎ」「手足ながい」「スタイルの良さで女子に喧嘩売ってる」

5位：沢木碧

女子の声は「イケメン、スポーツマン、一科生で性格優しそう」「裏ファンクラブがいるのが強い」「名前呼ぶと怒るのは可愛い」

「沢木君ならワンチャンありそう」

居並ぶ警備班の面々の後ろから集団の前で、警備の意義について語るじゆうもん手を振る。ブンブンと。

「んんー」

一つ咳払い。怒られちった(笑)

ある程度事情を知る者、つまりは私や十師族の血縁者、各校の生徒会役員などが今日の作戦を聞かされている。

つまりは「魔法科高校の論文コンペを餌にパラサイト残党を集めて捕縛又はせん滅を行う」というものだ。

作戦立案に際し、パラサイトの一部捕縛における敵勢力の弱体化が今回の作戦にGOを出させた。

作戦説明の時に天下の四葉の光夜様が壇上の将校に聞こえるよう、舌打ちをし会議場を凍らせた。

後ろに回った楠葉ちゃんが光夜くんの後頭部にチョップを入れて「失礼した」と謝らせて何とか会議は続行された。

悪い方向に事態は舵を切られた。

つまりは「敵を引込せん滅させる」という作戦の選択だ。

魔法科高校生や各重要施設の間人を「極力安全を確保しながら餌」として扱うというのだ。

その中であーちゃんがいるのだから光夜君もおこである。

「キヨ」

「今日は警備班?」

声をかけてきたのは摩利だ。

「まあ、真由美の護衛といったところかな」

「で肝心の真由美は?」

「向こう」

視線を飛ばすと、白い礼服用軍服姿の藤林響子と立ち話をしている。

「十師族のアレコレを聞かされてもな。あたしは二十八師補でもなければ百家でもないしな」

困った顔で嘆息一つ。

そうよね、十師族の腹の探り合い程面倒なものはない。

藤林響子もまゆみんも笑顔で話しているが言葉の節々が「九島の独走」だと「七草も手勢を？」と妙な探り合いを始めた。

楽しそうではあるが、九島と七草なんて地雷に触れたくはない。

「それで摩利は避難してきたわけか。でも彼氏と結婚すれば百家だから今のうち顔つきしておけば。千葉摩利さん」

!!!

将来の名前で呼ばれて顔を真っ赤にする摩利。

擬音で「ボン！」と音がして頭から湯気が爆発するイメージが見える見える。



開会までもうあと10分。

会場内のエントランスをふらつきながら転生者メンバーの配置を思い出す。

今日の布陣は！脳内ドラムロールを鳴らすのだ！

♪ダラララララララ♪ジャン！

【横浜・論文コンペ組】

四葉光夜：「いや、特段ないな」

司波雪光：「諸々の準備がなければ情報収集でも活躍してたし!!」

久慈灘幽玄：「インタビュ―？ 姐御、結構暇だよな」

黒城兵介：「来年は発表する側を狙おうかな？」

萬真人：「また警備……」

十二江清姫：「私！」

【横浜・魔法協会関東支部】

黒羽竜也：「光夜！雪光！ほのかさんの身柄はちゃんと守れよ！いいか守れよ！」

藤林奏：「ふふふ」

四葉夜天：「うふふ」

アーデル・フォン・羅門：「やつらぶつ殺してやる」

【一校】

緋村武心：「よっし！じゃんけん勝った！虎退治ゲット！」

ミシエル・フィリオ：「あー、中華街でごはんしたかったー」
 狼谷一樹：「俺が引率担当か」

【京都】

高村マリア：「法楽！うろちよろしない！」

鬼一法楽：「じゃんけん負けた〜」

七海奈波：「カチューシャがいるなら安心」

五輪鳴門：「カチューシャがいるなら安心」

獅子王院楠葉：「カチューシャがいるなら安心」

仙波冬彌：「カチューシャがいるなら安心」

【その他】

相馬新（関重蔵）：前日から姿が見えない。怪しい。

須田渉

「今日は自宅待機だね！戦場？無理無理！死んじゃう！ほら、情報収集で活躍したじゃない！無理〜」

エイプリルフル企画：ぼくのかんがえた・・・

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せ

よ
閉みじよ。閉みじよ。閉みじよ。閉みじよ。閉みじよ。閉みじよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

—— 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！

・関重蔵

適用クラス：アサシン、アーチャー

fate未修者だが何となく七騎のことは知っていたので「アサシンね、小次郎だっけ」と発言。

聖杯戦争のことはよくわかっていない。

雪光に「トラックの免許持つてる？」と聞かれる。

・四葉光夜

適用クラス：セイバー、キャスター

自分の適用クラスの「セイバー？」に訝しむ。

fateシリーズはアニメ履修。

マスターとの相性としては誰でも大丈夫だが、常に「あずささんではないのか」と思っている。

中条あずさがマスターなら令呪無くてもなんでも命令を聞いてくれる。

・司波雪光

適用クラス：セイバー、ライダー、キャスター

取り敢えず「問おう、貴方が僕のマスターか」と言うことだけは決意。

四次聖杯戦争での召喚を希望している。

原作知識を最大限使おうと考えているが、今ひとつキャラクターの真意理解度が低いのでどうなることやら。

・藤林奏

適用クラス：キヤスター

「第五次は槍×弓、第四次は槍主従。このカップリングに合算で15万は使った」と断言。逃げて槍の人。

・黒城兵介

適用クラス：ランサー、キヤスター

「f a t e? ああF G Oの原作ね」といった認識。

最初の人生で病院暮らしが長くスマホでのソーシャルゲームをしていないのでよくわかっていない。

「ライダー?! 誰!？」とライダーを仮面ライダーと勘違いしている模様。

性格が屈折しているマスターに召喚されるとマスターの性格が矯正される能力がある。

・川村エカテリーナ

適用クラス：キヤスター

「私の時代が来た!」と絶叫。

黄金律（金・身体）、キャスターC++の能力が十二分に発揮。

本人的にはどの聖杯戦争でも行ける！と思っっている。

遠坂凜に召喚されると戦闘よりも金銭面でのフォローが中心になることが決定している。

・タツヤ・クドウ・シールズ（黒羽竜也）

適用クラス：セイバー、キャスター

「月箱」を理解する程度の方アン。FGOには総額でちよつと引かれる金額をぶっこんでいた。

「龍之介だけは勘弁」「神父も嫌だな」「俺が第四次聖杯戦争で桜ちゃんを助ける！」と一

番ノリノリ。

・緋村武心

適用クラス：セイバー、キャスター

「セイバーでよくない？キャスターなら使いものにならないと思う」との言。

・鬼一法楽

適用クラス：セイバー、バーサーカー

「え〜バーサーカー？奈波の方がバーサーカーじゃん」と発言し奈波に脛を蹴られる。

・七海奈波

適用クラス：キャスター、ライダー

普通の女の子枠なので、どのマスターに召喚されても最初は「ドン引き」からスタート。

途中から「いい加減にしなさいよ！」とプチ切れ始めて無双を開始する。

確実にケイネス先生の顔芸で「キモイ」と言ってしまうと思う。

・五輪鳴門

適用クラス：アサシン、キャスター

アサシンで召喚されたら確実に五次キャスターを「おばさん」と呼んでしまう。

・獅子王院楠葉

適用クラス：キャスター

「四次なら龍之介、五次なら先生か」と理解。

本人的にはどっちでもいいが、速攻古式魔法で洗脳する気まんまん。

ただ士郎のご飯は食べたい。

・仙破冬彌

適用クラス：キャスター

「エクストラ世界でランサーと釣りしたい」と希望。

「あ、そうなると五次の召喚必須か」と推察し、先生と結婚しないといけないのか悩む。

・アーデル・フォン・羅門

適用クラス：キャスター、バーサーカー

「四次なら速攻ジジイぶつ殺す」「五次なら速攻神父ぶつ殺す」と発言し

周りから「バーサーカーで召喚されたら逆に狂化で性格矯正してくれるんじゃないか」と期待されている。

・狼谷一樹

適用クラス：セイバー、キャスター、バーサーカー、ライダー

適用クラスが一番多いのはビックリ。

士郎と組むと、士郎の無銘人生が少し変化する。

イリヤにワンワンと言われてニヤけるのでロリコン疑惑が湧く。

「プリズムイリヤは見ていたけどロリコンじゃないんだ!」

・久慈灘幽玄

適用クラス：キャスター

確実に切嗣、言峰神父と喧嘩する。士郎とも喧嘩する。凜とも喧嘩するしワカメとも喧嘩する。

必ずマスターと喧嘩する。

ただし、間桐桜には優しい。第四次聖杯戦争に召喚されると虚空に向かい「ウロブチ

〜!〜」とよく叫ぶ。

・ミシエル・フィリオ

適用クラス：キャスター、バーサーカー

女子のマスターと相性が良い。逆に若い男子マスターとは今ひとつ相性が悪い。ウエイバー君はミシエルとのラッキースケベ被害要員になる。

「川澄さんだ〜」とセイバーに話しかけること必須。

・周公瑾（憑依転生）

適用クラス：キャスター

「ははは、速攻自害して座に戻ります」

・須田渉

適用クラス：アーチャー、キャスター、ルーラー

「ルーラー希望。他は嫌。絶対嫌」と転生人生でもつとも真剣な顔で召喚担当の神に圧力をかける。

さらには「チートで、ギルガメッシュと同じ能力で原作知識もりもりで、幸運EXつけてね。絶対だよ絶対」と担当神にネチネチ言っていたのを目撃されている。

人嵌めるなら色恋沙汰

「でさ、いつまでここにいりやいいの？」

茶室で横になつて寛ぐ少年。まるで虎だ。それも美しく若々しい虎である。その虎が暇を持て余している。

茶室に客として迎えられたのは古式魔法の大家から使者として訪れた京都府の府職員だった。

フレームの太い眼鏡に、やや安めのスーツ。体格はあまり運動していないのかややふくよか。

顔の白さは病的というよりも優雅とか俗世間との距離を感じさせる。

この中年男性も古式魔法師であり、地方自治体勤めの魔法師としては屈指の一人でもある。

「鬼一様には窮屈かとは存じますが、まもなく結界役による索敵も終わりますのでお動き頂きたいのはそこからですね」

転生者たちの京都での前線基地。

獅子王院の京都の屋敷。

来訪した府職員を応接用の茶室に通したのは年若い、それでいて獣の空気を纏う体格の良い少年だった。

鬼一法楽。剣術の名家。この1000年で収斂された現代剣術とは違う、人の血で積み上げられた戦場剣術。

そして古式魔法と密接に絡む1,000年の名家。

その若き次期当主は府職員を茶室に案内し、簡単なから見事な茶を点て振る舞った。府職員が茶を飲むと「応接終わり」と言わんばかりに腕枕で横になり、詰まらなそうな態度を見せる。

京都に住み名家の魔法師たちは鬼一家を重視する。

「現代剣術」に対抗する伝統の殺人剣術。それを今に伝える鬼一家は古式魔法師たちにとっては現代への抵抗の印の一つだ。

茶室のふすまが開くと、一人の少女が入室してきた。

法楽の隣に座り法楽の頭を叩く。

叩かれた法楽は教師に叱られた生徒のように姿勢を直す。

「本件において遊撃隊を指揮いたします高村マリアでございます。お見知りおきを」

綺麗な正座姿で深く一礼をする少女。

美少女と言っているが編み込みの黒髪は茶室よりも格闘技のリングの方が似合うだ

ろう。

(あちらが虎ならこちらは羅刹女といったところかな)

「ええ、清水寺の方からお名前はお伺いしております。高村様も相当の腕前で」

お世辞にならぬお世辞と裏腹なことを府職員は考える。

古式魔法師、特に京都の魔法師たちは自分達の事を地名や古刹に例えて話すことがある。

清水寺の方、東山殿、蜂岡山様 e t c

忌み名を使う魔法師は「京都式」と言われている。

「若輩なれど、京の地に妖魔が跋扈するのは日ノ本の術師としては屈辱です。そうならぬ様全力を持って対処いたします」

顔を上げる高村マリアの目つきに府職員は気おされた。

(16歳の小娘とは思えん)内心で汗をかきながらも、居住まいを崩さなかったのは年長者であることの小さな矜持によるものだった。

「俺はチャンバラ出来ればいいんだけど」

前世では77歳まで生き、古式の剣術継承で苦勞した法楽としては、折角自由に動ける現世ではやりたいことを小声でこちた。



「絶対、魔法科高校には入らない」

「絶対入るよ。奈波、きつと入る」

カジュアルな服装の七海奈波は暗い顔して、隣にいる楠葉に宣言する。

その宣言をさらつと否定すると楠葉は手元のタブレットで現在の京都市内の交通情報を確認する。

奈波の方を見ずに、日本魔法協会本部周辺の車両の交通状況を注視する。

(会うたびに聞かされるのもね)

奈波は転生者に会うたび、「今度は絶対魔法科高校にい入らない」と文句を言っているので聞かされる方は飽きている。

前世では奈波と楠葉は長い付き合いであり、親友と言っても良い関係だった。

元氣とミーハーを形にした奈波と、伝統と現代の魔法文化を担う楠葉は妙に馬が合った。

転生者として前世の知識を持つ楠葉はその秘密を一校卒業時に奈波に打ち明けたが、態度が一向に変わらない奈波に安心しつつ「鈍感か？」と疑惑もあつたりした。

「琢磨のお守りどうするの？一校いったら暴れる・・・前に光夜先輩に黙らされるからいいか」

奈波の徒弟を引き合い出したが、彼が一校に入つて暴れようものなら光夜なり雪光な

りぐうの音も出ないほど凹まされるのは想像に難くない。

獅子王院の京都邸宅の地下にある応接室。

企業案件用に造られている部屋であり、会議机と応接用ソファのある二部屋続きのスペースだ。

会議机のあるスペースでは複数のモニターで京都市内をモニタリングしている。

また既に西日本魔法師連絡会や獅子王院京都本社、五輪鳴門の知己の「忍術使い集団」からの情報もモニターに流れている。

ソファでは奈波が「2095年度 制服の可愛い高校」というwebカタログをタブレットで見ている。

見ているというか睨んでいる。

「ユキ君いるもんね〜」

「馬鹿、やめとけ」

アツシユグレイの髪。中学2年生の仙破冬彌が少し茶化す様に奈波に声をかけるが、五輪鳴門が頭を抱えてそれ以上言葉を続けない様注意する。

冬彌は前世の高校卒業後は即座に宮内庁関連のスカウトで新陰陽寮へと参加した。

そのため、雪光と奈波との繋がりには数年間開いており、二人の恋愛遍歴にはあまり巻き込まれていない。

逆に鳴門は四葉の弱み探るため、七海奈波と雪光の恋愛を「諜報の対象」として追っておりおおよそのことは知っている。

その諜報の対象である奈波（一度目の離婚直後）に身辺調査をしていたことを知られると、諜報員は奈波に拉致され八丈島沖での海洋調査に3週間従事させられた。

諜報員からは「あの人、軽く海賊ですよ」と報告を受けている。

八丈島沖に現れた国籍不明かつ機関銃武装した船舶二艘を「七海の想弾」にて沈没させている。

冬彌に向かってソファに備え付けの皮張りのクッションが思いのほか剛速球で投げつけられた時に高村マリアが入室してくる。

「ほら、ブリーフィングやるよ」

一緒に法楽も入室するとマリアは会議机へと向かい、モニター前に陣取る。

司波達也より下の年代は川村エカテリーナという人物をそれなりに尊敬している。

一代で億万長者となり四葉へ対抗した個人。

物語の司波達也とは全く違う人生設計ながらさながら偉人の如き人生。

億万長者であり、亡命者の生活を助ける機関を作り、亡命に関する法律の改定、新口シアとの長期にわたる闘争。

楠葉にしてみれば一個人で近習備に殴り込み

鳴門にしてみれば一個人で内閣情報局に殴り込み

奈波にしてみれば一個人で北海道開発局に殴り込み

冬彌にしてみれば一個人で宮内庁に殴り込み

法楽にしてみれば一個人で古式魔法の大家の家々に殴りこむ。

カナデがカチューシャを「精密運行する暴走機関車」と評したことにみんな納得している。

「まもなく正午。私たちは広域結界と広範囲射程の魔法で京都全域をコントロール」

その言葉に室内の全員の視線がマリアに向かう。

皆余裕はあるが真剣な表情だ。

「ホットスポットには法楽と奈波ちゃんを投入。鳴門は現場で遊撃。フオローと索敵よろしく」

法楽は肩を回し、奈波は少し不服そうな顔をし、鳴門は拳を握り指の関節を鳴らす。

「改めて言うておくけど、横浜は向こうの高校生どもに任す。京都は敵の投入戦力は多くないが横浜に比べると広範囲。それに京都という土地柄、古式の結界が至る所にある。それを上手く使えるのは一校のあいづらよりも私たち。いい、横浜を外された二軍なんて思わないで。雪光と兵介が走り回ったら神社仏閣が滅茶苦茶よ」

最後はため息。

「たしかに」と冬彌が笑う。他の面々もクスクスと笑う。

マリアは全員に顔を見る。

「じゃあ仕事を始めましょう。今回の騒動の経費は重蔵持ちよ」

その冗談に皆笑える程度には荒事には慣れていた。



八辻の柳

鳴門の持つく忍術>である。

自分の木霊を街の「辻」に放ち、その木霊の視界内の映像を共有する知覚魔法である。忍術に分類される魔法は「幻覚」「知覚」に類されるものが圧倒的に多い。

「京都駅付近にはパラサイトはいないね」

京都駅ビルの喫茶店。そこには情報端末とCADを同期させていた鳴門が一人コーヒーを飲んで待っていた。

雪光謹製の「パラサイト感知器」である。

と言っても即席であり、これが使ええる人間は少ない。

情報次元でのエコー装置に近く、その取扱いについては転生者でも一部しか使えない。

現代魔法師より、想子について感覚的な認識の古式の魔法師方が向いている。

前世の世界では現代魔法師の藤林奏やカチューシャはこの装置の利用に手を焼いたことがある。

このチームでは目であり連絡役の鳴門がパラサイトの判別を行うこととなった。

京都は平常であった。一校での十文字襲撃、三校襲撃は他所のことである。

可能性の低い襲撃に備えるべく厳戒態勢を引くという判断を京都府は行わなかった。

観光地での人員の移動制限は生活に直接響く。

勿論それには「敵」を引き入れるための舞台づくりとしての意味もあった。

数日前から街中には九島の魔法師、古式の魔法師、そして国防軍が人の目に極力触れずに溶け込んでいる。

と言っても国防軍については小隊規模で公共施設（京都駅や、観光センター等）に分散しており危急の際は現場に急行する手はずになっている。

目や耳は九島と古式、手は国防軍といったように分担して警備にあたる彼らと違い、目も耳も手も独自に運用する「遊撃隊」はその行動制限は無いに等しい。

西日本の伝統派を本来の古式魔法師として正道に戻した高村マリアを筆頭に遊撃隊を構成する誰一人特別でないものはいない。

少人数ながら、現時点で西日本最高の即席チームである。

USNAの工作員の京都侵入。

結界のほころびと想子反応により、異国の魔法師と怪異たちが京都の地に入り込んだことは間違いなく、あとはどれだけ具体的に位置を特定できるか。

遭遇戦の先手を取る作業が、古式、九島、国防軍、そして遊撃隊で同時にかつ分散し、共有しつつ行われていた。

ただし各組織の手の内は十全には明かされておらず、「転生者」という最大のアドバンテージである未来で結実する最新技術を秘匿しながら遊撃隊は捜査を続けていく。

技術の秘匿については誰一人異論はなかった。

単純に「新製品」として出すことは可能だがそのコア技術や理論については現行の世界のバランスを崩すものばかりで、おいそれと出していいものではない、という結論だった。

(アーク・リアクターの再現って今やるとまずいよな〜)と鳴門は脳内で現時点までの状況を整理する。

早々に五輪を掌握し、内閣情報局と連携し日本の諜報・防諜を手に入れる。

それが鳴門の今の目的であり、前世で出来なかったことでもある。

現在の四葉と九島を凌駕する十師族の筆頭に五輪を据えることだ。

(関さん邪魔だな〜)

前世での2105年、鳴門の動きを早々に察知した関重蔵は、村井少将と共に行動し

五輪、特に鳴門にハニートランプをかけて

首輪をつけることに成功した。

4年近く時間をかけて、一人の女性を鳴門に近づけ結婚をさせたのだ。

鳴門は2歳年上の女性。まんまと嵌められた。

2111年に結婚祝いで連れていかれたレストランで、会う予定のなかった関がいたときに人生に枷を嵌められたことに気付いた。

「人嵌めるなら色恋沙汰」と言われた時は愛妻から受けた裏切りよりも諜報員としての経験と組織力で完敗と感じた。

鳴門の動きや鳴門が作り上げた組織は関重蔵に筒抜けであったし、そこから村井少将によって裏から良いように扱われたこともあった。

結局妻とは離婚できず、ズルズルと結婚関係をつづけた。女性は任務とはいえ、夫となった鳴門に少なからず夫婦の愛情はあったようでもある。子供も設けたが晩年は接点が無くなっていった。

鳴門は一度だけ、死ぬ前の関重蔵に「あんたに嵌められて楽しい人生だ」と嫌味をいつたところ「人の後ろ暗いところを好きで嗅ぎ回ってるんだろ。それが自分に跳ね返っているだけさ」と言われた。

その時の関の表情はいつもの軽い笑顔ではなく、言葉とは裏腹に真面目な顔だった。

関重蔵のプライベートや子供の情報を漁ろうとしても、作業員が死ぬばかりで、後ろ暗さをねじ伏せるだけの実力に嫉妬と尊敬のない交ぜの感情を持つに至った。

(今回はカナデさんが早期リタイアさせるだろうから、大きく変わるな)

前世での悔いは現世で晴らせそうだと鳴門は思う。

(四葉は今回の件が片付けば円満に終わる。光夜さんあたりか竜也がトップについてお終い。関さんはカナデさんが退職させるからオサラバ。雪光はどうせ七草のお嬢さんのお尻追っかけるだけだからヨシ。同年代以下はどう動いても裏稼業には顔出さない。夜天さんの面々は…わからないがああ反応を見る限りは手は出してこないだろう)

数日前、久慈灘幽玄から連絡を受けてあるデータを渡された。

「お前は五輪の縁者だろう。前世で世話になった。これを渡すから五輪滲の治療に役立てろ」

幾つかの薬のリストと、そこから発展的に調薬された新薬の組成データだ。

「これを服用すれば31歳じゃなく、70歳までは生きれるだろう。体調さえ気をつければ出産も可能だ」

五輪滲、鳴門の家族だが鳴門としては忠誠を誓うただ一人の女性。

車椅子に座する公開された戦略級魔法師。12使徒のひとり。

虚弱な体質のため、年々行動範囲は狭まっていく。

軍務で長距離を移動するがそれも出来て年数回だ。

鳴門が裏の道に進み、五輪家を存続させたのはこの五輪滞への忠誠が全ての根源でもある。

「みんな見習って気楽に生きるのもいいか」

手元の情報端末のディスプレイに視線を向けて、独り言ちる。

五輪鳴門は本当に自由に生きることとはと、数秒思索した。

コーヒーは冷めている。



鳴門の探索結果を受けて奈波と法楽は京都駅から離れた。

奈波はスカイブルーのスクーター、法楽は大型バイク。

といっても現在は電動が主流なので、液体燃料ベースの車両の流通数も2000年代

初頭より減っている。二人とも電動ではある。

京都太秦。その地域に入ったところで適当な駐車場に停車させる。

法楽は布に包まれた大太刀CADを背中に背負う。

「なく、よう」

「あんたホントに人の名前呼ばないわね」

「会話できてるからイイじゃん」

「奥さん逃げたのそれが理由よ。ちゃんと観月さんと呼んであげないと。40過ぎてから結婚してくれたんでしょ。あの雪だつてオイとかなくみたいには呼ばなかったのよ。それをあんたは、どうせオイとか名前呼ばないんでしょ。結婚したからつて別にあんたの付属品になったわけじゃないだけだよ。ちゃんとその辺わかつてる？わかつてんの？」

「その話はすんなよ…マジで…」

「そんな態度だから2年も家帰つてきてくれなかつたのよ。ちゃんと謝つた？ねえ、ちゃんと一緒にお墓入つてくれたの？」

駐車場から出て、二人は歩きながら話続けながら周囲に目をむける。

京都での戦闘は戦闘車両が動き回ることは無く、人々による近接戦闘が中心になると思われていた。

大亜連の主力は横浜。

逆にパラサイト、この場合はCIAから飛び出した情報センターの尖兵たちが京都の魔法協会本部襲撃の主力と思われる。

その読みは当たっており、京都の町は普段と変わらぬ様子を見せていた。

「時代劇の町太秦」というのはいくつかの元号が変わった現在では、意味が変わっており戦国期や江戸時代を模した屋外セット以外に明治大正昭和平成などの屋外セットも組

まれており一大映画街の様相がある。

通りには昔の俳優・女優たちのブロマイドが掲げられ、土産物屋の軒先には3Dの立体画像で亡くなった俳優たちが店番をしている。

「京都本部からちよつと距離あるわね」

2020年代を代表する美形俳優の3Dパネルを見ながら奈波は情報端末を弄る。

情報端末に写された地図には現在地から魔法協会本部へのルートが示されている。

徒歩での所要時間は55分。車両で17分。

京都の車両移動はマニュアル運転以外だと意外と時間がかかる。

東京中心部よりもオートモビリティの設定が複雑で公共道路での自動運転の速度は西日本で一番遅く設定されている。

安全対策という面強いが、都市伝説では京都の滞在日数を稼ぐ観光協会の陰謀説がネットにはある。

そういったこともあり、京都の中を自由に移動するには自転車かバイクが一番よく、オートモビリティを利用しない観光客は目立つ。

遊撃隊の二人は速度を重視してのバイクだがパラサイト達が同様にバイクとは考えづらいというのは鳴門の意見であった。

パラサイトのセーフハウス強襲以来、パラサイトの足取りはつかみづらく、極力目立

たぬように動いている。

そう考えると移動に関してもオートモビリティの利用を最適と思われ、探すとすると人込みやオートモビルのある各駅近くとなる。

「この辺りってどっかのセーフハウスでもあるの？」

奈波は情報端末に話しかける。

「その辺りの寺社の結界が歪んだとの報告があつてね。鳴門の探知も太秦方向で一致している」

マリアの返答。

「じゃあ、そこに誘導をよろしく」

店先の3Dモデルに手を振りながら奈波は誘導を求める。

周囲には平日ながら観光客がまばらに歩く。

13時10分を過ぎたところだ。

◆

獅子王院家の会議室でモニターチェックしていた冬彌が最初に気付いた。

「嵐山から情報。数8」

「冬彌」

「アイマム」

「嵐山には？」

「九島の主力部隊が展開」

「陽動でしょうけど、騒ぎになると面倒ね」

「マリアは口元に手をやり数秒考えこむ。」

「この手の戦術判断は重蔵や光夜、竜也、達也の範疇と思われがちだが劣らずマリアも荒事には慣れている。」

「USNAの最大手銀行から発注されたウェットワーカー、いくつかの大国から送り込まれた殺し屋、資本家を狙う社会共産主義者気取りのテロリスト、その悉くを逃げ切り、倒し、生き抜いてきたマリアの前世は表と裏を行ったり来たりする人生でもあった。」

「USNAのセーフハウス代わりがスターズの少将とアンジーシリウス少佐の家なので大抵の悪党は手を引く。」

「たまに元四葉の当主だった女性が安物の普段着でドアの前で待ち構えていたことを何度も見た。」

「日本では四葉本家やカナデの家に転がり込むことが多く、複数の死神に狙われる状況の割には平和でもあった。」

「何か数値は示している？」

「計測値が奇妙だね。現代魔法にはない」

モニターを冬彌が指さすと横から楠葉が顔を出す。

確かにモニターに表示されるサイオン量や周辺濃度、その他の魔法師の専門用語を指し示す数値が、並列して表示されている嵐山の先月平均と大きく違っている。

「奇門遁甲だね。方位をずらす系じゃなくて、守備陣だから範囲地域内での使用魔法に増減ポイントが発生するやつ」

奇門遁甲は「方術」以外にも戦陣としての意味がある。

一説には砦を中心に組まれた柵の配置方法という意味もあり、特定の侵入方法を知らないと砦にはたどり着けないことから

侵入者を惑わす方術という捉えられ方をされており、実際方術士たちは戦陣としての奇門遁甲と同様の使用ができる方術を生み出した。

それが方位をずらす「奇門遁甲」の起源とも言われる。

楠葉が喝破したの方位をずらすのではなく、範囲内の特定の地点では特定の分類される魔法の効果を弱め、また特定の箇所では魔法の効果を微増させる効果を持つ、方術「奇門遁甲」である。

彼女の実家は呪禁師と呼ばれる古来からの防御魔法を司る一族でもあり、この手の陣については造詣が深い。

「対応方法は」

「マリアは視線を楠葉に向けずモニターから視線を外さずに聞く。
「現代魔法の方が良いわね。古式だと呪殺合戦になる」

概略ではあるがマリアの求めるに答えに合致した言葉を伝える。

呪殺合戦は京都の地ではデメリットが多い。

下手な神社近くで行うと地脈の干渉で、術者に倍返しで帰ってくる。

もつと不味いのはこれだ。

「あと嵐山は応仁の乱の影響でたまに怨霊であるから古式の魔法使うと大惨事になる」

「つい最近の?」

「そう、つい最近」

冬彌が軽く聞く。楠葉は真面目に答える。

笑い話。

「国防軍に連絡、対古式ではトラブルが起きる地域なので現代魔法で上手くやるよう伝えて。楠葉、そつちのフォロー」

即時冬彌は手元のコンソールを動かし、国防軍へのチャンネルをオープンにし、依頼内容を伝える。

「私、現地向かうけど大丈夫」

後衛組から一人外れることでの、補助要員の不足。それを心配しマリアに楠葉は視線

を向ける。

「冬彌が残っているから働かせる」

「マリアは少し笑うと冬彌に視線を移す。

「まあ、働かせないとサボるからね」

「え〜」

楠葉は冬彌の不満の声を背中に聞いて会議室を出た。

アンジエリーナ・クドウ・シールズことアンジー・シリウ ス少佐

「あれだ」

「そうなの？」

13時27分。

横浜の状況について報告を受けつつ、法楽と奈波は指示を受けた寺に到着した。路地のすき間にある小さい寺。本尊があるとされる小さな本殿。そして賽銭箱。

境内というよりも建物の空き地といった印象が強い。

奈波の腰の高さまである石碑には「小倉百人一首」や「三条家」といった文字が読み取れる。

寺の周囲を見て回ると、赤いモビリティが駐車している。

乗車しているのは男性が二人。虚空を見たまま身動きをしていない。

奈波は少しだけ胡乱な視線をモビリティに向ける。

「ゲータじゃ間違いない」

法楽としては断定のつもりで言ったわけではないが、話し相手の即断を少し甘く見て

いた。

「じゃ、やるわね」

「おい！人払いがま」

奈波の手元に一つの光の弾。

球体が潰れ楕円状に変化し、楕円状から更に伸ばされ潰され、楕円状というより尖端の光の槍だ。

法楽の制止を気にすることもなく奈波は槍を投げつける。

光弾発生から投擲まで1秒未満。

人のいない境内の出入口からで、人の目に触れることはない。

七海奈波の想弾は一種のBS魔法、つまり個人の能力由来の物である。

それが科学的に立証されたのは20歳の時の研究結果でそれまでは第七研究所の研究の結果と思われていた。

七宝の群体制御に類似した特性のため同一視されていたが、七宝の群体魔法の技術とBS魔法がまじりあい至境の魔法へと昇っていた。

奈波の視線に沿って鋭利な光の弾がはるか先の赤いカラーのモビリティのタイヤに穴をあける。

光弾の弾道は一直線ではなく障害物を巧み避ける。

奈波の「想弾」は視線と連動する。その弾道は視線誘導の為直線ではなく、自由に動かすことが可能である。

高速で動く光弾は奈波の視線により地面すれすれを飛行し、目に触れない。

昼の京都。観光客は少なくない。しかし多くもない。

人の目に触れぬ路地影の寺からの魔法。

だが、モビリティのタイヤのパンク程度では気にする人間も少ない。

モビリティの二人はパンクを気にしたのか降車する。

1人は禿頭の中年。もう一人は20代。

中年は作業着、20代はシャツ姿。

タイヤのパンク、いや切り裂かれたタイヤを確認すると二人は視線も交えず、モビリティをそのままに歩き出す。

驚きも不思議がる様子もない。その感情の揺れの少なさに法楽と奈波は敵対者と判断した。

「移動開始した」

奈波は一言マリアへ報告の連絡を入れる。



太秦から歩いて15分。

非魔法師には知られていないが、魔法協会の施設は京都に複数箇所ある。

京都という土地柄再開発可能な地域というのは限られており、横浜の様な巨大なビルを建造するわけにも行かず

本部機能を「協会本部ビル」以外に「協会第二ビル」と「京都西資料棟」と分散している。

西暦2000年に入る頃には京都に関しては景観保護の条例を皮切りに、「陰陽」や「風水」に関わる「研究条例」と呼ばれる

学術調査を根拠とした土地開発を制限する時限条例が乱立した。

その煽りを受けてか2095年の現時点でも時限条例から発展した幾つかの京都独特な条例によって大型建築物は制限されている。

その結果として魔法協会の京都本部は「本部機能と大型会議、公式レセプション」「中小会議と専門学術発表」「資料整理と学術調査」で利用できる施設を分けた。

本部ビルと第二ビルは「会議」「レセプション」「発表」といった共通部分もあることから建物同士は徒歩圏内であったが

「資料と学術調査」をメインとなる「魔法協会京都西資料棟」についてはやや離れたところに存在した。

つまりは太秦映画街から少し歩いた先にある「国際芸術文化京都センター」の敷地内

に併設する5階建てのビルである。

◆ 「ZAPPA！」

国際芸術文化京都センターの第一駐車場では、鬼一法楽が大太刀を抜き6人のパラサイトと大立ち回りをしていった。

13時55分に京都センターの駐車場についた時点で、京都センターに待機していた義勇兵の一団と古式魔法師たちが数名のパラサイトと戦闘を開始していた。

「いやほおおー」と叫びとともに、大太刀の鞘抜き捨ての一閃で一人を上下両断。

次の瞬間に死体の直上の虚空を唐竹に割る。

鬼一法楽が納めた秘剣「仏斬り」である。

魂魄を切り捨てると言われ、「是空の太刀」とも評される技。

現代魔法的に言えば「有機物においては霊子を、無機物においては情報体次元での切断をする」という魔技であり、法楽の対パラサイトの切り札の一つでもある。

その一閃で上下両断された人物に憑依していたパラサイトは消滅した。

戦端を開いた義勇兵たちよりも、パラサイトへの直接的な殺傷能力を持つ法楽に多数のパラサイトが群がるのは必然でもあった。

2人、3人と膨れるうちに合計で6人を一人で相手することとなった。

奈波は「義勇兵は誰!」と現状を確認しつつ仲間になる相手の確認を始めた。

この状況下で戦闘の真つただ中飛び込めば同士討ちになる危険性が高い。

「九鬼門下の義勇兵だ!」

ひげ面で戦闘服をまとった男性が自分の所属を明かす。左右の手には拳銃とタブレットCADがそれぞれ握られている

20名近い魔法師たちは車両止や建物の影から攻撃的侵入者に対して牽制として魔法を照射するもの、パラサイト達は事もなげにその魔法を素手で打ち破る。

だが数に勝る魔法師たちは矢継ぎ早の魔法でパラサイトを足止めしている。

この足止めが可能なのも大多数のパラサイトを一人で相手する法楽がいてこそである。

「もつとー!」

大太刀の振るう際に「呼吸」と「指で切る印」により大太刀に想子を纏わせる。高周波と加重の二重行使の高等技術だ。

最小の挙動による魔法の行使を可能とするのはこの特注の大太刀CADのなせる業だ。

「多くても!」

左右ほぼ同時に飛び掛かって来るパラサイトを半呼吸で両断。

そして、即座に見えぬパラサイトの魂魄を「勘」と「気配」で切断する。
「俺はいいんだぜ」

大太刀を肩にかつぎ、腰を落とし構え直すと法楽は己の希望を周りのパラサイトに伝える。

パラサイトに共感能力があれば、その凄絶な笑みに恐怖を覚えただろう。

法楽本人としては朝からのフラストレーションを開放して満足しつつある。

「こちら現場の鳴門。大太刀馬鹿が駐車場で暴れております」

駐車場の向かいのビル屋上から鳴門がマリアに報告を入れる。

「ほっといいいい。奈波ちゃん」

手元のモニターは駐車場近くの監視カメラの映像が映し出されている。

マリアは義勇兵と接触した奈波に報告を求めぬ。

「馬鹿が大太刀で暴れてる」

「それ以外」

(馬鹿と大太刀は一致してる)とマリアは奈波と鳴門の報告の共通を心中で納得しつつ、改めて奈波に報告を求めた。

「九鬼の義勇兵と合流。余剰戦力は無い。7分前に国防軍と九島の義勇兵に応援を要

請

奈波の端的な説明を受けてマリアは会議室の別モニターに表示された近隣の国防軍の移動状況に目をやる。

モニターの京都市街地図には青い点が京都センターに向けて動いている。

「移動している。この調子だと1、2kmくらいだからもう数分」

現状の戦力であれば持ちこたえられるだろうとマリアは判断した。

マリアの思考の中にパラサイトの目的という疑問が浮かんだのは状況を楽観できるからだろう。

資料棟から協会本部ビルにあるメインサーバーへのアクセスを目的にした襲撃か。

だが、パラサイトが情報次元のあなたから来た存在なら、怨霊や悪霊を召喚する呪術を収集した資料棟の第5資料所蔵室を狙った可能性もある。

彼方から自分たちの同種をこの次元に呼ぼうという「種の拡大」を望んだ可能性もマリアの頭によぎる。

「あ、裏門」

京都センターの裏門付近のライブ画像に声をあげたのは冬彌だ。

マリアも裏門の映像を目にすると、自分の情報端末とパーカーを手にした。

「今から行くから、冬彌足止め」

「は〜い」

「鳴門、あんたは監視」

「アイマム」

二人に指示を出すとマリアはそそくさと会議室を出た。

モニターに映るのは赤い髪、秋物のコート、目元を隠すマスク。

20歳ほどの背の高い女性。

アンジェリーナ・クドウ・シールズことアンジー・シリウス少佐であった。



（これは「仮装行列」?!それも範囲展開?）

リーナには坂道と足元の感覚ズレている。

視覚的に察知している地面は、足裏の感覚ではもう数センチ下にある。

彼女の知覚魔法も情報次元レベルでの座標のズレにより十全に機能しない。

この魔法は冬彌の「雪雨」の魔法である。

効果は幻術による認識の誤認。その範囲は情報次元へと波及する。

「四季」のエレメントは「式」であり「四鬼」であり「四神」でもある。

彼の古式としての血統は「格」ではなく「術」に集約されており、その役目は「四神

の器」でもある。

冬、つまりは玄武を守護獣としてその身に宿す冬彌は靈験あらたかな京都の町とは非常に相性が良い。

東京の、特に地形的に靈力の恩恵を受けない八王子ではこれほどのことは出来ないが京都では地形を情報次元レベルで詐称することなど赤子の手をひねるよりも容易だ。赤毛の女兵士は眼を閉じて、知覚魔法を再度展開し情報次元レベルでの周辺感知に注力した。

およそ一分。

サイオン量に対して負担は大きいがりーナは決して得意とは言えぬ「術式解体」を行った。

数秒間の後、情報次元レベルでも現実レベルでも雪雨の効果が軽減される。

リーナは移動魔法を即時展開し、影響ある範囲を抜け出した。

言葉では容易だが、知覚魔法から術式解体の範囲放出、そして一秒の間を置かず移動を行う。

連続使用の継ぎ目を極力感じさせない確かな魔法行使の実力が必要である。

精緻な魔法運用をあまり得意としない、と評されるリーナではあるがそれはUSNAの超一流魔法師が揃うスターズ内の話であり、ごく平凡なB級以下の魔法師と比較すると十二分に精緻な魔法運用であった。

「流石リーナちゃん、このくらいなら抜けるか」

前世で二度、作戦で殺し合いを行った冬彌としてはこの程度で行動を阻害できるとは思っていないかったが、マリアが裏技で現地に到着する時間は十分稼いだと判断した。



「止まって」

（誰？）

裏手の駐車場を抜けて建築物まであと数メートルといった時、一階の非常階段ドアから現れたのは青いパーカーに黒のジーンズ。青のスニーカーの女の子であった。

シリウス少佐の姿であるリーナより少し背が低い。

“ 仮装 ” を解いた実際のリーナと同じだろうか。

編み上げた黒髪の美少女。強く、どこか攻撃性を秘めた顔つきの少女だ。

「アンジー・シリウス少佐。ここは日本の魔法協会の敷地内。一応社団法人の施設で公共施設じゃないから不法侵入にあたるよ」

少女は左手を開きリーナの方に向ける。

（通せんぼね）

リーナは少女と対峙しながらも部下たちが別の経路で敷地内に侵入し、表の駐車場へ

到達したか思案を巡らせたが目の前の少女の気配の強さから、一瞬で目の前の状況に引き戻された

「どきなさい。民間人が怪我するわよ」

「すでに上とは話が付いている。ペンタゴンはこの件にはどの程度関与しているの？ デビット・ストールの承認は出てるの？」

黒髪の少女、高村マリアの口から出たのはデマかせだ。適当。嘘。

その言葉にアンジー・シリウス少佐は動きが止まり、マリアを睨みつける。

（どうせパニックってるんでしょ。今だとストールのおっさんは上院だっけ）

マリアの予想は当たっていた。

（どういうこと！ペンタゴンが偽の命令を出したの？CIAが関連しているって話だったけど、少将や参謀関係からは何も情報は出なかった！ストール上院議員のブリーフィング同席は政治的要素でもあったわけ？我々スターズは囧？なんのため？もうこんな陰謀とか嫌なのに！魔法の力を評価されたけど隊長だけど、軍内政治はまったくわからぬのに！いや〜せつかく日本に来たのに！すぐに戦闘だし、まともに観光できなかつた！観光は無理でもシブヤには行ってみたかった！ダメより一ナ戦闘中に余計なことを考えては！）

マリアは親魔法師系かつタカ派の上院議員のストールの名前を出したのが、偶然にも

リーナの思考の混乱を激しくする。

来年の中間選挙用にスターズへの予算配分の政治的便宜を図るためペンタゴンに寄つたとき、表敬と印象向上のためブリーフィングに顔を出したにすぎず、そこにはこの一連の事件への深い関与はない。

前世でマリアはストールへの政治献金により間接的に金融関係のロビイングを支援してもらつたことがあり、よくしゃべり覇気のある笑顔を浮かべる老人と懇意にしていた。

「もう一回言つておく。上とは話がついているから引きなさい。嘘だと思ふなら確認でもしたら？」

リーナは薄つすらと汗をかき、二歩三歩と後ずさる。

「名前は？」

「たか…川村エカテリーナ」

「そう、この場で言うのはなんだけどあまり国家間の騒動には首を突つ込まないことね」
リーナはそう言うのと踵を返し走り出す。

その言葉は強がりであり、同世代の女の子に対するアドバイスでもあった。
走るリーナの後ろ姿が見えなくなるとマリアは小さくため息をつく。

おつちよこちよいで勘違いしやすいリーナを言葉の罠にはめた事へのちよつとした

罪悪感。

「まあ、この名前を言うのはあんたとカナデだけしとくよ」

誰に言うでもなく一言呟く。

高村マリアはちよつとだけカチューシャに戻った気になった。

「獲ったど〜！」

建物を挟んだ駐車場側から叫び声が響く。

法楽がパラサイトの最後の一人を物理的にも情報次元レベルでも「唐竹」にした瞬間であった。



14時27分

横浜では想定よりも前倒しで事件が頻発していると連絡を受けたがマリアからしてみれば、あの四葉光夜と黒羽竜也そして司波達也が揃っていることを考えると、16時には横浜騒乱編が終わるのではと感じていた。

不安要素の「影の中の男」については（どうせ関重蔵がなんとかする）の一文で結果が出てしまうと感じていた。

「お次だよ！三年坂で意識不明者が二名出たよ、向かって」

各人の情報端末から冬彌の明るい声が聞こえる。

「奈波ちゃん！鳴門！二人は事後処理してから来て。法楽、飛ぶよ！」
駐車で義勇兵たちと状況確認をしている三人に声を投げる。

高村マリアは川村エカテリーナではなく、高村マリアとして現世で戦っているのだ。

駄話：忘れたところにテキトー登場人物紹介

「須田よ、須田渉よ」

誰だ？この僕を呼ぶ声は…。

「目覚めるのです。須田渉よ。ポテトチップスコンソメ味とゼロカロリーソーダを準備しているのです」

止めろ、起こすな。ゼロカロリーソーダではなく、コークハイを希望するぞ、僕は。

「それは許されません。今の君は16歳。第一高校の学生。アルコールは厳禁。いくら夢空間でもコンプライアンスは重要。ハーメルン読者にポテトチップス齧りながら飲むコークハイの魔力を触れ回るのは許されない」

なんだ？ハーメルン読者？それは…ダメだ、夢の中でも思い出せない。

「さあ、起きるのです。須田渉。いや観測者たる転生者。【うちの魔法科高校の劣等生にはオリ主転生が多すぎる】を読まずに【その2】を読んでいる読者諸君にわかり辛く転生者たちを紹介するのです」

わかったよ、だがこれだけは要求させてもう。

「なんですか、須田渉よ」

できれば4K画面でお願いします。ブラウン管での視聴はやっぱり画像が悪いので。「よろしい、目を開けなさい」

◆ 神様（以下、神）「はい、それでね。転生者の紹介だね」

転生者（以下、転）「いや、いいんだけどさ。登場人物をこういった形で舞台裏で紹介するのはどうかと思うよ」

神「しかたないんだ。しかたないんだよ。考えたら転生者のバックボーンが本編で全く語られてないから横道逸れて話す必要があるんだよ」

転「不祥事の上塗りにならない？あれだけロキがやらかしておいて」

神「コンプライアンス委員会が設置されました」

転「うわく、実社会みたい」

神「神様も時として夢が無いのだよ」

神「関重蔵」

転「国防軍の諜報員。七草と十文字の情報を探りに一校へ学生として潜入。36歳」

神「チートは非魔法系。殴ったりけったり波動拳」

転「技が古い感じがする。前作でパワーゲイザーとか言ってたし」

神「昇龍拳コマンドが↓←↓ 表記の時代の人だから」

転「昇龍拳って《Z＋パンチ》表記でしょ？なにその矢印の表記？誤記？」

神「あー、オールドゲーマーに喧嘩売った」

神「四葉光夜」

転「イケメン、寡黙、天才魔法師。四葉一族の暗部。でもイケメン」

神「天才的魔法師で四葉真夜の弟。四葉元造の冷凍精子にて生まれた忌子」

転「一人、正統派主人公なんだよね」

神「中条あずさとの恋愛シーンも一人だけカッコよかった」

転「でもボッチ」

神「ボッチ♪ボッチ♪ここにボッチ♪」

転「タッチっぽく歌ったらダメ」 検索ワード《タッチ OP》

神「司波雪光」

転「正統派ラノベ世界転生主人公」

神「チート内容がなく、キリト＋深雪！を即答する、チート決定最短記録ベストテン

入賞者」

転「美少年かつ美少年。深雪ちゃん双子。これ以上の説明が必要だろうか？いや不要

(反語)」

神「(反語)とか久々に見た」

転「最短記録って他には」

神「一言「ギルガメツシユ」と答えた人が複数人いて同率で3位にランクインしてる」

転「あのギルガメツシユ?」

神「そう金ぴか」

神「藤林奏」

転「エロい、可愛い、美女」

神「友達の彼女をエロいとか、いやだゝ須田ちゃんのエッチ」

転「いいんですゝ今は一観測転生者だけ」

神「電子の妖精に匹敵するウィザード級ハッカーで超一流の魔法師」

転「精神波とか思念波で電波やネットワークに接続できる異能中の異能」

神「でもコスプレして彼氏とにやんにやんする程度にはオタク女子」

転「コスプレにやんにやん♡」

神「にやんにやん」

神「川村エカテリーナ」

転「高村マリアの前世でもあるよね」

神「その通り。経済の天才児。魔法師としても聖杯戦争でキャスターで召喚されるレ

ベルの達人」

転「チートよりも性格がな〜」

神「騒ぐ、怒る、動き回る。でも意外と常識人だから」

転「リーナの親友にしてカナデの親友で、あとは？」

神「七海奈波をコントロールできる数少ない一人」

転「暴走列車かつ暴走列車のストッパー。炎のストッパー」

神「神の中には広島ファンが多いから炎のストッパーっていう二つ名聞いただけで泣いちゃう人いるからね」

神「黒城兵介」

転「二校の快男児。類まれなる身体能力と人に好かれる魅力」

神「二校三人衆の一人で、性格もさっぱりしているし友情に厚い」

転「女子よりも男子にモテそう」

神「兄貴だよね。実際海兵隊に入隊後は慕われまくったみたいだけど」

神「緋村武心」

転「ぶしん？ぶしん？」

神「むしん」

転「飛天流という古流剣術を使う火のエレメンタル。古式の一族で剣の天才」

神「藤林奏に惚れてるので、カナデの頼みに滅法弱い」

転「詳しくは《うちの魔法科高校の劣等生にはオリ主転生が多すぎる》で」

神「五輪鳴門」

転「いつわなると」

神「そうだってばよ！」

転「だってばYO」

神「天下一の忍術使い。五輪家の養子」

神「鬼一法楽」

転「えっと、古式魔法師で剣の天才。どっかで聞いたような（ジト目）」

神「緋村武心とは幼馴染で好敵手」

転「もう一度聞くんけど古式魔法師で剣の天才」

神「ひむらむしんとはおさななじみでこうてきしゆ」

転「棒読みだね」

神「三校に入学して兵介の後輩」

神「我が七海奈波」

転「我がが？」

神「普通のミーハーな女の子が血なまぐさい魔法師同士の戦闘に巻き込まれ、時には

太ももチラリさせながら戦う美少女戦士！負けるなナナミン！僕らのナナミン！」

転「え、なに？突然？」

神「いや、神の中でもコアなファンが多くてね。キャラソンだけで10曲あるのよ」

神「周公瑾（憑依）」

転「周公瑾に憑依転生してしまった悲劇の人、ワタナベケンゴ」

神「でも女子大生に二股交際をしてたわけですよ」

転「能力は周公瑾と同一。知識と記憶は引き継いでいるから実は超重要人物」

神「あれ？二股に関して興味ない？」

転「二股？僕の最高は四股だよ」

神「知ってる。ギャルゲの話だね。うん、そうだね。四股だね。凄いね、偉いね、頑張ったね」

神「タツヤ・クドウ・シールズ」

転「黒羽竜也の前世」

神「司波達也とうり二つ。単一創造魔法「反物質」情報体次元への「アストラルジャンプ」を有する反則級転生者。USNAスターズのワンマンアーミー通称「シヴァ」少佐」

転「実は○○の××という設定が《うちは》の終盤の大問題」

神「光井ほのかに惚れている」

転「惚れてる。結婚後も奥さんに内緒で毎年クリスマスカードを送る程度には」

神「獅子王院楠葉。古式と現代魔法を使う1, 800年の名家」

転「一度ラッキースケベを頂きました」

神「転んだ拍子にお尻に顔から突っ込むという」

転「その後ボコスカに殴られて千葉エリカちゃんに説教を」

神「その幻想をぶち殺す!!」

転「違う違う」

神「仙波冬彌。「冬」のエレメンツという超絶レア古式魔法師」

転「ここでも古式魔法師登場」

神「入学当初はやれやれ系男子」

転「やれやれ（杉田智和声）」

神「やれやれだぜ（小野大輔声）」

神「こつから霞たちの世界線」

転「ぼく知らない世界だね」

神「アーデル・フォン・羅門」

転「暴力系美少女」

神「全身に神を下ろす特殊な魔法をね」

転「小柄で細いけどDカップあるよね」

神「突然なに」

転「Dカップあるということなんですよ！中条先輩と同じくらいの身長で！Dカップ

！」

神「アンダーとトップの差が16.5×18.5cm！」

転「勉強になる！」

神「狼谷一樹」

転「人狼。再生能力と怪力に秀でた存在で、実は人狼は日本国内でも彼一人」

神「実は歩く国際問題」

転「右足が領土問題で左脚がEEZの海域の問題」

神「違う違う」

転「実はドイツ人とか？」

神「実はドイツ人。日本の犬神憑きの一族と西欧の狼一族の混血でドイツ国籍」

転「じゃあ、漢字名は？」

神「偽造戸籍の記載。本名はゲーオルク・シュトウツク。ただし6歳で日本に来た

からドイツ名で話しかけられても返事をしないことの方が多い」

転「え？ラインハルト・フォン・ローエングラム？」

神「その聴き間違えは無理あるだろ」

神「久慈灘幽玄」

転「日本酒みたいな名前」

神「魔法の天才児で学力や魔法理論においても司波達也を凌ぐ天才」

転「どのあたりで」

神「なんとオートとマニュアル両方でCAD調整が出来、さらには飛行魔法の改良、さらには常設型熱核融合炉の諸問題も大学で解決、そしてそして」

転「そして」

神「サイオン過剰効果による空間内事象干渉を抑える装置を完成させて、司波家の凍結騒ぎを減少させたのだよ」

転「司波達也も涙を流して喜ぶね。泣かないと思うけど」

神「反語」

神「ミシエル・フィリオ」

転「長身南米美少女！褐色ぎみな肌は男子の本能を刺激する！サンバ（ダンス）！ア

ンジー（ウテナ）！ナディア（不思議の海の）！龍宮真名（ネギま）！アーシエス・ネイ（BASTARD）！」

神「待って待って待って！ミカエル（BASTARD）！が抜けてる」

転「あそつか。能力的には死者と流血と植物に関係する魔法を使うんだっけ」

神「戦場に行けば5分でインスタント死者の軍勢が完成」

転「まあ、そんなことより褐色巨乳天然グラマラス美少女という一点だけが全てを覆い隠すよね。Gカップ」

神「24.0〜26.0cm」

転「この数字の意味は説明しなくてもわかるね！」

神「切花霞（四葉夜天）」

転「ミクロン単位の糸を使う《糸使い》だっけか」

神「実はエロ知識は劣等生世界に転生する前にプレイしていたエロゲベースだから偏っている」

転「え、なに？俄然興味出ていた？対魔忍？感度3,000倍？」

神「ゲーム主人公がM男なので攻撃するとエロシーンが進むヘンテコゲーム」

転「え」

神「関重蔵との初夜の時は「重蔵さんを気持ち良くさせたい」と思って枕元にスタン

ガンを準備していたほどで

転「…」

神「大丈夫！修正された関重蔵。パッチでそのあたり修正された。眉間にしわ寄せないで」

神「影の中の男」

転「両方の世界線にいたんだよね」

神「世界への影響の仕方は違ったけどね」

神「とりは須田渉」

転「健康第一、良縁結びます」

神「せつめいがおわってしまった」

転「一校最初の恋愛博士。在学中に結びつけたカップルは30に及ぶ」

神「結構凄いな」

転「ときメモで初見一発で藤崎詩織を落とすから。任せてよ」

神「スゲー」

横浜騒乱

午前8時00分

横浜港署。

千葉寿和警部は昨晚藤林響子に言われて、ありとあらゆる伝手を使つて「横浜作戦」へ参加人員を揃えた。

既に国防軍から警察上層部への警備人員の協力の話はあつたが、天下の千葉家の総領息子が突然の勤労意欲という名の下心を發揮、当初の予定を上回る人員を当日揃えることができた。

「千葉警部、本件のことは理解しているね」

横浜港署に急遽設置された警備本部では、指揮を執る警視正が美人の色香に負けて無理やり門下生の警官たちを動員した千葉警部に詰問とも説明ともとれぬ声音で語り掛けていた。

直立する千葉寿和は少しだけ青い顔をしている。

国防軍主導の特殊な作戦に警察省上層部が応じたという話は少し前から聞いていたが、藤林響子の依頼がまさにその件のど真ん中とは想像していなかった。

「はっ！国防軍への警備協力と聞き及んでおります」

そう千葉警部が答えると警視正は額に手をやり少し悩むような態度を見せる。

「警備ではなく、正しくは広域での立ち入り制限を行うのだよ。下手をすると横浜は戦場になる可能性がある」

不満と、少しの怒りが警視正の言葉から感じられた。

千葉寿和はその意図を正しく認識した。

（縄張り荒らしか）

国防軍は秘密裏に国内に潜伏する工作員との戦闘が勃発するようお膳建てをした。

そういった国内での広域戦闘が行われることは「治安」を担う警察組織の面目を潰す行為でもある。

国防軍は自分達の作戦行動のため国内治安を意図的に乱す状況を構築したのだ。

事前の調整は難航したが妥協点が見いだされた。

だが現場を仕切る警視正の怒りは収まっていないようであった。

「いいかね、千葉警部。君がご実家の伝手を使ったことには何も言うことはない。逆にこれだけの人員を集めたことを褒めたいくらいだ」

「はっ」

千葉寿和の返答も弱い。

警視正の言葉は文字面とは裏腹な意味があった。

「千葉警部。君にはある程度自由に動いてもらつて構わない。警察省にもその旨伝えてある。私からの指示は一つだけだ」

警視正は千葉寿和の顔をしっかりと見てから指示を出した。

「国防軍の脳筋共に一泡吹かせてこい！敵国の工作員を一人でも多く“逮捕”しろ！」
「はっ！」

殺さずに工作員を捕まえろ、国防軍が行う工作員の殲滅とは真逆の命令でもある
千葉寿和の恋と仕事の板挟みの一日が始まった。



午前8時40分

「すみませんね。今朝早くに不発弾が見つかつて、この先の区域への通行が制限されるですよ」

山下公園へは車で25分。横浜という区域から少し離れた路上。

裏道を含めて多くの警官が配備され、人の出入りを確認していた。

「おまわりさん、そんなの聞いてないよ」

大型の貨物トラックの運転手は少し高い位置にある運転席から外にいる警察官に不満を伝えた。

交通量の多い大通りとはいえ、非常に警官の数は多い。

渋滞を起こしている先頭車輛辺りだけでも20人近い警官の姿が見える。

「申し訳ないね、こつちも仕事でね」

「交通規制の解除は何時くらい？」

「予定だと、昼間までかかりそうで」

いらついた運転手は小さく舌打ちをした。

警官はそう言った態度には慣れっことで、特に反応を示すことはなかった。

運転手との対応をしていない別の警官はこの隙に車両の外部をみている。

少しでも違法性を感じるところがあれば別件で運搬貨物の検査も行うよう指示を受

けていたのだ。

「まいるんだよ！こつち到着に時間指定のある荷物なんだよ!」

声を荒げる運転手に対して対応していた警官は準備していた言葉を言った。

「この先でUターンできるでしょ。そこから、この地図の、そうそうその大通りを北上

した先に交通管理の臨時部署のテントがあるからそこに行けば通してもらえるから」

運転手の見せる地図アプリを指さしながら移動先を指示する。

移動先の臨時部署のテントは貨物つまりは国外の作業員への物資供給を調べる部隊

があり、強制的に貨物検査を受けることになる。

午前8時47分

小規模であるが最初の騒動が始まる。
裏道での検問を抜けた車両がいたのだ。
これが横浜騒乱のスタートであった。

幕間：スーパーソニックランチャー

あと数日で10月30日を迎えるある日。

一校の制服を脱ぎ、国防軍の制服に姿を変え、関重蔵として仕事に励む。

俺は装備課へ必要なものを取りに行っていた。2週間前に連絡を入れて大急ぎで準備して貰っていたのだ。

先に言っとくけど日本刀じゃないからね！

銃弾と魔法飛び交う戦場で日本刀振り回すとかさ、非効率と言わざる得ない。

あーあー桐原とか千葉エリカという名前は聞こえませんが、聞こえませうん。

まあ真面目な話、交戦距離を考えると日本刀と言うのはあまりよろしくない。

殺傷範囲も狭く、遠距離にいる相手の動きを止めるといふ抑止効果もないので白兵戦主体でないと運用するには厳しい。

100m以上先の相手を威嚇するのに日本刀振り回して「うおおおお」とか叫んだら、ほら頭悪そうじゃん。

銃器の存在を見せつけ牽制に一発撃つだけでも、敵の行動の抑止や誘発など遠距離に居ながらコントロールが可能だ。

そういった意味では日本刀、近接武器と言うのは戦場における用途の幅が小さい。

俺の前世（霞）の時のように飛んでくる銃弾をちぎっては投げちぎっては投げ、時には魔法師の魔法を極限に鍛えこまれた歩法により回避しながら敵に近づくななどしない限りは現代戦での日本刀はお勧めしない。

「少佐、ホントに使うんですか？」

「いや、下手するときは、情報課としては最後の仕事になりそうなのよ」

一瞬とはいえ名前と存在が表面に出た諜報員など使いづらいのだ。

関重蔵は相馬新。

少なくともこの情報の確認で他の国が動いた形跡はない。

国内では裏社会の情報屋と諜報系の御同業が裏取りで動いていた。

彼らがどうなったかは想像に任せるが一人は過去形の存在となった。

既知未来知識とはいえ、情報が流れたのだ。それがポツと出の泡沫情報でも情報は情報。
報。

村井さんも苦い顔をしていた。

福生にある広大な基地。

かつては米軍の横田基地、横田飛行場の跡地に建設された「国防軍横田飛行場」に足を伸ばしていた。

ダークグリーンに塗装された大型倉庫をいくつか横切り、目的の第11倉庫にちょうど装備課の課員である富田曹長と到着した。

富田曹長はまだ若い装束に転属してから在籍も長く、そこそこ軍内の人事に耳目がある。

「じゃああの噂は本当で？」

「そう、もうね諜報としては大敗。あとはどつかの研修施設の管理責任者あたりでまったりかね」

首をすくんでおどけてみせたが大敗である。

あく、ほんとこの事件が終わったら辞表だして就職口探すかな。

「お、そうなると無茶ぶりはもうないな」

倉庫の前で待っていた50代の男性。

栗原大尉。装備課のおやつさんである。

東京にある大型装備や特殊な装備は一旦おやつさんに情報がまわる。

そしてこのおやつさんと上手く付き合おうと融通が利くのだ。今回のように。

横田基地第11倉庫、通称：質屋。

国防軍内の色々な部隊が色々な取引により「予算」ではなく現物によって情報部に支援を求めたときの現物の置き先がこの質屋である。

「言われたものは十分に揃えた。車両の鍵はこれ。B2駐車場に置いてある。細かいものは今から案内する」

車の鍵を受け取りつつ倉庫の出入口へと誘導される。

そう受け取る物。

スーパーソニックランチャーではない。

「スーパーソニックランチャーか!?’のスーパーソニックランチャーではないし、

あの「101旅団魔装大隊 真田 繁留大尉であります」のスーパーソニックランチャーではない。

スーパーソニックランチャーは別に国防軍の全部隊に配備されている制式採用品ではなく、魔装大隊の試験運用配備であつてスーパーソニックランチャーは質屋にはない。

スーパーソニックランチャーの凄いところは指向性を持ってスーパーソニックブームを発生させ、対象物の破壊が可能であることだ。

実のところ、スーパーソニックランチャーは武装型CADで相当のサイオン量が必要なので扱える魔法師は限られる。

スーパーソニックランチャーを情報部の装備運用評定会で撃つたことがあるが一人で長時間運用し使いまくるのはキツイ。

スーパーソニックランチャーの運用マニュアルでも使用後に5分〜10分程度の休息を推奨されている。

試しにスーパーソニックランチャーを連続で3連スーパーソニックしてみたが、相当疲れた。

スーパーソニックの疲れに負けて結局その日は事務仕事をほっぽりなげて五反田にある焼き肉屋でスーパーソニックな疲れを癒すため4時間ほどダラダラ飲んでいたことがある。

若かったなく中年だから山盛りカルビとかもう無理。

今度、アーデル連れていこう。あいつ牛一頭くらい喰うからな。

倉庫の奥に置いてある幾つかの装備は以前と同じままだ。

おやつさんは、一つ一つ改めて説明してくれた。

「整備に2週間。お前の昔のデータのままでが使えるだろ？」

「さーせん。上手くやります」

無茶な整備期間のお詫びを言いつつ、俺は頭を下げた。

これで当日の玩具十二分。

前日からの泊まり込みも準備して、万全に当日を迎えられるだろう。

さて、俺は何回スーパーソニックランチャーって言ったかな？

簡単に言えば「ほつとけ！」である

「はあー！」

刀の軌道に沿って斬撃を模した想子が竜也目がけて放たれる。

特化型CAD、拳銃型だが達也の持つ二丁よりもバレル長は短い。

左手の一丁の引き金を引くと斬撃は霧散していく。

（いい腕だ。カノープス、だがそれでは俺の最愛の義妹を任すにはまだ足りん！）



「と思う、黒羽竜也であった」

「須田。その表記だと俺は二丁拳銃になるぞ」

魔法協会関東支部の最上階近く。

幾つかある会議室の一室には魔装大隊の特尉「不動達也」が情報端末から流れ出る声に突っ込んでいた。

端末の先には自宅学習となっている須田渉だ。

須田が戦闘予想をまとめたテキストという名の夢小説の一部を朗読したのだ。

部屋の中にいる竜也とカナデ、アーデルは一校の制服、夜天はグレーを基調としたボ

デイラインがわかるタイトなカジユアルドレス、ファッション上では「フィツシュテールスカート」と言われるものだ。

学生は学校指定のシューズだが、夜天はローヒールのパンプス。

全員戦闘向きの服装ではない。だが共通して左の袖口には小さな三角形のクリップ形状のものがある。

雪光謹製の「衣服強化ナノマシン格納クリップ」だ。

微量のサイオンを注入することで、クリップ内のナノマシンが装着者の衣服に拡散し、衣服の防御性能を向上させるものだ。

防刃、防弾、耐衝撃機能を向上させ防塵効果もある。

2か月未満の作成時間ということもあり、個数も限られており服装の自由の利かない「学校の制服」を纏う面々に渡された。

京都の面々は日常の街中での移動ということもあり、ナノマシンの副次効果による衣服の色の変化など目立つことは憚られたため辞退した。

「須田君、今度それどこかのサイトに投稿したら?」

情報端末の先の須田は「発表する前に国防軍に握りつぶされると思うの」と笑う。

話しかけた藤林奏でも「確かにね」と相づちを打って笑う。

「須田も、こっちくればいいのに」

アーデルもお菓子をほう張りながら話に混じる。

「主戦場でしょ？無理だよ〜」

「根性なしの玉無し」

「アーデルちゃんのエッチー！」

身をよじって恥ずかしがらる須田の声が会議室に響く。

義勇兵の待機する中階層の会議室とは違い、高層階にあるこの会議室はさほど広くはない。

この会議室にいるのは転生者、今作戦においては「混成即応班」という名前の元、魔装大隊の不動達也特尉と外部協力者コードネーム「指揮者」の二名が選定した人間によつて構成されている。

魔装大隊による強権発動という部分はあるが根回しの際に四葉の影があつたことから、十師族最大の暗部である四葉による魔装大隊への圧力による編成と周囲には見られており、実際転生者以外にはそうであつた。

「もうすぐ始めるんでしょ？」

「そうね、カチューシャからも連絡来て法楽君が焦れ始めてるって」

須田の質問の声にカナデは手元の情報端末に来ているカチューシャからのメールに目を落とす。

(「馬鹿がスクワット始めた」って、誰のことか一目瞭然か)

「脳筋」

「アーデイに言われたくは無いと思うわ」

カナデの言葉に反応したアーデルに即座に反応したのは夜天だ。

少し論するような笑みを浮かべて。

脳筋という意味では単語の意味にピッタリなのは今も昔もアーデルであった。

夜天は知らないが前世における傭兵生活ではその脳筋さは肯定的に発揮されていた。

アーデルの発言は弱腰の味方の士気を上げ、実際に戦闘では勝利に導いている。

中東や中央アフリカの内戦や戦争では「レッドヘアーデビル」「血まみれ髪」とも言わ

れ、白兵戦による強襲が最も活躍した場であった。

「お嬢様ぶって。で、三十路処女は破られた?」

アーデルの声音は少し馬鹿にしたように、俗にいう煽るといった口調だ。

「黙れ」

冷たい声。殊更に殺気が混じる。重くはないが恐ろしく鋭く指すような舌気だ。

アーデルが夜天の繊細な部分にずけずけと踏み込んだからではない。

重蔵から「お楽しみはとつとくか」と言われ同衾以上はしていないからであり、凶星

されたことへの怒りと恥ずかしさと落胆がない交ぜされた反応だった。

簡単に言えば「ほっとけ！」である。

「安心した。腑抜けてたらケツ蹴っ飛ばしてた」

アーデルは親友「切花 霞」(きりはな かすみ)の殺気にあふれる眼と同じ眼をした
夜天を見て改めて安心した。

「大丈夫、まだスタートラインは一緒だから」

「カナデさん！」

カナデが気楽にどちらにもSEXしていないことを手をヒラヒラしながら伝える。

まるで「今晚はお鍋」と夕食のメニューを伝えるような気軽さだ。

夜天は少し顔を赤らめ声を出す。

夫婦の関係を嫌味なく開けっぴろげにするカナデには「敵わない」と思いつつも憧れる夜天であった。



横浜国際会議場。

午前8時45分

会場内エントランスが見える吹き抜けの中二階では萬真人と黒城兵介が警備班のバ
ディとして見回りをしていた。

階下のエントランスでは一条将輝と十三束鋼が司波深雪と立ち話をしている。

(3時間の仮眠だと流石にきつそうだな)と兵介はその様子を見ながら考えていた。

深雪に向ける一条将輝の視線は明るいが目元の隈が目立つ。

兵介自身は5時間と少しの睡眠で今日を迎えており、睡眠時間の割には非常に体調は良かった。

警備班は午前中の見回りから防弾ベストを装着しており、すでに臨戦態勢と言つてよいだろう。

警備班の指令本部はそのまま国防軍の指令所としても運用され多くの軍人が出入りをし、学生の警備班と比較にならぬほどの緊張と敏捷な動きを見せていた。

会場内に重装歩兵小隊が2小隊。

防弾防刃機能に対爆性能が付与された最新のバトルドレス、そして7・62mm弾を発射する国産のアサルトライフルを装備し、グラスデイスプレイを装着した防弾ヘルメット、特殊繊維で製造された運動補助機能があるアンダースーツ、汎用ブーツに身を固めた日本国家が誇る国防陸軍第1師団第2大隊所属の重装歩兵小隊の面々である。

陸軍第一師団の第2大隊は陸軍普通科歩兵の精鋭部隊であり、陸軍特殊部隊「スクネ」や陸軍特殊戦略班「ヤタガラス」に所属する者の母体集団でもある。

国防陸軍第1師団第1大隊は首都防衛の要であり精鋭無比としては第2大隊と遜色がないものの、特殊部隊などへの移籍は少ない。

それは首都圏、特に東京防衛に一秒たりとも質量の低下を許さないため、人員の移動は少ないと言われている。

駐車場には数台の軽装甲車に兵員輸送車、そして地下駐車場には4台の91式装甲戦闘車がスタンバイしている。

「この後どうなる？」

並んで歩く萬真人に聞かれ少し困ったような笑いをする兵介。

年齢の割に口調が大人びているので萬真人の精神的な成熟度は年齢以上であろうことは確実だが、どの程度まで話すべきかは兵介の中で迷っていた。

それは萬真人が事態における解決手段や情報をもとに指示命令を下す立場にいない一兵卒だからである。

前世では海軍海兵大隊の少将まで昇った兵介からすると、前線の一兵卒は事態の裏や奥を覗き込むより前線の地獄の中から抜け出す努力をすべきで、そこには事態の裏側の情報など余計なものではないから。

萬真人の想定では戦闘だ。

既に横浜市街には多数の兵士が：国防軍、魔法協会が集めた義勇兵、十師族の手の者が配置されている。

敵は大亜連合の潜入部隊、商業船に偽装した揚陸船、CIAの特殊部隊として認識さ

れているパラサイトの一団。

敵軍の投入戦力が不明な状況では決して過剰戦力ではないが戦力不足でもない。

「想定されるのは4カ所での戦闘です。京都、一校、横浜全域、会場周辺」

兵介の言葉にうなづく真人。その4カ所での戦闘は数日前の説明で聴いていた。

「ここからはあの説明から発展させた俺の予想です」

まだ軍籍の無い身としてはあくまで予想であつてそこに過度な責任は無い、と兵介は自分に言い聞かせた。

それは自分の戦況予想を聞かせることができる楽しみを隠す言い訳のようなものでもあつた。

前世は光夜や関重蔵など天才や先達との会話の中では聞く側になることの多かつた兵介としては、予想を話すことを希望されているこのシチュエーションは楽しいものでもあつた。

「京都は…安心です。正直京都は特殊な地域なのであつちの面々が適任です。光夜に任せたら1, 000年の結界も全て解除した上でパラサイト撃退して、あとの結界修復の方が大問題ですよ。それに雪光なんかを走らせたなら…文科省の文化事業関係の部署が過労で死にますね」

雪光の「高速走行」による余波を想像しながら声を出さず笑う。

（あいつ、走ると物壊すからな）と自分で補足を入れるが、雪光も兵介が走ると物を壊すと思っっていることはお互い様である。

言葉の意味を十全に把握できず真人は表情を少しこわばらせる。

兵介はそんな真人の反応を気にせず説明を続ける。

「二校もあの3人で十分でしょう。呂剛虎と複数名、パラサイトがいたとしても緋村がいる以上敵じゃありません。緋村は年喰ってから国内の妖怪退治の専門家でしたから。〈茨城童子〉を名乗った半妖半人とかとやりあつて勝つてます」

「半妖ってそんなものまでいるのか？お前たちの世界は」

少しだけ真人の声のトーンが上がる。驚きが漏れ出たのだ。

「古式魔法師なんて陰陽師一族がこんだけ生きてるんですから、妖怪の10匹、20匹いたつておかしくないでしょ」

真人は小声で「そうか」と返すだけだ。【魔法科高校の劣等生】という世界の広さを改めて感じていた。

「横浜全域は魔装大隊はじめとした精鋭がいますし、各施設に身を隠している国防軍の数を入れれば相当大規模な都市防衛戦の様相を呈しています。まあ黒羽竜也が横浜全域はどうかするでしょう」

兵介はそう言いつつ、すれ違う三校の他の警備担当に「よっ」とあいさつをする。

中2階の廊下から見えるエントランスの人は減りつつある。

もともと警備班の学生と数少ない登壇予定の参加学生。

それと100人に満たない各校の論文コンペの観覧学生で、そのほとんどは生徒会関係と部活連の関係者となっており応援のために参加する一般学生は皆無だ。

「だが敵の陣容は不明だろ」

真人の質問。兵介はやや過剰とも思える緊張をしている兵介に視線を投げる。

「それでもです。黒羽竜也ことタツヤ・クドウ・シールズは司波達也に匹敵する殲滅力に四葉光夜と同等の天才です」

「それがアイツの本名か」

「前の名前ですよ」

前世では軍人として一線級の活躍をした兵介は、同様に戦略・戦術で状況をひっくり返してきたタツヤ・クドウ・シールズを高く評価している。

特に第3次メキシコ湾侵攻とキューバ沖艦隊戦での活躍は、兵介から見てもタツヤ・クドウ・シールズの出色の戦果だ。

「強いて言えば、影の中の男ですよ。あれだけが不安要素です」

「戦闘スタイルは?」

「俺は直接対峙したことが無いので伝聞ですが空間を歪曲させたり、光の弾を投げつけ

たり空飛んだり、魔法師というより魔法使いです」

軽く肩をすくめる兵介に、真人の表情はさらに硬くなる。

一番の難敵に対しての情報が少ない。

実戦経験が決して多くない真人としてはその準備不足が心配でたまらない。

情報と言うのは兵法の基本で、萬家でも「事前の備えこそ百戦百勝をもたらす」といった戦訓があるので殊更現状に不安を覚えているのだ。

「あの男がどの程度の実力でどれほどの幅を持った戦略、戦術を駆使してくるかは想像できません。そしてそれに対抗できるのは現在では転生者だけです」

「勝てるのか」

絞り出すような真人の声。

不安と心配がない交ぜされた声。真人にはこの事態に対峙している転生者としての不安があつた。

魔法科高校の劣等生の山場、横浜騒乱なのだ。民間人の犠牲、そして【戦争】の一端がこの横浜の街で起こり、その收拾が自分に委ねられている気がする。

自分自身への勝手なプレッシャーが真人の緊張の根源だ。

「勝てますよ。向こうの世界線の4人の実力がどうだか知りませんがこつちの面々は今時点で世界屈指の、いや世界最高の魔法師ぞろいです」

兵介の言葉に嘘偽りはない。

四葉光夜の天才性は前世で嫌というほど見てきたし、タツヤ・クドウ・シールズの世界を敵に回せるほどの戦力、藤林奏がどれほど電子の世界を支配したのか、司波雪光の発明とそれを駆使する実力、川村エカテリーナが残した偉業の偉大さ、後輩たちの実績を上げるだけで分厚い本が一冊出来る。

大亜連がこの横浜騒乱で中条あずさを害すれば、明日とは言わず即時地図から大亜連は消えるだろう。

それ程の実力者である四葉光夜に匹敵する魔法師、異能者集団なのだ。この2周目の転生者たちは。

「それはあの相馬も含めて?」

「あの人と須田ちゃんはのぞきます」

説明不足を恥じるのを誤魔化す様に舌を少し出しておどける兵介。

そのまま話を続ける。

「説明を受けたように鍵は奴の行う空間系魔法の解除です。横浜で対応できるのは竜也、光夜、カナデ、雪光、それと幽玄です。その5人も分散配置していますし、最悪の場合は京都組が飛んできます」

飛んでくるというのは比喩だが正しくは高村マリアが前世で身に着けた「空間連結魔

法」による長距離瞬間移動だ。

新ソ連が躍起になって開発を推し進め断念した魔法の一つ。

川村エカテリーナの父親の基礎研究を受けて晩年の川村エカテリーナが結実させた魔法師の次の第一歩。

もし、この魔法が早々に完成していれば一個師団の兵隊を3000km離れた戦場へと10分とかからず投入できる。

川村エカテリーナはその魔法の大部分を文字情報に残さず、自分の脳内に収め死んでいった。

父親の名義で基礎研究の論文とそれを発展させる可能性を指し示す「補足論文」を残し未来の魔法師たちへの宿題とした。

「基本は状況に応じて柔軟に対応です。ただ勝手な行動は戦場での不測を招きますから俺たちは基本国防軍の指示を聞きながらとなりますね。自由行動するには立場もありますし」

真人の顔が曇る。

3日前に受けた説明も大雑把なら、兵介の認識もあまりに固まっておらず戦闘のディテールが曖昧なのだ。

「そんなので大丈夫なのか。肝心の相馬もこの2、3日見えない」

「対大亜連であれば心配はないです。影の中の男も戦力的にはこっちが上、パラサイト関係も対応策はある」

「別段、先輩たちを蚊帳の外にしているわけじゃないですよ。俺も自由に動きたいところやっぱり横浜に来るには「警備班」に参加するしか方法が無い。要はまだ学生の身なんです。自由に動ける奴らの方が特別なですよ」

黒羽竜也の率いる即応班についてもそれなりに理由や立場のある人間が選択されている。

萬真人や黒城兵介がこの場には警備班が一番参加が容易で一番無理が無い。

その不便さが萬真人の不満と不安であると兵介は予想した。

「見透かされてるか」

「こう見えても大隊指揮官でしたからね。新兵の心理把握については苦心しましたから」

「新兵・・・」

(2周目から見えればそうか)と納得せざる得ないと思う真人。

自分と裏番、そして2周目転生者の間にある最大の差は経験だろうと改めて痛感する。

2周目転生者は世界情勢について大小あれどそれなりに関与し、それなりの結果をも

たらしていた。

その彼らから見れば初体験の真人の不安や心配など経験済みで、緊張の根源など想定
の範囲内なのだ。

「質問ばかりですまん」

「横浜騒乱は初めてならそんなもんですよ」

兵介の言葉に真人も、言った兵介自身も軽く笑う。

（横浜騒乱を3，4度もしてたまるか）といった転生者特有の周回クリアへのちよつとし
た苦笑である。

「経験者は頼りになるな」

「固くならず。相手は魔法使いでも、こっちは「さすおに」がいるんですよ。「さす
おに」

冗談で言ったつもりが兵介自身も妙な説得力に声だして笑ってしまった。

真人も一瞬キョトンとしたが、釣られるように体を曲げ笑っている。

「さすおに」というワードへの身勝手な期待と、転生者だけが笑えるそのワードに対して
の圧倒的信頼。

衆人監視でテロリストの腕を切り飛ばし、それが目立つ行為とはあまり認識した様子
もなく、

吉祥寺真紅郎の知識と認識の誤認を利用し「お前!そんなこと言っている場合か!がり勉」(意訳)と口論し、

敵テロリストのトラックを消滅させドヤ顔(七草真由美以外は全く理解できず)、同級生の前で軍属を公開し守秘義務の誓約を一方的に押し付けつつ、妹の接吻で封印を解き(二度目の同級生)。D。)

全身タイトの様な武装をし、同じ服装の部隊に再成かけまくり

同級生に再成を行い、妹に「30倍の痛みを」と間接的マウンティングを発表させ最終的には敵艦隊を消滅させ、最終回は妹に出迎えられる司波達也。

二人の脳内にはアニメの映像がシーンが高速で上映される。

「そうだな、その台詞24時間で何回くらい司波深雪は言うのかな?」

「達也が呼吸するたびに良いそうですけど」

真人が腹を抱えながら聞くと、兵介も返し、その返しに二人ともさらに馬鹿笑いをする。

3分ほど爆笑すると二人の目元には笑いすぎて涙が浮かんでいる。

「萬」

廊下の先から声がかけられる。

真人も兵介も目元の涙をぬぐいそちらを見る。

「桐原」

桐原武明が服部刑部と連れ立っている。

今日のは警備隊長の十文字克人の伝令役のだ。

「もうすぐ開会するそうだ」

間もなく2095年10月30日9時を迎える。

◆

切れ長の目。その横には愛らしい少年の顔。

久慈灘幽玄と司波雪光は搬入された実験装置を舞台裏で最終チェックをしていた。

すぐ傍では、他の学校のスタッフも同じように調整をしている。

調整完了後は論文コンペの技術スタッフに最終確認をし待機となる。

論文コンペの代表選出は市原鈴音、五十里啓、平河小春の三名だが平河小春がインフ

ルエンザの為一時期離脱。

そのサポートとして司波達也が名を連ね、平河小春復帰後も「作業補助」として論文コンペのメンバーとして学内で認識されていた。

実験用のハードウェアに関しては雪光と幽玄がなし崩しに担当することとなった。

司波達也による推薦と「信じられません！常人の3倍の速さでCADの組み立てと調

整ができるなんて！」という中条あずさの証言によって雪光が参加。

幽玄に至っては「暇だったから」と言つて書き上げた「重力制御型熱核融合炉におけるハードウェアの問題点一覧」を司波達也に渡したことで「そうか、手伝つてくれるのか」という勘違いのふりをした強制的な手伝いとして、ハード面を雪光と担当することとなった。

幽玄としては「達也が楽になるかと思つて親切にしたら仇で返された」と呟き、司波達也からは「存外お人よしだな」と返された。

達也の軽い笑顔を見せられ「お前がたまに見せるその笑顔は狡い。それは光井さんも惚れるわ」と当の光井ほのかが同席する喫茶店で言つたところ、女子達は一斉に顔を赤らめたのを幽玄は見ていた。

関本勲は市原鈴音と反目はするものの、別口で舞い込んだ魔法大学が実施している高校生向け基礎研究研修コース（2週間）へのインターン参加が決まり、「失敗して一校の看板に泥を塗るなよ」の捨て台詞を言つて研修に忙殺されることとなった。

この研修昨年度より実施されたもので一説には十師族、特に四葉の息がかかっているとされていた。

この研修は前世でハニートラップに引つかかった関本勲が、切花霞（夜天）をかばつて大けがを負い3か月の入院生活を送つたことへの返礼と謝罪として夜天が仕込んでいたものだ。

前世では関本は霞によるハニートラップで霞の思い通りに動く駒になっており、周公瑾の洗脳を受けたふりをして中華街を探るよう動いていた。

その後、周公瑾に霞の存在を知られ爆殺未遂があつたときに身を挺して霞を助けている。

「君が無事なら僕はどうなつてもかまわない！愛しい人よ！」とややナルシステイックに叫んでいたことは夜天だけでなく、一樹も幽玄もアードルもミシエルも覚えていてる。

入院後に「好きな人がいるんです。関本先輩には勘違いをさせたようではないです」と病室で夜天は謝っている。

前風紀委員長の渡辺摩利と一緒に見舞いに行くことで関本が暴れまわったり、ヒステリックになるのを防ぐ用意もしていった。

「はは、そうか、独り相撲だったか。いや、楽しい独り相撲だったな、ははは」

関本の絞り出すような濁いた笑い声を聴き、霞（夜天）は色恋での人を嵌めるには罪悪感が伴うことを知った。

二人とも作業はしているが、今ひとつ暇であった。

上級生たちは少し離れたところでソフト面のチェックをしており、会話をする相手がないのだ。

先に話題を振つたのは雪光だった。

「そつちでのアラタってどうだったの?」

「そつちと変わらんだろ」

雪光と幽玄は接点が少ない。

雪光は生徒会所属、幽玄は特に所属をせず「司波達也の同級生」というスタンスで、その立ち位置は西城レオンハルトや千葉エリカと変わらず、どちらかというとなり柴田美月の様なグループの一員でも生徒会や部活連との接点も薄い方ではある。

「マリカーで安全運転してたんだ」

「なんだ、マリカーしてたのか」

雪光の脳内には関家での家族パーティーにお邪魔したことや四葉光夜主催での家族と学友とのパーティーの一コマが思い出されていた。

「負けるとウィンカーがないせいにしてた」

子供に向かって「安全運転してたからお父さんの勝ち!」と言つては息子のアラタに「お父さんゲームだよ」と笑われていた一幕が雪光の脳裏によみがえる。

「想像できないな」

「で、そつちは?」

幽玄としては本当にそんな関重蔵を想像できなかった。家庭人の側面があるとは一切思えなかったからだ。

「ゴルゴみたいになってた。M16ライフルの代わりに日本刀使ってたけどな」
「うわ〜」

眉間にしわを寄せ雪光は残念そうな声をあげる。

（やっぱりカナデがブレーキになってたか〜）

相馬新ではなく関重蔵という人間を引いた眼で見ると、奇妙なバランスの上に成り立っていたことを雪光は感じていた。

それは雪光以外でも兵介も光夜も感じていた。

軍の命令で行う行為の激しさと、家庭で見せる一面のギャップは同一人物の見せるモノとは思えなかった。

幽玄が続きをは話そうとすると情報端末が振動した。

赤いライトがゆっくりと点滅し、それは何かを伝えるようであった。

「どうやら開始の合図だ」

情報端末を制服のポケットから取り出すと振動を止める。

雪光も同じように情報端末を取り出すとディスプレイを見る。

「いっちょも」

◆ デイスプレイには「SHOW TIME」の文字が浮かんでいた。

「小野先生〜」

「ちよつと!同性でも胸を揉むのはセクハラよ!」

清姫はカウンセラーの小野遥を見つけると指先をワキワキと動かしながら近づいた。

「萌えだ、萌だよ〜」

(この台詞!この瞬間だから!ここそ言えた!八雲師匠ありがとうございませう!あつたことないけど!)

2095年9時33分。

この時には横浜騒乱は進行していた。

USNAの超大型直立戦車「ハイペリオン」

「十文字隊長」

魔法科高校から選抜された学生警備隊の隊長である十文字克人に声をかけたのは、この論文コンペ会場を中心とした警備陣の責任者である福島中佐である。

小柄な中年男性なので十文字克人を見上げるような態勢になる。

臨戦体制ということもあり服装は戦闘服を身に着けている。

福島中佐のもたらした情報はただ一つ。

「どうやら国内潜伏した工作員が横浜市外の交通規制の網を無理やり破ったようだ」

開会式もこれからというところで、この情報は十文字克人の緊張感を一気に上げた。

「警備隊に警戒を促します。続報があれば共有いただきたい」

奇妙なことだが学生有志による警備隊は、国防軍の指揮系統の下部にはない。

学生ではあるが、警備隊は本来は学生自治をうたう魔法科高校の趣旨による自発的な行為であり、その指揮系統は警備隊長が頂点になっている。

そのため今日の国防軍との連携はあくまでも「情報共有」による提携であり、十文字の判断は「国防軍からの助言」によって決定され、国防軍の進言を履行する義務はない。

そこには十師族に対する忖度も過分に含まれている。

国防軍としてはいくら魔法師集団とはいえ、指揮命令系統に含まれない集団が警備の一翼を担うのは不安でしかない。

福島中佐も平静を装っているが舌打ちの一つもしたい気分だ。

十師族。その政治的影響力が有事ともいえる現在に多少なりとも影響をしていることはやはり国防軍の悩みでもあった。

十文字は警備隊の控室に戻るなり、沢木を引きつれた服部に指示を飛ばした。

「服部、警備班でエントランス警備担当班以外を集めてくれ」

◆

「ドンパチー！」

「わかったから」

アーデルの弾む声を制するのは夜天だ。

アーデルはタワー正面で腰に手をあて胸を張る。

二人とも横浜ベイヒルズタワーの正面玄関に陣取っている。周辺には義勇兵たちが車止めや防弾用の簡易壁をそそくさと設置する。

30分前には横浜市街地への敵勢力の侵入が各所に情報が流された。

横浜ベイヒルズタワーには多くの義勇兵が詰めており、現在は戦闘経験が豊富な部隊

が今か遅しと周辺陣地の構築に励んでいる。

「あんた、糸は？」

「もう出してる」

夜天の魔技である「斬糸」はミクロンサイズの糸を、時には人体、時には周囲に張り巡らし操作、感知を行う。

現在は、この横浜ベイヒルズタワー周辺に200本の糸を張り巡らせ、地面の振動から異質な存在の感知を行っている。

「国防軍以外はいないわね」

周辺の振動や温度、そして微量の波動、そういったものを感じ分析するのは夜天の得意とするところである。

「いや、ちよつとまって。ああ中華街ね。あと五分くらいかしら。門が開くわね」

少し距離がある区画である中華街方向から複数の振動。地面をこする独特な振動。数は複数。

地面圧を考えると全長5m前後。

「出番じゃない？」

少し面白がつて、横のアーデルへ水を向ける。

それを受け、アーデルはCADを介さない地震の魔女としての独特な魔術を発動す

る。

「●△■×!!!」

言葉としては聞こえない、叫びの様な祈りの様な声を出すとアーデルの身体には無数の青白い紋様が浮かび上がる。

それは首元から伸び頬まで覆う様だ。

同時に手首のクリップのナノマシンも活性化する。

制服の上着、グリーンのジャケットは漆黒に染まる。ネクタイもだ。

そしてワンピース部分には黒いファイヤーパターンが浮かび上がる。

ナノマシンが想子に反応し、個々人の想子紋（サイオンパターン）を形成している。

その横では夜天も想子をナノクリップに注入する。

彼女来ているドレスは色を変え純白へと変化し、スクエアの幾何学模様を浮かび上げらせる。

「行つてくるー!」

それだけ言つて走り出すアーデル。

目の前の防御陣として防弾用簡易壁の1, 8 mの高さを簡単に飛び越え、さらには1 mの高さの車止めも飛び越えていく。

アーデルの戦闘用魔法装甲「タイタン オブ ウォー」

戦の大神の名を関したこの魔法装甲は強靱な想子装甲に人理を越えた肉体能力を宿す状態にするものである。

今の彼女には“ジェボードンの獣”など子犬にも等しい。

150cmに満たぬ身体はUSNAの超大型直立戦車「ハイペリオン」、大亜連が投入した中型の東欧製直立戦車とはケタ違いの、重戦車を屠るために生まれた超大型直立戦車とほぼ同等の馬力と強靱さを持つ。

レース用バイクもかくやという加速を見せ、アーデルは中華街目がけ走り出す。



「カノープス少佐」

「ああ、京都でも総隊長殿が動き出した」

衛星の一人に声をかけられ、横浜港近くのUSNA系の貿易会社が借りるオフィスでカノープスが答える。

USNAスターズ。

世界最強の魔法師部隊。

実際に去年の中近東での作戦で派兵された2小隊が敵の機甲大隊の侵攻を抑え込んでいた。

カノープスたちUSNAスターズの服装は軽装甲スーツを身にまとっている。

スターズブラボーチーム総数11名。

京都にはシリウス率いるアルファチーム。

横浜では残りの11名がカノープスのブラボーチームとして戦端が開かれるのを待っていた。

昼の戦闘ではあるが、USNAの戦略分析官の読みでは目標は2カ所、魔法師協会関東支部と論文コンペの会場だ。

カノープスはチームをブラボー1、ブラボー2と隊を分け、スターズだけではなく潜伏在日していた準戦闘工員（パラミリ）を各班に5名ずつ付ける。

首都圏におけるUSNAの最高戦力でもある。

目的はCIAから離反した元工員の処分と「パラサイト」の削除。そして漁夫の利である。

複数の目標を持つ本作戦は非常に偶発的な状況への対応を求められることから、シリウスよりも政治的判断能力が高いカノープスが横浜の担当となった。

それには彼の血筋、USNAの政治中枢に近い血脈による要求でもある。

「傾注！」

衛星級の声にオフィス内にいるスターズと準戦闘工員がカノープスに向く。

カノープスの派手さは無いが重く通る声が響く。

「本作戦は偶発的な要素が多く、諸君らの冷静かつ躊躇ない判断を求め。この作戦にはそれを対応できる人員を配置した。諸君らの理性と豪勇に期待する」

短いながらも、期待と作戦の難しさを伝えるには十分だった。

オフィスにいるスターズと作業員がカノープスに敬礼する。

中には普段敬礼などしない無頼を気取る者もカノープスの佇まいに敬意を表す。

なぜ彼がシリウスではないのか？

オフィス内は軽装甲のスターズ、銃器と防具で身を固めた作業員たちが張り詰めた空気のなか、カノープスの返礼と次の言葉を待っていた。

通常の社員たちは誰一人としない。全てUSNAの人間だ。

「あらほらさっせ」

1人だけ、1人だけ異国の言葉で返事をする者。

オフィスの入り口、抱えていた衛兵を力なく足元に倒れさせる。

服装は制服、魔法科高校第一高校の制服に、口元をバンダナで隠している。

決して大柄とは言えない体格、USNA基準で言えば子供だ。

侵入者の声に全員が振り向く。

「作戦失敗はお仕置きだべ」

準戦闘作業員が銃口を向けるよりも早く、左手と右手にそれぞれ持った何かを床に投

げつける。

その場にいた作業員たちは、グレネードだと思い距離を置く者や重量のあり被弾を防ぐ遮蔽物へと回る者、魔法師たちは障壁を展開する。

それは鎮圧用のスタングレネードとスモークグレネードであった。

大音量と閃光によって、一部の作業員たちは動きを制限された。

訓練の賜物が混乱による銃乱射は起きない。

魔法師たちはオフィス内に充満する煙で視界が確保できない。

下手に障壁を解除すれば煙を吸うことになり、確実に今よりも行動不能になる。

一種の詰み、であった。

魔法師たちが聞くのは煙の中からの打撃音と「敵だ！」という作業員の声。

天井部分にある換気装置も稼働状況が悪い。一向に排煙される様子がない。

エアコンによる室内の空気循環が余計に煙を充満させる。

魔法による排煙をしたくとも密閉された会議室、地下にありさらには窓や隣室に空間

が無いことは全員理解していた。

煙を逃がす先が無いのだ。

3回目の打撃音。

魔法で煙の無害化を行おうとするが、煙の成分と魔法式の不一致で発動エラーを起こ

している。

CADのエラー音が室内でいくつも木霊する。

スモークグレネードが地面に投げつけられて2分。

USNAスターズの体感として10分だろうか。

最善の判断は浮かばないが、障壁を緩め周囲に打って出ることが最悪の手段の一つと考え誰一人障壁は解かない。

準戦闘工員がダメでもUSNAスターズ11名がいれば作戦の遂行、最低でもCIA工員員の削除は可能なのだ。

「諸君！余計なことをしなければCIAの跳ねつ返りの首を土産に持たすぞ！だがこちらに敵意を向ければ諸君は死ぬ！」

滑らかな英語。

無音に近い、煙の充満した部屋の中。その言葉が聞こえて1分後、ドアの開閉音。

「ドア方向に近い者！障壁を解除して無理にでもドアを開けろ！」

カノープスの声で、一人のスターズ下士官は「イエッサー！」の声と共に障壁を解除。

煙に咳込み、催涙の効果で涙を流しながらも手探りにドア方向に進み、何とかドアを開けることが出来た。

ドアが開いたことで気圧差で煙が徐々に廊下へと逃げていく。

「全員15秒内に障壁を解除して目を閉じて床に伏せろ」

カノープスはその命令を出し、15秒後にドアに向かってゆっくりと流れ出すような気流を作った。

煙が晴れるのにさらに30秒ほどかかったが、他の物であればこれほど早く原状復帰は出来なかつたであろう。

煙が無くなった後には床に倒れ込む10人以上の準戦闘員。

後にわかることだが打撃で気絶させられた者は少なく、「後頭部に何かか触れたら意識を失っていた」「喉元に触れられたら意識が無かつた」と言っていた。

「本部に至急連絡！動けるものは重要資料の破棄、負傷者の介抱、即座に次のセーフハウスに移るぞ。監視機器が仕掛けられていないかも確認だ」

先程の高校生を追うことはしない。それがカノープスの判断であり、それは最善手でもあった。

もし、追跡をしていれば関重蔵の「俺の小隊」によって追跡者は射殺されていただろう。

USNAスターズ、ブラボーチームは事件介入の機会を失う結果となった。

関重蔵の手によって。

お花摘みなら一緒に行くこうか？

「ガスの元栓閉めた？」

「何言ってるの!?!バカなの!?!死ぬの!?!バカなの!?!バカなの!?!」

そこまで言わなくていいと思わない？

警備隊の指示で、参加学生は全員大会議室に集合している。

私の横では数少ない観覧学生である「おかん」こと和泉理佳が緊張のあまり私に食ってかかっている。

ちよつとジョークに耐えられる気分じゃないようだ。

発表する学生、審査の各校の生徒会、そして少数の観覧生徒、全員で1000人程度。

一校や二校より生徒数の少ない六校や七校は発表に5名、生徒会で3名、観覧で2名みたいな構成になっており、横浜に近い一校からの観覧生徒が多い。

この中には武闘派で知られる生徒が多く参加しており、準警備班と言った感じになっている。

特別に今日は全生徒に自衛のためCAD保持認められてもいるので完全に戦力扱いだ。

会議室の前の方ではあーちゃんが「落ち着いてください！現在、警備班と国防軍にて退避ルートの確保をしています！」

と一生懸命に説明している。

横には四葉君がおり、あーちゃんのその様子を後見している。

「キヨ」

慌てるおかんをよそに真由美が声をかけて来る。

彼女も元生徒会長ということで観覧生徒として論文コンペに参加だ。

「どうしたの？お花摘みなら一緒に行こうか？」

ゴン

脛を蹴らなくてもいいじゃない。

「そうじゃなく、摩利も警備班に回ったの」

たまに「白磁の肌」とかお世辞を言われている真由美の肌がいつもより白い気がする。

流石の七草のお嬢様も戦場に放り出されて緊張と恐怖を感じているのかも。

「それは旗色が悪いということ」

「ちよつとこつちに」

真由美は私の腕を引いて会議室から出ようとする。

丁度近くに三七上ケリーがいたので「和泉の面倒みておいてよ！」と声をかけると

「げっ！」と返事をしてくれた。

和泉の事が嫌いなわけではなく、昨年二科生中心のクリスマスパーティーを行ったときに当時の一年生を一科、二科関係なく参加招待したのだが誤って私の胸に顔からダイブしたのが三七上ケリーなのだ。

それ以来、私に頭が上がらない。

うーん、2年男子は初心いの。

◆

真由美が私の手を引いて会議室を出ると、別の階の警備隊本部へと連れていかれた。

「十二江」

そこにいたのは十文字克人、渡辺摩利、一条将輝&黒城兵介だ。

「どうしたの？後輩いびり？」

「違う」

摩利が呆れつつちよつときつめに否定する。

「指揮権の移譲を提案されている」

そう言つてジュウモンは同じくらしいの身長黒城兵介くんに視線を飛ばす。

視線を真つ向に受けても黒城君はひるまない。

「です。実際の戦闘が行われていますので警備隊の指揮権の移譲を隊長である十文字さ

んに具申しました」

黒城君は肩を少しだけすくませる。

「状況的に学生の対応範疇を越えていると思ひまして。十師族としての面子もあるので何とも」

言葉だけで聴くと非常に挑発的だが、なんとも黒城君の表情やジェスチャーを見ると一種ユーモラスだ。

「警備隊は十師族の領分ではない」

「そうです、だからこそ国防軍に対して隔意なく指揮権を移譲できる」

あ、じゆうもんが言葉尻取られてやんの。

「その判断は隊長であるこの俺が」

「では判断してください。実戦経験が国防軍より豊富とは思えません」

じゆうもんは眉間にしわを寄せるが、それを真正面から受けても黒城君は余裕。いやより上位者といった雰囲気は漂わせる。

助け舟を出したのは真由美。

「黒城君の意見もわかるわ。でも、国防軍指揮下に入った場合に隊が十全に機能するとは思えないの」

「なぜです」

「私たちは学生で、それも学校が違うわ。それを纏められるのは十文字君のモノリスコードでの実績によるものよ」

十文字克人のモノリスコード三連覇。まあ正しくは新人戦と2年次、3年次の連覇で合計で3連覇。

真由美のスピード・シューティング三連覇にも比肩する記録ではある。

「それは違います。モノリスコードの優勝者であることはたんなる箔付けです。十師族の十文字家次期当主。それがこの人の指示を聞く理由の一つです。勿論理由としては最大ではありませんが最小でもありません」

うわ、魔法科高校内における十師族の政治力学を理解した上で話しているのね。

モノリスコードの実力者。一校の部活連会頭、そして魔法師の頂点に立つ十師族、それも他の当主とも対応の立場にある十文字家次期当主。

たしかに百家に関係ない一生徒から見たら、指示する側と捉えるだろうな。

こう後輩から指摘されると、いかにジユウモンの周囲からの見られ方が厳しいかよくわかる。

「最大の理由はなんだ兵介」

一条君がそう聞くと黒城君はあっさりと答える。

「慣習だよ」

うーん、痛い。

そうなのだ、九校戦の優勝校が警備隊のトップにつくのは慣習、慣例でそこに特に過去の警備実績等は加味されない。

そこに十師族とかは関係なく「九校戦の優勝校の警備隊総隊長がちょうど十師族だった」だけなのだ。

例えば実戦式のある学生がいればその人の意見を聞くのが良いのだろう。

だが実戦を経験済みの指揮官など学生にはいない。

さらに言えば原作ではジユウモンは警備隊の指揮をほっぽって義勇軍に参加した。

しかし、それはなし崩しに戦闘が始まり、学生の自主的な行動の結果でもある。

でも今は組織的な行動を求められる中、学生の警備班が指揮系統から外れるわけにはいかないのだろう。

この辺りは前世が軍人だった黒城君のいうことが正論だ。

「これ以上は時間の無駄です。自分からの具申とその説明は以上です。ご判断を」

黒城君は再度じゆうもんを見ると視線を真由美に向けた。

余計なことを言った生徒を見守る先生みたいだね。

真由美の立場は難しい、前生徒会長ではあるが今の時点では学生自治における権限は何一つ有していない。

十師族の七草としてジュウモンの判断を支援できるだけの戦略眼を真由美は持ち合わせていない。

だから代弁者として私を呼んだのだ。

七草真由美はまごうことなき十師族の姫で、人の上に立つ器量を持っている。

そしてその周りには三人の協力者。

1人は武力、渡辺摩利

1人は知恵、市原鈴音

1人は私、十二江清姫、担当は政治である。

「十二江家の次期当主として進言します。警備隊は国防軍の指揮下に入るべきと考えます。十文字家次期当主殿には申し訳ありませんが実戦経験や事態の規模はこの場にいる私を含めた若輩には荷ががちすぎると思います」

珍しく堅苦しい物言いに十文字克人の顔つきが怒りや困惑ではなく、今まで以上の緊張の色が見れる。

ジュウモンも別に指揮権を渡したくないわけではない。ただ一人で決断するには慎重にならざる得ないのだ。

本当に国防軍に任せていいものか？魔法師を守護し、国を守る十師族の十文字家の当主として、警備隊の総隊長としての責務の放棄にならないか。

そこに同学年で十師族として意見を言える七草と十二江、そして学年的には若いが後日この判断の証言し、信用されるだけのバックボーンを持つ一条を集めた。

ただの一生徒からの具申を検討する時間はあまりにも短い。

だからこそ、若輩の十師族が具申を支援するポーズを作りたいのだろう。

それが意識的にしろ無意識的にしろ。

ジユウモンのには儀式なのだろうね。

「わかった」

それだけ一言言うのと近くにいた警備隊の生徒を呼び止め軍の人を呼んでもらった。

来た人は襟元の階級章を見ると佐官のようだ。

どうやらここの最高責任者かな？

軍の偉い人に向き直るとジユウモンは宣言する。

「現時点より魔法科高校の有志警備隊は国防軍の指揮下に入ります。今後の指揮命令については、中佐の指示のもと行動いたしますが、我々の本分が学生であることをご留意いただきたく存じます」

その言葉に軍の人も敬礼する。

「わかりました。指揮権の移譲を受理いたします。国防軍としては警備隊には観覧学生の護衛をお任せしたい。銃火に身を晒すのは国防軍の仕事。若人たちに無駄な血を流

させるつもりはありません」

「黒城、これで指揮権は国防軍だ」

満足したか、といった口調だ。

「そうですね、これで十文字さんも将輝も戦力において警備隊から離れての運用が可能です」

今までの厳しくも挑戦的な感じじゃない。なんとというか謎々の答えを言う年長者みたいな感じで黒城君が答える。

黒城君は軍の偉い人に背筋を伸ばし、違和感なく敬礼。

偉い人も自然に返礼し、返礼した瞬間に釣られた敬礼をしたことの驚きが顔に出る。

「中佐、僭越ながら有志警備隊、黒城兵介、具申いたします。十文字克人、一条将輝の両名を魔法協会義勇兵と合流させ、市内の侵攻軍の掃討作戦へ参加させることを具申申し上げます！両名とも機甲化部隊で換算で1個大隊規模の戦力を有する戦術級魔法師であります。本施設警備においては過剰戦力となりえます。何卒両名の義勇軍参戦をご一考下さいますようお願いいたします」

黒城君の話の神妙に聞いた偉い人は口を開いた。怒ってる感じはない。

「君のその本施設警備の戦力過剰とする理由は？」

その場の全員の視線が黒城君に向く。そうだ、爆裂の一条君、フアランクスの十文字

がいなくても防衛は可能なのか。

「一校に四葉がおります」

堂々と、下手をすると目の前の軍の偉い人以上に堂々としている。

まるで大軍を率いる將軍のようでもある。

偉い人の額にうつすらと汗が見える。

そう思った私もいつの間にか手を握りしめているし、真由美や摩利も緊張しているのが伝わる。

四葉光夜。そうだ。四葉の貴公子。いや、九校戦の実力が本物なら天才。

十師族最大の闇。殺し屋集団。悪意の壺、殺戮の影、裏社会の王、闇の住人、マギウ

ス・ザ・カース（呪われし魔法師）：

戦争、闘争、殺し、暗躍、そういったものでは右に出る者はいない。

書き換えられた私の記憶ではその勢力はこの数年で飛躍的に伸び、すでに東アジアのみならず東南、オセアニア地域まで手が伸びているとの噂もある。

真由美も、十文字もその名前の前では余計な口は挟めない。

「わかった。魔法協会に連絡をし受入れ体制の準備と戦力運用について協議しよう」

「感謝いたします」

再度黒城君は敬礼。

偉い人も返礼。

「黒城君と言ったな、卒業したら国防軍に来る気はないか」

少しほほ笑み、えらい人が勧誘する。

「そうですね。希望としては海兵大隊ですかね？さもなければ陸軍空挺かな」

困ったような笑顔で黒城君が返すと、偉い人は指示をするためこの場を離れる。

「将輝、これでフリーハンドで動けるぞ。あの子を探してやつてくれ」

二人とも真剣な表情をする。

誰か探し人がいる：もしかして、三校でパラサイトに憑依された女子生徒？

「わかった。兵介無理するなよ」

「大丈夫だ。ジョージに雪光もいる」

三校の二人はがっちり握手をする。

一条君は「ジョージに会ってから関東支部に向かう！」と言って小走りに警備隊本部

から出て言った。

「十文字さん、引継は服部副隊長に」

「お前はここまで読んでいたのか」

「ここまで算段に驚きを隠せないじゆうもん。いや私も真由美も摩利も驚いている。

この会場に集中する戦力を分散する方便を使い、十師族としての責務と警備隊の仕事

に板挟みだった二人を解き放ったのだ。

「十師族の威光は否定しないが、それだけで人が従っているとは思わないことだ」

黒城君はじゆうもんと真由美に再度視線を飛ばすと「警備に戻ります」といつてこちらも部屋から出た。

「まいったな。これじゃどつちが先輩だかわからんな」

嘆息一つし、摩利がつぶやくとじゆうもんが「ああ」とだけ答えた。

どんなに実力が有ろうと結局は私たちは18歳の子供なのだ。

大人たる二周目の面々からすれば、何に悩み、何を気にして、何に囚われているかなどお見通しだ。

関重蔵や四葉光夜だけ注視していたが、他の人たちもやはり特典持ちの実力者ぞろいなのだろうか。

そんなことを思いつつも、事態は次のフェーズに移っていく。

つまり「シエルターへの避難」だ。

駄話：「御飯」

司波深雪の容姿を擬音として表現するなら「シヤラララララ〜ン」だと思う。
対して、アーデルは「バツシューーン！」だろう。

片や流れる黒髪、白い肌。雪と氷を思わせる寒々しい美しさに人間らしい微笑み。

もう一方は燃えるような赤毛に猛禽を思わせる攻撃的な美貌。美しさと猛々しさを
持つ感情の美貌。

相反する美貌の二人だが意外と仲は悪くない。

「御飯」

「単語じゃなくて文章で言つて」

優しさの無い笑顔で返す深雪副会長。

アーデルは不機嫌になることもなく、勝手に椅子に座る。

「御飯」

「アーデル、文章つてわかる？単語を助詞や接続助詞などで繋げたものよ。馬鹿なの？」
心優しき氷雪女王の司波深雪が面と向かつて優しい声で罵倒するのはアーデルだけ
である。

深雪副会長はオーダーに対して甲斐甲斐しく、食事を準備してやる。

司波達也曰く「手間のかかる妹分として接しているみたいだ。人を世話することで色々な経験を積んでいると思う」だってさ。

そりやいいけどさ、生徒会室で暴発しない様、見守る俺の苦労も考えてよ。およよ。お昼の生徒会室。

女子達の騒ぎに困り顔の中条あずさ会長に、軽く切れながら甲斐甲斐しく世話する深雪副会長、そして「ほんとよく食べるね」とあきれる光井ちゃん。

そして足音が生徒会室に近づく。

「あーちゃんー！」

扉が開くと弁当箱を持ったミシエルが返答を待たずに生徒会室に入ってくる。

「いたの、アラタ?」

「いたの」

ミシエルの問いに答える。

司波深雪が「シャラララララ」ならミシエルは「ドンドンギャンギャン! レッツ、パ〜テイ!」である。

褐色の肌、金髪、長身、メリハリ効きすぎなスタイル。そして衣装。

先日行われたハロウィンパーティーでも学年問わず騒ぎ好きの女子を集めて「レディ・

バンパイア・ビキニ」というフェイクレザーの黒ビキニにひざ丈のロングブーツ、マント、シルクハット姿の集団を作り、前述の衣装でノリノリで踊りまくった。

非常に露出度の高いカツコの集団は、もちろん好評と不評を受けたがノリノリ女子の中に露出度を抑えた格好の前生徒会長七草真由美がいたおかげで服部会頭が裏取引に応じたとの噂もあり、集団の中心にいたミシエルと七草真由美が生徒会長からの口頭注意で済んだ。

幽玄に言わせると「大学に行けば十師族関係でストレス受けるから先に憂さ晴らししてるんじゃないか」だってさ。

「ユーゲン君に露出度の高い恰好見せたら、露出度下げろって怒られちゃった」と七草真由美嬢は言っていたので、この二人の関係はそこそ良好なのだろう。

「あーちゃん、お昼食べよ」

ミシエルは有無を言わず、中条あずさ会長の横に座るとお弁当を広げ始めた。

「フィリオさん、食堂にはいかないんですか」

何とも困り顔で中条会長がミシエルに聞く。食堂に行つてほしい空気がビンビンだ。

「うーん、食堂も良いけど生徒会室の方が気が休まるかなあ。あーちゃん、アスパラのお肉巻き食べりゆ？」

「ええ、いただきます。あはは」

声が笑ってませんよ、会長。

狼谷は一匹オオカミを気取っているが、どうせモーリーのところで飯を食っているだろうし幽玄も七草真由美に引っ付いているだろうし、先月の激闘が嘘のようである。

現時点でも俺が国防軍であることは一部にしか知られていない。

切花霞も殺す殺す言つときながらベッドの中では連戦連敗なので、今のところ諜報活動は進んでいる。

十文字家の東京別邸と七草の本家の間取りは把握した。

幽玄の付き添いと言うのは我ながら上手い口実と思う。

問題は幽玄の研究の有用性を七草の当主が理解できるか。

七草弘一という人物は諜報を遊戯的にとらえているので厄介だが怖くはない。

お兄様のところのシヨツカー首領こと四葉真夜に惚れている（会話の中で出た四葉のという単語で口角が少しあがって、無意味に椅子から立ち上がってあるいたので動揺揺しだな）ので、その対抗意識で諜報の世界に身を置いているのだろう。

不倫して泥沼離婚裁判の上で結婚してしまえ。

七草が興味を示さねば、あとはどこだ？五輪か三矢か。

五輪滯の体調を考えると有能な人材確保が急務なのは五輪か。

幽玄の才能を十全に使うには多額の研究費がいる。

それを賄える財力の家がいるのだ。一条は無理く。

横浜騒乱は概ね原作通りに進んだ。

司波達也は灼熱のハロウインを起こし、俺は裏で行動し大亜の船に潜入し必要な情報は取れた。

転生者たちはまとまりなく動いたものの各自そのトンデモチートの片鱗を見せ「二科生のくせにヤバイ」という認識が学内に広がっている。

直立戦車3台を相手に一人で大暴れとか、そこに座っている赤毛ちゃんが一番目立つたが。

そしてこの後はリーナである。来訪者編だが俺はそこまで原作読みこんでいないので起きる事件は幽玄に相談しながら解決せねばなるまい。

次はパラサイトか。それにしてもアニメは2期やったのだろうか。

あのバカの居場所だ

「思ったより状況は悪い」

「そうなの？」

竜也の言葉はその場に残ったカナデに心配の声を上げさせた。

上層階の会議室。

既にアーデルと夜天は戦場となる横浜の街に出ており、残された竜也は状況把握のため動いていた。

二人ともすでに手首のクリップからナノマシンを開封し、制服は黒の模様が現れている。

竜也はジャケットの端に黒のラインが入っているだけ。

カナデは線と点、モールス信号を思わせる模様がスカートに浮かび上がっている。

義勇軍との連絡官として魔法協会関東支部にいる国防軍佐官と話をしたところ、現在10時40分時点で戦闘が横浜各所で戦闘が開始されている。

「論文コンペは中止、中華街では中華街内の不穏分子が動き出している」

表情の起伏で言えば達也と五分の竜也は淡々と状況を説明する。

「ついでに言う」と羅門が中華街の大門前で不穏分子封じ込めで大暴れしている
（あの突つかかってくるのは相当腕に自信があるのか）というのが、大暴れに対する竜也
の感想である。

「それであなたは？」

カナデは動揺することなく質問をする。

二人の間に緊張感が張り詰める

この二人は前世世界では、やや敵対的な関係にあった。

F L Tのセキュリティ部門の責任者、もう一人はU S N Aの軍人。

タツヤ・クドウ・シルズは諜報戦には積極的ではなかったが、U S N Aに対して企
業ながらF L Tは眼の上のタンコブであった。

日本における魔法師の情報保護はある時点から四葉、特にF L Tのセキュリティ部門
が一翼を担うこととなった。

当時のF L Tはネットワークにおけるハッカー、クラッカー対策は世界最強と称さ
れ、U S N Aの国防総省の対外諜報部門は煮え湯を多く飲まされていた。

ハッキング攻撃の報復で西E Uは30分間のネットワーク大規模システムダウンを
喰らっている。

それを主導した電子世界の強者が藤林奏こと関奏であった。

大亜連は1度、FLTへの工作員の潜入作戦を行ったが関奏の指揮により保安部隊が阻止しており、前線指揮官としても十分な資質を持っていた。

「FLTの保安部隊は大国の特殊部隊に伍する」というのはCIA、NSAの諜報担当者からタツヤが聞いた評価だ。

「何も。出番はまだ先だ。そっちは？」

手元の情報端末を竜也に見せつける。

「通信網は掌握。何か聞きたい情報は？」

「あのバカの居場所だ」

返事はため息。

「こっちが聞きたいくらい」

関重蔵とは一昨日から連絡が取れないが、元気に動いているのは确实だ。

カナデのネットワークには「USNAの行動阻止」という情報が入ってきており、作戦計画の外で暗躍するのは情報部でありその戦端を担っているのが誰かということも想像がついた。

「状況の悪さの原因はあの人、なわけないでしょ？」

「直立戦車の台数が多い。もっと言えば魔法に干渉出来る機体が確認されている」

「ピクシー？」

直立戦車の数が多いのは接岸した船舶から現れた以外に、横浜港近くの積み荷の集積所からの発進が確認されている。

【影の中の男】が空間転移を使ったと考えれば、直立戦車の国内密輸など容易。

この直立戦車の台数の多さも【影の中の男】によるものと竜也は睨んでいた。

転生者たちの中でも戦略、戦術眼という意味では竜也、兵介、重蔵は頭一つ抜けており敵勢力の拡大も想定内ではあった。

「勘が良いな。影の中の男は、パラサイトの憑依を直立戦車のAIに応用している」

カナデは頬を指でなぞり困った顔をした。

魔法師の強さは「事象の改変」という物理現象への介入が可能なことで、個人でも大型戦車と同等に戦闘が出来る。

だが、戦車側が魔法師による事象改変に対応できれば魔法師の優位性は無くなる。

戦力は数だが、戦力の内容と相性が変わりつつある。



「いやいや、確かに百家の責務と作戦実施の協力はするけどさ、この状況は、この状況はちよつとな〜」

引き攣る笑顔の十二江清姫の腕を引っ張り半ば引きずるのは渡辺摩利だ。

片手には警棒型とも少し違う武装型CADを握っている。

「駄々をこねるな。こういった状況だからこそ、あたしたちの力が必要なんだろう」

「私、戦闘は苦手ですて…」

「空間把握は十八番だろ」

十二江家の魔法は古式の術に則った儀式による天候操作ではあるが、天才十二江清姫の実力は「空間把握」でもその才を際立たせていた。

七草真由美が「妖精の射手」という異名を獲得するに至る要因の「千里眼」を持つように、十二江清姫は「風霊の囁き」(シルフボイス)とも言われる「気流把握」の異才を持つっており、知覚魔法と合わせることで目視出来ないところでも認知することが可能となる。

ブランシユ壊滅における建築物内の敵感知ではこの能力が十分に役立った。

目視ではないからこそ、建物内に罟として配置されていた通常の空氣の構成とは比重の違うガスの察知を可能とし、萬真人の突入劇をアシストした。

「今度はあたしの為に使ってもらおうぞ。宝の持ち腐れだからな」

数名の国防軍兵士とすれ違う。

凛々しい美少女同士が珍妙なやりとりをしているのに不思議な顔をする。

「おりんはどうなのよ〜」

「鈴音は鈴音で忙しい」

「私は暇？」

「暇だろ」

（ほぼ徹夜で、夜中の3時から晴天になるよう調整したんだけどな）

天候操作だけではない、風向きや湿度、そして横浜港近くの海流の調整まで国防軍から来たリクエストには全て応えたのだ。

彼女の才能は「自国内の環境調整を行える」ことにかけては右に出る者はいない。間もなく、シエルターへの第1組が発発する。

すでに先行して国防軍が進路を確保すべく動いているが地上での戦闘も発生しており、シエルターへの支道出入口の確保まで人が回せないというのが現状である。

そこで七草真由美が「生命を賭して、という覚悟がある人だけ」を条件に九校の生徒内から対策部隊を設立した。

その最先鋒で戦場に踊りだそうというのが渡辺摩利だ。

九校戦でも名前をはせる凛々しき美少女である渡辺摩利が麗人然とした十二江清姫を引きずる姿を警備隊の面々や国防軍の軍人たちは驚いたように見ている。

「国防軍の人達の邪魔になるから」

「ならない！すでに真由美を通して行動許可をもらっているし、警備隊以外の生徒から

の希望だから問題ない」

ふんす、と鼻息強い渡辺摩利の言葉に清姫は先日ミーティングでの担当割り振りを思いだしていた。

「光夜は会場の学生たちと行動を共にしてくれ。他の人間が動けない場合の最終防衛線はお前だ」

「心得た」

黒羽竜也の指示に言葉少なにうなずく四葉光夜。

藤林奏に指示の意味を聞けば「普通の横浜騒乱なら今の光夜が全力で行動すれば5分で終わるかもしれませんが。でも今回は彼を予備戦力としておきたいんです。何かしらの不測の事態が予想されます」と清姫に答えた。

パラサイトの情報、謎の空間魔法を使うテロリスト、CIAの分派の集団、情報の出どころはいくつかのウソによって巧妙に偽装されて提出されたが先の情報は作戦に従事する各組織は把握している。

さらには雪光から当日暴れそうな達也の仲間にも伝えてある。

「エリカあたりは考えなしに切りかかりそう」とのためである。

「摩利く。彼氏にいいとこ説明したいのは分かるけどさ」

「な！修次は関係ないぞ！関係ない！」

渡辺摩利は顔を真っ赤にし、さらに速足となり清姫を引きずる速度も上がる。

(こりや、単独行動させると危ないな…)

渡辺摩利の戦闘力に心配はない。ただ戦闘レンジは近接寄り、知覚能力についても十
二江清姫以上ではない。

単騎で動くよりも連携を前提とした動きでないと足をすくわれる可能性がある。

友達を戦場の露にするわけにもいかず、溜息を一息ついて清姫は引きずられるのを止
め自分で歩き出した。

「摩利、わかったから手を離して。こっちも条件がある」

「なんだ？お前が準備した漫画みたいな戦闘服でも着ろとでもいうのか？」

「あ、それを条件にすればよかった」というような表情を清姫が見せるとそれに反応して
渡辺摩利も「本当に準備してるのか？」と驚愕とこの友人の残念な性癖にうんざりとし
た絶妙な表情をする。

「もうすこしメンバー増やそう。スクワッドで動かないと」



この時点で戦域は中華街大門と横浜地域外縁部となっていた。

間もなく10時10分となる。

流派!東方不敗は!

「(こ)ちらです!」

高校一年生にしては体格がよく、身に着けるプロテクターは市販品ではなく特注品であることは一目瞭然だ。

一条将輝を乗せた車両の運転手は中華街大門前に車を付け到着を告げる。

車内には一条将輝を筆頭に戦力になる6名の魔法師が乗り込んでおり、魔法協会の兵員輸送用車両から迅速に降り展開していく。

「なんだ!?これは!!」

1人の魔法師がその現状に驚いた。

直立戦車が4台。すでに大破し大門前にうず高く積まれていた。

その積み方は人為的で門の通行を塞ぐようになっていた。

大門の正面には一人の少女が腕組みをして仁王立ちしている。

周辺の国防軍兵士もその少女に声をかけることもせず周囲警戒をしている。

国防軍も20名ほどで、小隊が二つ急行したようだ。

「国防軍の白岩少尉です」

「十師族、一条家の一条将輝です」

如何にも軍人らしい体格の良い男性が将輝に近づき敬礼する。

将輝も軽くお辞儀を返す。

親の教育もあり、安易に敬礼をしないようにしている。

少なくとも現時点では将輝は軍属ではなく、下手に敬礼をすると指揮命令系統に組み込まれることを受領するという態度として見られるからだ。

「魔法協会の義勇兵を自分含め6名到着しました。この状況は？」

「いや、あそこにいるあの少女が……」

白岩少尉はややひきつった笑みを見せ視線を大門前の少女に向ける。

一校の制服と微妙にカラーリングの違う制服。魔法光を纏っており、その威圧感は現役の軍人もたじろぐほどだ。

少女は大きく息を吸い声をだす。

「おらー！出てこい！大亜連の手先！チンピラ！ゴク潰し！喧嘩売るなら買うぞ！おい！
てめえ、こもつてないで出てこいや××コ野郎！この×●△マの腐った玉無し！」

その威性の良さと言葉の薄汚さに、味方である国防軍兵士も魔法師たちも一条将輝も驚きのあまり動きが止まる。

端から見れば大門前の少女は美少女だ。

猛禽類をイメージさせる横顔は美しさと猛々しさを併せ持つ美貌で、美醜で言えば圧倒的な異彩の美貌である。

小柄な身体に纏う空気はその体格のイメージとは全く違う力強さもある。

だが口から出たのは今時のチンピラも口にしない罵詈雑言。それも下ネタ絡み。

「魔法師の品位が…」

一条将輝が頭を抱えて、国防軍にどう思われるかに頭を痛めた。

だがその反面、なぜか戦闘においては絶対的な戦力になるとも感じている。



「周大人」

「皆様方、この状況で抗うのは愚の骨頂。我々の目的は大亜連の勝利ではなく商売人としての自己の利益では？」

（怖い…なに？あの子怖い…ホント怖い…。昔冷やかして行つた裏ビデオ屋さんのヤクザより怖い）

アーデルの怒声は人の動きのない中華街に響き渡る。

常人の声ではなく、ある意味で神の声である。その威は人間の怒声の比ではない。

それを聞いている周公瑾も味方とはいえ恐怖を感じていた。

前世、高校時代に悪ふざけで行つてみた裏ビデオの店員が首元に刺青が入っており、

ものすごく怒鳴られたトラウマが周公瑾ことワタナベケンゴの思い出として浮かびあがる。

そんな恐怖を押さえて、周公瑾はこの会議室に集った中華街の実力者たちに大亜連への協力を翻意させようと話をしていた。

10分以上前に行われた大門前の戦闘で中華街内の直立戦車は全て大破した。

中華街に残るのは大亜連からの歩兵戦力が数十名残るだけだ。

そんな中、大陸からの縁だけで参加を強制されている中華街の大人達は、この周公瑾の言葉に心揺れ始めていた。

勝負の見えない戦争よりも、勝つ側に貢献して自己の利益を取るべきか。

未だその決意は誰一人ついていなかった。



「ちよつと、何を」

「テンション上げ」

アーデルは積み上がった直立戦車の残骸に上り、コックピット辺りを無理やり力任せに開ける。

将輝は声をかけるが、アーデルの返事は意味不明であった。

大破した直立戦車の操縦席でアーデルは自分の情報端末を操縦席のスピーカー機能

と連動させようとしていた。

「よし」

直立戦車の残骸から降りるとアーデルは機能連携が出来たので情報端末を弄り、直立戦車の外部スピーカーカーから音楽を流すため選曲を始めた。

「全員！大門壊すから、戦闘準備！」

その声には全員緊張が走る。

アーデルは首を二度三度左右に揺らし、コキコキと鳴らすと大門前に立つ。

だが、その次の行動が大門に対して起きることは無い。

「左方向から直立戦車！戦闘車輛が複数台です！」

国防軍兵士からの声。

声の先には複数の直立戦車と戦闘車輛が見える。

まだ距離はあるが大門破壊に時間がかかるようでは軍用車両による銃撃、砲撃を受けることになる。

アーデルは慌てる様子もなく、手元の情報端末の選曲を終わらせ流し始める。

その異様な空気に国防軍も魔法師たちも、一条将輝もアーデルから距離を取り、敵車両への遮蔽を取る行動しかとれない。

アーデルは向きを変え、遠くから向かってくる戦闘車輛に正対する。

「流派！東方不敗は！」

アーデルは腰を落とす。

まるで拳法の構えのようだ。

彼女の肉体は魔法光が増し、肉体強度を跳ね上げる。

「王者の風よ！」

構えを変えて突きを出す。

名もなき古代の軍神の力が、遙か彼方の雷神の怒りがアーデルを中心に渦を巻く。

「全新系列！天破侠乱！」

二度三度と突きを放ち、内回し蹴りを行い再度構えを変える。

「見よ、東方は赤く燃えている！！！！」

深く腰を落とす。

「石破！」

左手を突き出し、右手を引く。

「天驚！」

右手には渦巻くように魔法光が収束していく。

そして次の言葉と共に正拳突き of 要領で右手を突き出す。

「ゴツツツツド！フィンガー！！」

前面に突き出した右手から巨大な掌型の魔法弾が直立戦車と戦闘車輛目がけて飛んでいく。

◆ (たしか・・・GガンダムのBGMだったよな)

周公瑾は爆発音に混じる懐かしい音楽を聴きながら改めて集まった中華街の中心人物たちを見た。

「わかった。大亜連の工作員を拘束しないさい」

老師と言われる壮年男性が苦渋の表情で右手を軽く上げると、部屋の隅いた数名の配下が部屋から速やかに退出した。

◆ 「ヒート！エンド！」

4台分の直立戦車と2台の戦闘車輛の爆発を背景にアーデルを腕組みをし、背中に爆風を感じた!

(誰かと、ラブラブ天驚拳やりたい!)

「馬鹿か!」

爆発に身を晒し、ポーズをとるアーデルに突っ込めたのは一条将輝だけだった。

アーデル。この世界の後の一条夫人である。

七草の特別攻撃隊

一気に論文コンペ会場はざわついた。

「学生を二組に分ける！」

学生警備副隊長を任されている服部は警備隊を前に激を飛ばす。

十文字克人と一条将輝は横浜ベイヒルズタワーへの義勇軍参加のため警備から離脱した。

「任せたぞ」の一言に服部刑部は頭を悩まし、30秒後には覚悟を決めた。

会場の玄関ホールには学生警備隊の各班の班長9名が揃っている。

「編成基準は？」

「人数が多く戦力とカウントできる一校生を分散させ、第一組は参加人数の少ない学校を纏める！二組目は国防軍に殿を任せて撤退する。発表準備済みの学校は各機材を破壊やデータの削除を急げ！」

的確な判断を質問者につつけると、学生警備隊は自校の生徒会執行部と連携し人数の確認と人員の調整に勤める。

各班班長が各校の生徒会と調整すべく離れると服部に人が近づく。

「服部君」

「七草かい、先輩」

いつも以上に真剣な眼差し七草真由美が服部に声をかける。

その後ろには、一年生の司波達也と行動を共にしている面々だ。

司波深雪、吉田幹比古、千葉エリカ、西城レオンハルト、柴田美月、光井ほのか、北山雫。

それだけではない、千代田花音と五十里啓、壬生紗耶香、桐原武明もいる。

「第一高校の服部会頭に提案があります」

七草真由美の声は前生徒会会長ではなく、十師族特有の希望を伝えるのではなく命令に近い声音だ。

◆ 後に言われる「七草の特別攻撃隊」の結成の提案である。

「先発は出したか」

「はい、第二中隊から選抜した小隊を移動ルートに。他に周辺警戒で四小隊を周辺に出しています」

「そうか」

会議室では福島中佐はモニターに映る地図と戦闘開始地域、そして学生たちの避難

ルートを見ながら呟いた。

部下に不安を与えぬために表情を消して頷く。

本来であれば横浜内の自軍戦力は十二分と考えていたが敵、侵略者である大連連の持つ戦力は想像よりも厚めに配置されていた。

既に横浜港近くでは突如出現した直立戦車により遭遇戦が行われており、中華街大門では既に銃撃、魔法戦が展開されている。

中隊以上の指揮官にはこの作戦の全容が知らされていたが、その作戦は受け身なこともあり、敵勢力の行動如何では変わってくる。

今も、3分おきには各地域の情報交換が頻繁に行われておりモニターの戦況も逐一変化している。

(戦力はもつか?)

横浜港を中心に横浜全域での戦闘が開始されている。

広くもなく、狭くもない地域で小規模ながらいくつかの要所要所で戦闘が繰り広げられ、この要所の戦闘が拡大し、要所戦闘範囲が合体すれば一大戦闘区域となり投入すべき戦力も増える。

戦闘区域が合体して横浜全域を覆った場合。

一区域の限定的な対応に収まらず、横浜を中心とした神奈川や八王子や町田など南多

摩、そして都心への広域の戦闘区域宣言が発令される可能性がある。

それは、本格的な「本土侵略」を受けていることの表明であり、本土侵略が発表されれば大連連から第二陣、第三陣と戦力が投入されるだろう。

国際法上における宣戦布告をつとり越した侵略行為。国際社会への遠慮が無用になる。大戦力による本格戦争へと発展するだろう。

その場合は横浜ではなく福岡をはじめとした西日本の北側へ侵攻だ。

つまりはこれから数時間が日本侵略防衛の分水嶺になって来る。



先頭の隊員が左手を握り腕を少し上げる。

ハンドサインで「止まれ」ということだ。

第一小隊8名はシエルターへの撤退ルートを先行して進んでいた。

先頭の隊員はライフルに搭載した赤外線スコープを除くと人型が数名、進行先に待ち構えているのが見える。

最小限の電灯で薄暗い中、大人数が少数の敵と遭遇すれば最悪の結果学生たちの血だけが流れることとなる。

先頭の隊員がゆつくりと音を立てずに後退すると小隊長に「複数名による待ち伏せです。小銃らしいものを携帯しています」と伝え、小隊長も頷き、情報端末でのテキスト

メッセージを本部に送る。

◆ 作戦司令室となった会議室は学生たちのシエルター避難のための準備のため兵士たちの出入りが活発になっていった。

「生徒の組み分けが終わりました。警備隊の振り分けも完了済みです」

警備隊を代表して服部刑部は福島中佐に報告すると福島中佐は頷く。

「では、第一組は避難路が確保次第出発。第二組は第一組が到着後出発とする」

先発が到着するまで後発を出さないのは先発組が後退する可能性を含めての判断である。

先発の撤退時に後発組が撤退路にいることによる撤退困難を回避するためだ。

結果的に論文コンペ会場に長時間残ることとなる第二組の護衛陣は第一組よりも厚くなっている。

「あの…」

「どうかしたかい」

報告を終えた服部はおずおずと、申し訳なきように福島中佐に声をかける。

周囲にいた副官や連絡係は服部を制止することはない。

「先ほど、当校の七草先輩、七草真由美さんから施設外警備の志願者を集める許可を得た

と……」

服部の言葉に福島中佐は苦笑いをせざる得ない。

命令無視ではあるが、学生内にいる即戦力を自発的に糾合して戦力化できるといふことは望ましいし、「七草」の名前の元で責任を取ると誓約したのだ。

士官学校の先輩である村井からは「十師族はお荷物だが役に立つ荷物だ」と以前言われたことを福島は踏襲した。

「十師族の若い世代は好戦的だね」

服部に向ける視線は優しい、いや板挟みになるこの若い学生の苦勞が福島の頬に苦笑いを浮かび上がらせている。

七草真由美が率いる一団には連絡役で1小隊を付けた。

福島の想定する戦力は数名ながらあの七草、それも射撃においては魔法師軍人のそれを凌駕する七草真由美が

いるのだ。中隊規模の制圧力を持つだろう。

数十人規模の人員を出すよりも数名の学生と1小隊で、中隊の動きをするのならおつりがくる。

それが福島のはじき出した算盤の結果だ。

そこに装備を整えた兵士が報告に現れた。

「報告いたします。地下シエルター通路の先遣隊が敵勢力を発見したとのことですよ」
その報告を聞いて福島は顔を少しゆがめた。

（先手を取られた）

「すいません」

司令本部となっている会議室の入り口には一校の中条あずさ生徒会長とその補佐たる四葉光夜がこの後の行動を確認に訪れ、福島への報告を耳にした。

◆ 四葉光夜は三回指を鳴らす。

◆ 「直立戦車を前に！横転した車両を盾にして距離を詰めるぞ！」

大巫連の小隊長は日本の魔法師の卵たちが立てこもる会場へと迫っていた。

保有する戦車は2台。

兵士も多く、この作戦で拠点制圧が出来ればエリートコースも確実だ。

協力者から与えられたキョンシーたちもある程度はこちらの指示を聞いてくれる。

路上の先には日本の兵士たちが銃器を構え、時折撃ち牽制してくる。

相手には直立戦車が無い。だがこちらには直立戦車がある。

距離を詰めるのに適しているのがどちらかは明白だ。

「たいち」

横にいた副官に一筋の雷が落ちる。

轟音。後方の兵士にも、横の兵士にも、近くの直立戦車にも侵攻していた小隊全員に寸分の狂いもなく雷が落ちる。

そして小隊長にも雷が落ちる。



「終わりました。半径300mは安全です。シエルターへの通路にいる敵勢力も処分しました」

四葉光夜の天才、1000年単位で語り継がれる「天才」の伝説の一端であった。

状況がつかめぬ周りの人間がいきなりの光夜の言葉の真意をつかみあぐねて奇異な視線を向けている。

「四葉どういことだ？」

「先ほど索敵し、周辺の地上地下の敵軍を処分しました。シエルターまでの経路は確保しました」

「確認だ！急げ！」

声を荒げて指令を出したのは福島の副官を務める兵士だ。

四葉光夜の佇まいに気押され、感情を強めにだし指示を飛ばす。

それは上位者の機嫌を取るためのポーズでもあり、恐怖を紛らわす感情の発露でもある。

「四葉…お前何をやった？」

猜疑と恐怖。服部は四葉光夜が入学してから何度となくこの感情を己の中に呼び起こすこととなっていた。

「索敵、照準、攻撃です」

再度指を三回鳴らす。先ほどのスナップ三回が魔法の発動であると示す様に。

驚き疲れた顔をする服部。

この緊急事態でせわしなく動く兵士たちも、魔法行使をこともなく言う四葉光夜に恐怖のあまり行動が遅くなる。

「四葉君と言ったな。こちらの指示無く魔法の行使は止めていただこう」

唯一毅然とした態度で光夜に注意できたのは福島だけであった。

言葉は毅然としても背中に流れ出る汗は畏怖の感情の表れだ。

（あの小娘どころの話じゃない！あれは小賢しいだけが……これは！）

「七草が責任を取る」「実戦で有効な若手の魔法師を有効活用」と言った七草真由美の指示や命令なれたリーダーとしての言葉は福島にしてみれば学生の背伸び程度だったが、目の前にいる四葉光夜の一挙手一投足は、「支配者」「絶対者」のそれだ。

「申し訳ありません。緊急事態と判断してのことです。ご容赦を」

冷静な四葉光夜の言葉に声を荒げて返事したくなる気持ちを押さえ福島は言葉を返す。

「君の魔法師としての実力は我々の切り札になり得る。軽々な行動は慎んでいただきたい」

緊張に声をからさずに言うのが精一杯だった。

「報告です！シエルター通路に敵勢力の姿が消えました。先遣隊が安全を確認！追加の部隊派遣を要請しています！」

兵士の報告で、静寂と緊張に包まれた司令室はまた感情と熱を取り戻し、通路警備の追加人員の派遣のため人が動き出す。

「生徒の最初の集団の移動開始をする。服部君」

福島の言葉に服部は頷き、早々に第一組出発の準備をするため会議室を出る。

「小鹿曹長」

「はっ」

「斎藤少尉の隊を呼んでくれ。会場内の逃げ遅れ生徒の確認は斎藤少尉に一任する。学生警備と連携するよう伝えてくれ」

福島は指示を飛ばしながら手元のタブレットに目を落とす。

会場周辺の敵勢力を示す情報が「制圧」「消失」と文字に替わっていく。

「四葉君は疲れていませんか」

会議室を出て服部の後を歩いて追いつながら

恐る恐るねぎらいの言葉をかけるのは中条あずさである。

屈強な兵士たちが行きかう中で小柄で弱弱しさが残る中条あずさは非常に目立つ。

戦場の一角となるこの会場では「普通の少女」である。

この小柄な少女の言葉が、四葉光夜には最大の癒しであった。

「はい、大丈夫です」

笑顔で返す光夜。

この光夜の笑顔を見れば、更なる驚きで動きを止めるだろう。

そこには少女に恋する少年の笑顔があったからだ。



間もなく午前10時30分を迎える。

半ギレブラコン女！

「深雪さん」

「はこ」

七草真由美の呼びかけに司波深雪は頷くと、右手を突き出し手元のCADを操作する。

横では七草真由美も同じように右手を突き出す。

前方には2台の直立戦車。



七草の特別攻撃隊は前面には遠距離攻撃が可能な七草真由美、司波深雪を配置し、中央には索敵要員の五十里啓と対パラサイト要員の吉田幹比古、部隊最後尾には後方からの敵勢力との戦闘に備え、千代田花音が配置されている。

近接を得意とする千葉エリカ、西城レオンハルト、壬生紗耶香、桐原武明の四名は前衛と中央の中間にいる。

必要があれば前面の二人の前に出て壁になり、状況に応じて側面の敵を叩き、場合によっては後方で敵の遮断を行う。

そして彼らに同行するのは7名の国防軍小隊であり、この戦闘区域内での警戒活動の法的根拠になっている。

3分前に接敵した直立戦車2台と敵の歩兵10名は撃破。

次に目指すは現在地から300m先の「横浜避難地下道第二降下口」である。



一呼吸に三突き。

「三段突き……」

普段、明るい声の千葉エリカも声を潜め背中に流れる冷や汗を感じていた。

相対する中年男性。スーツ姿で日本刀。

決して運動慣れした体格でないのはスーツのジャケットから覗く腹部のだらしなさが語っている。

七草真由美が主導する「部隊」に参加したエリカは兄から渡されたオロチマルを手に、シエルターへの生徒たちの避難が終了するまで、シエルターへの支道口の巡回をするこ
ととなった。

腕に覚えのあるエリカの好奇心や冒険心もその行動の動機にある。

「横浜避難地下道第二降下口」の入り口あたる自動モビリティの地下駐車場入り口で交

戦する国防軍と敵勢力。

そして国防軍相手に相手に大立ち回りをする中年男性。

片手には日本刀。

「こういう相手にはわたしねー」と部隊から飛び出し、牽制の一振りを男性にしたところカウンターで繰り出されたのは沖田総司の秘剣「三段突き」であった。

転げまわり距離を取り、そのとき相手の技が何か判断できたのだ。

「エリカー！」

「ミキー・パラサイトよー！」

先程の三段突きは制服のジャケットを掠める程度で済んだが、もう半歩相手の踏み込みが鋭ければエリカは声を出せない状態になっていた。

改めて自分が生死の境に立っていること感じる。

雪光の説明で「パラサイトは情報次元からの召喚時に特定の技術や、過去の人間の情報を被せて呼ぶことが出来る」という説明から「三段突きを放つ中年男性」がパラサイトだと一瞬で直感した。

ミカエラ・ホンゴウが若年にして実戦で使用可能なまでに拳法の功夫があったのも、この「上乘せ」によるものである。

中年男性は日本の剣術をその身上乗せされたパラサイトなのだ。

「おもしれえ！相手にとって不足無しだ！」

部隊から歩を進めたのは西城レオンハルトだ。

他の面々、七草真由美や司波深雪は魔法にて他の工作員への牽制や直立戦車を相手取っている。

近接戦闘を得意とする桐原や壬生紗耶香も遠距離魔法を使う他の魔法師に敵を近づかせまいと奮戦しており、余剰人員として「パラサイト」の相手が出るのが一年生の三名だけだ。

「エリカ、レオ。30秒足止めしてくれ」

幹比古は札を出すと想子を活性化させながら小声で何かを呟きだす。

「レオ。油断しないで。相手の剣の間合いは必殺の間合いよ」

先程、恐ろしい幸運によって致命の一撃を受けなかったエリカは緊張の声で注意を促す。

「任せろよ！パンツァー！」

レオンハルトは音声入力で魔法を発動する。

左腕のCADから魔法光が全身に回る。

これで日本刀の一撃も防げると思ったが、相手の力量を見誤っていた。

中年男性は「するり」と地面を歩く。

千葉の剣士であるエリカが対応できぬほど、自然かつ不自然な歩法は歩くというより滑るといった動きで10m近くあった距離を詰めた。

パラサイトの強化された肉体能力と古流剣術の妙が合わさった動きにエリカもレオも動けない。

狙いはレオだ。

切っ先がレオの身体に触れる。普通であれば硬化魔法の干渉力に負け、日本刀の切っ先はレオに触れることは無い。

だがパラサイトなのだ。

魔法師よりも情報次元に通じ、CADもなく魔法を発動させる。

切っ先が硬化魔法に触れると、想子同士の干渉を示す魔法光が一瞬だけ出るが次の瞬間には刀の先がレオの左肩に触れる。

「ぐうー」

硬化魔法が透過されたことに驚きつつも苦悶の表情を浮かべ体をひねるレオ。

エリカが横合いから中年男性を切りつけるがこれも「するり」とよけ五歩、六歩と間合いを取る。

「ちい、信じられねえ」

レオの左肩から出た血は制服を赤く染める。

硬化魔法をいともたやすく透過されたのだ。レオからすれば弾く感覚も、突破されたといった感じではなく、まるで硬化魔法そのものがなかったような切られ心地だ。

後方遠くでは千代田の地雷にかかった敵の装甲車が宙を舞う。

通常兵器にとっては難敵である魔法が簡単に無効化された。

この中年男性のパラサイトはレオを簡単に屠ることができ、それは十師族最硬と目される十文字家のフランクスを切り裂ける可能性が持つ。

パラサイトの身体能力は銃火器での正面戦闘では追い切れず、刀は魔法師の硬化魔法、障壁を切り裂きうる。

対人戦闘では最強の存在がエリカの前に立っている。

相手の歩法、剣閃から自分より数段、いや桁の違う剣技を誇る相手なのも承知だ。

だが今いる一校の部隊で最も剣技に優れたエリカでないと対応できない相手でもある。

(死中に活)

そんな言葉がエリカの頭をよぎる。

道場でも実戦のように！と指導はされていたが、ここまで自分の命を俎上に挙げての勝負は初めてだ。

アドレナリンが大量に脳内をめぐるよりも恐怖の芽が開いていくのが、エリカ自身感

じていた。

もう一度中年男性が歩を進める。

(幹比古君の時間を稼ぐのが仕事！命を捨てても！)

覚悟を決めエリカが一步前に足を踏み出す。

!!!!

次の瞬間中年男性は動きを止め中空を見ると、不自然に上半身が痙攣する。その時間5秒。

痙攣が止まった次の瞬間に上半身は大きく伸ばされた。

まるで土人形を弄り回す子供が粘土がどこまで伸びるか試すような感じだ。

中年男性の身体は上半身と下半身が絞られるように左右逆に回される。

肉体の絶命。

そして中空の見えぬ空間へ幹比古の燃烧の魔法が情報次元に逃げ込んだ。パラサイトを焼き尽くす。

◆

「実力差」

ぼそりと夜天が呟く。

昔なじみで「半ギレブラコン女！」「冷血漢気取りの短気馬鹿！」とお互い罵りあった

相手ではあるが、アーデルの次に口喧嘩をした相手で、自分の背後に四葉の看板が見え隠れした時期でもその態度は変わらなかつた。

学業の成績ではほぼ五分だった相手。

糸による情報でその半ギレブラコン女がパラサイトと戦闘となつたのを感じ助太刀したのだ。

如何に剣の腕に自信があつても、その動きを感じる限り負ける公算は高い。

「もう少し実力つけなさいよ」

再度呟いた口調は夜天というより霞の頃のままだった。

懐かしむような、寂しがるような、在りし日の思い出を知る声だった。

横浜は午前11時5分を迎える。

雪光と幽玄はお互い目を合わす

「で俺たちは運良くか」

「運良くだね」

「運良くだ」

久慈灘幽玄、司波雪光、黒城兵介が逃げ遅れの学生の搜索として会場に残っている。

玄関ホールは閑散としており、シエルター移動の第一組はすでに出発しており、第二組は地下ホールで待機中だ。

体格的には大中小と言ったトリオだが、容貌の美しさ、力強さ、そして落ち着きぶりを見る者が見れば修羅場をいくつくぐったかを疑うほどだ。

運良くといったものの、会場に残ることを後押ししたのは四葉光夜だった。

暗に「三人とも自由行動を取れ」ということだ。

「吉祥寺は？」

「さつき第二組に合流した」

幽玄の問いに兵介が答える。

各校の論文代表チームは機材を分解、破壊をし、二組目に組み込まれた。

一組目には中条あずさや、服部副隊長が先導し、二組目の殿には四葉光夜が配置された。

会場に残った生徒がいないかの確認はすでにあらかた終わり、「四葉の指示」という名分で三人は行動権を手にした。

雪光はジャケットの下から刀の柄を取り出す。

「なんだそれは」

「霊子刀剣（プシオンブレード）」

2096年以降に「ヴァンパイアハンター：ホーリー・スノー・ライト」とUSNAのWEBパルプ雑誌を賑わせた謎のヒーローが使用していた武装CADでもある。

物理・情報・霊体と三次元での攻撃を行え、その威力は高出力レーザー以上と言われている。

「サイオン固定式のブレードか。アーデルと近い発想だな」

「あの子そんな感じなの？」

「どちらかと言うと身に纏う方だな」

雪光と幽玄が会話をしながら、三人とも装備を整える。

兵介は左手首の新型CAD、手甲に近い形態。ブーツタイプのCAD。

雪光は霊子刀剣とタブレット型CAD、袖のナノマシンクリップ。

幽玄は手首にリストバンドタイプのCADだけ。

幽玄は地面に足先で地面に三角形を書く。

「落書き」と兵介。

「見とけ。理論構築も突き詰めるとこうなる」と幽玄。

落書きと評された図形が完成すると久慈灘は図形の中心でサイオンを活性化する。

「うお」

驚きつつ2，3歩距離を取る兵介。

立体的な地図だ。青白く半透明の立体画像。今いる位置を中心に半径10kmの詳細な地図が半透明の立体図として立ち上がる。

「現在位置がここ。現在敵勢力の行動地点がここ」

幽玄の言葉に反応して現在位置が明滅。敵勢力の位置も赤の点滅。

「敵の行動傾向は？」

「20分ほど巻き戻す」

赤の点滅が巻き戻り、上陸地点や横浜の街への侵攻状況を再現する。

「便利だな」

兵介が眩くと、少し気を良くした幽玄がもう一度地図を弄る。

「もう一つ便利ついでに」

右手で立体地図の時刻を現時点にする。

幾つかの黄色の光点が発生する。

「パラサイトだ」

「へー、そんなことできるの」

今度は雪光が感嘆の声をあげる。



「競争するか？」

兵介の言葉に雪光は軽く笑う。

「僕の勝ちだけどやる？」

それを受けて兵介も楽しそうに笑う。

「見てろよ」

そう言って兵介は手首のCADを起動させる。

次にブーツ型のCAD。つま先を二度、かかとを一度地面を突く。

微小の機械音がすると、ブーツから魔法光。

「先行くぞー！お前の分はないかもなー！」

その言葉は姿が見えなくなつてから聞こえたように幽玄は思えた。

制服の赤だけが幽玄の網膜に残る。

「どんな速さだ。アーデルや一樹以上だな」

少し呆れ気味に3Dマップに突如現れ市街を縦横無尽に走る点に見入る。

兵介だ。

「じゃあ、僕も行くから。あとは自由行動で」

「パラサイト案件だ。頼りにするぞ」

「お、信頼するって？」

「こき使うって意味だ」

雪光と幽玄はお互い目を合わす。

そこには子供じみた意地の張り合いは全くなく大人同士の軽口に対しての微笑だけがある。

「行つてきます〜」

微笑した雪光は手首のCADを起動して歩き出す。

1秒も経たず雪光の姿は遙か先へ来ていった。

3Dマップに高速で動く2つの点。片方は赤、片方は白。

人魔未踏の高速世界の住人が二人、戦闘が行われる音の遠い静かな横浜を走り回る。

「さて戦況はどう変わるか」

以前の世界で「影の中の男」、幽玄たちの世界では「アレ」と呼んだいた存在がいる以

上楽観視はしない。

だが、走り出した二人が想像以上の戦力であることを実感すると勝利への道筋が明るくなった気もした。

◆ 「撃てー！」

警察は銃火器で装備した集団と戦闘を行っていた。

路上の車両、建築物の影、交戦距離は50m程度でいつ銃弾が身体を貫いてもおかしくない。

警官たちも装備は通常の防弾ベストに拳銃ではなく、拳銃弾用自動小銃、俗にピストルキャリアバーカービンと呼ばれる装備にプレートキャリア、防弾用ヘルメットギアという、通常では考えられない装備でいる。

この警官たちは横浜管内での暴徒鎮圧や銃火器犯罪を専門に対応するYSAT（ワイサット）の一分隊7名と応援の機動隊選抜チーム8名の混合チームである。

現在、国防軍以外にもYSAT、機動隊、そして警察省から派遣された遊撃隊による「警察」がテロリスト逮捕のため横浜内で活動している。

2000年代初頭では銃火器犯罪に対抗する警察組織は5.56mm弾を中心としたライフル弾をメインにした装備であったが、2095年にはPCC（ピストルキャリア

バーカービン）を主体として交戦距離200m内を意識した装備になっていった。

これは警察組織が貫通性が高いライフル弾の使用に対する致死性の高さが問題視された結果と、実際に日本の都市部での交戦距離を鑑みた結果である。

狙撃手は引き続きライフル装備だが前線に立つ者は世論と上層部判断と予算によって苦勞をしていた。

打撃力を残すため強化9mm弾（9mm+）の使用に対応できるPCCが制式採用されている。

この武装の採用については国防軍の軍備増強を嫌う政治勢力へのガス抜きの意味合いもあった。

国防ではなく国内治安を担う組織の武装低下。

割りを喰らう形となり、警察組織と国防軍の軋轢は解消することが難しい状況は2095年も継続されている。

「隊長！」

隊員が叫ぶと、300mほどの前方のビルの角から一両の直立戦車が現れる。

晴天の中、突然現れた黒い機体は警官たちから見れば最悪の敵であり、テロリストから見れば侵略の象徴である。

「全員退避！下がれ！織田、障壁張って後退支援だ！」

隊員の魔法師に指示を飛ばすと同時に警官たちは牽制の射撃をしながら建物伝いに後退を始める。

直立戦車はその後退する警官たちに向けてガトリングガン銃口の銃口を向けた。

キヤリキヤリキヤリとモーターの始動音と共にガトリングは回転を始める。

書語化が不可能な排気音と射撃音。

地面に線を書くようにガトリングの銃弾は警官に向かって飛んでいく。

そこは後退を支援するY S A T隊員の障壁が阻み、石壁を削るような凄惨な音が市街地に響く。

魔法師の隊員は額から汗を垂らす。

障壁展開に疲労を感じたわけではなく、徐々にだが障壁への魔法的な干渉を感じているから。

「破られますー！」

それだけ叫ぶと魔法師の隊員は障壁が破れる感触を両腕に感じた。

つまりそれはあのガトリングから吐き出さる線に殺されるということだ。

「ひっ」

小さく悲鳴を上げる。

だが弾丸が織田と呼ばれ隊員に届くことは無かった。恐怖に引き攀つた織田の両目は見た。

高速で動く何かか物凄いスピードで弾丸の吐き出されるガトリング目がけ、赤い何か射線上を飛んで行つたのだ。

その何かが向かうとガトリングの弾は地面に落ちる。

織田がガトリングの弾が地面に落ちたのを気付いた瞬間に200m以上先の直立戦車は轟音を立てて崩れ落ちていた。

「大丈夫ですか？」

魔法科高校の制服、白いに稲妻のような黒い模様の入った制服を着た少年が声をかける。

輝くような瞳、美少年としか表現できぬ中性的な美少年だ。

この戦闘区域内で特に恐怖や緊張をする様子はない。

「ああ、君は退避しなくてもいいのかい」

本来であれば警官たる職責において退避を指示するところを織田は何ともなしに聞いてしまった。

「ええ、ちよつと散歩を」

そう言つて少年は一步踏み出す。二歩目の瞬間にはそこに姿は無かった。

「4機目！」

兵介はガトリングガンの銃弾をサイオンシールドで全て受けきり、1秒とちよつとで200mを詰めサイオンランスで一気に直立戦車を破壊した。

幽玄と別れて391秒。

雪光と兵介で9機の直立戦車を破壊している。

二人とも時速に直せば700km以上の速度で横浜市内を走り回っていた。

二人の狙いは直立戦車とパラサイトのみである。

通常の陸上戦力は国防軍と警察と義勇兵に任せ、難敵だけに的を絞り行動している。

先程光夜の魔法と思われるものが発動した。

その余波かパラサイトに憑依された人物は鈍くオーラを放ち始め標的の判別が容易になつている。

霊子刀剣でパラサイトの霊子だけを斬る。

肉体に残された本人の霊子の生存本能次第では「パラサイトから脱出」が可能であるが確立としては理論上は1.7%ある。

多くの市民がパラサイトに犠牲になつている。

だがパラサイトの専門家である雪光でもパラサイトから脱出できた事例は1件しかしない。

偶然と幸運が3乗したような状況によるもので、今の時点では霊子のみを斬り理論値1.7%にかける以外方法は無い。

1. 7%にかける以外方法は無い。
一校の二科生の面々、特に戦場に走り出しかねない生徒たちにはパラサイトの危険性を説明した。

実力、性能、なによりも情報次元状態での生存。

吉田幹比古なり古式の特に破魔調伏の術を体得した人間なり、情報次元への直接アクセスが可能な人間を同行させること。

他の仲間の二科生と一部の三年生に情報を与えて戦力へと変えていく。

今回ばかりは総力戦で使える者は使わねばというのが雪光の考えだった。

パラサイトの専門家である雪光から見れば、パラサイトとは生物というよりは「増殖を単一目的とした有機的なプログラム」に近い。

実体化は出来ず、有機生命体や霊子、想子を介しての無機物への憑依をする存在。

戦略的な押し引きの判断は宿主に依存するが、パラサイト憑依におけるパラサイト本体と宿主との相性次第では十全な戦略思考が出来るわけではない。

今回はパラサイトの数が多い。まかり間違つても一匹でも残せば、それが警察組織の人間に憑依すればそれは爆発増殖の可能性がある。

その芽をつぶすためにも、投入できる人間は投入しパラサイトを消滅できるようお膳

立てをする必要がある。

それが恋焦がれる七草真由美であつてもだ。

「雪光、行くぞ」

兵介の声に雪光は走り出す。



横浜。午前11時38分。

七草真由美、結婚を前提に付き合っ
て欲しい。返事は卒業
までにくれ

「終わったか？」

戦闘が一段落すると桐原武明は日本刀を鞘にしまう。

一校生は初陣を勝利で飾った。

局地的な勝利であったが、大亜連の侵攻軍の一部を撃滅せしめたのだ。

壬生紗耶香も初戦が終わり方で息をし、西城レオンハルトは肩の出血を国防軍兵士に治療されている。

無傷とは言えなかった。

桐原も擦過傷や、銃撃の跳弾による建築物の破片で頬に傷を作っている。

「ほのか、ケガはない？」

「うん、雫は」

「私は大丈夫」

初めての戦闘に疲労の色が強い光井ほのかに、ポーカーフェイスな北山雫が心配する。

周辺のパラサイト反応は柴田美月が裸眼で確認し、吉田幹比古にパラサイトの影が無いことを報告。

物理、情報次元両面で戦闘は終結した。

支道入口の一つ。そこには「七草の当特別攻撃隊」が防御布陣を構築。

支道入口近くには横転した車両を集め簡易の防壁を作る。

すでに、帯同する小隊が本部に連絡をし、国防軍の防衛範囲の情報が更新される。

「どうされますか。我々は応援が来るまでこの陣地を堅守する必要があります」

国防軍の鈴木少尉は七草真由美に今後の対応を説明する。

七草真由美は少し眉間にしわを寄せ悩む。

（しまった、摩利とキヨを先行して動いてもらったのはミスだった…）

戦術的判断は渡辺摩利、国防軍などの組織との連携判断は十二江清姫。

全体を見通す目には自信があるが局所での判断においては信頼する友人に任せていた。

副官役がないことで自己の判断に助言を受けられない。

戦場を体験した今の七草真由美にしてみれば判断一つで後輩が死ぬ可能性がある現状で軽々に判断が出来ない。

「わかりました。それでは我々もこの支道口周辺を警護します」

出来る限り動揺を見せず回答する。

守勢の判断であった。

その回答とほぼ同時に、地面の細動が起きる。

敵勢力の第二陣が到着したのだ。



東欧の中型直立戦車6台。

先程の戦闘では3台。

その倍以上の戦力。随伴する歩兵も多い。



遠距離からの掃射。

障壁を展開し、防ぐ司波深雪と七草真由美、五十里啓。

一科生としての魔法師としての実力が汎用性と言った点で如実に表れる。

二科生たちは障壁が弾丸を防ぐうちに車両の裏側を通り、地下に向かう支道口や弾の

貫通を防ぐ建築物へ遮蔽を取る。

「何とかならないか!」

支道口の地上部の建築物の影で大きな声でレオが叫ぶ。

「レオあんた、的になってきなさいよ!」

「無茶だ！いくらレオでも死んでしまおう！」

「行かねーよー！」

エリカが返し、幹比古が反論し、レオが突っ込む。

幹比古の横には銃撃の恐怖に固まる柴田美月。

壬生紗耶香も戦闘に寄与出来ない自分に悔しく舌打ちを一つ。

遮蔽物となった横転車輛の影から国防軍の兵士たちが射撃を返す。

銃声が数分続く。

この場では近接戦闘が主体のレオやエリカ、壬生では対応が出来ない。

幹比古の古式魔法でも敵を視認しづらい状況では使いづらい。

感覚魔法で相手を察知して行う方法もあるが、銃声と弾丸飛び交う状況では下手に時間をかければ殺されかねない。

古式の弱点は速度と戦場における柔軟な対応だ。

奇襲性が高いが戦場のど真ん中では融通が利かない。

銃声が一時止む。

七草真由美をはじめとした障壁を展開した魔法師たちは障壁への着弾が止まり首をかしげる。

「増援か？」

「いえ、司令部からは到着に10分はかかると」

小隊長と通信士の会話。

その声が聞こえた真由美は十二江清姫と渡辺摩利の顔を浮かべた。

先行して自由に動いた二人が救援に来たのか。

それにしても直立戦車6台を含めた敵勢力を停止させることなど出来たのだろうか
と疑問も出る。

銃撃によって起きた土埃が収まる。

その瞬間、巨大な何か、自動車サイズの物体が上空から落下。

注視していた国防軍兵士がぼそりと呟いた。

「直立戦車の上半部?」

その後金属の塊が上空から落下して起こす衝突音が追加で5回。

七草真由美もはつきりとのその双眸に目の前の状況を写す。

敵勢力の直立戦車の上半部と下半部が切断され、上半部がはるか上空から落下してき
たのだ。

「何が起きたの?」

深雪の言葉に誰も返す言葉が出てこない。

額から一筋の汗。

四葉の魔法師たちでもこれほど容易に戦況はひっくり返せるものか。そんな思いが深雪には生まれる。

遮蔽物から顔を出したエリカたちも言葉も出ていない。

敵勢力は突然の状況に混乱し騒ぎながら遮蔽を取ろうと右往左往としている。

「射撃用意！撃て！」

一番冷静だったのは小隊長の鈴木少尉だった。

小隊の面々の射撃で敵勢力の数が1人、また1人と減っていく。

「魔法の援護を！攻め時だ！」

鈴木少尉の声で意識の海から戻った七草真由美と司波深雪は得意の魔法で敵の歩兵を遮蔽物へと釘付けにする。

その射撃の援護を受けて白兵戦を得意とする面々が一気に距離を詰める。

その10分後、再度の戦闘も「七草の特別攻撃隊」の勝利となった。

支道口周辺には光井ほのかなど前線に向かない面々が国防軍と共に防衛を行い、七草真由美や千葉エリカたちは敵勢力が陣取った建物辺りを確認し残敵掃討を行う。

「流石にこれだけやれば大丈夫そうね」

「千代田先輩が吹き飛ばしましたから」

真由美の言葉を次いだのは吉田幹比古だ。

直立戦車の後方にあつた兵員輸送用の車両は千代田花音の一撃で大破。這う這うの体で車両から逃げ出した敵兵士は白兵戦組に制圧された。

爆発に紛れて建物に逃げ込んだものがないか、七草真由美の千里眼で索敵しているが周辺にはいない。

真由美自身も連続した戦闘で相当神経がすり減っている。

戦場での陣頭指揮がこれほど負担になるとは考えていなかったからだ。

自身が動きながら周辺へ指示を出せる渡辺摩利の凄さや、十文字の落ち着きぶりを改めて実感していた。

「七草さん……こちらにー！」

離れたところで、国防軍の小隊の1人が真由美を呼ぶ。

視線は近くにあつた喫茶店を示す。

千里眼による店内の索敵依頼だ。

「吉田君、パラサイトの確認だけよろしくね」

「はい、柴田さんがいないと言っているので大丈夫だと思えます」

幹比古にそれだけ言うと真由美は国防軍兵士のところへ向かった。

自分の千里眼がこれほど有用であり、またそれに頼られることの責任と負担を感じていた。

その負担により周囲を警戒することがおろそかになっていた。

それと同時に、千代田花音の魔法「地雷」によって吹き飛ばされた兵員輸送車両から命からがら逃げだした一人の大亜連兵士。

少し離れた商業ビル前に倒れていた。

運良くビルにあつた生垣がクツションになり助かっていたのだ。

しかし右足は折れ移動が出来ない。だが彼が受けた教育には窮地でも敵国への一矢を報いるべきという意識を持つことを推奨されていた。

近くには兵員輸送車内にあつたグレネード（爆発筒）発射装置。

「いっおおおお」

大亜連兵士は叫び声をあげて装置に装填されていた8発のグレネードをむやみやたらに乱射した。

グレネードは周辺の建築物に、そして文字通り半壊した直立戦車の下半部へと直撃する。

いや、正しくは直撃ではなく切断面から直立戦車内の弾薬室へのグレネードが転がり込んだのだ。

誘爆。

下半部に残った弾薬は誘爆し、本来発揮する火力を一斉に爆発させる。

最初に兵士の声に反応したのは司波深雪であった。

司波深雪は反応し、一校の仲間を守るよう巨大な障壁を張る。

幹比古も札を出し、風の精霊を自分の傍に呼び守りを固める。

だが移動中であり、戦場での意識がゆるんでいた七草真由美は敵兵士の声も周囲の状況に対しても反応が遅れていしまう。

爆風が七草真由美に届かんとしたとき動いたのは、彼女の迂闊さに呆れつつもその姿を見ていた久慈灘幽玄だった。



中空で七草真由美を抱きかかえるのは二科の1年生、理論の天才とも言われる久慈灘幽玄だった。

突然のことに七草真由美は言葉が出ない。

先程まで国防軍の兵士と呼ばれ歩いてきたときの突然の爆発。

熱と強風が体を包み込もうとした瞬間、無風の世界へと呼びこまれた。

外では、障壁を解除した司波深雪が同級生と国防軍の兵士の安否を気にして声をかけている。

真由美の見る限り後輩も、国防軍兵士も重傷者はいない。

ひと先ず部隊の安全は確保されたと判断できた。

この状況でお姫様抱っこをしている幽玄を真由美は落ち着かない声をした。

「久慈灘君、おねーさん少し恥ずかしいな〜」

「おしやべりすると、舌噛むよ」

久慈灘幽玄は昔のように「真由美」と呼び捨てにしなかった。

意識的である。

幽玄の足下には魔法光。

真由美を抱きかかえたまま、一步一步中空から降り、地面へと足をつける。

先程の戦闘もこの空間から見えていた。

劣勢を感じ、直立戦車を「空間断裂」を利用して行動不能にした。

空間内のある面を上空に移動面をつなげる。

そしてその2次元に上ある物体は分子構造が切断。

如何に硬質であろうとも「事象」には敵わない。

そして七草真由美を爆発から守ったこの空間。

「アストラル界」と幽玄は呼んでいる。

次元と次元の間。世界の重なり合う場所の隙間。

今、二人は外界の音と光と臭いを五感で感じられる別の世界に居る。

久慈灘幽玄は「無限図書館」とも言われる世界と同等の広さを持つ空間の支配者だ。アストラル界は現実世界の影であり、複写である。

この世界は【似像】の写し世界でもある。

人間は知覚する世界をコピーした世界。それは情報次元体に近い。だが情報次元体そのものではない。

世界の写し。過去の、1秒前の出来事も情報として写されている。

ただ写せぬのは人間と人間の心だけである。

誘爆によって崩れたビルの瓦礫が上から降ってくるが、久慈灘幽玄と七草真由美にはあたらない。

すり抜け、地面に塵を撒く。

「七草先輩。一度降ろすよ」

「ありがとう」

少しはにかんだ笑顔を幽玄に見せる。

「そんな無防備に笑うなよ。余計な男子が惚れる」

「久慈灘君もかしら」

横目で真由美を見る幽玄の口元は少し笑っていた。

(真由美の恋愛絡みの冗談はあんまり面白くないな)

口に出して言ってしまおうと感情が溢れそうになる。

あの時、彼女の手を離してしまったのは小賢しい計算と将来の打算が合ったからだ。自分がこの世界で生きるための打算。

強者の側につくための打算。

関重蔵に「恋愛は辛いな」と一度言われた。

感情的になって胸ぐらを掴んだが「大事な人を捨てたよ。置き土産は背中の刺し傷だ」と言われ、それ以来なんと無しに関重蔵を師匠扱いしている。

だが、今はどうだ。

転生者は溢れ、あの四葉は完全に軟化している。

命をかけて九島や五輪を抑え込むことをしなくても良い。

あの10年の暗闘が起きる兆しは無い。

自分の人生に影を落とす要因は皆無なのだ。

そう思った瞬間に久慈灘の口から自然と言葉が出た。

「七草真由美、結婚を前提に付き合っただけ。返事は卒業までにくれ」

2歳年下の男子。

接点も殆ど無い。

切れ長の目。フレームの薄い眼鏡の奥の瞳は冷静さと情熱が同居している。

まるで、何年も呼び慣れたように自分の名前を呼び捨てに求婚される。周囲では破壊されたビルの土煙がある。

「あの、すぐにはね、ほら答えづらいからね」

七草真由美は落ち着かない様子で、右手で髪を弄る。

顔は赤くなり視線も下に向く。

「卒業まで待つよ。イエスだと嬉しい」

はつきりとした声に、嬉しそうな笑顔。

久慈灘幽玄は返事よりも、自分の気持ちを、あの時は決して言えなかった気持ちを伝えられた。

押しが強いとか芯がしっかりしているとかでは無い。

目の前にいるのは駆け引きをせずに真っ直ぐにぶつかってきた大人の男なのだ。

そんな印象を久慈灘幽玄に真由美は持った。

「今はほら、みんなと合流しないと」

「いや、少しだけ周囲が落ち着くまでここで待とう」

幽玄は真由美の腰に手を回し、抱き寄せる。

真剣な瞳に真由美も悪い気はしなかった。

幽玄の腕の中には失くしたと思った感情が愛した女性の形で存在している。

531 七草真由美、結婚を前提に付き合っ
て欲しい。返事は卒業までにくれ

◆それが嬉しかった。
午前11時59分。横浜。

ギツタンバツタンにした

正午をすぎた。

勝ちっしょ！と楽観はしないけど、それでも状況はこちらに有利のようだ。

「ま〜り〜」

少し離れたところで、肩で息する渡辺摩利に声をかける。

「キヨ」

摩利も軽く手を振って返す。

スクワッド、つまりは小隊規模での行動。

1時間ちよつと前、ホントは一校生だけで組もうかと思っただけ千葉エリカにオロチマル（でつかい刀）を届けにきた千葉警部と出会った。

ちようど魔法犯罪対策班の部隊を引き連れていたので協力を要請。

「義理の妹の願いきかないと後が怖いですよ」といったら頭を書きながらOKを出してくれた。

ついでに藤林響子の誕生日を覚えておいた。

ほら魔法師社交界の華の藤林 “ エレクトロンソーサレス ” 響子さんの誕生

日は知っている人は知っている。

十二江家も古式と現代魔法の中間の立ち位置ということもあり、藤林家にはシンパシーを感じている。

そこそこ交流があるが向こうの家のほうが十師族の暗部に近いということとで家族ぐるみと言わけではない。

ついでに言うとも私も十二江 “ シルフボイス “ 清姫などという二つ名がある。
シゝルゝフゝボゝイゝス!

この二つを聞いたときまゆみんの前で駄々っ子の如く寝ころんで足をバタバタさせた。

出来れば “ 好天の巫女 “ とかさ “ 天羽の姫 “ みたいなカッコいい名前がいいです!

光夜君は「完璧」、竜也君は「当代第一」、雪光君は「王子様」、司波達也君は「天才エンジニア」、深雪ちゃんは「氷雪姫」と結構カッコいい二つ名がついている。

アーデルちゃんは「暴れん坊」「すぐ殴る美少女」「ツンデレではなくツン殺（コロ）」「美少女のなりをした森長可」といろいろ。

私たちは論文コンペ会場を出発して、散発的に仕掛けて来る敵勢力の団を追跡。

一団を捕縛後に公共施設の占拠をすべく侵攻していた大亜連の工作員部隊、だいたい

20人前後かな？をギツタンバツタンにした。

摩利の周囲には胴や腕に一撃を喰らい、痛みと衝撃で身動きの取れない大亜の作業員たちがうめいている。

銃弾飛び交う戦場を縦横無尽に走り回り、一人残らず切り倒す。

三巨頭に数えられるのも納得だ。

無駄のない移動魔法に、硬化魔法を併用した身体防護、そして剣術。

真由美が絶対的な狙撃者、じゆうもんが崩れることのない鉄壁ならば、摩利は切り裂く疾風と言ったところか（ダサイ）

勿論この評価は「一般的な魔法科高校基準」での高評価であって二周目転生者のぶつ壊れ性能との比較ではない。

近くにいた警察の人たちが「緊急逮捕だ！」と言って作業員に手錠をかけて行く。

「さすが、修次の彼女だな」

警官隊を指揮していたのは藤林響子の愛の奴隷こと千葉警部だ。

スーツの上着は無く、ボディーマーに刀剣型のCAD。すでにシャツには土埃と少しの返り血で汚れている。

「警部さん、横浜全体としての状況はどうなんですか」

「状況は終結に向かっていようだね。横浜港付近だと国防軍の特殊部隊が展開して相手

を抑え込んでいるらしい」

「どうやら、対大亜連についてはこちらの勝ちになりそうだ。

先程から情報端末に来る連絡を見るに転生者たちの活躍が顕著だ。

直立戦車はアーデルちゃんや雪光君、兵介君、幽玄君の活躍でほぼ横浜区域からいなくなつた。

「アーデルちゃんからの「処刑用BGMが足りない」ってどういうこと？」

「ただ、反面パラサイトの数は少ない。

真由美のところでは3体が確認されている。他の戦闘区域をあわせても10体はいない。

時折届くマリアちゃんからの報告では京都でも20体未満と、東西合計しても30体には届かない。

事前に確保したパラサイトと、現場での数を見るとすべてのパラサイトを吐き出したのか、それともまだまだ予備戦力があるのか。

全体像は見えないが少なくとも現時点では対大亜連侵攻については日本の防衛線が十二分に機能している様だ。

空を見上げ、自分の術法が安定していることを確認した瞬間。

空を大地が覆つた。

◆ 「キョー！」

摩利が驚きの声をあげる

空には巨大なビル群が覆いかぶさるように林立している。

悪い夢だね。

まるで上下に世界があるように、上空には衛星写真を立体的に張り付けたように横浜の街並みが映し出されている。

それでも太陽光は降り注ぐのは異様だ。

風は温い、潮の香りも消えている。

方位覚淵術の印を手元で結ぶ。3秒の知覚時間。あじやぱー。ナニコレ？

自然界にある想子を含む物質は方位によって、その性質に「色」が付く。

我が十二江家はその色を知覚して、方位を元に術を行う。

というわけで、現在いる場所の「方位」がぐつちやぐちや。上にも西があれば下にも西がある。

勿論、西の方にも西がある。

これが鏡世界（ミラーワールド）

現実世界と同じ世界だけれど、それは術者の思い通りに動く特殊な世界。

この世界での建築物の破壊は現実世界へと影響しない。

世界を動かせるのは術者か、それに匹敵する世界の主導権を握れるもの。

そして私は、私たちはその鏡世界へと引き入れられたのだ。

情報端末を出し、現在ネットワークに繋がっている人間を確認する。

直ぐ近くにいる摩利は繋がる。真由美、鈴音はログアウト状態。

雪光君はログイン。カナデさんはログアウト。竜也君もログアウト。幽玄君はログアウト。

相馬君はログイン。あーちゃんはログアウト。光夜君はログイン。

アーデルちゃんもログインで夜天さんはログアウト。

ログインとログアウトの状態がまばらだ。

この鏡世界については、事前に幽玄君が全員に説明してくれた。

どうやら、二周目組で鏡世界での戦闘に巻き込まれたことがあるのは幽玄君と関重蔵だけで、その魔法構造を把握しているのは幽玄君だけのようなのだ。

「巻き込まれたらネットワークの接続状況を確認してくれ。鏡世界でも複製された電子ネットワークが存在するから現実世界との通信は出来ないがログイン状態が確認できる。つまり、ログインしている奴は同一世界にいる相手だ」ということらしい。

つまり、今は現実世界と鏡世界で戦力が分断されたという状況。

影の中の男がついに戦場を制圧しようと動き出したとみてよいのだ。

◆ 状況を整理しよう。

ホント、整理しないと戦力配置もごちゃごちゃだし、何よりも不安で仕方がない。

千葉警部の指示で手短な公共施設に避難。

一階がコンビニの入っている横浜区役所の出張所だ。

摩利もいるし、15名近い警察隊もあり戦力的には孤立していない。

情報端末で連絡が付くのは「ログイン組」だけ。

千葉警部さんは指示を出し、捕まえた作業員を警察の本部へと移送すべく車両の手配を指示していた。

といつてもどこかから車両を呼ぶというよりも、外にいる国防軍に協力を仰ぐようだ。

そして私は、ログインしている面々、そしてログアウトとなった面々の配置状況、鏡世界に囚われた瞬間のフレンド向け公開のGPS情報、通信ログから転生者たちや一校の各戦力の配置状況の把握に努めた。

非常に複雑でややこしいが、下記の状況が正しいのだろう。

時間は
12時
27分
だ。

戦域

〈戦域A〉

「藤林、黒羽」

国防軍の連絡佐官を押しよけるように会議室に入ってきたのは十文字克人だ。

プロテクトアーマーを着用するためのアンダースーツ姿だ。

「どうも」

短い返事だが、竜也の声音は刺々しい。

藤林奏でも椅子から立ち上がる訳でもなく、PCのモニターを注視しながら忙しく中空をなぞり、操作している。

魔法科高校の生徒たち、警察、国防軍、そして大亜連の作業員が一瞬でいくつかの区域から【消失】した。

すでに現場は混乱の極致だ。

前線で指示を飛ばす論文コンペ会場の基地も消失した。

そのせいもあってか、すでに指示本部は横浜セントラルタワーに移動され現場指揮は広域に展開していた101旅団魔装大隊の風間少佐が臨時指揮官として、階級に適した

規模以上の指揮系統を何とかまとめている。

十文字はこのビル内に黒羽、藤林の両名が待機していることを聴くと、大急ぎで向かった。

魔法協会に派遣されていた佐官が「無用の立ち入りは控えるよう」言ったが、十文字克人は無視を決め込みその大柄な肉体で威圧しつつ、二人の元へ来たのだ。

司波達也とうり二つながら黒羽竜也が今纏う空気は恐ろしく殺伐としている。

普段は司波達也、黒羽竜也も、従順とは言われないがそれでも十文字を威圧するような態度はとらない。

「邪魔なので退室を」

だがこの言葉では高圧的で排他的な空気を漂わす。

「現状について意見だけ聞かせてくれ。聞けば退室する」

十文字の言葉に竜也は手元の情報端末を見ながら応えた。

「外に行つてゲリラでも狩つてろ。指揮権は国防軍だ」

「くっ！」

壁を殴りつけ十文字は部屋を出た。

年少者から相手にされない。

十師族であることも第一高校の筆頭ともいえる実力者であることも今は関係ないと

いった態度だ。

竜也は気にもせず情報端末を確認する。

メッセージの受信。

送信者は久慈灘幽玄だ。

<<< 8分後に鏡世界の解除魔法のコード送る。CAD調整の準備をしておけ >>>

「藤林、このビル内にCAD調整施設は？」

「4階下。CAD情報センターっていう部署があるからそこにある。出番？」

「そうだ」

「そう、よろしく」

「そっちは」

「出番はもう少し先ね」

手元の、ちょうど司波達也からの着信が来た情報端末を弄りカナデは答える。

「何かあれば連絡をする」

そう言つて竜也は会議室を出た。



〈戦域B〉 + 〈戦域B〉

「深呼吸だ、吉祥寺」

「ああ、そうだね。取り乱してすまない」

建物外を写すモニターを目撃し動揺した吉祥寺真紅郎の頬を平手でたたき、光夜は真紅郎を落ち着かせた。

空には大地、そして鏡の様な壁の出現報告が論文コンペ会場に残る人たちに少なからず動揺を与えた。

慌てふためく者、沈黙のまま青ざめる者、吉祥寺真紅郎は前者に近く「なんでだ!?」「どういうことだ?」とやや大きい声で独り言を数度繰り返したところ光夜に頬を叩かれ意識を現実に戻した。

「この状況をどうみる?」

吉祥寺真紅郎が光夜に意見を求めた。

会議ホールには数十人の生徒とそれを守るべく軍人が数名。

軍人の半数は建物外に出ており周辺の搜索に出ている。

責任者たる福島中佐も司令本部としていた会議室を出て、敷地外の様子が見える玄関ホールへと自ら出向いていた。

(思いの外、混乱しているな)

光夜は一瞬思った後、吉祥寺の質問答えた。

「すでに準備はしている。極秘だがこの状況が発生することは四葉は想定していた。対

抗手段はある」

「なっ！じゃあ君は、この生徒たちが危険にさらされることを知っていたのか」

周囲が配慮してか、言葉はきついが小声で光夜に迫る吉祥寺。

今にも胸倉をつかまんなばかりである。

「あくまで想定だ。可能性という意味では決して高いと判断していない」

言い訳じみているが、前世とそして今の状況を知る転生者としてはいえる最良の嘘だろう。

光夜は厳しい視線を向ける吉祥寺に対して、諭すように話す。

「聞いているだろう。今日ここでの論文コンペさえも国防軍主体の作戦の一部だ。生徒を危険にさらしている自覚は皆ある。国防軍だけでなく、十師族もだ。だがな、その危険を強いるからこそ一人の死傷者を出さないために俺や十師族がいる」

その声を感じる圧倒的な説得力。天下第一の人物へと将来確実になる光夜の声は、根拠も理由も必要としない。

光夜の言葉にはただただ人を信じさせるだけの力がある。

「光夜にしては長台詞だったな」

「そうだね」

制服を少し汚して会議ホールに入ってきたのは遊撃行動をとっていた黒城兵介と司

波雪光の二人だ。

口調は軽いが表情は決して楽観的ではない。

兵介の表情は笑顔に見えるが吉祥寺真紅郎の目から見れば、そこに普段以上の緊張感があることが見て取れる。

「兵介、大丈夫かい？」

「ああ、走りまわって出来ることはしてきた」

会議ホールの中を見渡して、生徒たちの動揺が静かにしかし確実に起こっていることを感じた。

生徒たちの会話は小声、意味もなく周囲を見て、時折軍人たちの姿に視線を投げ、また小声で会話する。

不安と恐怖が蔓延しつつある。

兵介は小さく深呼吸をする。それはこれから行う茶番への恥ずかしさを紛らわすための準備だ。

いくら今16歳でも、気持ちの上では70歳を超える壮年だ。

「まあさー……ここはいつちよ、天下御免の四葉にどうにかしてもらおうか！俺も手伝うからさー！出来んだろ？」

兵介はそう言って光夜の胸を軽く小突いた。少しだけ声を張っている。

その行動に反応したのは雪光が先だった。

「だよね。なんとたつて四葉でしょ」

意地悪な笑い。

この二人の態度に置いていかれた真紅郎はどう言っていていいかわからず動きが止まる。

光夜も軽く微笑むだけだ。

「で、四葉の秘伝魔法とかでさバーっと出来ないの？ パパッとやってズワーでドーン！
みたいに」

馬鹿の物言いである。

兵介は他人事のように極力馬鹿のように、実際は鏡世界の解除方式は兵介には難解だった、聞いている。

「5歳か」

「16歳」

光夜の突っ込みに即座に真顔で兵介は言葉を返す。

二人のやりとりを視界に収めていた女子生徒が声を殺して笑う。

その女生徒の隣の生徒も、また隣の生徒も笑いだす。

声を出さない者もいれば、声を出している者もいる。

少しだけ場の緊張がほぐれた。

会議ホール内では小声での会話をやめ、「どうなっちゃんだらうね〜」「さっき出て行った七草さん可愛かったな〜」

「こういう時つて動画とつてもいいのかな」とそこかしこで生徒たちが今までとは違う会話をする。

軍人たちも重い空気が少し晴れて笑顔を見せる者もいる。

非常事態に恐怖に凝り固まり、軍人に対して無意味に隔意を持つことを止めた生徒たちは今自分たちがどうすべきか理解した。

慌てず騒がず指示に従うことである。

そのためにも、不安になり過ぎずに恐怖に吞まれないようにする。

そのきっかけが笑いを誘う会話であった。

昔から光夜と兵介は人に注目されやすい。

ある程度自分たちの特性を承知のうえで行った兵介の目論見は成功と言ってよかった。

「吉祥寺、手伝ってくれ」

そう言つて会議ホールを出ることを視線で促す光夜。

「どうするんだ」

光夜がそのカリスマ性のある笑顔ではなく、16歳の子供らしい笑顔を見せ言った。

「ズワーでドーンキ」

◆
〈戦域C〉

「俺たちの仕事はシエルター周辺での警戒だ。今取れる最善はそれだ！」

激を飛ばすのは服部刑部。

強い意志を宿す瞳に、決して現状に屈しない意志。上級生も混じる警備隊の副隊長は年齢など関係ないといった風に自分の意見を「正論」として警備の学生たちに伝える。

その熱は伝染したのか、皆真剣な顔している。

シエルターでは点呼をとった生徒たちが知り合い同士、同校同士で小さなグループを作り部屋に散っている。

避難第一組の引率をしていた国防軍の国村少佐は戦力を確認し、警備の学生と連携し、周辺警戒のスケジュールと範囲を検討していた。

無線から聞こえる状況は混乱だった。

論文コンペ会場の消失、指示系統の混乱。そして、その中でも横浜には敵が散らばり侵攻作戦は止まっていない。

「副隊長。人員の配置は？」

服部の正面にいた萬真人が手を挙げて質問をぶつける。

回答は指名された服部ではなく国村少佐だった。

「シエルターへの侵入口は三カ所。地上出入口AとB。そして我々が通ってきた地下通路だ。戦力は均等配置。それぞれの出入口から少し離れたところで国防軍が防御陣を設置。学生諸君は出入口に陣取って、防御陣完成まで侵入者を防いでもらいたい」

国村の口調は硬い。出入口の防御陣地設営と出入口の学生による二段構え、と言えば聞こえがいいが敵がうろつく地上において防御陣は容易に設営できず、防御陣を張るということを理由に国防軍が敵勢力と戦闘を行い、敵勢力を削いだところを施設出入口で待機していた魔法師の卵たちに決定打を打ってもらおう。

学生に死傷者を出さないために国防軍が犠牲となる。

この緊急時において国村少佐が思い浮かべた策は決して妙策とはいえないものだった。

「では、俺は一番の激戦区に配置を希望します」

真人は真剣な眼差しで、国村を見つめる。

それは犠牲や追い込まれての言葉ではなかった。

「その判断は君ではなく私が行う。十文字隊長から隊の運用については国防軍が移譲されている」

その義侠心を内心評価しつつも、指揮権を盾に突っぱねる。

だが真人はその言葉にさらに追いつがる。

「自分は萬です。この名前には責務があります」

萬家。

魔法師百家に数えられる一族。江戸の昔より治安維持の組織に関係が深い魔法師。

その関係とは魔法師としてではなく、治安維持への協力をする武道の家柄という意味だ。

萬家が主体となつて編纂した逮捕術。その逮捕術は国防軍も白兵戦闘教則にも少なからず影響を与えている。

その名前は魔法師百家だけではなく数世紀に及ぶ治安維持に貢献する家としての重みがある。

「それなら自分も！」

真人の隣にいた沢木碧も手を上げ同道することアピールする。

それはライバル心というよりも、真人を心配し一人だけでは戦わさないようする友人の顔だ。

「国村少佐。この二人は近接戦闘では一校でも最上位に位置する二人です。決して国防軍の足を引っ張ることはありません」

小さくため息をついた服部は二人の望みを叶えるべく進言をした。

「カッコつけてやがって」と言つて同じように手を挙げたのは三七上ケリー、そして実戦を希望する数名の学生たち。

「君たちの義侠心は理解した。だが我々国防軍にも民間人たる学生諸君を戦場の最前線に立たせること良しとはできない」

国村少佐は湧きがある学生たちの熱気に意図的に水をさした。

ここは戦場で、ほんの数センチの長さの鉄塊が、弾丸が身体に命中するだけで絶命するのだ。

戦場で死なないためには冷静な判断と己の蛮勇を押しさえる抑制が必要だ。

「現在、地上巡回中の国防軍と連絡を取り合っている。地上戦力をこのシエルターに集約し再配置を予定している。その際に君たち学生警備隊の運用も含めて調整を行うことを約束する。それまでは血気逸るのを押さえて国防軍の指示に従ってもらいたい」

国村の言葉は半分本当で半分嘘だ。

シエルター宛ての連絡で地上を巡回している国防軍と近習備の混成部隊が近くで「パラサイト」と呼ばれる特殊な戦術兵器との戦闘に勝利したとの連絡があった。

そして空に大地が覆われたことで、一番近い避難施設兼前線基地としてシエルターに合流するというのだ。

混成部隊の指揮が知己の矢口大尉だ。

合流するととなると指揮権は階級上位者のである国村自身がすることになる。詭弁だが、戦力の一時的増加により学生たちの出番は抑えられるかもしれない。そういった目論見があった。

だが、その目論見は40分後に崩れ去る。

シエルターへのパラサイトの一部隊が強襲が行われるのだ。

◆
〈戦域D〉

「今のうちに休んでくれ」

千葉警部から投げられたペットボトルを受け取りつつ渡辺摩利は頷く。

「あの、シユ、修次さんはこの戦場にいるのでしょうか」

心配半分、自分の活躍を見てもらいたい感情半分。

渡辺摩利は先ほどの戦闘で見せた猛々しさを微塵も見せず、少しだけ顔を赤くして千葉警部に聞く。

(まあ何とも可愛いこと。修次の奴も早々に相手が決まって羨ましいことだ)

兄としては弟に婚約を先に越されて嬉しいやら悔しいやらといったところだ。

正式な挨拶は無いが、この様子なら婚約の話も秒読みだと千葉寿和は思う。

「あいつは今日は京都だよ。横浜のように大規模行動じゃなくて、市街地での小規模遭

遇戦それも隠蔽戦闘になるから、あいつの技の特性から京都配置みたいだな」

近接戦闘を主体とするならば横浜より京都。

それが国防軍の判断であった。

一時の混乱も収まり捕縛した大亜連合の尖兵を拘束状態にし、避難した建物の外から鍵がかかる部屋に分散して放り込んだ。

「十二江さん」

「キヨちゃんで」

渡辺摩利に劣らぬ凛とした美貌の美少女に声をかけるとしようもない返答。

千葉は「んん」と喉を鳴らす。30歳手前で女子高生をちゃん付けで呼ぶのだ。多少の気恥ずかしさはある。

「で、キヨちゃん。連絡は？」

少しだけ唇の端がひきつる。

「論文コンペ会場とはつながらないです。近い地域を巡回している小隊とか近習備や義勇兵の移動ログを見るに同じ空間内には存在しています」

情報端末のモニターに写る地図といくつかの光点。そして移動の時間。

確かに「近習備」と名前が付けられている青い点が15分前までこの辺りにいて北東方向に移動していたようだ。

「入れ違いか。この状況であまり戦力分散はしたくないが」

千葉自身も戦局の全体像を把握しているわけではない。

正確な情報の確保、自衛戦力の確保、そして部隊を指揮できる指揮官との合流。

千葉1人であればそれほど心配はしていないが、非魔法師を含む警察隊と二名の女子高生を守る責任を思うと戦力は増強しておきたい。

小さくため息をついて目の前の女子高生二人を見る。

高校三年生にしては大人っぽく見えるが30手前の千葉寿和から見ればまだ子供だ。

そんな少女たちを守る責任の重さを感じていた。

(まったく、貧乏くじを引いたな。まあそれでも藤林さんの好感度は稼いだかな)

藤林響子の顔を浮かべて、次はどこにデートに行こうか、横浜は当面やめておこうと思つた千葉寿和であつた。

だが藤林響子の婚約者は本来であれば沖縄での戦闘で死ぬはずであつたが、転生者による過去改変により沖縄での戦死を免れている。

沖縄で怪我を負い、2か月ほど入院したが現在は五体満足に軍務についている。

藤林響子は「電子の魔女」の腕を買われ魔装大隊入りしており、原作と呼ばれる世界

とはその事情は変わっていた。

◆ 千葉寿和が藤林響子の結婚披露宴に「友人枠」として呼ばれるのは11か月後となる。

〈戦域E〉

「我々も移動します」

支道入口からシエルターへの通路に降りて、通路の状況を確認した国防軍小隊は移動を提案してきた。

十師族であろうと、民間人である学生たちへ命令めた口調でもあった。

「わかりました。ですがどこへ？」

七草真由美は短く返事をし次の指示を促す。

「横浜タワーには国防軍の戦力が集結しつつあります。拠点として運用されるようですのでこちらへ向かいます」

国防軍の小隊を引きいる鈴木少尉は通信兵へ視線を投げると、少尉の言葉に同意するよう通信兵は頷く。

少しの間、通信は混乱したが現在では横浜に分散している小規模拠点同士が通信を復活させ、戦場全体の指揮を魔装大隊風間少佐が懸命に指示を飛ばしている。

七草真由美以外の面々も騒ぐこともなく、肅々と指示に従う態度を見せた。鏡の様な壁。

この現代魔法でも説明つかない現象に対して無謀、無茶な態度はみせない。破壊も出来ないこの謎の壁は戦域の分断を起こしていた。

国防軍の通信機から漏れる情報から、この壁により生徒たちも分断されており、戦場は混乱の極致になっていた。

その混乱を収めるためにも分散した部隊を集める必要がある。

「でも久慈灘君が…」

「彼は大丈夫よ」

柴田美月が同級生の心配を口にするが、七草真由美が微笑み答える。

久慈灘幽玄は姿を見せない。

鏡の様な壁が出現してから何処かへ行ってしまった。

幽玄の姿を見た他の一校生はそう思ったが、七草真由美だけは彼が「別の次元」で何か準備をしていることを知っていた。

戦場の隅での小さな秘密である。



〈戦域F〉

どおーん！

それは巨大な壁に鉄球をぶつけたようなイメージを一条将輝はもった。

目の前では全身を青白く光らせる小柄な美少女が道路上に立ちふさがる壁のようなものを殴りつける。

「君……ここだと敵に丸見」

「うっさい！ 枢木スザク！」

「一条将輝だ！ 誰だ?! そいつは?!」

先程から話しかけるたびに「キリト」「伊之助」「風太郎」と意図的に名前を間違えられ続けていた。

前世で二度ほど共同戦線を張ったことのあるアーデルからすれば一条将輝はちよつとした戦友で軽口の言える相手だ。

「四葉の奴にぐぬぬ言わせるチャンスなんだぞ！」

(先に力業で破ってギャフンって言わせてやる)

別段アーデルは四葉光夜個人を嫌っているわけではなかった。

あの中条あずさの夫になるのだから底抜けの善人で「ドジっ子フェチ」の変態と思っていた。

ただ前世において、四葉そのものは憎悪の対象であった。

親友の切花霞の死因の元となった事件は四葉が契機であったし、その後も十師族に関わるトラブルでは四葉による介入が多かった。

司波達也、深雪は卒業後も四葉の影響からは長く脱出することは出来なかった。

若き転生者たちの暴走もあったが結局は底知れぬ十師族と魔法師たちの暗部に苦しめられたと言っている。

その暗部は「影の中の男」の影響力は強かった。そういった理由もあり、アーデルとしては前世の自分たちの失敗を雪ぐためこの横浜で暴れ回っている。

「くー霸王翔吼拳を使わざる得ない！」

「今度はなんなんだ?！」

どおーん！

前世の後年（ややこしい）

「なんだ、ダンボールか」と言ってくれるかと思つたが、そんなことはなく大亜連からやってきた商用輸送船に偽装した船の船員は、積み荷の中にないダンボールを見て即座に無線機に手を伸ばした。

ゲームで言うところの船員の頭上に「！」が出たので、即座に後ろに回り首を絞め失神させる。

さあ、これからタイムアタックの開始だ。

失神した人間を積み荷の影に置き、俺はそそくさと貨物室から出る。

【影の中の男】が鏡世界を展開したがそんなことに関わっている暇はない。

無理やり不動達也特尉の即応班を作り上げるため、今日の横浜防衛に関わる幾つかの部隊に負担をかける結果となつた。

その尻ぬぐいとして俺は一人で大亜連の偽造商船へと潜り込むこととなつた。

その手配を苦虫を潰したような表情で行つた村井大佐有能です（棒読み）

というか、全盛期の光夜、雪光、カナデ、兵介、竜也（タツちゃん）がいれば横浜などどうにかなるだろう。

「もう全部あいつ一人でいいんじゃないかな」とスーパーが言いたくなるような超絶魔法師が多くいるのだ。

ちなみに前世ではガッツリRX世代なので、バイオライダー最強説を支持している。前世の後年（ややこしい）で兵介からスーパーの台詞がコラ画像であったことを知らされ愕然としたことを記しておく。

問題は【影の中の男】よりアーデルがはしやぎ回って横浜の景観をぶっ壊さないかの方が心配だ。

まあ最悪、達也の再成で建築物を直せばよからう。

手元の情報端末から「カメラの操作掌握は」とテキストを打つと支援課第二班の面々から「終わりました」「段ボールネタは若い人には通じない」「今すぐ電源を切れ！」といった突っ込みに混じって「横浜市内の各戦闘区域で異変」との情報が出て来る。

情報部門の悪いところ。戦況の全体については割と無関心。

このあたり、歩兵や機甲部隊と違い裏でアレコレする部門特有だ。

簡単に言えば「現地軽視」と言ってもよい。

勿論現地での勝ち負けは最重要だが情報部門はリアルタイムでの対応は少なく事前の仕込みがメインである。

その仕込みが終わってしまうと、現在進行形の事態では割とすることがない。

特に支援課第二班は閑職一歩手前。

若き歩兵が切った張ったをしている裏で、こういったジョークを言える余裕がある。まあ、それでも事前準備で血を流す量が多いので業務分散と許してほしい。

俺？現場兵士兼情報屋兼工員兼潜入員兼色男兼転生者なので休む暇はない。

あとアクション映画とかのスパイがリアルタイムの戦闘に巻き込まれる映画とかあるけど、アレは事前の仕込みの失敗かつ不測の事態なのでこっちの業界だと「後手」「トラブルが雪崩を打っている」状態である。

昔は手に汗握った映画も今では「この後何枚始末書かくのか」というシミュレーションが脳裏に浮かぶので楽しめない。

閑話休題

【影の中の男】が起こしたこの一連の事件だが俺的には「大した事件」ではなくなった。というのも、奴のこの世界に対しての知識の低さが状況を容易にしている。

思い出して欲しい。

魔法科高校の劣等生横浜騒乱編で事件解決には「お兄様」「多少の国防軍」「魔装大隊」「一校生」「一条将輝」「一人だけフルアーマー十文字克人 a. k. a 立ち上がれ魔法を手するの者たちよ！おじさん」で事が足りる。

京都に敵勢力がいても、カチューシャがまとめる後輩連中で十分だ。

というか、おつりがくる。

下手すれば仙波冬彌だけでもパラサイトの1ダースくらいなら片手でどうにでもなる。

接点が少なかったが仙波冬彌の実力は光夜のお墨付き。

島根？鳥取？どつちだけか、で起きた大陸系方術と八雲大社が関わる大事件を一人でどうにかしたらしい。

単純に数十のパラサイトの動向さえつかめれば対応戦力は色々できる。

問題だったのはこちらの戦力ではなく、敵勢力の情報不足だった。

「いつ」「どこで」「どうやって」が判明すれば対応方法はいくらでもある。

影の中の男の行いは以前と同じような行動を規模を大きくして行うだけだ。

通常の横浜騒乱は司波達也がいれば済むし、多少イレギュラーがいても転生者が1人、2人いれば解決できる。

そして今回は、「影の中の男」と異分子、「パラサイト」というイレギュラーの二本立て。

だがその対応できる人員は豊富。そして奴らの実施する作戦はある程度想定内。

横浜騒乱と同時なので戦力の集中は容易だし、横浜と京都と一校と範囲も狭められた。

影の中の男の手口も変わりはない。

あの男は4回目のコンテニュー。

そして能力は俺たち転生者の知るそれ以上にはなっていない。

なぜなら、俺たちは先に進んだが、あの男だけは途中でいなくなったからだ。

いくらリスタート出来たとしても、同様にリスタートしさらに成長した人間がいればどうにか出来るのだ。

実施されてる作戦は学生を囮としたものだが、国家鎮守の「近習備」や十師族、義勇兵、国防軍とこの国家の最大戦力を投入できたので聞こえてくる被害はそれほど大きくない。

というか、先ほど光夜が行った魔法で、鏡世界の外にいる敵勢力の数はぐっと減った。あとは小集団となった個別敵勢力を潰し、現場に混乱をもたらした。パラサイトを丁寧に消せば終わりだ。

影の中の男によって戦闘発生区域や規模の不明という難問を解決してくれた須田ちゃんにはキャバクラでも奢ってあげようと思います。

ただし20歳になってから。



また1人と船員を気絶させていく。

朝はUSNA、昼過ぎには大亜連と忙しい。

「こちら優男、ついた」

ダンボール発見から173秒。

目的はブリッジではない。

こういった商船に偽造した軍用船には複数の通信室を持つ。

一つはブリッジにいる船長や司令官がメインで使う通信室。

連絡先は船内や本国といった相手だが今回の狙いは第二通信室。

簡単に説明すれば第一の通信室がダウンした場合の予備であり、情報戦が発生した場合にメインの通信室が忙しい時の通常の通信運用を行う場所である。

そして俺が潜り込んだのは第二通信室の隣の部屋。

2095年では異常に普及していた無線接続が減っている。

理由としては電波ハッキングの技術が確立されており、本当に重要な情報は特注の通信ケーブルと通信装置によって

独自性を保ちかつ何重かの暗号変換を行ってから無線ネットワークへと流す。

硬質の床材を特殊刃のカッターではがし、床下を這う通信ケーブルにちよつとした玩具を付ける。

このカッター、一つで新人サラリーマンの月給2か月分位する。

魔法全盛のこの世界では魔法でなんでもできるように思われているが物音を点てずに物体の切断をするのならば実は魔法に頼らない方がいいのだ。

高周波ブレードは聞き耳を立てると振動音がするし、レーザーなんて目立つうえに下手すると物体への破壊音が響く。

やっぱりアナログが一番！

「データは取れてるか」

情報端末の先にいる部下に声をかける。

「OKです。いやはや、こんな方法で欲しいデータが手に入るとは」

「火事場泥棒には持ってこいだな」

俺は口もとに笑みを浮かべつつ、転送が終了したこと表示するハッキングツールを通信ケーブルから外した。

今やっているのは村井大佐が仲介した船内制圧のため強行偵察ではなく、第二通信室の通信回線へのダイレクトハッキングで相手国の秘匿回線でしかアクセスできない秘密データベースへのアタックだった。

欲しい情報は手に入った。

大亜連が保有する他の艦装船籍の船体情報、偽装登録情報、横浜までの本当の航路情

報、そして大亜連からの寄港地で補充した物品情報と艀装船籍の軍用連絡に使用する識別コード。

いや大漁大漁。

相手は敵地で大混乱。戦闘では押され気味。

いくら現地協力者がいてもその意識は戦局に目が行く。

船内の潜入者まで目が行っておらず、何をされたかはわかっていないだろう。

あとは簡単だ。



9分後。

俺の手引きで、国防海軍海兵大隊第3中隊にいる通称「海竜」部隊の面々が手早く敵艦艇を制圧した。

敵船は情報回線を緊急遮断し、いくつかの機密情報や通信機器を物理的に破壊し漏洩を防いだ。

相手からすれば最悪自国の軍事情報の漏洩は防げたと思っっている。

俺の行った悪戯も勘づかれていない。

通信機器が破壊される前にハッキングを仕掛けたことなどわかってもらえない。

支援課第二班は敵国情報を確保し、今後国防軍内での組織の重要性を増した。

「他に対象は？」

海竜部隊の隊長である尉官が質問してくる。

防弾用のマスクをしているので表情は読めないが、声音は緊張の影がある。

「そつちのクリアリングが間違いないければ終わりだ。外と連絡取つて船は無力化したことを伝えなよ」

素つ気なく答える。海竜部隊の隊長は頷き、部下に司令部への報告をするよう指示をする。

「情報部、あんたこの後は？」

少し探るような声。まあ童顔の工作員は現場にいただけで胡乱な眼で見られる。

この少年は何者だ、というヤツである。

「この後は別件だ。事態収拾に横浜散歩さ」

そう言つて、力のない敬礼をすると、海竜隊の隊長は軽く右手を上げて返礼する。

これでこの現場の仕事も終わった。

あとは【影の中の男】を始末するだけとなった。

宵闇

シエルター地下ホールの一角に簡易的に作られた指令所に完全武装の兵士が小走りに向かう。

兵士たちは薄い紺のボディアーマーに自動小銃、そしていくつかのグレネードと複数
の弾倉。

ヘルメットは強化カーボン製。

標準的な戦闘用装備だがボディアーマーの下の戦闘服は緊張の汗で濡れている。

「地上A突破されそうです。分隊長判断で防衛線を階段下バリケードまで下げました」

怯える高校生たちに動揺させまいと伝令は副隊長の耳打ちする近さで伝えた。

シエルター撤退第一組を指揮する国防陸軍関東方面管轄の第一旅団第二大隊の副隊長は頷くと、地下通路の封鎖を助けた学生たちの顔を見た。

「服部隊長代理」

「はこ」

緊張を含む返事。

シエルターに繋がる地下道は人為的な天井崩落により地下出入口は塞がれ敵の侵入

は断った。

そして次の指示を想像するに服部は実戦であると意識した。

一校の中でも実戦経験者は少ない。

服部は実戦を意識した訓練を体験したことがあるが、それでも実際に人間を殺した経験はない。



「出入り口まで撤退！・弾幕！」

地上出入口では放置車両を利用した簡易防壁が二重に造られていたが、外側の防壁から兵士たちが下がり内側の防壁へと撤退する。

一部の兵士が敵へ向かって自動小銃を連射し、撤退を支援する。

指示を出した少尉は外側防壁に兵士がいなことを確認すると隊の魔法師へ合図を送る。

「障壁展開！」

「障壁展開します！」

障壁。系統無しの物理障壁である。

敵は牽制で近くに落ちる頭部大の瓦礫を投げつけるが障壁に阻まれる。

投げられた瓦礫は本来であれば波打つことのない魔法の障壁に波紋を起こす。

投げたのはパラサイトである。

彼らは人間が物理世界を動くのと同じように情報次元世界を動く。

それは物理世界の行動に重ねて行えるのだ。

「学生警備到着しました！」

地下へ続く階段から上ってきた学生からの到着報告を受けて隊を率いる少尉は心中で舌打ちした。

学生たちの戦力化は、国防軍の戦力枯渇を示している。

今いる地点と別地点での入り口でも学生が戦力として投入されている。

シエルターを放棄して別の拠点に移動も一瞬少尉の頭に浮かんだが、30人はいる戦闘に向かない非戦闘員の学生たちを連れて移動する先が思い浮かばない。

「陣地を構築し直す！障壁や遠距離魔法で距離と時間を稼いでくれ！軍曹！人員は！」

思考を放棄して脊髄反射のように指示を出す。

思考をするまでもなく状況を感じとり判断するのは職業軍人の業だ。

「重傷で二名動けません！あとは全員戦闘継続可能です！」

軍曹の叫ぶ声に少尉は頷く。

「学生たちが魔法で時間を稼ぐ！適当なそこら辺の車を押してこい！壁だ！」



「ぐっー！」

後方の学生警備1人が直線で放たれた雷撃を受けて数秒の痙攣と共に気絶する。

「誰か後方に下げてくれ！」

爆風に数度巻き込まれた服部は汚れた制服姿で指示を飛ばす。

通常兵器にひるまない民間人風のゲリラ兵たちを魔法科高校の生徒たちは使える魔法を駆使して押し返す。

危険を顧みず、二重防壁の内側を出ている。

その先頭には魔法科高校第一校のジエネラルの異名をとる服部刑部だ。

よくよく見ると童顔には、すでに瓦礫の破片で出来た擦過傷や切り傷が見える。

雷、障壁、爆炎、突風。

使用できる魔法を駆使し、広範囲に牽制を行う。

複合型の魔法のためかパラサイト達の対応も単一魔法に比べて数秒時間がかかる。既に無傷の生徒の方が少ない。

「あそこだ！」

放置車両の影。二人の国防軍兵士が倒れ込んでいる。

目ざとく見つけたのは防壁内側で想子切れ間近で膝を着いた生徒だ。

学生警備隊到着前の負傷者が死者か。

はたまた壁用に車両を動かすための人員か。

2秒の逡巡。

踏み出したのは沢木碧だった。

走り出した沢木は空気甲冑の魔法で身を包み飛んでくる瓦礫のダメージを防ぐ。

しかし、パラサイトの投げける瓦礫は空気甲冑の魔法特性を減少させる。

改変された事象を改変しなかったように扱える。

このパラサイトの特性は魔法科の生徒たちとは相性が悪いが、魔法の使えぬ国防軍兵士よりか幾分かマシだった。

肩に飛来した瓦礫が思い切りぶつかりバランスを崩すが、沢木は車両脇まで到着し、手首のCADを弄り最大限の強度を持つ障壁を展開する。

「無茶したな！」

沢木の後に次いで走り込んできたのは萬真人だ。

遠距離戦を得意としない萬や沢木の様なタイプは救護兵として戦場を走り、負傷者を自陣に運ぶ役目であった。

ある意味で敵の目的になることだが、それでも出来ることを行う。

「我ながら無茶をしたよ、戻ることを考えなかつた！」

死地だが笑顔が消えない。沢木碧と言うのはそういう若者である。

その沢木の笑顔につられた真人は一度笑うとすぐに表情を硬くした。

「【宵闇】をやる。20m程度距離を取ってくれ」

「本気か……」

沢木は額から一筋汗を流し、呟きつつ真人から距離を取る。

先程喰らった礫の痛みを我慢し、倒れた二人の兵士を無理やり抱え、引きずりながら1m、2mと距離を稼ぐ。

二重防壁の内側から沢木の移動を助けるように、学生たちが沢木の後方に長大な障壁を構築し少しでもパラサイトの攻撃が

届かぬようする。

真人も敵の的になるように車輛の影から姿を出す。

沢木から離れるように前方へ移動。敵の視線が沢木から無防備な真人に注がれる。

「簡単に潰れるなよ」

真人は眼を細め一気に十一の印を素早く手元で結ぶ。

パラサイト達はその周辺のサイオンの変化に気付き離脱の為、跳躍しようとするが間に合わなかった。

視線の先にある一校生の姿が歪んで見える。

一校生だけではな周囲が、歪む。そして初めて感じる圧力、身体の重さ、押しつぶさ

れるような上からの重量。

ある一定の距離を取ったものから見れば萬真人の周辺だけ帳が落ちたように薄暗く見える。

不可思議な現象である。

【宵闇】

萬家に伝わる古式魔法。

その発動は体術の動きの中に無く、取手術、柔術の一門において唯一伝承されている純粋な魔法である。

体術を主とする古式魔法は動きの中に発動要素を混ぜるがこの術だけは単体発動だ。

萬真人の周辺11mは超重力の力場だ。

それは光の粒子さえ正常とは言えぬ動きをする。

周囲からは夜の帳。つまりは宵闇。

正午を幾分か過ぎたとはいえ、この晴天下で起こる光の異常現象はそれだけの高重力の力場である証明だ。

2000年代も多少過ぎたときに、真人の曾祖父にあたる人物が宵闇の重力場を凶つたところ10Gを越えていた。

そして歴代の使い手で最優と目される真人の宵闇はG換算で21Gに及ぶ。

その重力は太陽と同じであり、人間が活動可能な重力上限5Gの4倍にもなる。

いくら想子によって強化され人間ならざるパラサイトでも憑依している人間の肉体構造、骨や筋力の上限の数倍では身動きが取れない。

肉体から脱出したくとも高重力は想子によって事象改変された現象。影響範囲は情報次元にも少なからず及んでいる。

パラサイト達は呼吸は出来るが身動きの出来ぬ海の底をはいずる気持ちだ。

萬真人が十二江清姫の評価で2年生でも最強である理由。

強力な重力。それは範囲外からの魔法さえも正常に稼働し得ない空間。

そして萬真人を倒すにはこの宵闇の中を抜けるか、高重力にも負けぬ常識外れの干渉力で打ち破るしかない。

だが万一の確率で重力空間を抜けても古流柔術を収めた格闘家が待ち受けるのだ。

吉祥寺真紅郎の「不可視の弾丸」も同様に重力を使う魔法だが、現代魔法らしい「弾丸」という発想に対して

萬家の【宵闇】は全方位を抑える空間魔法と言っても良い。

この魔法の肝は術者は高重力に囚われない点だ。

真人は展開された空間を歩き、手近にいる這いつくばるパラサイトに問うた。

「お前達は憑依対象を解放することは出来ないらしいな」

パラサイトは身動きを取ろうにも指先が小さく動いただけだ。

真人は左手の親指を小さく左右に振る。

声をかけられたパラサイトは更なる加重で身を地面に沈める。

真人のチート能力は「武芸百般」「秘中の秘」の二つであった。

つまりは家伝武術に長け、秘中の秘である「宵闇」の自在の使用を可能にしている。

十二江清姫の「魔法演算能力向上」「ハッキング」「ひと誑し」を補う戦闘用のチートである。

【宵闇】内では最大重力を局所的に変更することが可能だ。

これは体系づけられた魔法の使用というよりも真人の感覚による調整に近く、同じ血を分け秘伝にも通ずる父や門人にも教えたことは無い。

最高重力は21Gではなく局所的に「33G」に達する。

「教えてくれ。俺の【宵闇】はお前たちの魂も押しつぶすのか」

パラサイトは真人の言葉に無言だ。

真人は重力がパラサイトの霊子そのものを押しつぶし霧散させるという自信はなく、パラサイト達を近習備の古式魔法師が到着するまで地面に縛り続けた。

その間約2時間。パラサイトは7体にも及んだ。

シエルター避難第一組の安全は近習備がパラサイトを封印した瞬間、それは萬真人が

想子切れで失神する瞬間によつて達成された。

結界を崩す方法は光なのである

「こんな無茶なセツティングは初めてだ」

不安を隠す様に声音はきつく何かを諫めるようなニュアンス。

三校の天才児、吉祥寺真紅郎は先を歩く神話的な美丈夫の背中に言葉に続き溜息を投げかける。

「対象範囲の絞り込みは人力だが時間はかからん」

振りからず答える光夜はいつもの調子だ。

2人は論文コンペ会場の4階の廊下を抜け、テラスへと出た。

テラスから見える風景は異様であった。

天には都市、至るところには蜃気楼の様な揺らぎ。

そして戦闘が行われているのか立ち昇る黒煙も視界に入る。

「ぶつつけ本番だけどいけるか？」

「問題ない」

真紅郎の言葉に応え数歩前に出る。

光夜が行うのは鏡世界の解除である。

術式解体や術式解散とは構築理論が全く違う「純理論」による魔法である。

光夜が目の前にテニスボール大の想子球を数十作ると四方へと一気に拡散させる。

想子球は10秒ほどで視認できぬほど距離を進んだ。

「カウントゼロで実行する。観測の補助を頼む」

観測の補助を真紅郎に伝えるが補助と言ってもしつかり見ておくくらいしかできない。

真紅郎も（何をいきなり…）と困惑する表情を浮かべ頷くのが精一杯だ。

頷く真紅郎を確認し、光夜は早々に手首のCADを操作する。

「5, 4, 3, 2, 1, 0」

CADの操作により、遠く離れた想子球が発光する。

数秒ののち光夜が眩く。

「次の段階だ」

「え！あれで出来るのか！」



四葉光夜が吉祥寺真紅郎に手伝わせ設定したのは光の波長に関する魔法であった。

鏡世界は閉鎖空間ではあるが光源が存在する。

それは太陽である。

だが鏡世界の太陽は太陽なのか。

鏡世界は世界の複製ではない、というのが久慈灘幽玄の結論だった。

久慈灘幽玄は鏡世界を自分の使用する次元間のすき間の様な「異空間に転送された世界」ではなく、閉鎖化された現実世界であり外と内を分ける壁が「接触ループ型結界」であると喝破した。

鏡世界を自由に出来るのは接触ループ結界を情報体次元にも展開し常時接触型結界として稼働させることにより空間内の事象改変をノータイムで実施できるのだ。

つまりは事象干渉なのだ。魔法科高校の劣等生とは違う原理による事象干渉。

そして、光源である太陽光だけはこの接触ループ型結界を抜けて空間内を照らしている。

結界を崩す方法は光なのである。

◆ 「15秒後に開始する」

端末に話しかける竜也は特に返事を期待したわけではない。

軍事行動時の癖に近い。

情報端末からは藤林奏の「どうぞ」と機械的な返事。

端末をしまうと手元のCADのパネルを数度さわり、竜也の足元に魔法式が展開され

る。

横浜ベイタワーの最上階の展望ルーム。

そこから横浜の全景が見える。

鏡の壁はまるでドームの方に半球状の形をしている。

竜也は視界内の半球をカウント。全部で7。

「発動」

自分の行動を誰と言わずに報告。

足元の魔法式が強く光る。

その瞬間、論文コンペ会場を覆う半球が破裂。

即座に魔法式の展開を中止。

展開直前の魔法式からの逆流で、仮想魔法領域に負荷がかかるが大した負荷でもなく

竜也は表情を変えない。

数秒、他のドームの状況を目視するが同様にドームが破裂することは無い。

藤林奏に連絡すべく情報端末を上着から出すと、短文メッセージが表示されていた。

【脱出した。光夜】

「もう少し詳細に報告しろ。効率重視か」

それだけ言って竜也は再度魔法式を展開。

30秒後にはすべてのドームが鏡の世界から開放された。

(言うだけのことはある)と久慈灘幽玄から提供された魔法式を評価すると竜也は展望ルームを後にした。

壁を透過する光の波長を特定し、その波長に過剰な情報を付与させることで情報体次元レベルでの「結界内の情報飽和」を起こすものだった。

それをこの短時間で、複数目標に対して設定した久慈灘幽玄の魔法理論構築の知識と技量について竜也は心の中で脱帽した。

そして想定したシナリオ通りでもあった。

横浜大騒乱編の終劇はもうすぐ。

駄話：オリ主たちの最盛期の設定

転生者の全盛期の能力ね。

何人かは「一人でも横浜騒乱を解決できる」レベルです。

【五輪鳴門】

戦略級魔法「殺生石（最大半径500mのサイオン濃度をコントロールし生理反応の暴走を起こし窒息しさせる）」を完璧に使いこなし「非公式戦略級魔法師」級。

体術、隠形に関しては言えば世界屈指。

魔法を使用しない格闘戦であれば、司波達也に匹敵する。

隠形であればBS魔法師の小野遥以上で精霊の眼を持つても認識するには集中力と注意が必要となる。

潜入技術で言えば「国防軍の主要施設」であれば数日の準備で対応可能。

※作者注：現代ニンジャであり、殺生石という切り札を持った最強の忍術使いです。

【七海奈波】

「七海の想弾」を完璧にコントロール。

高速（狙撃用の高速弾）の想弾を文字通り自由自在に扱える。

また、二輪車や自動車、船舶などの大抵の車両の操縦、修理が可能。

身体能力は一流アスリートレベルで、海洋研究で鍛えたダイビング技術やサーフィン、水泳能力、海上における活動では「専門家」として世界屈指である。

また自衛のため基礎的な銃火器の取り扱い技術は修得している。

超一級の海洋冒険家といっても差し支えない。

※作者注：ララ・クロフトも真つ青です。

【仙波冬彌】

広域では氷吹雪を起こし、近接では大気中にダイヤモンドダストが見えるほどの急速低温化現象を起こす。

司波深雪以上の振動系魔法に熟達した魔法師。

古式の「四神」である玄武の守護者であり、物質、情報次元両面での魔法戦に熟達。

彼自身は精霊の眼を持たないが、その第六感は視覚での情報次元の把握以上の能力を持つ。

槍術と柔術でも免許を持ち、実戦格闘技の使い手として一部では有名。

玄武の力を開放すれば「森羅万象の理」を捻じ曲げることが出来る。それは時間操作も含まれる。

※作者注：時間操作は数分が限界ですが、時間を巻き戻せるって…無茶か！

【獅子王院楠葉】

呪殺、呪禁においては当代最強でその術力は安倍晴明、芦屋道満、賀茂忠行に劣らぬとの評価を得ている。

彼女の本領は呪殺であり、本来であれば数か月かかる呪いも彼女が行うと「数瞬」である。

解除に複雑な手順を必要な古式の呪殺を戦闘中に行い、相手の行動障害を起こせる。

最大の呪法は「月を見ると精神に異常をきたす」という「月輪の呪い」である。

その有効範囲は直径十五里（約60km）となる。

合気柔術を使い、過去に「大関を投げた」らしい。

※作者注：「月輪の呪い」は彼女のオリジナルです。好きな漫画からネーミングを取ったらしい。

【緋村武心】

「斬鉄」をさも当然に行える技術。

秘剣「炎刀」は超高熱の刀状の想いで「両断できぬ物はない」と言われ、実際に「茨木童子の腕」を切っている。

また妖怪退治の専門家として一流の民俗学者以上の知識を持ち、「明鏡止水」による精神異常状態の解除、「不動心」による精神攻撃の耐性を持つ。

生身での高速戦闘行える神速の歩法を身につける。

現代に生きる剣士（剣術、剣道、外国の剣法含む）で確実に三指に入り、過去200年を見ても十指は確実である。

※作者注：「斬鉄」は文字通り日本刀で「鉄を斬る」ことです。薄い鉄板ではなく「鉄塊」を斬ります。

【鬼一法楽】

剣技においては当代随一を名乗れる。

秘剣「斬馬剣」「坊主斬り」の物心両面の秘剣を操る。

本来であれば、護摩行の末に付与される「摩利支天の加護」「馬頭観世音の加護」「多聞天の加護」「軍荼利明王の加護」を指の印で起動させることが出来、近接戦闘における身体向上の速度は群を抜く。

彼は間違いなく、世界の剣術史に永劫に名を遺す剣士である。

存命の剣士では比肩する者は少ない。

※作者注：「加護」系は複数実行すると術者が死にます。サイオン枯渇して死にますが、こいつは鼻歌歌いながらできます。

【司波雪光】

高速戦闘は「音速」の世界に容易に入り込む。

最盛期の雪光であれば「瞬きの間」というのは十分なまでの必殺の時間である。

「霊子刀剣」を縦横無尽に操り、「音の世界」を置いていくほどの速度。

また「アークリアクター」の開発、「自然サイオン循環装置」などの世界史に名を遺す発明も行っている。

パラサイトひいては「情報次元の先」についても専門家で「パラゴン（模範）」という名を持つ「情報次元体の集団」との戦闘経験を持つ。

※作者注：雪光は「多次元世界からの侵略」に立ち向かった本物の英雄です。情報次元への見識は群を抜いています。

【川村エカテリーナ】

経済理論の実践者として世界でも有数で、一説では「5ドルあれば1週間でNYのペントハウスを買う」と言われる。

魔法師としては「空間魔法」という超難問を長年取り組んでおり、世界で二人しかない「実戦レベルの空間魔法師」である。

彼女の空間魔法は空間を「近づける」「遠ざける」「裁断する」の用法となっており、「空間裁断」において両断できぬ物はない。

川村エカテリーナにとっては太平洋とは「道路にある水たまり」ほどの大きさしかない

い。

※作者注：カチューシャの凄さは「経済能力」と「魔法師としての実力」が高位で拮抗していることでしょうか。

【黒城兵介】

最強の兵士。彼の一撃は敵戦艦に大穴を開け、自軍の戦艦への砲弾を防ぐ。

また彼の率いる海兵隊の損耗は少なく世界転戦をやりきり「黒城兵介の行くところには勝利の二文字」と言われ、敵国からは「黒城」の文字で戦意が下がることになる。

魔法師としては「十文字に匹敵する障壁、七草以上の万能」とも言われ、国防軍最優の魔法師の座に君臨し続けた。

※作者注：ガチ軍神。大隊規模の指揮では世界最強です。彼の指揮下の兵士の士気の高さは「熱狂」レベルです。

【アーデル・フォン・羅門】

アーデルの魔女術の最奥は「大神の顕現」であり、文字通りその身に「大いなる神」を下ろす術である。

この状態のアーデルは「人間が規定する殺傷レベルA」程度の魔法では傷つかず、「現世の摂理」を根底から捻じ曲げるレベルの魔法で無いと傷つけることはできない。

その戦闘力は単騎で大国の機甲師団をせん滅し、複数の戦略級魔法師の魔法を受けき

り即座に反転攻撃（想子の拳を飛ばす）と言ったことが可能である。

未確認情報だが「熱核兵器」でも傷をつけることは出来なかつたという情報もある。

※作者注：魔法込みの単騎の殴り合い能力なら最強でしょうか。ハルクです。ハルク。

【ミシエル・フィリオ】

彼女が本気で魔法を使うと「迷宮」が発生する。広大な範囲にどこからと植物が延び、建物を飲み込み、人を飲み込み、そして誰しもが迷う迷宮が生まれる。その中はミシエルの配下となった「怨霊」「死人」が蔓延り、いかなるものの生存も許さない。

血と魂魄を流し尽くす恐怖の迷路なのだ。

ミシエルはその迷宮を「いかなる大地の上」でも創造可能であり、彼女が魔術の歌を歌えば大地に眠る霊たちは起き上がり「死霊の軍団（アーミー・オブ・デス）」を構成する。

それは国も人種も問わない。死霊は彼女の歌声に抗えないのだ。

※作者注：ミシエルの魔法は「ハイファンタジー」寄り。神話とか伝説の再現に近いです。乙女の涙が湖になったとかレベル。

【久慈灘幽玄】

世界ただ二人の「空間魔法師」であり「魔法工学の天才」であり「魔法創造の天才」で

あり「百学の天才」の異名を持つ。

彼の空間魔法は「空間次元」に深くかわり、同一空間の「裏空間」を創造する。彼は世界の広さと同じだけの「彼だけの空間」を持つ。

空間魔法は空間だけではなく、現実世界の「過去」も集積されており、彼は彼の任意で過去の状況を彼の空間に再構築することが出来ると言われている。

「過去と現在を支配し、あえて未来は手付かずに行っている」と評されたこともある。

※作者注：頭の良さでいったら転生者でも最高かもしれません。作者より賢い。

【狼谷一樹】

魔狼である彼は高速戦闘では四足獣のどれよりも速く、その筋力は大型戦車をひっくり返す。

何よりも獣の勘は、危険を「予言」レベルで教えてくれる。

彼の勘は恐ろしく正確であり常に戦闘の気配を読み取り、「先手を取られること」は無い。

彼自身は「BS 魔法師」に大分される。

その目は「外さじ」、耳は「逃さじ」、鼻は「惑わじ」と言われ「情報次元」であろうと物質世界であろうと獲物を必ず追い詰める「追跡者」「捕食者」であった。

また傷の回復は早く、内臓に届く傷も「ひと撫で」で済む。

※作者注：戦力的には羅門に劣りますが彼は感覚と野生の勘、そして意外と理知的な性格が「捕食者」を形成しています。

【藤林奏】

ネットワークの支配者。電波の女王。現代社会における情報は必ず彼女の手に一度は落ちる。

最盛期では会話と並行して外部情報の検索も可能となっている。

魔法師としては派手さは無いが「最巧の魔法師」の異名を九島烈より受け継いでおり、その精妙さは「最巧」の異名は九島烈ではなく、藤林奏のものとして後世に伝わる。

戦術眼においても優秀で、実戦派魔法師としても国内屈指であり銃火器、電脳戦、魔法戦とどれをとっても世界上位に名を連ねる。

※作者注：攻殻機動隊の草薙素子が電脳能力と同レベルで魔法能力を持ったのと同レベルです。つまりは少佐です。

【切花霞】

ナノミクロンサイズの鋼糸を使う。

人体の神経伝達を狂わせ、死体でさえ動かすことが可能である。

最大距離は7 km。最大対応数は156体。

近接戦闘では鋼糸を使用する斬撃術を駆使し、素手の戦闘でも現役の格闘家や軍隊格

闘術の猛者を殺傷できるレベルである。

※作者注：レガート・ブルーサマーズの系の能力とウォルター（HELLSING）の能力のがっちゃんこです。

【四葉光夜】

三回指を鳴らすと世界が変わる、と言われた。

※作者注：作者的に「どんな無茶な魔法も四葉光夜なら可能」という安心感。

【タツヤ・クドウ・シールズ】

「反物質の創造」を別においても、タツヤ・クドウ・シールズは別格の魔法師である。精緻かつ強力かつ最速。

存命する魔法師の世界最上位としてただ一人「四葉光夜」の対抗できる存在であった。キューバ侵攻時に見せた「チェイン・オブ・フォース（理力の鎖）」は海上の艦船すべてを絡めとり、北中南米大陸の一大大戦を止める結果となった。

格闘戦、射撃戦等兵士としても一級で彼が率いるスターズ特殊部隊（俗称：ダークマターフォース）は、音も姿も見せずいくつもの作戦を成功させていった。

※作者注：現代魔法の定義を土台に「神話・伝説の様な事象」を起こすことが出来るマジモンの天才です。

【関重蔵】

無手で魔法のような現象を起こす、一種仙人じみた格闘の達人。「レッツゴージャス
ティーン！」

※作者注：魔法師としてはこのメンバーで最低です。ただし神からのチート内容はこ
の面々の中でも最上位に位置します。

【十二江清姫】

日本国内であれば気象、天候、海流の操作が行える。

本来であれば一昼夜の儀式を「3時間」で行えるのは歴史上彼女だけである。

近接魔法では気流操作と感知を駆使した戦場コントロールが真骨頂である。

※作者注：気象条件を弄れるって神様か！

【萬真人】

素手の格闘では国内屈指。九重八雲にも劣らない。

また白兵戦武器においても一流である。

「宵闇（重力結界）」を使える数少ない一人で、その制御は常人以上であり、もつとも自
由に「宵闇」を使える。

※作者注：宵闇はチート魔法です。どのくらいチートかと言うと雪光や武心、法楽、
アーデルでも嫌がるレベルです。

【須田渉】

最高年収2,900万円(2020年換算)。共働きだが奥さんも非常に充実した仕事をしており、夫婦円満。子供は二人。ご近所とも仲良く、夫婦とも両親と仲良く、孫のランドセルをどちらの実家が買うかで喧嘩もない。

ついでに友達は四葉のオーナー。

いつの間にか学生時代の論文と今の仕事の関係で、四葉の手伝いで来年は昇給予定。

取引先からは「須田さんに頼まれるとなく。やりますか!」と言ってくれるほどに気に入られている。

学生時代よりは太ったが奥さんからは「昔は痩せ気味だったからそのくらいでいいんじゃない?」と言ってくれる。

月に2回くらいは趣味の操弾射撃の時間が取れて、社会人サークルに参加しており「アマチュア」としては全国区。

※作者注：上記の須田ちゃん。残業は月10時間未満です。フレックスです。後輩とか部下に「飲みに行こうか?」と誘うと喜んでついて来てくれます。凄いです。勤め人の理想みたいな人です。初めてのキャバクラでも速攻モテモテですが、そういった場での遊び方も粹で綺麗です。愛妻家です。ぼくのかんがえたさいこうのさらりーまんです。

参考【司波達也】

・日本で1，2位を争う魔法名家の生まれ

・骨折や出血多量の致命傷を負っても一瞬で再生できる能力と一人で戦艦を一瞬で消滅させる、世界に殆どいない戦術級の能力の持ち主

・そのせいで普通の魔法を使うのに少し手こずる

・普通の魔法が苦手なだけで実戦は負け知らず、小さい頃から軍隊に所属して働き忍者の師匠が居て格闘術も最強クラス

・学校の成績はトップクラスで見ただけで相手が魔法を発動する前になんの魔法かわかる

・魔法発動前に、術式がわかるから、発動前なら魔法消去できる

・研究が大好きで、学生なのに魔法史を覆し、名前が後世に残るような大発見を何度もしている

・幼い時に改造された人間魔法兵器で、最強になったが精神が破壊された

・親の会社（魔法アイテムメーカー）で研究してて、利益に多大な貢献

・戦闘力・研究成果ともに世界トップクラスなのに、それを隠して高校に通ってる

・主人公固有のTNT換算20メガトンの戦略級攻撃魔法で敵の軍港を近隣都市ごと

吹き飛ばす

・分解や再生に関する魔法なら何でも使える
 ・それ以外の魔法は魔法式を構築するのに時間がかかりすぎて実践では使い物にならない

・しかし魔法式を丸ごと脳に植えつけることによりむしろ常人より早く魔法を使える
 ・→は四葉家の秘匿技術なので世間にバレてはいけない

・物体を原子単位で分解↓ $E = mc^2$ で、質量をエネルギーにできる。

・物体を原子単位で復元↓肉体も物体も再構成可能。発動体が壊れても、これで復元。

・さらに、天才の主人公にしか使えない擬似魔法により、たいていの魔法は再現可能。

・ちなみに兄は戦略級魔法師で妹が戦術級な兄の通り名は「破壊神（ザ・デストロイ）」

・特殊な「眼」により隠れている敵をすぐに見つけ出したり見えない攻撃を察知する

ことができる

・「眼」を誤魔化すことができるのは「この世に存在しないモノ」のみ

・妹のキスで、魔法の制限が解除される

※出典：5chの掲示板と思われる